富士市埋蔵文化財調査報告　第 55 集

静岡県　富士市

船津古墳群 II

船津Ｌ–第 62 号墳ほか埋蔵文化財発掘調査報告書

2013 年 3 月

富士市教育委員会

船津 L-第 62 号墳　出土遺物集合

カラー図版２

船津 L-第 62 号墳　石室全景（南から）

船津 L-第 62 号墳　小刀出土状況

船津 L-第 62 号墳　馬具出土状況

カラー図版４

船津 L-第 62 号墳出土　馬具

船津 L-第 62 号墳出土　玉類

船津 L-第 62 号墳出土　耳環

船津 L-第 206 号墳　石室全景（南西から）

船津 L-第 206 号墳　遺物出土状況

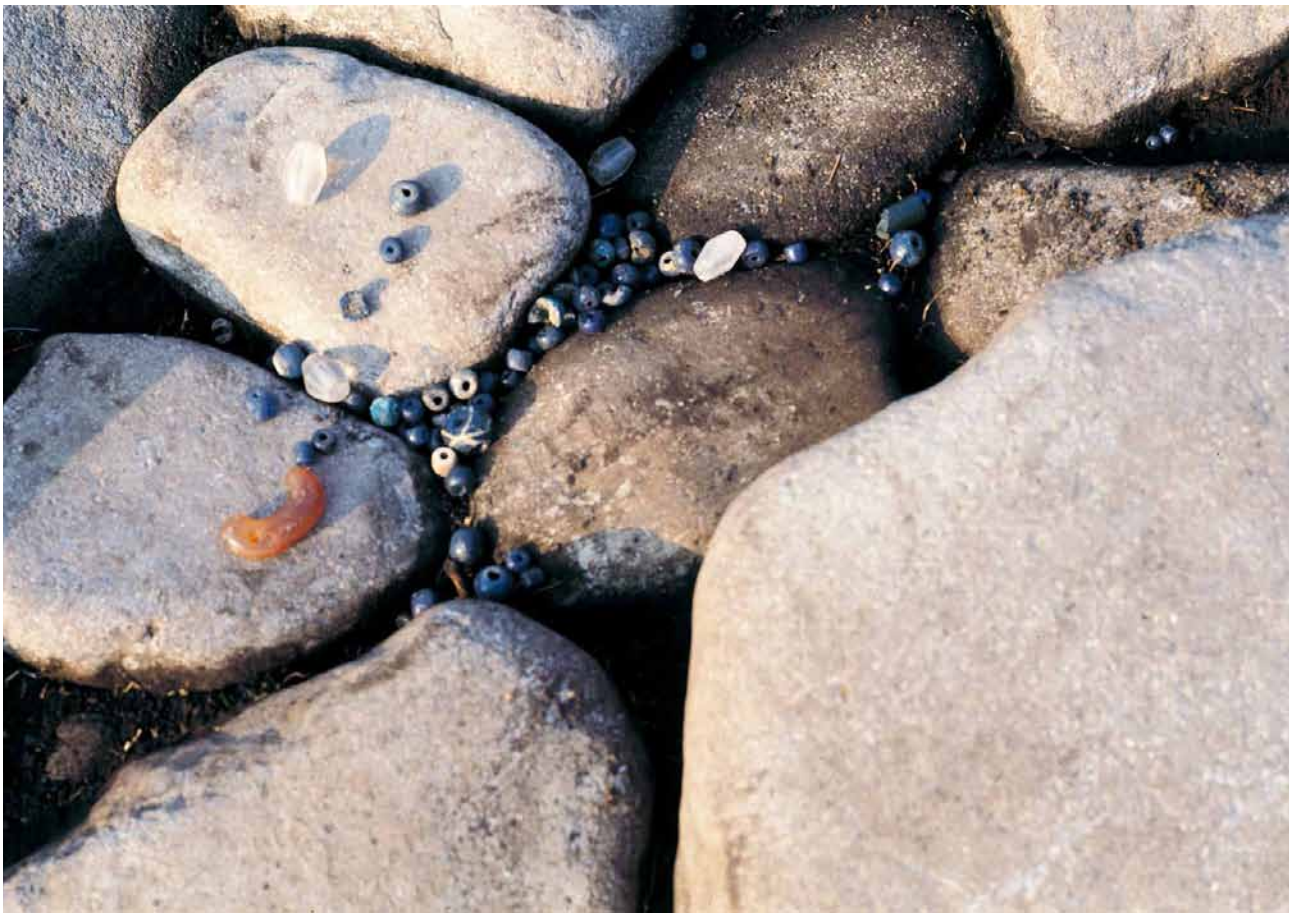
カラー図版 6

船津 L-第 206 号墳出土　大刀・鉄鏃・耳環

船津 L-第 206 号墳出土　須恵器

船津 L–第 207 号墳　石室全景（南から）

カラー図版８



船津 L-第 207 号墳　玉類出土状況

船津 L-第 207 号墳出土　玉類

序

私たちのまち富士市は、世界文化遺産に登録され日本のみならず世界の宝となった霊峰・富士山に見守られ、豊かな自然と温暖な気候に育まれて、遥かな古代から現代まで発展してまいりました。

その発展を支えたのはこの地に暮らした先人であり、先人の生活や文化の痕跡は埋蔵文化財として我々の足元に眠っています。

開発により、やむを得ず破壊されてしまう埋蔵文化財を記録し、後世に伝えるために、発掘調査が行われます。

ここに報告いたします船津古墳群の発掘調査でも、農地改良工事や農道建設工事に伴い破壊されてしまう古墳の発掘調査が行われました。調査の結果、大刀や馬具をはじめとした豊富な副葬品が発見されました。それらの品々は近畿地方で生産されたと考えられるものや、駿河の地で生産されたと考えられるものがあるなど、当時の政治的・経済的動向を考える上で貴重な研究資料となりました。

平成２年度に発掘調査が行われてから、概要報告にとどまり正式な報告を刊行するまで多くの時間がかかってしまい、関係者の方々にご迷惑をおかけいたしました。

最後になりましたが、現地調査および報告書刊行にあたり、皆さまのご指導・ご助力に深く感謝申し上げるとともに、今後とも埋蔵文化財の保存にご理解・御協力いただけますよう、お願い申し上げます。

平成２５年３月
富士市教育委員会
教育長　山田幸男

例　言

1．本書は、静岡県富士市船津字春山沢東 661 に所在する船津７古墳群第２地区 1,2 次調査、船津字矢川上 806-2,3 に所在する第３地区 1,2 次調査、船津字春山沢東 653-1 外 18 筆に所在する第５地区１次調査の発掘調査報告書である。

2．調査は、農地改良工事（第２地区）、農道拡幅工事（第３地区）、農地改良工事（第５地区）に伴い、富士市教育委員会が実施した。

3．調査は以下の体制で行われた。

第２地区１次調査（確認調査　平成２年７月５日）

担当　渡井義彦（文化体育課主事）・中尾欣司（文化体育課指導主事）

第２地区２次調査（平成２年１月１０日～平成２年２月２８日）

担当　渡井義彦（文化体育課主事）・中尾欣司（文化体育課指導主事）

第３地区１次調査（確認調査　平成３年１０月１９日）

担当　久松義昭（文化体育課主事）・中尾欣司（文化振興課指導主事）

第３地区２次調査（本発掘調査　平成３年１０月２０日～１０月３０日）

担当　久松義昭（文化体育課主事）・中尾欣司（文化振興課指導主事）

第５地区１次調査（確認調査　平成１１年９月２日～９月３０日）

担当　渡井義彦（文化振興課係長）・田中淳一（文化振興課指導主事）

整 理 作 業（平成２４年４月１日～平成２５年３月 31 日）

担当　藤村　翔（文化振興課文化財担当　主事）　　協力　石川武男（富士市立博物館学芸員）

4．本書の執筆、編集は藤村・石川が行った。また、大谷宏治氏（静岡県埋蔵文化財センター）に玉稿を賜った。執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章第１節５項、第２節５項、第３節５項、第４節３項　藤村　翔

第Ⅲ章遺第１節１項～４項、第２節１項～４項、第３節１項～４項、第４節１項・２項、第Ⅴ章　石川武男

第Ⅳ章１節　大谷宏治（静岡県埋蔵文化財センター）

5．本書に掲載した出土遺物の実測・トレースは稲葉万智子、小田貴子、金刺才己（文化振興課臨時職員）が担当した。

6．現地調査における記録写真は各担当者が撮影し、整理作業における遺物写真のうちカラー図版はすべて杉本和樹氏（西大寺フォト）による。また、モノクロ写真図版は杉本氏撮影分と井上尚子（文化振興課臨時職員）撮影分があるが、それについては写真図版目次に記す。

7．本書にて報告する出土遺物・実測図・写真はすべて富士市教育委員会で保管している。

8．本書の作成にあたり、次の方々に多大なる御指導と御協力を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

伊藤純子、大森信宏、大谷宏治、菊池吉修、鈴木一有、田村隆太郎、戸根比呂子、和田達也（敬称略　五十音順）

凡　例

１．座標は、任意座標を使用した調査であるが、全体図等は平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、世界測地系（平成１４年４月施行）を使用している。

２．古墳に関わる外部施設、埋葬施設である横穴式石室の各部位は、大谷宏治 2010「例言」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 231 集　富士山・愛鷹山麓の古墳群』、大谷宏治 2003「第１章第３節　用語と須恵器の編年」『静岡県の横穴式石室』静岡県考古学会に準拠し、下記の通り定義した。なお、計測位置については右頁のとおりとした。

（１）外部施設

墳丘　第１次墳丘　横穴系埋葬施設において墳丘を段階的に造成する場合、埋葬施設を覆う墳丘の中核となる盛土

第２次墳丘　横穴系埋葬施設において第１次墳丘を覆う盛土　これをもって墳丘は完成する

周溝　墳丘を区画するために掘削された溝

（２）埋葬施設

横穴式石室　古墳の内部に掘削された墓坑に、石材を用いて玄室などを構築するもの

玄　室　埋葬施設となる空間

玄　門　玄室の入り口部分で、羨道や前庭と区切る部分

羨　道　天井が架構され、玄室と石室外をつなぐ空間

前　庭　天井の架構されない羨道や玄室に続いて墳丘外にむけて構築された部分

墓　道　埋葬施設へ至る通路部分

裏込め　横穴式石室を構築する際、石材と墓坑の間に充填された土砂

段構造（框石）前庭あるいは墓道から１段下がって玄室に入る横穴式石室の、段の部分　特に石材を用いている場合は框石と呼称する

基底石　横穴式石室を構築するために最下段に据えられた石材

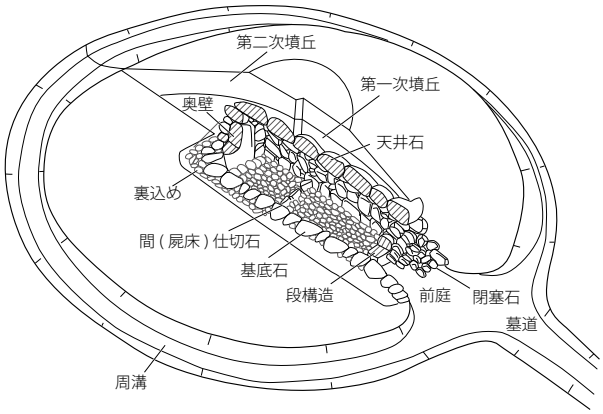
無袖形横穴式石室　袖が形成されないもの　なお、本報告では奥壁側から玄門側（入口）をみて右側を右側壁、左側を左側壁とする

玄室の平面形　長方形　玄門部、中央部、奥壁側の幅がほぼ等しいもの

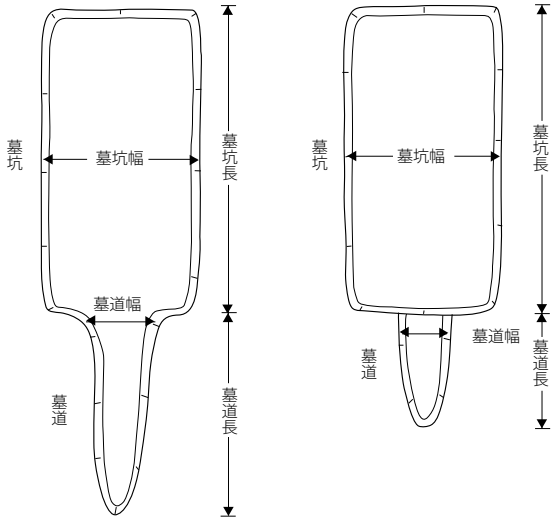
胴張り形　玄門側、奥壁側にくらべて中央部の幅が広く、側壁が弓なりを呈するもの

３．横穴式石室において、Ｌ - 第 62 号墳にて２面の床面が確認された。本報告では、下床面を第１次床面、上床面を第２次床面とする。

４．土層・遺物の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。

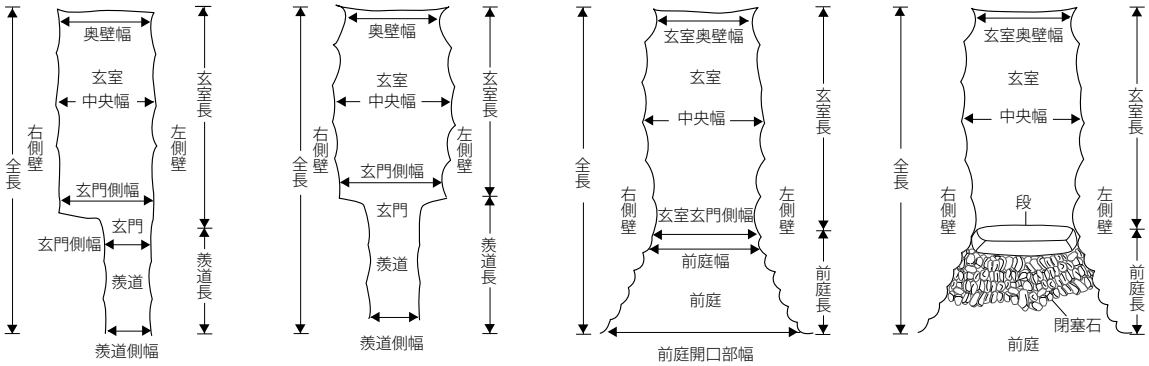


横穴式石室



横穴構造　　竪穴構造

墓坑の形態



片袖式　　両袖式　　無段無袖形　　有段無袖形

石室の形態

目　次

カラー図版

序
例　言
凡　例
目　次

第Ⅰ章　調査経過
第１節　船津第 L- 第 62 号墳の発掘調査 …… 1
第２節　船津 L- 第 206・207 号墳の発掘調査 …… 3
第３節　船津 L- 第 77・78・189・190・218 号墳の発掘調査 …… 6
第４節　整理作業 …… 6

第Ⅱ章　立地と環境
第１節　地理的環境 …… 7
第２節　歴史的環境 …… 8
第３節　船津古墳群の概要 …… 13

第Ⅲ章　調査成果
第１節　船津 L- 第 62 号墳 …… 17
第２節　船津 L- 第 206 号墳 …… 44
第３節　船津 L- 第 207 号墳 …… 50
第４節　船津 L- 第 77・78・189・190・218 号墳 …… 56

第Ⅳ章　後論
第１節　船津 L- 第 62 号墳の馬具について　大谷宏治 …… 61

第Ⅴ章　まとめ
第１節　古墳の年代について …… 71
第２節　墓道について …… 71
第３節　総括 …… 73

付表　出土遺物観察表

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第Ⅰ章　調査経過
第２節　船津 L- 第 206・207 号墳の発掘調査
第１図　船津古墳群周辺図（S=1/2,000）…… 4
第２図　古墳位置図（S=1/500）…… 5

第Ⅱ章　立地と環境
第２節　歴史的環境
第３図　旧石器・縄文時代の主要遺跡分布図（S=1/150,000）…… 8
第４図　弥生～奈良・平安時代の
主要集落遺跡分布図（S=1/150,000）…… 10
第５図　主要古墳・周溝墓分布図（S=1/150,000）…… 11
第３節　船津古墳群の概要
第６図　船津古墳群周辺古墳分布図（S=1/15,000）…… 14
第７図　船津 L- 第 208 号墳・船津 L- 第 212 号墳　出土遺物　…… 16

第Ⅲ章　調査成果
第１節　船津 L- 第 62 号墳
第８図　L- 第 62 号墳　調査区と現況図 …… 17
第９図　L- 第 62 号墳　検出状況図 …… 18
第 10 図　L- 第 62 号墳　土層断面図　…… 19
第 11 図　L- 第 62 号墳　石室展開図 …… 20
第 12 図　L- 第 62 号墳　開口部石積み状況図 …… 21
第 13 図　L- 第 62 号墳　石室基底石及び墓坑検出状況図 …… 22
第 14 図　L- 第 62 号墳　第１次床面・第２次床面遺物出土分布　24
第 15 図　L- 第 62 号墳　石室内小刀・装身具出土状況図 …… 25
第 16 図　L- 第 62 号墳　石室内馬具出土状況図 …… 26
第 17 図　L- 第 62 号墳　石室内鉄鏃・他金属出土状況図　…… 27
第 18 図　L- 第 62 号墳　小刀・刀子 …… 29
第 19 図　L- 第 62 号墳　鉄鏃① …… 31
第 20 図　L- 第 62 号墳　鉄鏃② …… 32
第 21 図　L- 第 62 号墳　弓金具 …… 33
第 22 図　L- 第 62 号墳　馬具① …… 35
第 23 図　L- 第 62 号墳　馬具② …… 36
第 24 図　L- 第 62 号墳　馬具③ …… 37
第 25 図　L- 第 62 号墳　馬具④ …… 38
第 26 図　L- 第 62 号墳　その他の鉄製品 …… 40
第 27 図　L- 第 62 号墳　装身具 …… 41
第 28 図　L- 第 62 号墳　玉類 …… 41
第 29 図　L- 第 62 号墳　須恵器 …… 42
第２節　船津 L- 第 206 号墳
第 30 図　L- 第 206 号墳　石室展開図 …… 44
第 31 図　L- 第 206 号墳　遺物出土分布 …… 45
第 32 図　L- 第 206 号墳　遺物（大刀・鉄鏃・耳環）…… 46
第 33 図　L- 第 206 号墳　遺物（須恵器）…… 48
第３節　船津 L- 第 207 号墳
第 34 図　L- 第 207 号墳　検出状況図　…… 50
第 35 図　L- 第 207 号墳　石室平面図・遺物出土状況図　…… 51
第 36 図　L- 第 207 号墳　石室展開図　…… 52
第 37 図　L- 第 207 号墳　墓坑検出状況図　…… 53
第 38 図　L- 第 207 号墳　遺物（玉類）…… 54
第４節　船津 L- 第 77・78・189・190・218 号墳
第 39 図　平成 11 年度　確認調査トレンチ配置図・土層断面図 … 56
第 40 図　L- 第 190・第 218・第 77・第 78・第 189 号墳
平断面エレベーション図　… 57
第 41 図　L- 第 190・L- 第 218 号墳　遺物（須恵器）…… 58
第 42 図　古墳に伴わない遺物　…… 58

第Ⅳ章　後論
第１節　船津 L- 第 62 号墳の馬具について
第 43 図　馬具の編年的位置づけ（鈴木 2008 を参照して作成）… 62
第 44 図　帯金具付鉸具造立聞環状鏡板付轡の変遷 …… 64
第 45 図　帯金具付鉸具造立聞環状鏡板付轡に伴う馬具 …… 65
第 46 図　船津 L- 第 62 号墳出土馬具の面繋構造の復元
（宮代 1997 を参照して作成）…… 67
第Ⅴ章　まとめ
第２節　墓道について
第 47 図　船津古墳群の墓道の復元　…… 72

挿表目次

第Ⅱ章　立地と環境
第３節　船津古墳群の概要
第１表　船津古墳群調査履歴一覧　…… 15

第Ⅳ章　後論
第１節　船津 L- 第 62 号墳の馬具について
第２表　古墳時代後期～終末期の板状Ｘ字脚辻金具の類例
（板状十字脚辻金具を含む）… 61
第３表　帯金具付鉸具造立聞環状鏡板付轡の類例　…… 63

カラー図版目次

カラー図版　1
　船津 L- 第 62 号墳　出土遺物集合　［杉本］
カラー図版　2
　船津 L- 第 62 号墳　石室全景（南から）
カラー図版　3
　船津 L- 第 62 号墳　小刀出土状況
　船津 L- 第 62 号墳　馬具出土状況
カラー図版　4
　船津 L- 第 62 号墳出土　馬具　［杉本］
　船津 L- 第 62 号墳出土　玉類　［杉本］
　船津 L- 第 62 号墳出土　耳環　［杉本］
カラー図版　5
　船津 L- 第 206 号墳　石室全景（南西から）
　船津 L- 第 206 号墳　遺物出土状況
カラー図版　6
　船津 L- 第 206 号墳出土
　　大刀・鉄鏃・耳環　［杉本］
　船津 L- 第 206 号墳出土　須恵器　［杉本］
カラー図版　7
　船津 L- 第 207 号墳　石室全景（南から）
カラー図版　8
　船津 L- 第 207 号墳　玉類出土状況
　船津 L- 第 207 号墳出土　玉類　［杉本］

写真図版目次

PL.1
　1. 船津 L- 第 62 号墳　第 1 次床面検出状況(南から)
PL.2
　1. 船津 L- 第 62 号墳　調査前現況（南から）
　2. 船津 L- 第 62 号墳　表土除去状況（南から）
　3. 船津 L- 第 62 号墳　石室全景（南から）
　4. 船津 L- 第 62 号墳　石室閉塞部（石室外から）
　5. 船津 L- 第 62 号墳　石室閉塞部（石室内から）
PL.3
　1. 船津 L- 第 62 号墳　第 2 次床面検出状況(南から)
PL.4
　1. 船津 L- 第 62 号墳　石室閉塞部の最下部
　2. 船津 L- 第 62 号墳　石室奥壁（南から）
　3. 船津 L- 第 62 号墳　遺物出土状況（鉄鏃・砥石）
　4. 船津 L- 第 62 号墳　遺物出土状況（馬具・鉄鏃）
　5. 船津 L- 第 62 号墳　石室右側壁（南から）
PL.5
　1. 船津 L- 第 62 号墳　遺物出土状況（耳環・刀子）
　2. 船津 L- 第 62 号墳　遺物出土状況（玉類）
　3. 船津 L- 第 62 号墳　調査の様子
　4. 船津 L- 第 62 号墳　石室左側壁（南から）
PL.6
　1. 船津 L- 第 62 号墳　遺物出土状況（小刀）
　2. 船津 L- 第 62 号墳　遺物出土状況（馬具）
PL.7
　1. 船津 L- 第 62 号墳　石室基底石検出状況(南から)
PL.8 ～ PL.18
　船津 L- 第 62 号墳　出土遺物　［杉本］
PL.19
　1. 船津 L- 第 206 号墳　石室全景（南西から）
　2. 船津 L- 第 206 号墳　石室全景（南から）
PL.20
　1. 船津 L- 第 206 号墳　遺物出土状況
　船津 L- 第 206 号墳　出土遺物
PL.21
　船津 L- 第 206 号墳　出土遺物
　　※ 耳環・大刀［杉本］
PL.22
　船津 L- 第 206 号墳　出土遺物　［杉本］
PL.23
　1. 船津 L- 第 207 号墳　石室全景（南から）
　2. 船津 L- 第 207 号墳　墓坑全景（南から）
PL.24
　船津 L- 第 207 号墳　出土遺物　［杉本］
　船津 L- 第 212 号墳　出土遺物　［杉本］
　船津 L- 第 208 号墳　出土遺物　［杉本］
PL.25
　1. 平成 11 年度　確認調査地全景（南から）
　2. 船津 L- 第 77･78 号墳　石室全景(南西から)
　3. 船津 L- 第 77 号墳　石室全景（南から）
　4. 船津 L- 第 78 号墳　石室全景（東から）
　5. 船津 L- 第 189 号墳　石室全景（南西から）
　6. 船津 L- 第 190 号墳　石室全景（南から）
　7. 船津 L- 第 218 号墳　石室全景（南から）
PL.26
　1. 須恵器出土状況
　2. 調査の様子
　出土遺物

杉本和樹氏による遺物写真撮影の様子

第Ⅰ章　調査経過

第１節　船津第 L- 第 62 号墳の発掘調査

１．本発掘調査に至る経緯

船津 L- 第 62 号墳の発掘調査（船津７古墳群　第２地区）は、静岡県富士市船津字春山沢東 661 の土地所有者による同地の農地改良工事に先立ち、富士市教育委員会が実施した（注１）。

平成元年（1988）12 月 20 日に土地所有者から当該地の遺跡の取り扱いについて本市教育委員会へと連絡があり、土地所有者およびその知人である常葉学園短期大学教授（当時）の小野真一氏の立会いのもと、担当職員が現地の確認をおこなった。

同地は 1988 年発行の『静岡県文化財地名表』に船津 L- 第 62 号墳として記載されている古墳であり、愛鷹山南麓を流れる春山川左岸の河岸段丘の緩やかな斜面上にあるミカンの木の混在する茶畑のほぼ中央に位置していた。この時点での所見でも古墳であることは間違いないものとみられたが、今後の取り扱いを考える上でも古墳の性格を把握する必要があったため、平成２年（1990）７月５日に富士市教育委員会による確認調査を実施する運びとなった。

確認調査では、主体部の天井石３石が原位置を動かされているものの側壁に架構された状態にあること、また奥壁上段の石材や側壁もほぼ原形を留めていることを確認し、保存状態の良好な横穴式石室であることが判明した。また墳丘表土中から須恵器大甕の破片も検出され、古墳時代後期に築造された横穴式石室墳と判断された。

本墳は、破壊の著しい船津古墳群中にあって保存状態が良好で貴重な古墳ではあったが、ミカン畑から茶畑へと変更するため、土地を削りたいという土地所有者の希望により、記録保存を前提とした本発掘調査を実施することで合意した。それに伴い、文化庁と静岡県教育委員会の指導を得て、本発掘調査は「船津古墳発掘調査事業」として、国県費補助金対象事業となった。本発掘調査は、補助金内定を待って平成３年１月 10 日から開始することとなった。

２．調査体制

平成２年度の埋蔵文化財発掘調査体制は次のとおりである。

事務局	富士市教育委員会	教育長	山本　厚
事務局	文化体育課	課長	小長谷秀夫
		課長補佐（文化担当）	小出禮節
		係長	杉本　篤
調査担当		指導主事	中尾欣司
		主事	平林將信
		主事	渡井義彦
		主事	久松義昭
		主事補	前田勝己

このうち、L- 第 62 号墳の現地調査の体制は以下のとおりである。

調査担当		指導主事	中尾欣司
		主事	渡井義彦
調査補佐	文化体育課	短期臨時職員	井倉洋子
			遠藤敦子

なお発掘調査作業員は、富士市シルバー人材センターに委託し、調査担当者の指示のもと作業を行った。

３．調査の経過

（１）本発掘調査

本発掘調査は、平成３年１月 10 日（木）から同年２月 28 日（木）まで行われた。詳細は後掲の調査日誌を参照されたい。

１月 10 日に古墳上部の伐採や古墳鎮守祭が行われ、調査が開始された。墳丘表土の掘削は人力にて 10・11 日の２日間実施され、その中から須恵器片が出土している。１月 14 日に重機によって落下した天井石や動いた石が除去された後、石室内の人力掘削が進められ、同日から早速、金属器等が出土している。１月 18 日には石室周囲にやり方が設定され、検出状況などの実測が進められた後、同写真が１月 22 日に撮影された。１月 23

日から28日にかけて開口部付近の石積みの実測、石材除去が一段ごとに慎重に行われたが、調査当初はすべて閉塞石として認識されていたようであり、段構造の石材はすべて取り外されている。また、1月28日から2月4日にかけては石室周囲のトレンチ掘削も行われ、墓坑の状況等が確認されているほか、壁面の実測も以後随時行われたようである。一方で石室内では多数の遺物が検出されてきており、2月5日に敷石を有する追葬面が検出され、その後、遺物出土状況や敷石の写真撮影や図化が進められた。2月8日から13日にかけては追葬面の掘削が行われ、途中に遺物やまばらな敷石らしきものが検出されたことから調査時にはこれを床面として捉えたようであるが、『概報』では採用されていない。2月14日には初葬面の精緻な敷石が検出され、写真撮影や実測が行われた。2月15日には基底石、裏込石を残し、重機によって壁面石材が取り上げられ、またこれらの実測、写真撮影が進められている。2月26日には基底石も取り上げられ、完掘状況の実測や写真撮影の後、27、28日と重機による埋め戻しが行われ、現地調査が終了している。

（2）概報整理作業

概報整理作業は平成3年（1991）3月に開始し、3月25日の概報（渡井1991）の刊行を以て終了している。その間に遺構実測図の編集やトレース作業や一部の遺物写真の撮影、報告文の執筆が実施された。

尚、平成4年以降に、調査時に出土した馬具類の一部については、外部機関によってクリーニングや修復といった一連の保存処理が行われたようであるが、関係書類散逸のため、詳細は分からなかった。

【L-62号墳　本調査日誌】

平成3年（1991）

1月10日（木）晴れ　調査開始。土置き場用囲いをコンパネで設置。地権者主催の古墳鎮守祭。古墳上部の茶木伐採。地権者とトレンチ位置協議。現況レベリング。現況写真撮影。石垣、盛土（耕作土）撤去。須恵器片出土。

1月11日（金）晴れ　盛土（腐葉土）除去。天井石の落下。須恵器片多数出土。

1月14日（月）晴れ　重機搬入。側壁平板測量。排土後石室現況写真。排石作業スナップ。石室内排土。同スナップ。石室南側トレンチ掘削？須恵器片多数、刀子（石室北側）、耳環1・金属器（石室南側）出土。

1月16日（水）晴れ　石室内排土。奥壁除去。石室南側トレンチ精査。運搬（ビニールシートなど）。石室周囲掘り下げ。馬具、金属片など出土。

1月17日（木）曇りのち雨　石の運び出し。石室の清掃。雨のため作業中止。

1月18日（金）晴れ　石室清掃。やり方設定（KBMより－1.10m。北側杭6.445 m、南側杭4.889 m、東側杭6.581 m、西側杭3.895 m）。

1月19日（土）晴れ　やり方水糸の設定。石室側壁（東）実測。

1月21日（月）曇りのち雨　側壁実測。雨のため作業中止。資材、機材購入。

1月22日（火）曇り一時雨　石室清掃。写真撮影（石室全体、閉塞石）。実測。スナップ写真。

1月23日（水）晴れ　側壁（西側）、閉塞石実測。スナップ写真。レベリング。

1月24日（木）曇り　側壁レベリング（西側）。小野真一氏来訪。調査範囲実測、レベリング。閉塞石実測、石の取り上げ。閉塞石北側石積み写真。

1月25日（金）曇り後晴れ　閉塞石実測。断面図。中野国雄氏来訪。閉塞石レベリング、石の取り上げ。この時から、閉塞石の下部の石材が大きいため、当初から積まれた石積みであった可能性を想定しはじめる。

1月28日（月）晴れ　閉塞石下部写真撮影、実測、レベリング。トレンチ（北、西）掘り方（検出？）。閉塞石下部除去、実測、レベリング、写真。側壁計測線割り付け。スナップ写真。須恵器片出土。

1月29日（火）曇り後晴れ　重機搬入用塀作業。側壁（東）実測。墳丘部トレンチ。

1月30日（水）曇り　側壁断面図。石の搬出。

1月31日（木）曇り　やり方再設定（－60cm）。側壁実測（東展開図）。東、南、北、西トレンチ掘り方土層観察、写真。

2月1日（金）快晴　小野真一氏来訪。東トレンチ写真。東トレンチ、主軸北トレンチ、西トレンチ断面実測。

2月4日（月）晴れ　東トレンチ横断面実測。調査範囲図実測、レベリング。調査範囲外北トレンチ土層断面実測。遺物出土状況写真（耳環、刀子、短刀、金属器片Ⅰ～Ⅴ、鉄鏃・砥石、馬具）。

2月5日（火）快晴　調査範囲外北・西トレンチ清掃、写真（土層断面・全体）。第1次床面（追葬面）検出。

2月6日（水）曇り後晴れ　写真（墳丘スナップ、馬具、短刀）。出土遺物の取り上げ、レベリング（鉄器片、馬具、短刀など）。

2月7日（木）曇り　第1次床面（追葬面）敷石実測。写真（馬具）。

2月8日（金）曇り後晴れ　第1次床面（追葬面）敷石実測。主軸・横断面実測。レベリング後、石の取り上げ。写真（馬具・鉄器片）。

2月12日（火）晴れ　第1次床面（追葬面）掘り方（掘削？）。第2床面（中間層）実測、写真。耳環、玉、馬具？出土。

2月13日（水）快晴後曇り　第2次床面（中間層）実測、写真、レベリング。玉出土状況写真。石、出土遺物の取り上げ。鉄器X線撮影。

2月14日（木）晴れ後曇り　レベリング、石の取り上げ。写真（玉出土状況）。第3次床面（初葬面）検出、写真。側壁平面図補足。

2月15日（金）雨　重機搬入。側壁の取り上げ、石材運搬。北東側を掘削したものの、周溝は確認できず。

2月16日（土）晴れ　裏込め石検出。

2月18日（月）曇り　裏込め石検出。第3次床面（初葬面）敷石清掃、実測。

2月19日（火）曇り　第3次床面（初葬面）敷石実測、レベリング、石の取り上げ。

2月20日（水）晴れ　第3次床面（初葬面）敷石レベリング、石の取り上げ。床面下敷石（入口部）検出、実測、写真。

2月21日（木）快晴　床面下敷石（入口部）レベリング、石の取り上げ。石室中央部サブトレンチ。写真（横断面《東》1～3、裏込め石・掘り方）。

2月22日（金）快晴　裏込め石一部実測（西・東）、レベリング、取り上げ。根石（基底石）実測、写真。

2月25日（月）晴れ　KBM移動（27.430m→46.156m）。調査範囲図面上へ。根石（基底石）、側壁展開図補足。掘り方レベリング。石材運搬。

2月26日（火）晴れ　根石（基底石）運搬。完掘、掘り方平面図、写真。

2月27日（水）晴れ　重機による埋め戻し。スナップ写真。

2月28日（木）雨　重機による埋め戻し（北側通路部分）。撤収、資材片付け。

注

(1) 船津L-第62号墳の調査については、1991年に富士市教育委員会より発掘調査概報が刊行されている（渡井1991）ものの、発掘調査事業にかかわる書類の綴りは既に散逸しており、遺構図面や写真以外に当時の調査を直接示す資料としては、調査担当者の記した日誌が残る程度である。従って、本節の現地調査にかかる内容は1991年の概報の記述を最優先しつつ、調査担当者の日誌にて不足分を補完して再構成したものである。

第2節　船津L-第206・207号墳の発掘調査

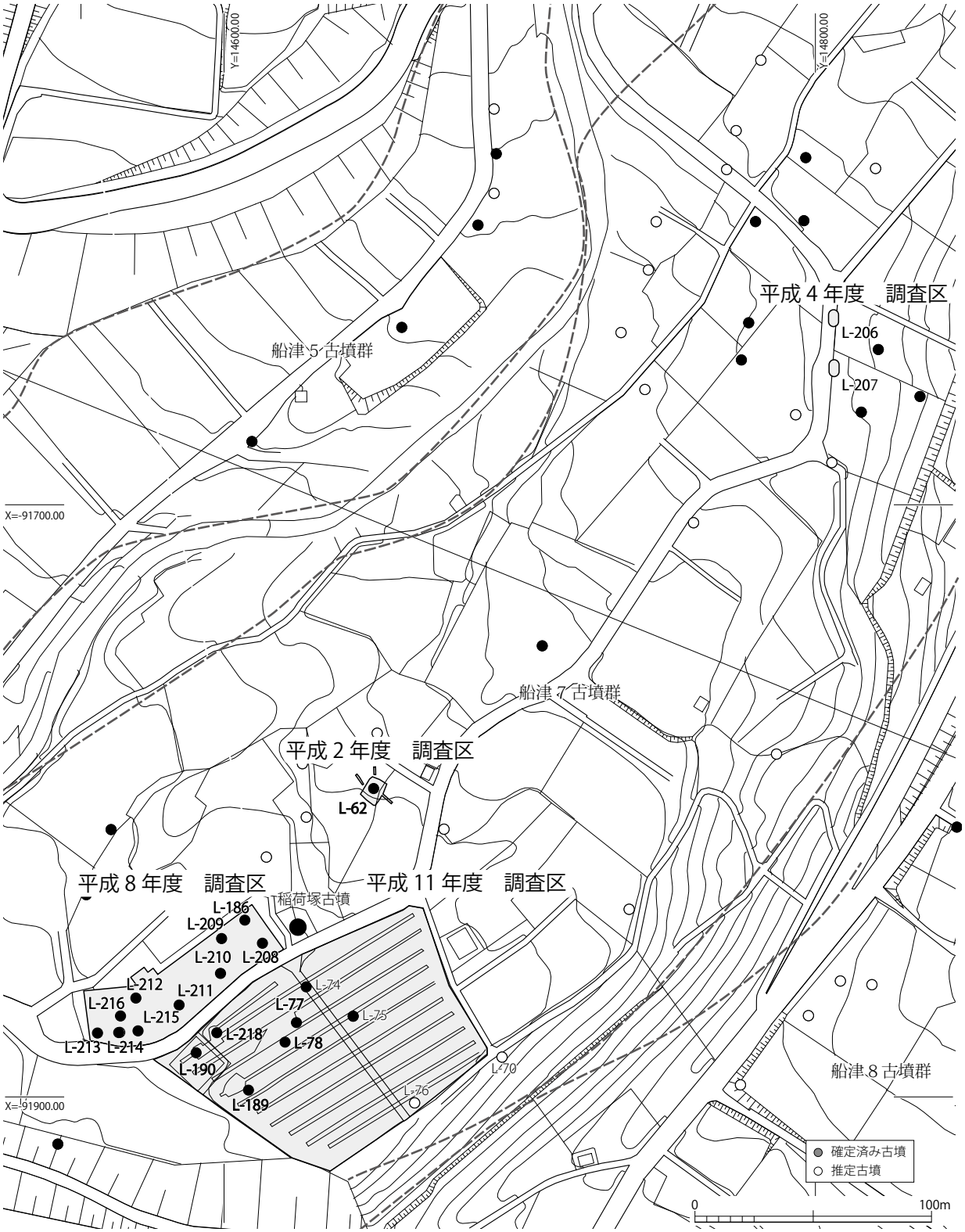
1．調査に至る経緯

船津L-第206号墳ならびにL-第207号墳の発掘調査（船津7古墳群　第3地区）は、富士市役所農政課が富士市船津字矢川上806-3地先（L-第206号墳）、同806-2地先（L-第207号墳）において平成3年（1991）8月29日から平成4年（1992）3月10日にかけて行った農道拡幅工事を契機としている。平成3年10月18日、当該地の工事中に2つの石室らしきものを発見したとのしらせが農政課から文化振興課へと届き、文化振興課職員がこれを確認したところ、ともに古墳であることが判明したため、新たにL-第206号墳、L-第207号墳として新規登録される運びとなった。

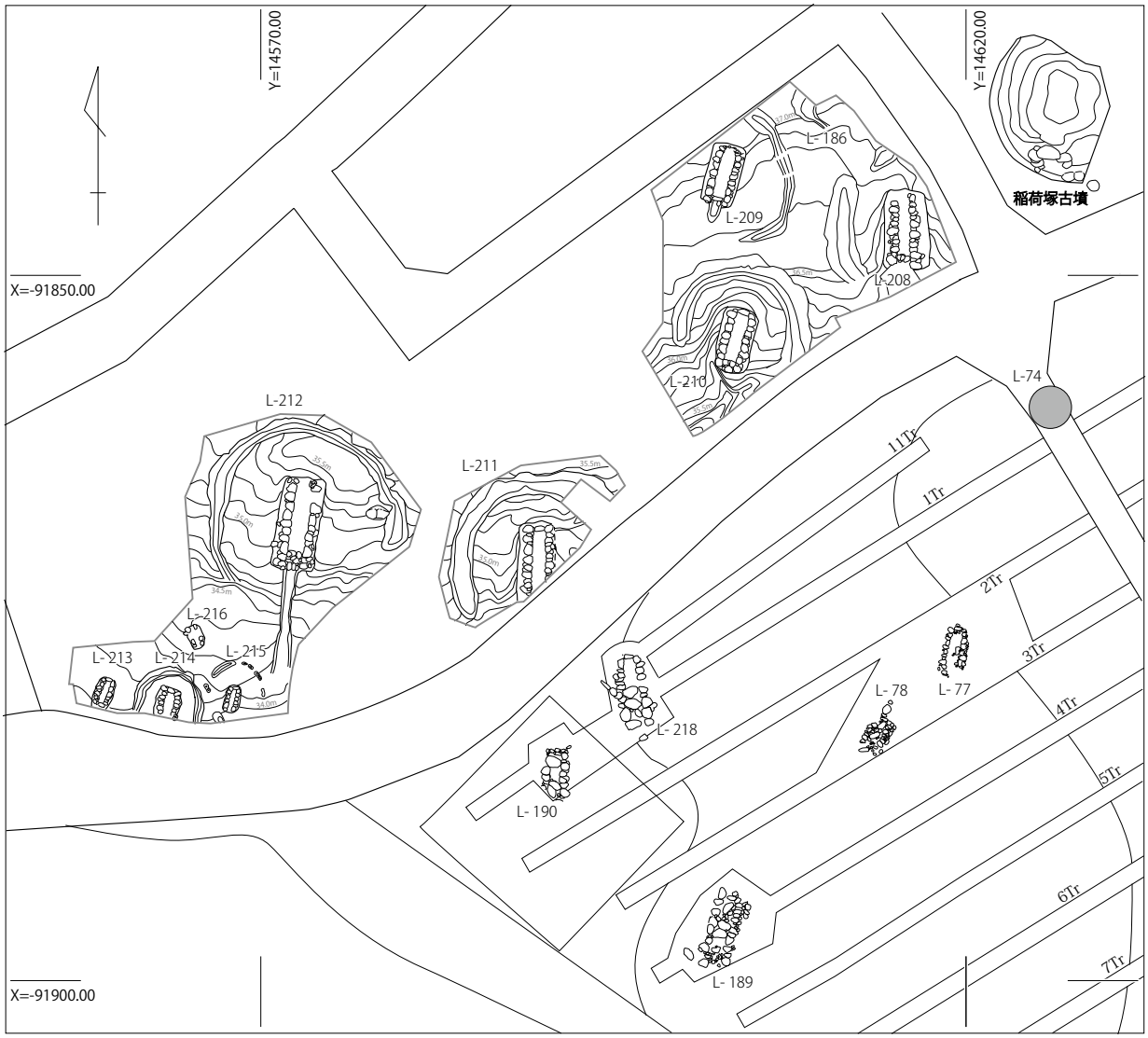
その際、L-第206号墳は擁壁面となる斜面を削る工事中に石室開口部付近が露頭し、既に開口部の一部が重機によって削平されたようであり、工事業者によって完形に近い須恵器が数点採集されていた。露頭部分は擁壁設置予定箇所であり、工事もかなり進行していたため、急遽、遺物の収集と現況記録を目的とした発掘調査を実施することした。開口部より北側の大部分については石室が残存していると判断されたが、工事の影響が及ばな

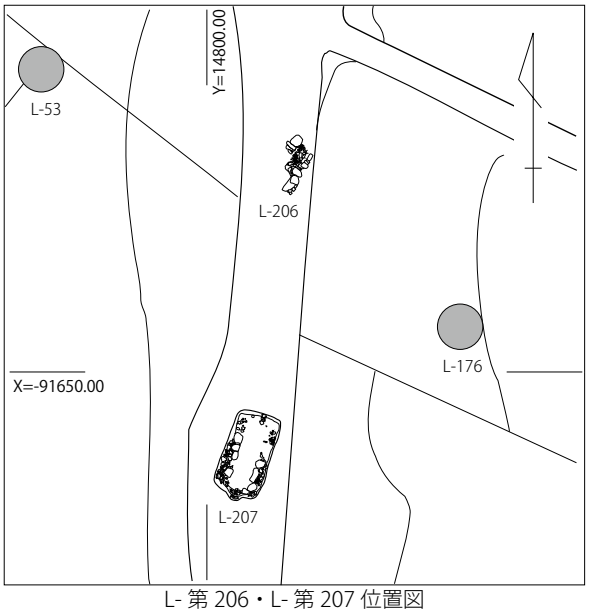
いため、現況のまま保存することとなった。

L- 第 207 号墳については、10 月 18 日の発見時点で石室の基底石らしきものが露頭している程度であった。翌 19 日に確認調査を行って床面の一部が確認されたため、古墳として認定した。残存部分は農道の拡幅工事によって道路直下となり、現況保存は困難であると判断されたため、急遽、記録保存を前提とした本発掘調査を実施することとなった。

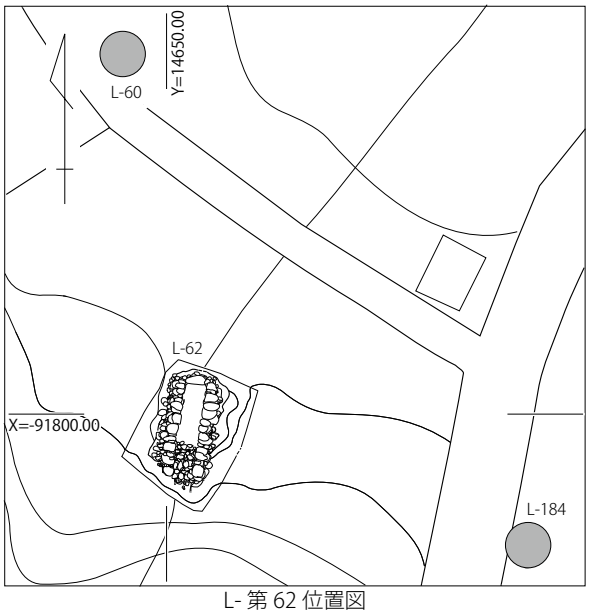


第 1 図　船津古墳群周辺図（S=1/2,000）





L-第206・L-第207位置図



L-第62位置図

0　20m

第2図　古墳位置図（S=1/500）

2．調査体制

事務局	文化振興課	課　長	小長谷秀夫
		課長補佐	小出禮節
		係　長	佐野誠一
調査担当		指導主事	中尾欣司
		主　事	久松義昭
		主　事	前田勝己
		主事補	影山英之

第3節　船津L-第77・78・189・190・218号墳の発掘調査

1．調査に至る経緯

船津L-第77･78･189･190･218号墳の調査は個人の茶畑改植に伴い、実施された。当該地は昭和50年代に行われた踏査によってL-第77、第78、第189、第190号墳が所在することが確認されていた。また、同地北側には現存する稲荷塚古墳と平成9年4月～6月に製茶工場建設時に発掘調査されたL-第186、L-第208～第216号墳が所在していた。このため、事業者より確認調査依頼書が提出され、平成11年9月2日～30日の期間で確認調査を実施した。調査は地形に合わせて11本のトレンチを設定し、重機及び人力による掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、5基の横穴式石室を主体部とする古墳を検出した。なお、調査結果の詳細については後述する。確認調査の結果を踏まえ、事業者及び富士市教育委員会にて協議を重ねた結果、事業者が盛り土等の保護措置を講じることで古墳を現状保存することとなり、調査を終了した。

2．調査体制

事務局	文化振興課	課　長	小林孝征
		課長補佐	殿岡孝則
調査担当		係　長	渡井義彦
		指導主事	田中淳一
		主　査	志村　博
		主　査	木ノ内義昭
		主　事	前田勝己
		主　事	仁藤丈也

第4節　整理作業

【平成24年度（本整理作業）】

事務局	富士市教育委員会	教育長	山田幸男
		教育次長	鈴木　清二
	文化振興課	課　長	渡井義彦
	文化振興課	主　幹	前田勝己
整理担当	文化振興課	上席主事	佐藤祐樹
		主　事	藤村　翔
整理補佐	文化振興課	臨時職員	稲葉万智子
			小田貴子
			井上尚子
			金刺才己

本整理作業は平成24年4月1日より開始し、本書の刊行を以て終了した。期間中に出土土器の洗浄や一部遺物の接合、復原、遺物の図化作業、遺構図、遺物図等の編集、各図トレース作業、観察表等の作成、遺物の写真撮影、報告の執筆を行った。出土金属製品については静岡県埋蔵文化財センター大森信宏氏の御協力の下、X線撮影を実施した。また、船津L-第62号墳の馬具についての考察を静岡県埋蔵文化財センター大谷宏治氏に依頼し、玉稿を賜った。なお、遺物集合写真、金属製品や玉類の個別写真については杉本和樹氏に撮影を依頼した。最後にこれらを編集し、報告書を作成した。

なお、本書にて報告する遺物や図面は、すべて富士市教育委員会にて保管・管理されている。

第Ⅱ章　立地と環境

第１節　地理的環境

船津古墳群が所在する静岡県富士市は、北に富士山、東に愛鷹山、南に駿河湾、西に富士川と豊かな自然と景観に恵まれており、平均気温も 16 ～ 17℃と年間を通じて比較的温暖な地域である。平成 20 年（2008）には富士川町との合併を経て、人口は平成 25 年３月１日現在で 259,339 人、面積 245㎢を測り、静岡県東部における中心都市の一つとして位置づけられている。古墳群が位置する現在の富士市船津の行政区分は、現在の富士市（1966 年～）から､吉原市（1956 年～)､原町（1955 年～)、浮島村（1889 年～）と遡っていき、町村制施行以前は駿河国駿東郡、律令制下では駿河国駿河郡に帰属する。

現在の富士市域は、富士･愛鷹両火山系である山地と、富士川河口付近のデルタ地帯から浮島ヶ原低湿地帯にかけて形成されている平野部に大きく分けられる。平野部は、富士川の運搬した物質が堆積して形成された扇状地型デルタである富士（加島）平野、富士川河口から沼津市の狩野川左岸に位置する牛臥山までの田子の浦砂丘によって挟まれた東西約 15km、南北約 2km、海抜高度平均 5m 以下の低地である浮島ヶ原などの地形区に大別されている（小川 1986)。本古墳群の南に位置する浮島ヶ原は､現在は水田や工場団地が広がっているものの、6,000 ～ 5,000 年前（松原 1989 など）から近世にかけては、赤淵川や須津川、春山川、さらには沼津市域の高橋川や大川から注ぎ込まれる豊かな水を湛えた広大な沼湖（浮島沼）が形成されていたのであり、この沼湖や周辺の低地部が長年に亘って生産基盤や交通路として利用されたのである。

本古墳群の立地する愛鷹（火）山は、富士市･沼津市･裾野市にまたがる最高点海抜 1,504m の成層火山であるが、約 10 万年前には既に活動を停止している（町田編 2006)。その後は西に接する箱根火山や北北西に位置する富士火山等から飛来したテフラが山体に厚く堆積し、愛鷹ローム層が形成された。なかでも富士火山起源テフラを主体とする上部ローム層では、腐食質土層である黒色帯と、激しい噴火によって短期間で堆積したスコリア層が交互に折り重なっており、その標識的な層位状況から、旧石器時代研究のフィールドとしても著名となっている。

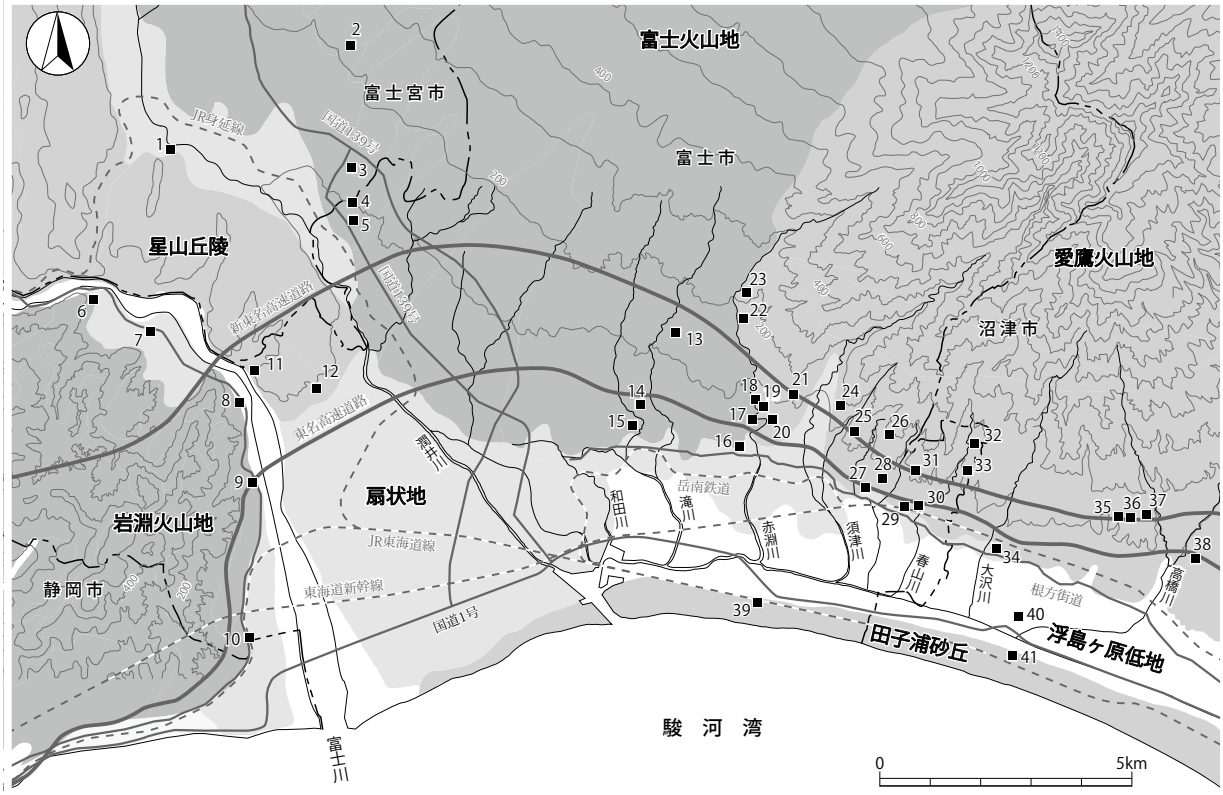
テフラが降下した間にも愛鷹山体の各放射谷の下刻は進行し、谷中を通る各河川流域には、河岸段丘が発達・形成された。本古墳群が立地する春山川流域も浸食作用によって、上から高位、中位、低位の３段の河岸段丘が形成されるとともに、谷頭部には扇状地が形成された。高位段丘は、愛鷹林道の臼の谷橋付近から下流へ約 1,125m の春山川左岸に残されている。この段丘と中位段丘の比高は約 40m で、南西に向って緩やかに傾斜する。中位段丘は、高位段丘に引き続いて、東名高速道路北方 450m 付近までの約 2,200m 間の春山川右岸に残されている。この段丘面以下に、古墳群の存在が確認されている。この段丘と低位段丘の比高は約 20m で、南に向って緩やかに傾斜している。低位段丘は、中位段丘に引き続いて、下流にある根方街道（県道 22 号三島富士線）付近まで、約 1,280m 間の春山川左岸に存在している。現在の河床との比高は 5m 内外で、南に向って緩やかに傾斜する。低位段丘上には当古墳群の大部分が存在しており、今回報告する８基の古墳もここに位置している。春山川はそのまま南下し、根方街道以南で旧浮島沼に注がれていたことから、浮島沼北縁の津の一つとして、いつの時代からか一帯を船津と呼ぶようになったとみられる。根方街道は富士から沼津・三島へと至る主要交通路であり、この往還の沿線に、次節で述べるとおり、弥生時代以降は数多くの集落が営まれている。

第２節　歴史的環境

旧石器時代　静岡県内において後期旧石器時代の遺跡が西部の磐田原台地や東部の愛鷹山・箱根山周辺に集中することは有名であるが、富士市域においては長らく富士山南麓の天間沢遺跡（志村 1986）や愛鷹山南西麓の峰山遺跡・陣ヶ沢Ａ遺跡（中野 1972・志村 1986）においてナイフ形石器や細石刃が採集されているほかは、星山丘陵の高徳坊遺跡において当該期の可能性がある石刃状剥片（佐藤・服部 2012）が発掘されている程度であった。しかし、近年の新東名高速道路建設等に伴う発掘調査が相次いで実施されたことにより、良好な資料が蓄積されつつある。

愛鷹山南麓の矢川上Ｃ遺跡（柴田・杉山ほか 2009）では、ナイフ形石器を主体とした複数の文化層が確認されたほか、礫群も数多く検出されており、当該期の大規模な集落跡として位置付けられている。古木戸Ｂ遺跡では第Ⅲスコリア帯～休場層までの複数段階の石器ブロックが認められているほか、古木戸Ａ遺跡・天ヶ沢東遺跡においてもナイフ形石器や尖頭器、細石刃がみつかっている（岩本ほか 2010）。愛鷹山南西麓の前の原遺跡（注１）や向山遺跡（岩崎・西田ほか 2013）でも、ナイフ形石器や尖頭器が出土している。近接する沼津市域ではさらに調査例も豊富であり、愛鷹山南麓の渕ヶ沢遺跡（岩本ほか 2013）や秋葉林遺跡（阿部 2009）、的場遺跡（富樫 2010）などで、当該期の重層的な遺跡の拡がりが確認されている。

縄文時代　草創期の遺跡については愛鷹山東南麓で確認されているものの、愛鷹山南麓～富士市域では天ヶ沢東遺跡等で尖頭器の存在が確認されているが、土器や遺



1. 滝戸遺跡　2. 箕輪Ａ・Ｂ遺跡　3. 若宮遺跡　4. ジンゲン沢遺跡　5. 天間沢遺跡　6. 大北遺跡　7. 浅間林遺跡　8. 木島遺跡　9. 破魔射場遺跡・駿河山王遺跡　10. 大楽窪遺跡　11. 万野原遺跡　12. 念信園遺跡　13. 三度蒔Ａ遺跡　14. 中島遺跡　15. 宇東川遺跡　16. 赫夜姫遺跡　17. 前の原遺跡　18. 花川戸遺跡　19. 向山遺跡　20. 中尾沢遺跡　21. 富士岡中尾遺跡　22. 峰山遺跡　23. 鵜無ヶ渕遺跡　24. 百間遺跡　25. 天ヶ沢東遺跡･古木戸Ａ・Ｂ遺跡　26. 鳥帽子形遺跡・中尾遺跡　27. コーカン畑遺跡　28. 愛鷹遺跡　29. 上ノ段遺跡　30. 春山遺跡　31. 境丸山遺跡　32. 陣ヶ沢Ａ遺跡　33. 矢川上Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡　34. 吹上遺跡　35. 渕ヶ沢遺跡　36 的場遺跡　37. 秋葉林遺跡　38. 伊良宇祢遺跡　39. 三新田遺跡　40. 雌鹿塚遺跡　41. 鳥沢遺跡

第３図　旧石器・縄文時代の主要遺跡分布図（S=1/150,000）

構は未だ確認されていない（岩本ほか 2010）。

早期の遺跡としては、星山丘陵の念信園遺跡や万野遺跡（中野 1969）、富士山南麓のジンゲン沢遺跡（植松 1984）、三度蒔Ａ遺跡（中野 1972）、宇東川遺跡（若林編 2012）において押型文系土器が、また高徳坊遺跡（佐藤・服部 2012）やジンゲン沢遺跡（前田 2007）で早期後半の条痕文系土器が出土している。

愛鷹山南西麓～南麓では陣ヶ沢Ａ遺跡や矢川上Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡、春山遺跡、鵜無ケ渕遺跡、峰山遺跡、百間遺跡などで押型文系土器が、春山遺跡、境丸山遺跡、烏帽子形遺跡、（江尾）中尾遺跡、愛鷹遺跡、百間遺跡、峰山遺跡、花川戸遺跡などで条痕文系土器が採集されている（中野 1972、小野 1975）。また向山遺跡では発掘調査の結果、竪穴建物跡にともなって多くの条痕文系土器の破片が出土しているほか（前田 1999）、富士岡中尾遺跡で野島式土器が出土している（田村・大谷ほか 2010）。中尾沢遺跡で早期末の無文土器、向山遺跡で清水柳Ｅ類土器、前の原遺跡で表裏縄文土器や押型文土器、野島式土器が出土した（岩崎・西田ほか 2013）。天ヶ沢東遺跡、古木戸Ａ遺跡、古木戸Ｂ遺跡でも当該期の土器が出土している（岩本ほか 2010）。いずれの遺跡も比較的高所である丘陵上を中心に立地しており、遺跡の密度も低い。

前期の遺跡については早期からの継続で捉えられるものがほとんどであり、遺跡の規模も小さい。富士山南麓のジンゲン沢遺跡（植松 1984）、愛鷹山南西麓の峰山遺跡（小野 1975）、花川戸遺跡（中野 1972）、前の原遺跡（岩崎・西田ほか 2013）などで木島式土器が採集または発掘されている。天ヶ沢東遺跡や富士岡中尾遺跡では前期前半の清水ノ上Ⅱ式のほか、搬入品とみられるものを含む北白川下層式土器がみつかっており、特筆される（岩本ほか 2010、田村・大谷ほか 2010）。続いて、中尾沢遺跡、前の原遺跡、向山遺跡、富士岡中尾遺跡（前田編 1991、田村・大谷ほか 2010、岩崎・西田 2013）、古木戸Ａ遺跡（岩本ほか 2010）、コーカン畑遺跡（注 2）では諸磯ｂ～ｃ式や十三菩提式、中期初頭の五領ヶ台式が確認されており、従来希薄と考えられてきた前期後葉～中期初頭の遺跡が、愛鷹山南西麓に一定の拡がりをもって分布する状況が明らかになりつつある。

中期中葉頃から後期にかけての時期には、一挙に遺跡の数や内容が充実してくる。富士山南麓ではジンゲン沢遺跡で藤内式期とみられる竪穴建物跡が検出されているほか（前田 2007）、隣接する天間沢遺跡（平林編 1984・1985）においては勝坂式や曽利式、加曽利Ｅ式、称名寺式、堀之内式の土器とともに、多くの竪穴建物跡や配石遺構、土坑などが検出されており、当該期の拠点的な集落として認識されている。

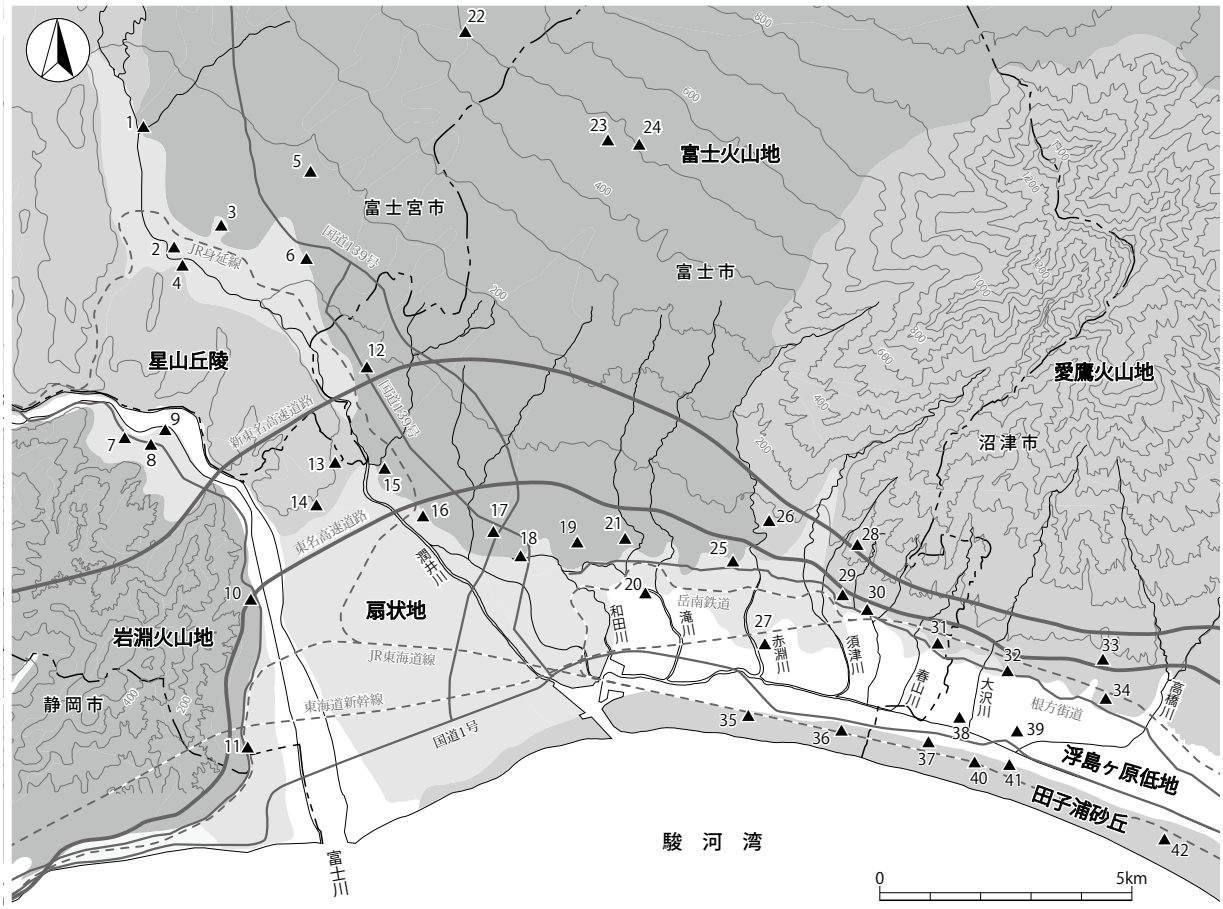
一方、浮島沼北西に位置する宇東川遺跡ではこれまでに藤内式・井戸尻式から堀之内式までの土器とともに柄鏡形敷石建物を含む多数の建物跡や土坑が検出されているが（久松編 1991、佐藤編 2009）、なかでも曽利Ⅳ・Ⅴ式期と堀之内式期に盛期をむかえることが明らかになっている（若林編 2012）。また宇東川遺跡から程近い中島遺跡では堀之内式や加曽利Ｂ式といった後期の土器とともに、環状を呈した配石遺構も検出されているほか、赫夜姫遺跡でも堀之内式の注口土器が出土している（中野 1972、志村 1986）。こちらも、宇東川遺跡を中心として集落ネットワークが形成されていた可能性が高い。愛鷹山南西麓では、上ノ段遺跡（小野編 1964）において曽利式を主体とする土器や石棒などとともに配石遺構が検出されているほか、向山遺跡（岩崎・西田 2013）で曽利式期の石囲い炉を有する竪穴建物跡が確認されている。後期後葉以降は周辺地域と同様に遺跡の数が激減し、田子の浦砂丘上に新たに成立し始める三新田遺跡（平林編 1983）において晩期の土器片が出土している程度である。

弥生時代　弥生時代になると、遺跡の立地がそれまでの丘陵上から「浮島沼」に隣接した丘陵先端部へと大きな変化をみせると考えられている。ただ、当該期の市内の遺跡数自体は現状では少なく、その始まりについても富士川以東においては中期後葉の大坂遺跡や沖田遺跡までしか遡って確認することができない。周辺の前期の遺跡としては、富士山南西麓の渋沢遺跡（渡井・山上 1989）で樫王式から丸子式までの土器がまとまった出土をみせ、また富士川西岸の山王遺跡（稲垣編 1975）で水神平式が出土しているほか、愛鷹山南麓の葱川遺跡（小野・笹津 1971）で氷Ⅱ式や樫王式の土器片が、沼津市丸山遺跡（沼津市教委 1976）では水神平式の土器片がそれぞれ出土している。そのような近隣地域からは少し遅れて、富士山南麓の丘陵上に立地する大坂遺跡や浮島沼西岸の沖田遺跡、北岸の寺の上遺跡において、中期後葉の原添式や有東式の土器が出土している（中野

1972、志村 1986)。特に沖田遺跡は中・後期の土器とともに矢板や大足・竪杵といった木製品が大量に出土しており、このころから浮島沼沿岸に根を下ろした水稲農耕が漸く軌道に乗り始めたことが窺える。

後期以降については、富士山南麓の岩倉Ａ遺跡（佐藤 2011）や星山丘陵の高徳坊遺跡、念信園遺跡（中野 1969、佐藤・服部 2012)、宇東川遺跡（若林編 2012)、浮島沼に張り出した低地部の行僧遺跡（藤村・若林 2012)、田子の浦砂丘上の柏原遺跡(藤村ほか 2013 など）で集落が確認される一方で、愛鷹山南西麓では向山遺跡（前田編 1991）や宮添遺跡（佐藤編 2011・2012 など)、的場遺跡（小野ほか 1965）などの集落が、浮島沼を南面して見下ろす丘陵上から丘陵端部にかけて成立する。こうした新たな集落には続く古墳時代前期まで継続して展開するものも目立っており、特に愛鷹山南西麓における集落は、浮島沼北縁を通る根方街道の成立とも相まって、古墳時代になり拠点的集落へと成長を遂げることとなる。そのような動きの一方で、浮島沼や根方街道から離れた愛鷹山丘陵上にも、山側に条濠らしき溝を伴い、外来系土器も出土する集落である平椎遺跡の存在が明らかとなっているが（田村・大谷ほか 2010)、こちらは少なくとも古墳時代前期前半までには解体しており、同様の消長を辿り条濠も有する愛鷹山東南麓の足高尾上遺跡群との関連性も注意される。

古墳時代　古墳時代前期初頭頃に丸ヶ谷戸前方後方形周溝墓（馬飼野・山上 1991）や高尾山古墳（池谷編 2012）といった方形原理の首長墓が築かれるなか、それらに少し遅れて、愛鷹山南西麓に駿河東部地域では最大級となる全長約 90 mの前方後方墳である浅間古墳(静岡大学人文学部考古学研究室 1998）が築造される。ま



1. 渋沢遺跡　2. 泉遺跡　3. 大宮城跡　4. 滝戸遺跡　5. 丸ヶ谷戸遺跡　6. 上石敷遺跡　7. 清水岩ノ上遺跡　8. 浅間林遺跡　9. 中野遺跡
10. 破魔射場遺跡・駿河山王遺跡　11. 大楽窪遺跡　12. 天間代山遺跡　13. 高徳坊遺跡　14. 念信園遺跡　15. 沢東Ａ遺跡　16. 中桁・中ノ坪遺跡
17. 東平遺跡　18. 三日市廃寺跡　19. 舟久保遺跡　20. 沖田遺跡　21. 宇東川遺跡　22. 村山浅間神社遺跡　23. 大坂遺跡　24. 岩倉Ａ・Ｂ遺跡
25. 祢宜ノ前遺跡　26. 向山遺跡　27. 行僧遺跡　28. 平椎遺跡　29. 宮添遺跡　30. コーカン畑遺跡　31. 寺の上遺跡　32. 葱川遺跡　33. 閑峰遺跡
34. 古城遺跡　35. 三新田遺跡　36. 柏原遺跡　37. 下道遺跡　38. 雄鹿塚遺跡　39. 雌鹿塚遺跡　40. 中原遺跡　41. 鳥沢遺跡　42. 東畑遺跡

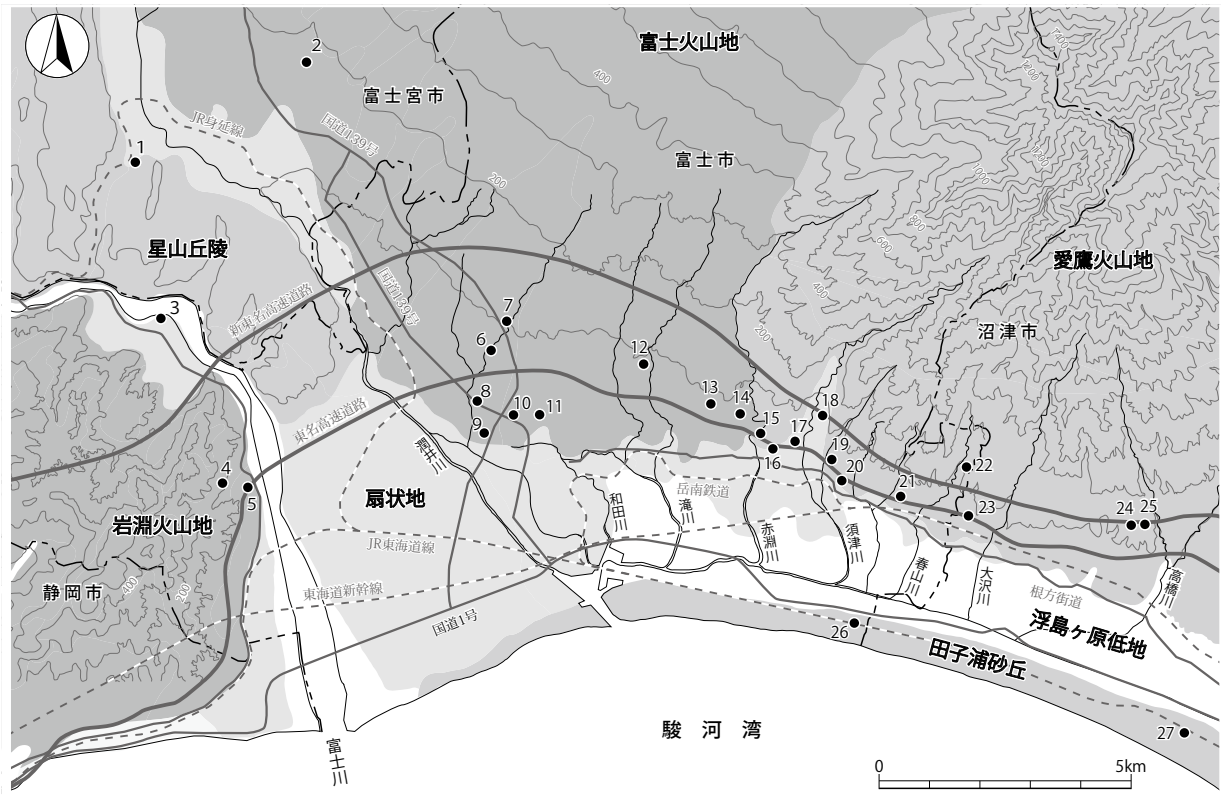
第４図　弥生～奈良・平安時代の主要集落遺跡分布図（S=1/150,000）

た前期の方形周溝墓の類例も近年増えてきており、富士川西岸の中野遺跡（稲垣 1984）や愛鷹山南西麓の富士岡 1 古墳群（岩崎・西田ほか 2013）、宮添遺跡（佐藤編 2012）が挙げられる。続く前期末頃には粘土床の主体部から仿製内行花文鏡・四獣鏡、琴柱形石製品、石釧などを出土した前方後円墳である東坂古墳（後藤・中野ほか 1958）が築造されており、これ以降、駿河東部地域では円形原理の首長墓が卓越することになる。

続く中期の前方後円墳としては愛鷹山南西麓の船津ふくべ塚古墳（小野 1957、中野 1958）が想定されるが、後述の通り明確ではない。またその他の墳形では後述する円墳の船津薬師塚古墳（大塚 1965、大塚編 1990）が含まれるほか、同じく円墳の琴平古墳、田子の浦砂丘上の双方中方墳とされる庚申塚古墳（ともに後藤・中野ほか 1958）も当該期の可能性がある。

後期になると、新たに富士山南麓の大淵扇状地南端斜面に全長 54 m以上の大型円墳とされる伊勢塚古墳が築造される（藤村・若林 2012 など）。富士市域の古墳では初めて埴輪を採用しており、その規模や立地、墳形などから、新しい時代の首長墓を印象づける資料であるといえよう。同時期には、愛鷹山南西麓の天神塚古墳や寺屋敷古墳（藤村・若林 2012 など）、愛鷹山南麓の長塚古墳（山本編 1999 など）、田子の浦砂丘上の山の神古墳（平林 1983 など）といった小型の前方後円墳が各小地域単位で築かれる。一方、後期初頭には富士山の側火山の噴火により、「大淵スコリア」と呼ばれるテフラが富士山南麓から愛鷹山南西麓の範囲で広く降灰していることも明らかになっており、当該期における中小首長墳の台頭も、そうした自然災害への対応の一環として捉える考えも示されている（佐藤・藤村 2013 など）。6 世紀後葉までには前方後円墳の築造は停止し、有力層の古墳には、横穴式石室を内包した円墳が選ばれるようになっていく。

群集墳については、富士市域に 800 基前後が展開していたことがかねてより知られている。その中でも現状では初期の事例として考えられているのが、6 世紀後葉に富士山南麓の大淵扇状地上に築かれた中原第 4 号墳（富士市教委 1994）である。主体部に段構造を有する



1. 別所古墳群　2. 丸ヶ谷戸遺跡　3. 中野遺跡　4. 妙見古墳群　5. 山王古墳群　6. 中原 4 号墳　7. 横沢古墳　8. 西平 1 号墳　9. 伊勢塚古墳
10. 東平 1 号墳　11. 国久保古墳　12. 実円寺西 1 号墳　13. 東坂古墳・大坂上古墳　14. 富士岡 1 古墳群（花川戸 4 号墳）　15. 寺屋敷古墳
16. 天神塚・中里大久保古墳　17. 琴平古墳・道東古墳　18. 須津 J-6 号墳・千人塚古墳　19. 浅間古墳　20. 宮添遺跡　21. 船津薬師塚古墳
22. 船津ふくべ塚古墳　23. 荒久城山古墳　24. 秋葉林 1 号墳　25. 的場 3 号墳　26. 庚申塚古墳・山の神古墳　27. 神明塚古墳・松長古墳群

第 5 図　主要古墳・周溝墓分布図（S=1/150,000）

無袖形横穴式石室からは、銀象嵌剣や銀象嵌大刀、鉄製馬具といった副葬品のほか、U字形鋤先や鉋を含む各種農工具や県内では珍しい鉄鉗も出土しており、鉄器生産やその流通に関わる集団の長たる被葬者の性格が想定されている。大淵扇状地上ではこれ以降、金銅製鈴や馬具が出土した横沢古墳（平林・志村 1981）、銀象嵌大刀や丁字形利器、杓子形壷鐙が出土した東平第１号墳（久松 1991）、銀装大刀片や雁木玉が出土した国久保古墳（藤村ほか 2011）など、豊富な副葬品を有する小型円墳が６世紀末から７世紀前葉頃を境に目立つようになり、その他の多数の円墳と併せて伝法古墳群を形成していく。愛鷹山南西麓〜南麓の丘陵地においても、大型の横穴式石室を有する実円寺西第１号墳（平林・川上 1986）のほか、方頭大刀が出土した大坂上古墳（後藤・中野ほか 1958）、銀装圭頭大刀が出土した花川戸第４号墳（佐藤・若林編 2013）、金銅装圭頭大刀が出土した中里大久保古墳（植松ほか 1975）や秋葉林１号墳（大谷ほか 2010）、銅鋺が出土した道東古墳（後藤・中野ほか 1958）、鉄針が出土した須津 J- 第６号墳（大谷編 2010）、鉄鐸の出土した的場３号墳（富樫 2010）など、際立った副葬品を有する小型古墳も数多く確認されている。

これらの古墳の多くは駿河東部地域に顕著に分布する段構造を有する無袖形横穴式石室（竪穴系横口式石室を含む）を主体部とし、また豊富な鉄製馬具や特徴的な副葬品を有することも多いことから、馬匹生産や鉄器生産、その他の手工業生産等の技術を有した複数の集団が当該地周辺に存在したことが想定されている（鈴木 2010、大谷 2010b など）。

古墳造営の母体となったであろう集落遺跡は、近年の発掘調査により、徐々に様相が判明しつつある。前期の集落としては、富士山南麓の宇東川遺跡（若林編 2012）、愛鷹山南西麓の赤淵川西岸に位置する祢宜ノ前遺跡（前田・佐藤 2008）や浅間古墳に南接する宮添遺跡（佐藤編 2012 など）、また境的場遺跡（小野ほか 1965）などのほか、田子の浦砂丘上の三新田遺跡（平林編 1983）で多数の竪穴建物跡が見つかっている。当該期の中心となる集落遺跡は浮島沼の周縁部に分布が集中しており、弥生時代から継続する遺跡も多い。中期以降になると、前代までに遺跡密度の薄かった富士山南麓の大淵扇状地南端の潤井川沿いに、新たに沢東Ａ遺跡（小野・秋元ほか 1995 など）や中桁・中ノ坪遺跡（志村・吉田 2004 など）、東平遺跡（木ノ内 2001）に集落が形成される。特に、５世紀代の須恵器を出土する先進的な集落は、沢東Ａ遺跡のほかには愛鷹の宮添遺跡などごく限られており、後期以降に伊勢塚古墳を嚆矢とした伝法古墳群が形成されていく上での母体となった集落として評価できる（藤村 2012）。それに対し、愛鷹山南麓に広がる群集墳については宮添遺跡やコーカン畑遺跡（藤村 2010）といった根方街道沿いに散在した集落との関わりも想定できるものの、それだけでは古墳の数には遠く及ばない。むしろ、６世紀後葉から７世紀にかけて発展する柏原遺跡や下道遺跡、中原遺跡、鳥沢遺跡といった田子の浦砂丘上の集落との関わりも、積極的に想定しておくべきであろう（藤村ほか 2013）。

奈良・平安時代　奈良・平安時代になると、市内全域において集落遺跡の数や内容が充実し、富士山南麓では天間代山遺跡（植松 1976）や東平遺跡（平林編 1981 など）、舟久保遺跡（木ノ内編 1996）、宇東川遺跡（若林編 2012 など）に代表される。東平遺跡では遠江や西駿河、甲斐などの諸地域との交流を示す土師器のほか、「布自」や「厨」などの墨書土器、中央との関係を考える上で重要な銙帯金具が出土しており、官衙的性格の濃厚な計画的集落であった可能性が示されている。また遺跡の南東部には「寺」と記された墨書土器や布目瓦が出土した三日市廃寺跡が位置しており（木ノ内編 2002、佐藤・若林編 2013 など）、『日本三代実録』所載の定額寺である「法照寺」の有力な候補地として考えられている。

愛鷹山南西麓では依然として宮添遺跡（佐藤編 2012）や祢宜ノ前遺跡（前田・佐藤編 2008）、沖田遺跡（前田 2000）といった伝統的な集落が勢力を維持しており、特に「根方街道」沿いの遺跡については東隣する地域からの玄関口として中世まで機能していたであろうことが想定できる。田子の浦砂丘上では三新田遺跡（志村編 2000）が依然として有力であるほか、柏原遺跡でも集落が確認されている（藤村ほか 2013）。柏原遺跡は『日本三代実録』貞観６年（864 年）12 月 10 日条に記載され、これ以後に廃された「柏原駅」の候補地として考えられており、根方街道とともに、砂丘上の街道（推定東海道）の整備も進んでいたことが遺跡からも窺われる。また８世紀代の墳墓としては、東平遺跡内に占地し方頭大刀、蕨手刀、銙帯金具等が出土した西平第１号墳の

ほか（志村ほか 2003）、富士川西岸の妙見古墳群（稲垣 1980）や山王古墳群（稲垣編 1975）の一部が挙げられる。この時期の墳墓の主体部には個人埋葬を意図した小型石室が採用されるほか、妙見１次 I-2 号墳などからは蔵骨器とみられる有蓋短頸壺も出土している。

注

(1) 富士岡１古墳群出土として報告された建物遺構や古墳に伴わない遺物（岩崎・西田ほか 2013）は、2012 年の範囲変更後の前の原遺跡に帰属する。

(2) 2012 年に調査したコーカン畑遺跡２地区では、諸磯ｂ式から五領ヶ台式の土器片とともに、被熱した集石遺構や多数の土坑も検出されている。

第３節　船津古墳群の概要

１．船津古墳群の呼称と範囲

本書で扱う船津古墳群とは、富士市域の東側に位置し、愛鷹山南麓を流れる春山川によって形成される河岸段丘上やそれを見下ろす丘陵尾根上にかけて築かれた古墳によって構成される古墳群を指す。

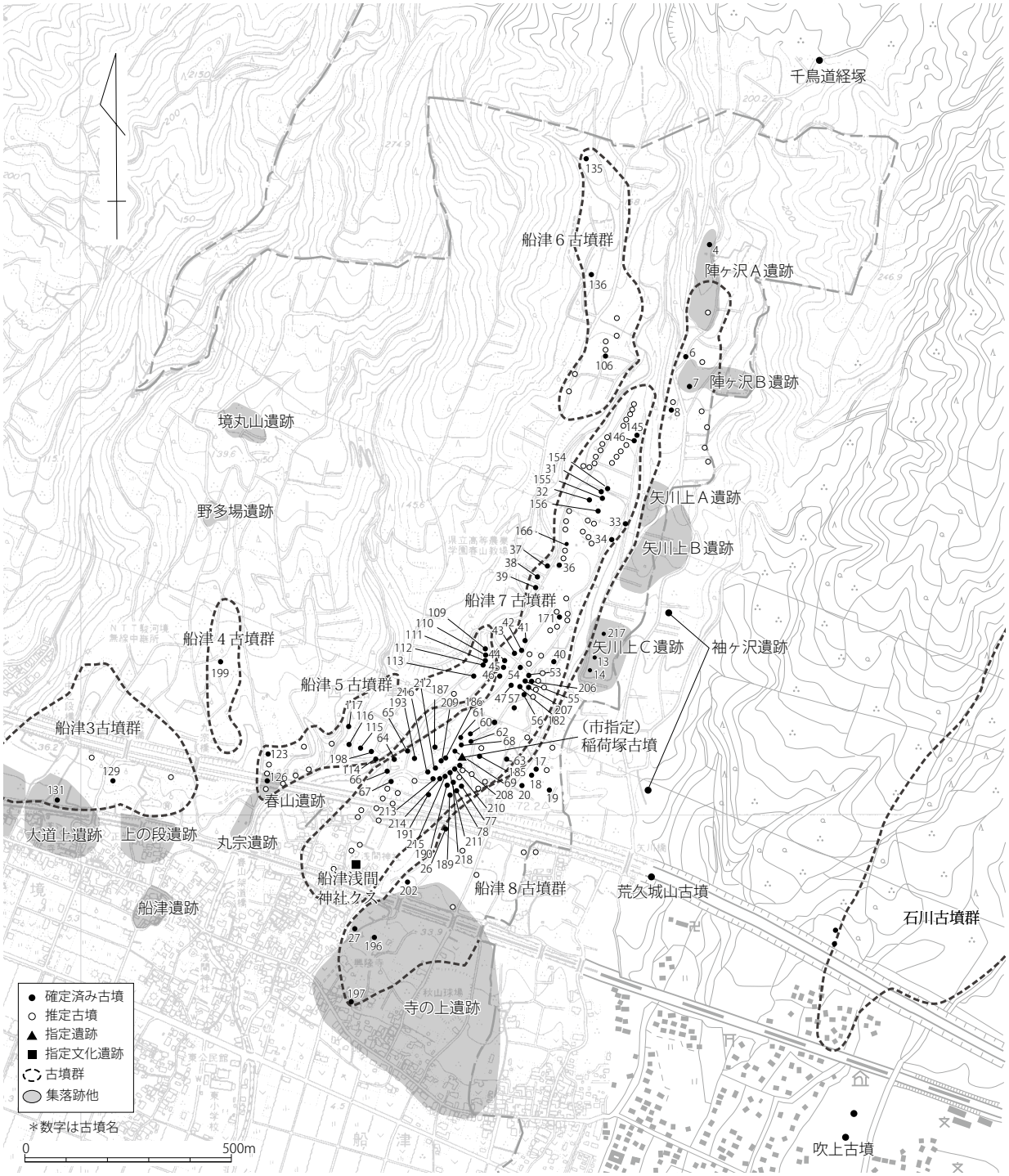
船津古墳群の名称とその範囲については、春山川を挟む東西の丘陵斜面や丘陵上の古墳群を指して「船津古墳支群（Ｌ群）」、総数 131 基（中野 1958）とされたのを基本的な考えに据えつつ、その後の分布調査の進展によって発見された江尾集落北側に散在する古墳を併せた範囲とするのが通例となった（渡井 1988・1999）。現在の埋蔵文化財分布地図ではそれらを８群に分け、西からそれぞれ「船津１古墳群」、「船津２古墳群」、…「船津８古墳群」という呼称が与えられており、総数は 217 基を数えるまでに至っている（富士市教育委員会編 2013）。近年提示されている細分案は、古墳群と呼称するよりも、むしろ支群として認識するべき群単位であり（水野 1974・1975）（注 1）、また「船津」の名を冠する古墳群の全体的な範囲についても、地形的・分布的にも春山川周辺の古墳からは連続しない江尾の丘陵上の古墳も含めるのには、慎重にならざるを得ない。古墳が集中して築かれた須津川流域と春山川流域の中間に位置し、分布も疎らな増川・江尾地区の古墳（現在の増川古墳群、平椎古墳群、船津１・２古墳群）については、現段階では前者の古墳群とは分けて整理しておくべきであろう。以上の考えから、冒頭に述べたように、本書では船津古墳群を春山川の河口周辺からその流域の河岸段丘や隣接する丘陵尾根に分布する古墳の総称として捉える（現在の船津３～８古墳群）。また現在の沼津市に所在する荒久城山古墳、神ヶ沢１・２号墳などを含む神ヶ沢古墳群（滝沢編 2002）についても、後述するように春山川東側の丘陵上に分布する古墳時代中期から後期前半の古墳によって構成される群との地理的・時期的な関わりが濃厚であることから（渡井 1999、大谷 2010b）、本書では船津古墳群の範囲に含めて考えたい。

２．船津古墳群の調査履歴

船津古墳群を構成する古墳のうち、その大多数は古墳時代後期後葉以降から飛鳥時代の古墳と考えられているが、古墳時代中期や後期前半の古墳も確実に存在しており、両者は分布上も違いをみせている。ここでは船津古墳群の古墳を立地や主体となる時期の違いから以下の３つの支群として大別し（中野 1958、p159）、その概要を紹介したい。尚、各古墳の参考文献については第１表を参照されたい。

陣ヶ沢支群　春山川の河岸段丘から一段高い、東側の丘陵上に築かれた古墳によって構成される。主として古墳時代後期前半以前の古墳が目立つが（大谷編 2010、p19）、鞍置塚古墳（L- 第７号墳）のような横穴式石室墳も存在するようである。ふくべ塚古墳（L- 第８号墳）は全長 65 ｍを測る前方後円墳の可能性があり、かつて小銅鏡、石製刀子、丸玉が出土したとされる（小野 1957）。陣ヶ沢出土と伝わる資料には小型仿製鏡（乳文鏡）や刀子形石製模造品があり（渡井 1988）、これらの遺物がふくべ塚古墳やその周辺から出土したものと考えられていることから、陣ヶ沢一帯に古墳時代中期に遡る古墳が存在したことは疑いない。新東名高速道路建設に伴って調査された L- 第 217 号墳（柴田・杉山ほか 2009）は、周

溝のみの検出ながら 20 mを測る円墳であり、当地域に一般的に分布する無袖形横穴式石室特有の地山を穿った墓坑の痕跡がないことから、墳丘盛土内におさまる竪穴系埋葬施設であった可能性がある（大谷編 2010、p19）。また周溝覆土内の最上層にしか TK23 ～ TK47 型式併行期降下とみられる大淵スコリア（佐藤・藤村 2013）は含まれず、橙色スコリアを主体的に含む覆土堆積から、古墳時代中期以前の築造と考えられよう。近接する L- 第 13 号墳（SD01・SD02）や L- 第 14 号墳についても、橙色スコリアを主体とする周溝覆土堆積状況から、古墳時代中期以前の円墳や方墳、あるいは方形周溝墓とみられる。金銅装の十文字楕円形鏡板付轡や剣菱形杏葉、辻金具が出土した荒久城山古墳も同一丘陵上の南端部に位置しており、現状では当群に含めておきたい。



第６図　船津古墳群周辺古墳分布図（S=1/15,000）

境・西船津支群　春山川西岸南側の低位段丘や丘陵斜面に築かれた古墳によって構成される。古墳時代中期から後期の古墳の存在が確認されている。根方街道を見下ろす丘陵斜面に位置する薬師塚古墳（L- 第 131 号墳）は周溝を有する直径 24m の円墳である。主体部の木棺粘土床からは鉄剣や刀子、鉄斧、玉類が出土しており、中期の小首長墳として認識されている。近接する上ノ段古墳（L- 第 129 号墳）も主体部等は不明ながら、後藤守一氏によればかつて金銅装の眉庇付冑片や杏葉が出土したと伝わる古墳である（中野 1958）。氏の観察が正しければ、こちらも 5 世紀まで昇る首長墳である可能性がある（注 2）。かわって河岸段丘の入口付近に位置する丸山古墳（L- 第 126 号墳）は無袖形横穴式石室を主体部とする円墳であり、大刀や鍔、鉄鏃、刀子、耳環、須恵器が出土している。同じく桜沢 A 古墳（L- 第 123 号墳）も横穴式石室を主体部とする径 10 mの円墳であり、須恵器の出土が伝わる。両古墳ともに、須恵器には遠江Ⅲ期中葉～後葉（TK43 ～ TK209 型式併行期）の資料が含まれており（注 3）、後に述べる寺の上第 1 号墳（L- 第 202 号墳）同様、石室の詳細は不明ながらも

第 1 表　船津古墳群調査履歴一覧

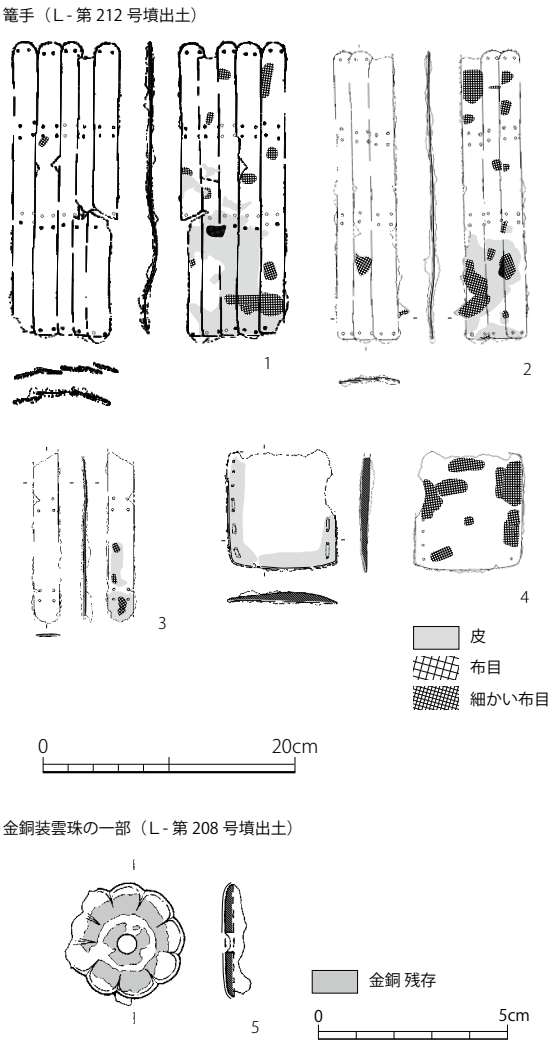
遺跡名 地区・次	古墳番号・古墳名	調査 主体	調査年度 調査種類	調査期間	所在地 調査の契機	対象面積（㎡） 調査面積（㎡）	時代	遺構	遺物	文献
船津 3 古墳群 1 地区	No.574　船津 L- 第 131 号墳 （薬師塚古墳）	静岡県	S37 本調査	S37.8.22 ～ 9.5	境字寺西大道上 7261 東海道新幹線建設		5c 中葉	円墳・粘土床	玉類・剣・ 刀子・鉄斧	A
船津 7 古墳群 1 地区		富士市	S59 試掘	S59.8.27 ～ 8.29	船津字春山沢東 680-1 茶園造成	4,000 34				
船津 7 古墳群 2 地区 - 1 次 船津 7 古墳群 2 地区 - 2 次	No.510　船津 L- 第 62 号墳	富士市	H02 試掘 H02 本調査	H2.7.5 H3.1.10 ～ 2.28	船津字春山沢東 661 外 農地整備	55	古墳後期	横穴式石室 1 基	須恵器・玉類・ 鉄鏃・刀子・馬具	B 本書
船津 7 古墳群 3 地区 -1 次	No.598　船津 L- 第 206 号墳	富士市	H03 本調査	H3.10.19	船津字矢川上 806-3 地先 農道拡幅工事	4	古墳後期	横穴式石室 1 基	須恵器・直刀 ・鉄鏃・耳環	本書
船津 7 古墳群 3 地区 -2 次	No.599　船津 L- 第 207 号墳	富士市	H03 本調査	H3.10.20 ～ 10.30	船津字矢川上 806-2 地先 農道拡幅工事	32	古墳後期	横穴式石室 1 基	玉類	本書
船津 7 古墳群 4 地区 - 1 次	No.517　船津 L- 第 186 号墳 No.616　船津 L- 第 208 号墳 No.617　船津 L- 第 209 号墳 No.618　船津 L- 第 210 号墳 No.619　船津 L- 第 211 号墳	富士市	H08 試掘	H8.8.2 ～ 8.29	船津字春山沢東 648-11 製茶工場建設	1,800 800	古墳後期 ～奈良	古墳 10 基 （No.517 は周溝のみ）	須恵器・石器	C
船津 7 古墳群 4 地区 - 2 次	No.620　船津 L- 第 212 号墳 No.621　船津 L- 第 213 号墳 No.622　船津 L- 第 214 号墳 No.623　船津 L- 第 215 号墳 No.624　船津 L- 第 216 号墳		H09 本調査	H9.4.7 ～ 6.30						
船津 7 古墳群 9 地区 -1 次	No.471　船津 L- 第 14 号墳 No.464　船津 L- 第 169 号墳 No.465　船津 L- 第 170 号墳 No.466　船津 L- 第 171 号墳 No.467　船津 L- 第 172 号墳 No.468　船津 L- 第 173 号墳 No.469　船津 L- 第 174 号墳 No.625　船津 L- 第 217 号墳	静岡県	H10 試掘	H10.6.8 ～ 10.27	船津字矢川上 新東名高速道路建設	27,090	古墳	横穴式石室 8 基		D
船津 7 古墳群 9 地区 -2 次	No.466　船津 L- 第 171 号墳	静岡県	H10 本調査	H11.2.16 ～ 3.31	船津字矢川上 582 新東名高速道路建設		古墳	周溝・横穴式石室	鉄鏃・刀子・鉄製品・土師器・ 石器・縄文土器・陶器	E
船津 7 古墳群 5 地区	No.524　船津 L- 第 77 号墳 No.525　船津 L- 第 78 号墳 No.526　船津 L- 第 189 号墳 No.527　船津 L- 第 190 号墳 No.628　船津 L- 第 218 号墳	富士市	H11 試掘	H11.9.2 ～ 9.30	船津字春山沢東 653-1 外 茶畑改植	5,295 1,025	古墳後期	横穴式石室 5 基	須恵器	本書
船津 7 古墳群 6 地区		富士市	H12 試掘	H12.5.24 ～ 5.26	船津字浅間原 614-2 新東名仮設事務所建設	1,000 95		なし	なし	F
船津 7 古墳群 7 地区		富士市	H13 試掘	H13.7.3 ～ 7.4	船津字春山沢東 680-7 外 茶畑嵩上げ工事	6,700 220		なし	なし	G
船津 7 古墳群 8 地区		富士市	H20 試掘	H20.7.16 ～ 7.17	船津 618-2　外 防火水槽築造	60 24		なし	なし	H
船津 8 古墳群 1 地区 -1 次 船津 8 古墳群 1 地区 -2 次	No.579　船津 L- 第 202 号墳 （寺ノ上第 1 号墳）	富士市	S60 試掘 S60 本調査	S60. 4 .15 ～ 4.17 S60.10.15 ～ 11.26	船津字寺ノ上 701-2 茶畑改植		古墳後期	円墳・周溝（手鏡型） 無袖型横穴式石室	須恵器・玉類・大刀・鉄鏃	I

文献
A．静岡県教育委員会（1965）「薬師塚古墳」『東海道新幹線静岡県内工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県文化財調査報告書　第 6 集
B．富士市教育委員会（1991）『船津 L- 第 62 号墳　発掘調査概報』
C．富士市教育委員会（1999）『船津古墳群　船津 L- 第 186・208 ～ 216 号墳製茶工場建設に伴う発掘調査』
D．中日本高速道路㈱・財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（2010）『富士山・愛鷹山麓の遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第 230 集
E．中日本高速道路㈱・財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（2010）『富士山・愛鷹山麓の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第 231 集
F．富士市教育委員会（2012）『富士市内遺跡発掘調査報告書　－平成 11・12 年度－』
G．富士市教育委員会（2011）『平成 13 年度　富士市内遺跡・伝法国久保古墳　埋蔵文化財発掘調査報告書』
H．富士市教育委員会『平成 14・20 年度富士市内遺跡発掘調査報告書』（2010）
I．富士市教育委員会『船津寺ノ上第 1 号墳　発掘調査報告書』（1987）

駿河東部地域では古相の横穴式石室墳であったと考えられる。

寺の上・春山支群　春山川東岸の低位段丘と丘陵斜面の一部、そして西岸北側の中位段丘に築かれた古墳によって構成される。古墳時代後期から7世紀にかけての古墳が密集して築かれ、船津古墳群の中核を成したと考えられる。本支群では古相にあたる遠江Ⅲ期中葉～後葉（TK43～TK209型式併行期）築造とみられる寺の上1号墳（L-第202号墳）は直径22.5 mの円墳であり、主体部の横穴式石室は全長12.5 m、奥壁幅1.2 mと長大な無袖形を呈する。副葬品には大刀や刀子、20点を越える鉄鏃、須恵器などのほか、斧形石製品や真珠貝製棗玉といった希少な遺物も含まれており、群形成の契機となった特殊な被葬者の姿を想起させる。現存長6.0 mの横穴式石室を有する富士市指定史跡・稲荷塚古墳の西側一帯は平成8・9年度に工場建設工事に伴い、大小10基の古墳が調査されている。なかでも篠状鉄札（篭手）が出土したL-第212号墳や金銅装雲珠の一部が出土したL-第208号墳において副葬品に特徴があるほか、単葬を意識したとみられる石室全長2.0 m弱のいわゆる横穴式小石室もL-第213～第216号墳で確認されており、当古墳群の群構造や被葬者集団の性格を考える上で貴重な資料をもたらしている。こうした調査成果が、後の大谷宏治氏による当古墳群の墓道復元や特色ある大刀の茎形状による地域生産の推定へと繋がっている（大谷2010b）。本書で報告する古墳はすべて当支群に含まれており、今回の調査報告によって富士市を代表する古墳群である船津古墳群の実像が、より一層鮮明になるものと期待される。

小結　船津古墳群では、少なくとも古墳時代中期より春山川両岸の丘陵上や斜面にて古墳が築造されはじめ（陣ヶ沢支群、境・西船津支群）、後期後葉以降になると低位の河岸段丘上（寺の上・春山支群）が主たる造墓域に変化していくという大まかな流れを指摘することが可能である。そのなかでも、薬師塚古墳や上ノ段古墳、荒久城山古墳、寺の上第1号墳といった中期から後期にかけての有力墳が、浮島沼やその北端を東西に走る根方街道（現静岡県道22号三島富士線）を見下ろす立地を示す点は重要であり、当古墳群の展開過程において、沼上やその縁辺部の交通路への意識が大きく働いていたことが窺われる。



第7図　船津L-第208号墳・船津L-第212号墳　出土遺物

注

(1) 船津古墳群自体をその立地条件から細分する試みはすでに中野国雄氏もおこなっており、その後の細分案の考え方の基礎となっている（中野1958、p159）。

(2) 現在は資料の行方がわからず実見出来ていないものの、1930年刊行『静岡県史　第一巻』に掲載された写真（境古墳）からは、6世紀以降の大型雲珠の破片となる可能性も考えられる。

(3) 丸山古墳ではハソウが遠江Ⅲ期中葉（TK43型式併行期）に、桜沢A古墳では高杯が遠江Ⅲ期中葉～後葉（TK43～TK209型式併行期）に位置づけられるとみられる（渡井1988）。

第Ⅲ章　調査成果

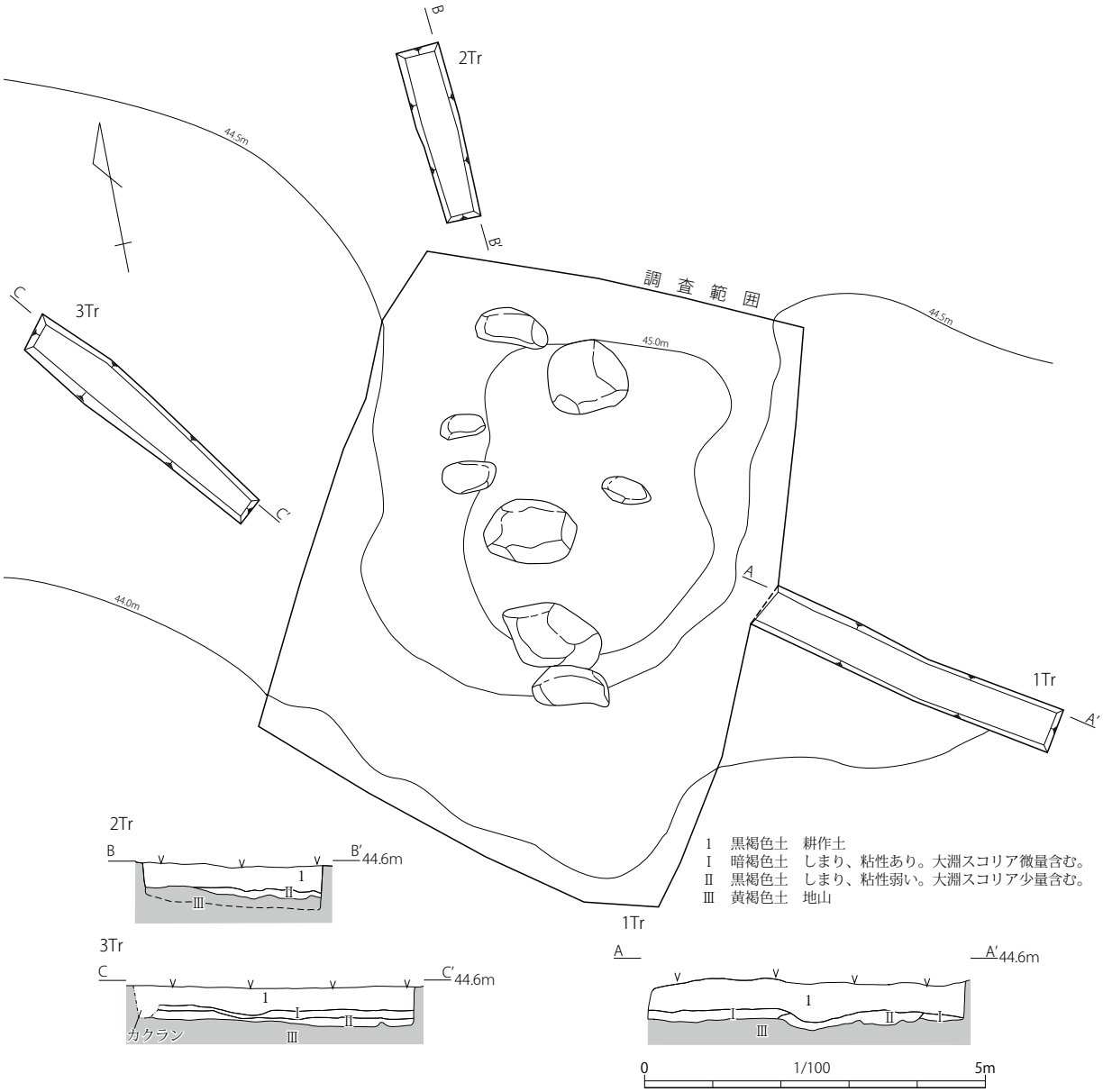
第１節　船津 L- 第 62 号墳

１．古墳の現況

船津 L- 第 62 号墳は春山川西岸に位置する低位段丘面にある南向きの緩やかな斜面上に立地する。昭和 58、61、62 年の３ヵ年に渡って実施された市内の埋蔵文化財分布調査によって初めてその存在が確認された。しかし、石材の散乱した状況から、主体部はすでに破壊されたと考えられていた。（富士市教育委員会 1988）

２．墳丘の構造

墳丘の大部分が流出し、墳丘盛土と考えられる土は石室周辺の一部に残存するのみであった。墓坑底面から２段目まで黒色土（5 層）が覆い、その上に黒色土（4 層）、



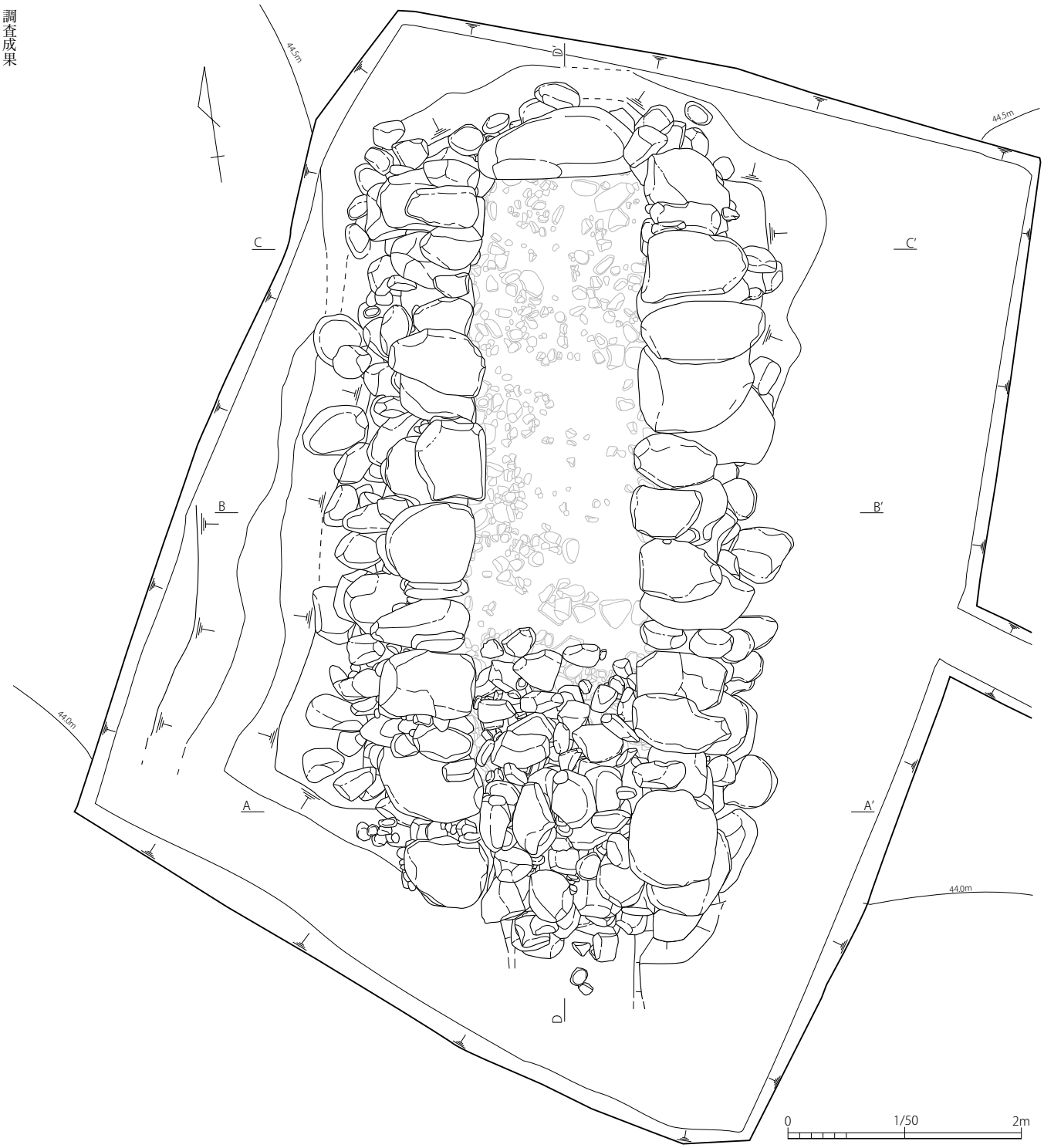
第８図　L- 第 62 号墳　調査区と現況図

黒褐色土（3 層）、暗褐色土（2 層）が盛土されていた。第 5 層はその状況から側壁裏込めと共に第 1 次墳丘を兼ねていたと考えられる。

確認調査時に主体部の東西、北側にトレンチを設定し、検出に努めたが、周溝は確認できなかった。

3．石室と墓坑の構造

横穴式石室の天井石が原位置から動かされていたが、奥壁、両側壁、閉塞部ともに遺存状況は良好だった。石室は磁北に対して、奥壁側で主軸方位が 8.3 度西に振れ、南に開口する無袖形横穴式石室である。石室石材は春山川周辺で採取される川原石を用いていた。



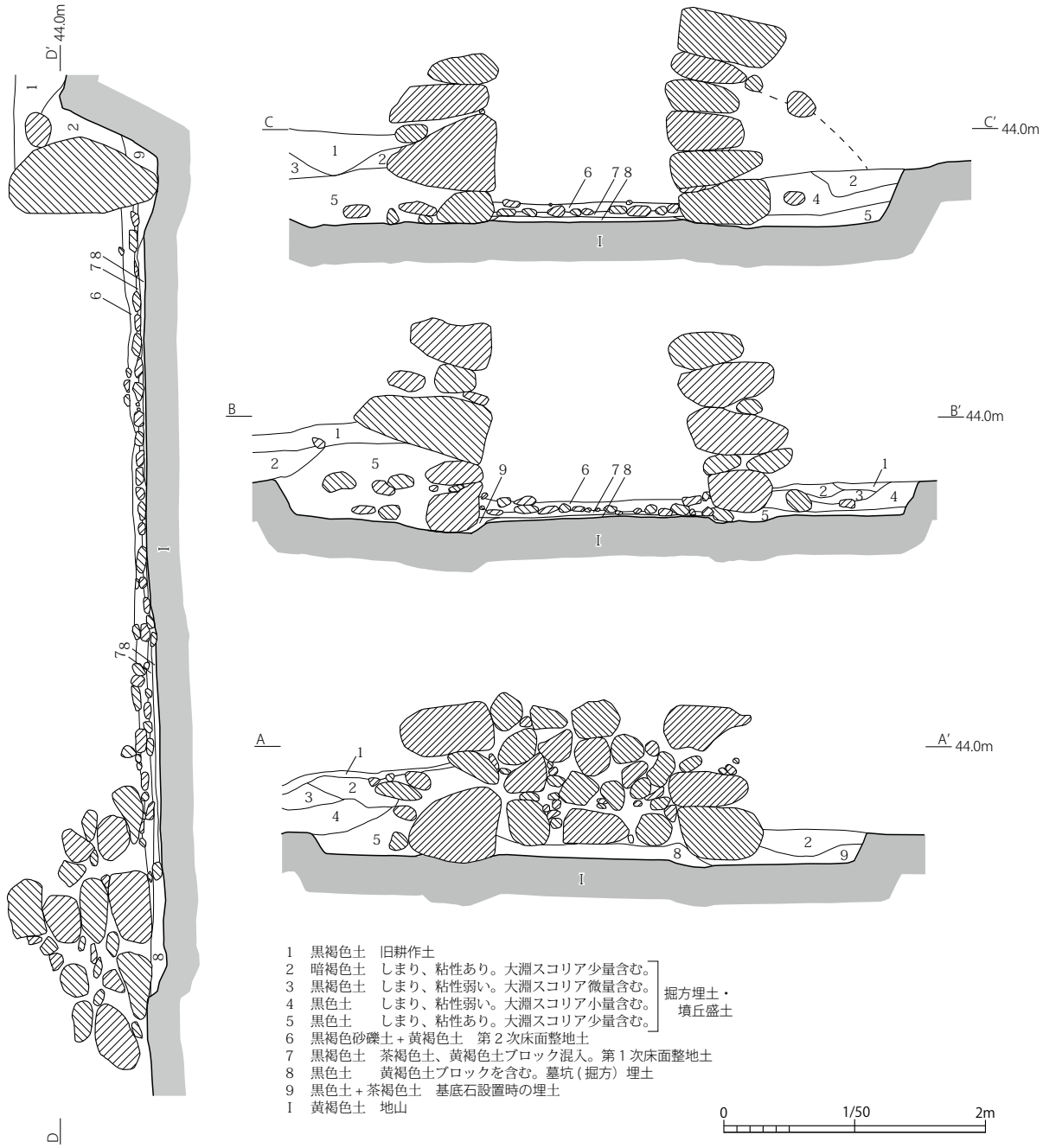
第 9 図　L- 第 62 号墳　検出状況図

規模・形状　石室は全長 6.23 m、石室幅は内法で奥壁部 1.30 m、中央部 1.75 m，玄門部 1.40 mを測る。玄室平面形は中央部が若干張るものの、長方形を呈する。

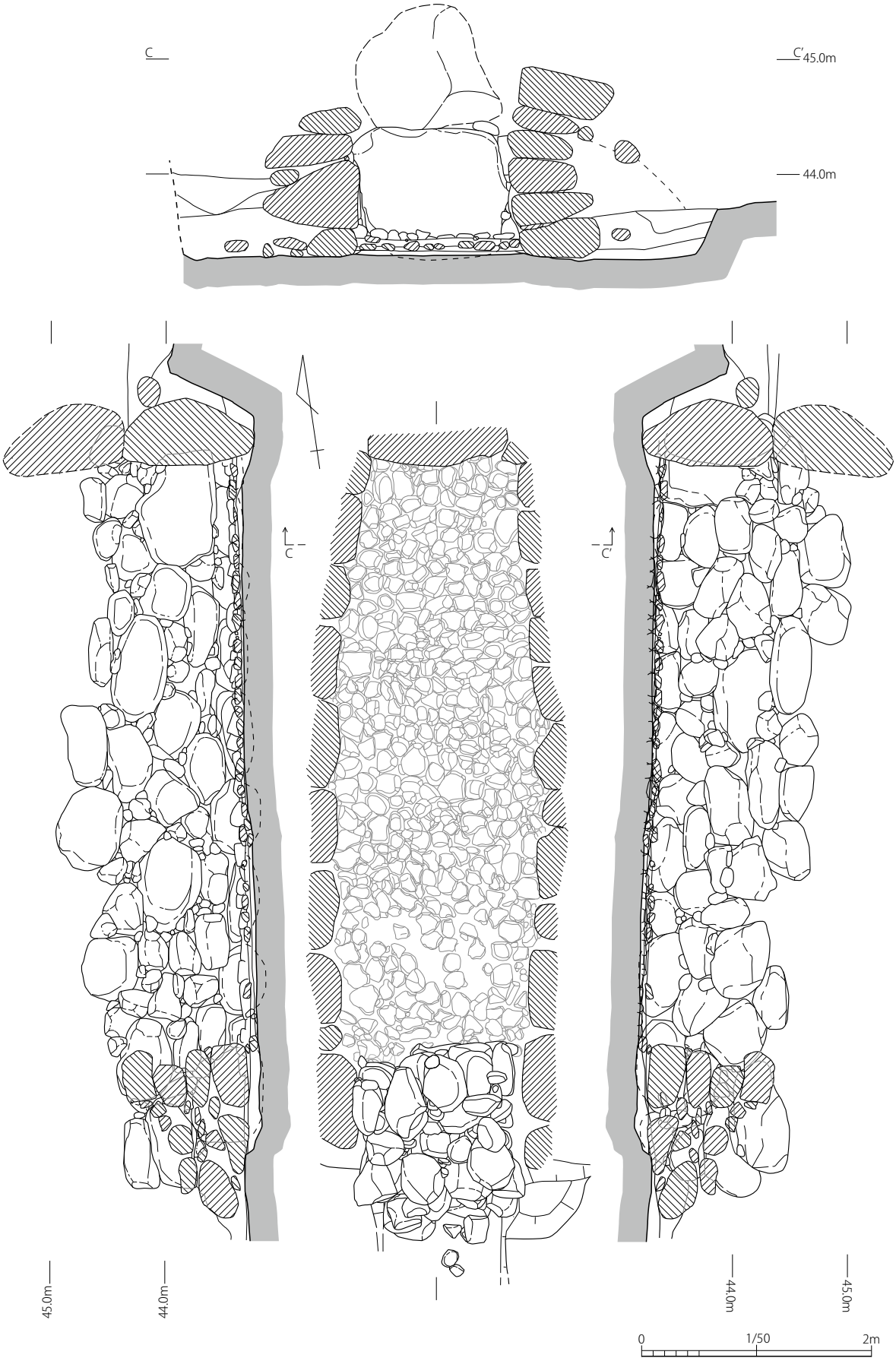
墓坑　墓坑規模は全長 6.8 m、中央部幅 4.85 mを測る。構造は竪穴状で、奥壁側で 76cm 掘り込まれていた。平面プランは長方形を呈するが、右側壁で玄門部から 1 石目、左側壁で 3 石目に内側にやや屈曲する。

壁面構成　奥壁は 2 段確認された。1 段目は大型石を鏡石として樹立させていた。2 段目の石は確認調査時に原位置から動いていると判断され、取り外されたため、奥壁の高さは明らかでないが、1.80 m程と推定される。

側壁は一部抜きとられていたものの、両側壁共に 5



第 10 図　L- 第 62 号墳　土層断面図



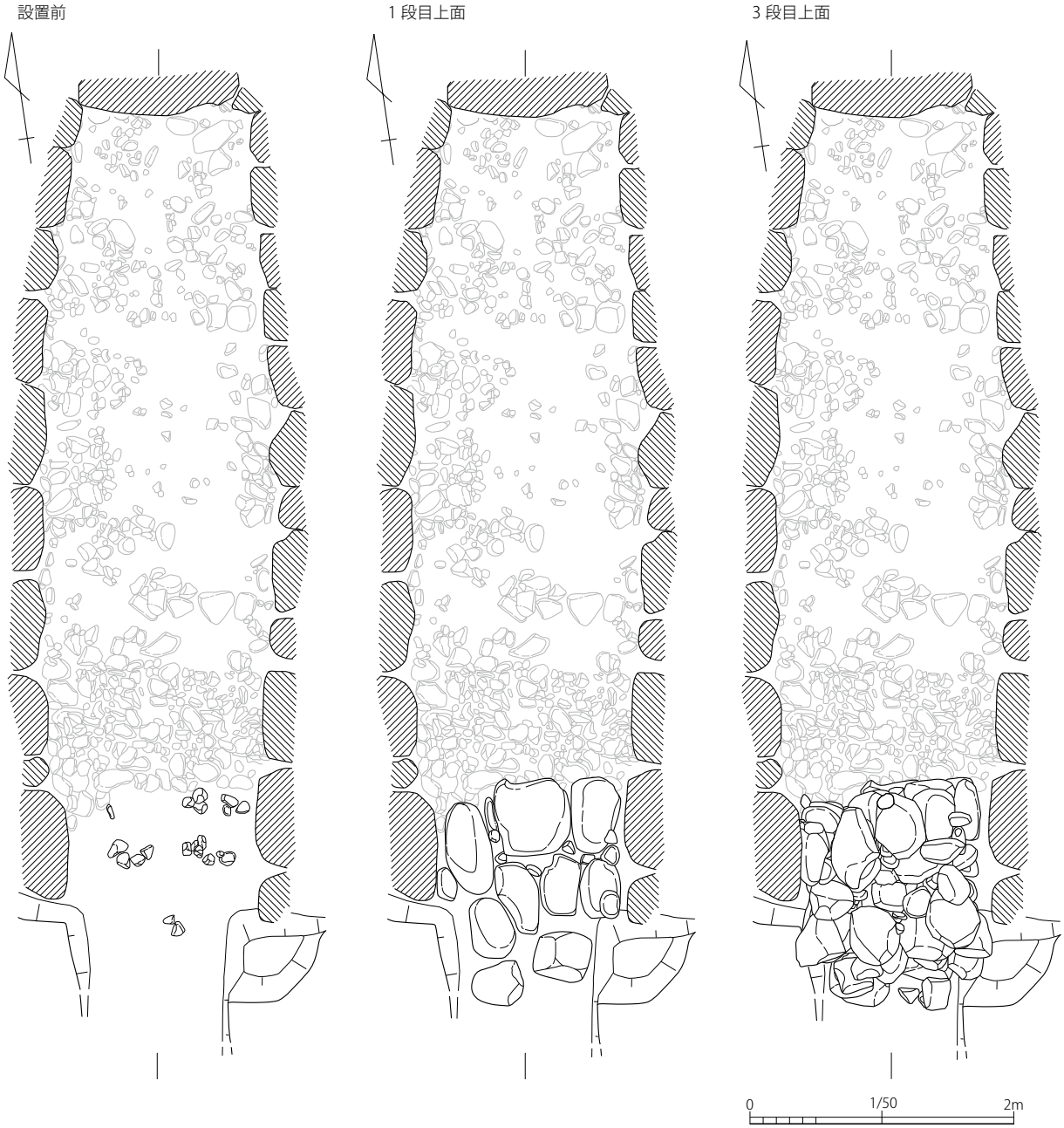
第 11 図　L- 第 62 号墳　石室展開図

～６段残存した。積み方は 30cm ～ 60cm の石の小口面を内側に向ける積み方を主体とし、一部に大型石を用いた長手積みを用いていた。

左側壁は、基底石が 12 石配される。そのうち奥壁手前の石の上端は標高 44.20 m付近に達し、他の側壁の３段目上面と高さを揃えていることから、この石が壁を積み上げる際の指標石となった可能性がある。

基底石、２段目は水平な目地がみられることから、水平に積み上げを行ったと考えられる。３段目は石室中央、玄門部から１石目に大型石を用いていることから奥壁手前の基底石とともに４段目以降の積み上げの指標となった可能性が高い。

右側壁は玄門部１石目に大型石を用いている。その他の基底石は 60cm 大の均等な石を用い、上面を 43.50 m前後にそろえるが、玄門部から奥壁に向かって５石目（石室中央部）が若干高い。２段目以降、この部分で南から北へ斜めの目地がみられ、積み方に差異が認められる。石室中央から奥壁側では奥壁手前の大型石を指標とし、比較的大型の石を積み上げる。これに対し、石室中央から玄門側は、玄門部付近と石室中央で大型石を用



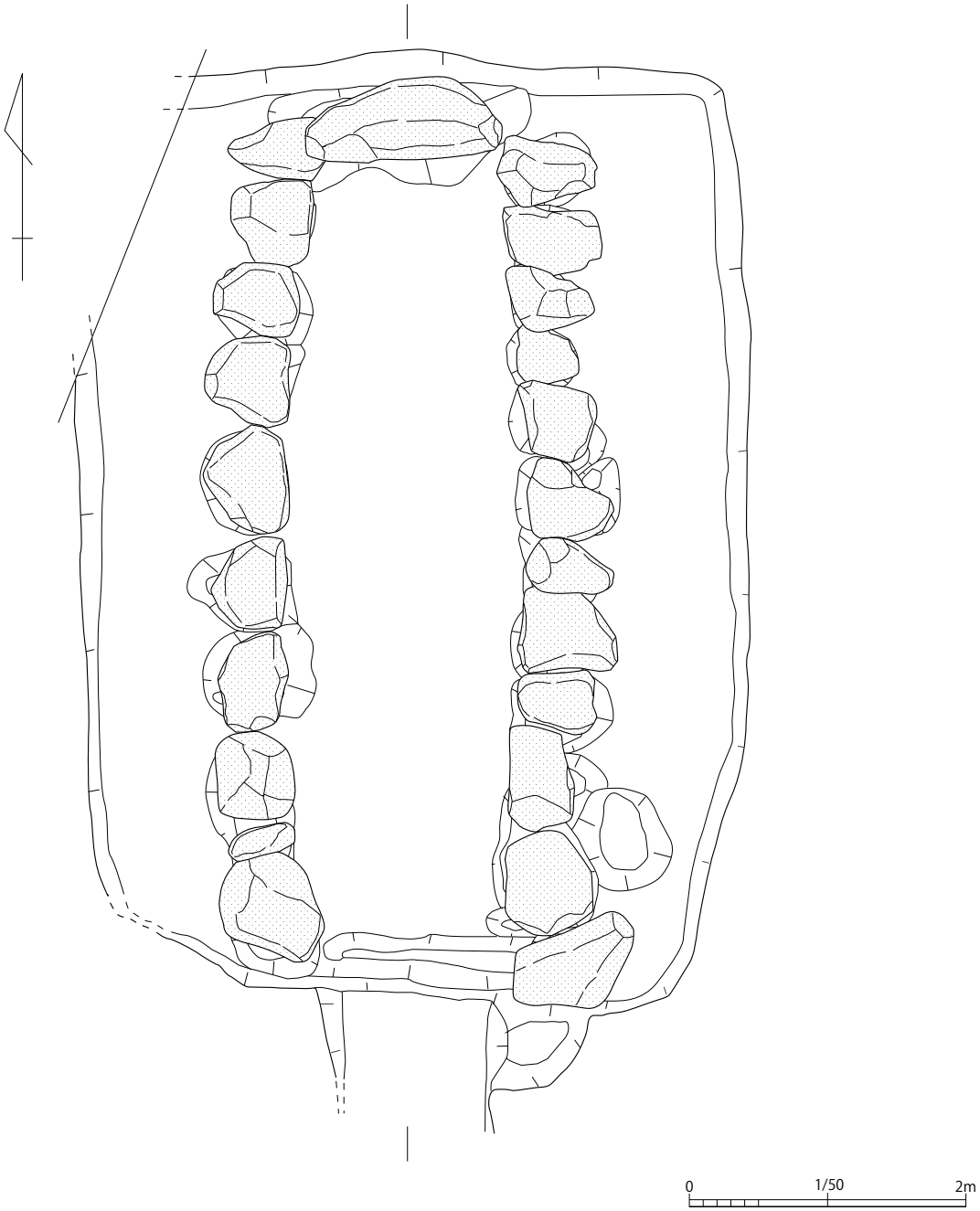
第 12 図　L- 第 62 号墳　開口部石積み状況図

い、その間は小型の石を積み上げていた。側壁の裏込めは基底石裏に 30 ～ 50cm 大の石を配し、さらに上部は黒色土を入れ、安定を図っていた。

閉塞石・段構造　閉塞部の下１・２段目の石は直径 50cm から 70cm の大きな石を使用している。その大きさと安定から、少なくとも下２段については、追葬時に外していないものと考えられ、段構造を有する石室と言える。ただし、それより上部については、閉塞石なのか、段構造の一部のいずれかなのかは断定できない。

床面　床面は２面確認した。第２次床面では、5 ～ 20cm の石を敷設していた。敷石は入口部分の幅 1.0 m の範囲に密に敷石が施されるが、その他はまばらな状況であった。第１次床面では、20cm 大の均一な石を玄室内全面に敷設していた。

床面には間仕切り石や屍床仕切石や石棺は認められず、また、棺座のような高まりもみられなかった。



第 13 図　L- 第 62 号墳　石室基底石及び墓坑検出状況図

４．遺物出土状況

遺物は比較的、豊富であった。石室内から小刀、鉄鏃等の武器、刀子、馬具、装身具である耳環、玉類の出土がみられた。また、石室覆土、墳丘表土からは須恵器甕片が出土した。

遺物は第１次床面、第２次床面ともに認められたが、両面共に石室奥壁から開口部にむかって２ｍの範囲に大刀責金具、鉄鏃、弓金具、刀子、馬具がまとまって出土した。小刀、装身具は石室中央で出土した。

大刀の装具は第１次床面、第２次床面ともに出土したが、いずれも破片のみで、分布は集中しない。

鉄鏃は第２次床面では奥壁手前に散在するが、第１次床面では、奥壁手前、石室主軸から左側壁側に分布が見られる。

弓金具は第１次床面で４点、第２次床面では１点出土し、鉄鏃と同様、散在した状況がみられた。

刀子は第１次、第２床面ともに、奥壁手前と石室中央周辺でみられるが、出土位置にまとまりはなかった。

馬具は第１次床面では辻金具、帯飾金具、鞍金具、腹帯金具、鉸具が出土し、第２次床面では轡、鐙吊金具が出土している。両床面ともに右側壁側、奥壁から開口部に向かって2.1ｍの範囲に分布している。

小刀、装身具は石室中央で出土した。小刀は第２次床面､右側壁側で奥壁から開口部に向かって5.7ｍ､切っ先を奥壁に向けていた。周辺では耳環２点が出土している。

玉類は第１次床面、奥壁より開口部に向かって3.90ｍの付近で集中して出土した。

第１次床面、第２次床面共に大刀装具、鉄鏃、弓金具、馬具等は奥壁手前に分布が集中し、小刀、耳環、玉類の装身具は石室中央部の右側壁寄りと一定のまとまりがある。しかし、それぞれの遺物の出土状況をみると奥壁手前の右側壁よりに散在した状況がみられ、原位置を保っていないものと考えられる。

次項で各遺物の年代を推定しているが、第１次床面、第２次床面の大刀、小刀、鉄鏃、馬具等の遺物に時期差は認められない。以上のことから、第１次床面に伴う遺物の片付けが行われた後、第２次床面敷設時に遺物が散在した可能性と、後世の盗掘、撹乱を受け、遺物が散在した可能性の２つが推測される。

５．出土遺物

船津L-第62号墳では、横穴式石室床面から小刀、鉄鏃、弓金具、馬具、装身具を主体とする副葬遺物が出土した。須恵器・土師器といった土器類については床面からも極少量出土しているが、いずれも小破片のため図化できるものはなかった。一方、墳丘表土や石室内覆土からは須恵器が一定量出土している。

出土した遺物の種類と総数は下記の通りである。

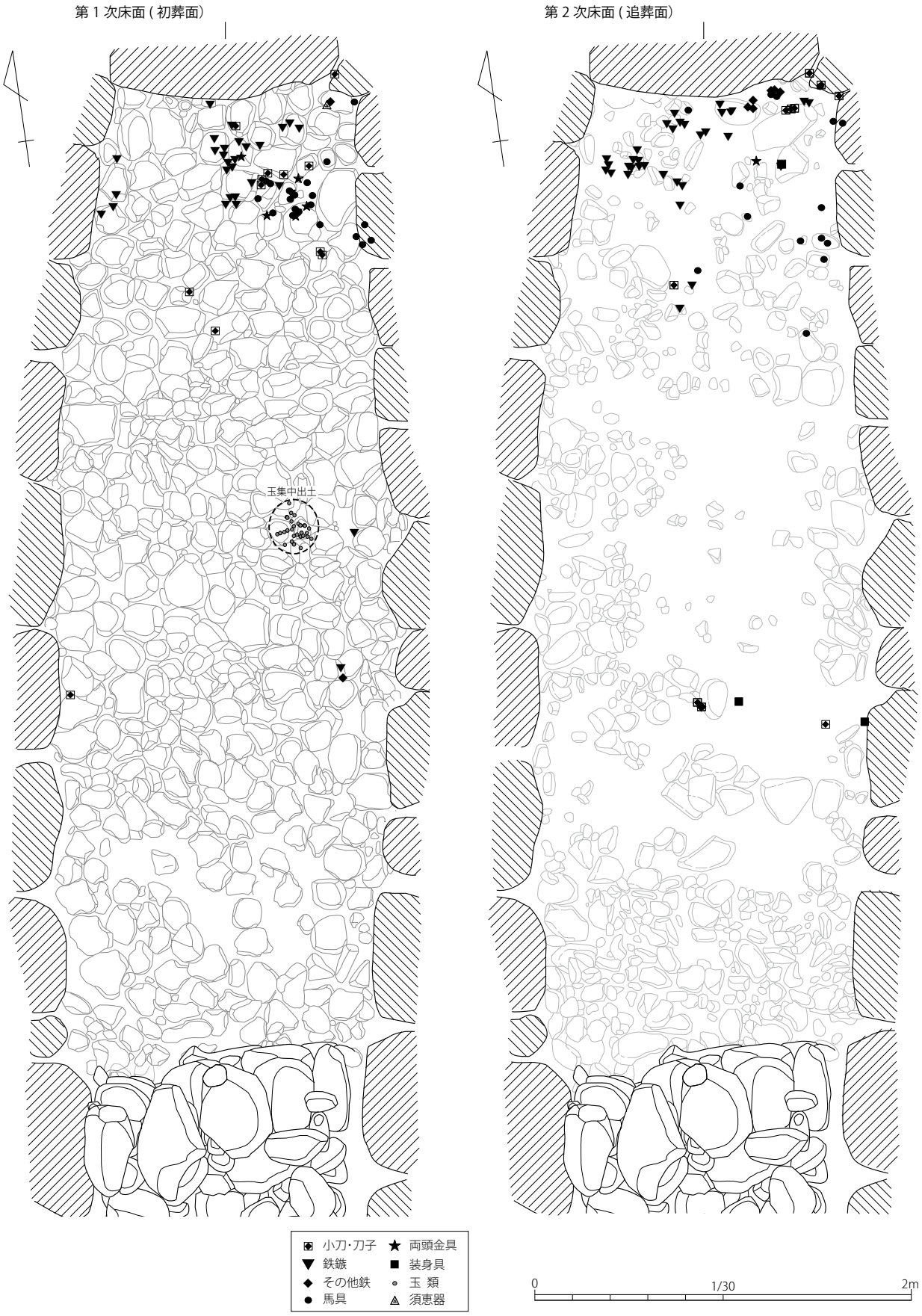
【床面】

武　器	小　刀	１点（ほか刀装具あり）
	鉄　鏃	29点（鏃身29点、茎関25点）
	弓金具	６点
工　具	刀　子	４点以上
馬　具	轡	１点
	辻金具	３点
	帯飾金具	21点（銅製７点、鉄製14点）
	鞍金具	２点
	腹帯金具	１点
	鉸具金具	２点
	鐙吊金具	２点
装身具	提　砥	１点
	耳　環	２点
	管　玉	２点（碧玉製）
	小　玉	25点（ガラス）

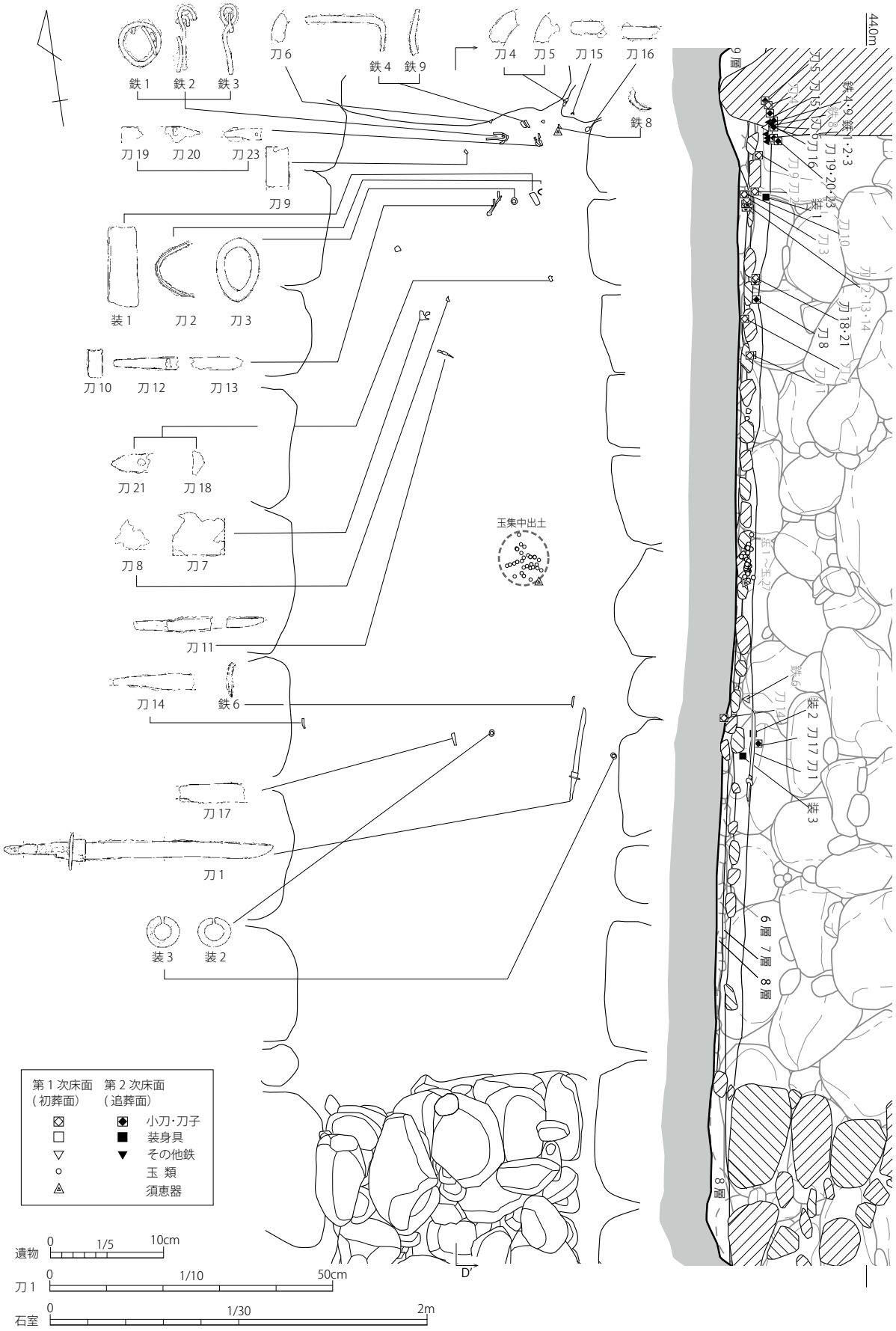
【石室覆土・墳丘表土ほか】

土　器	須恵器甕片	コンテナ約１箱分

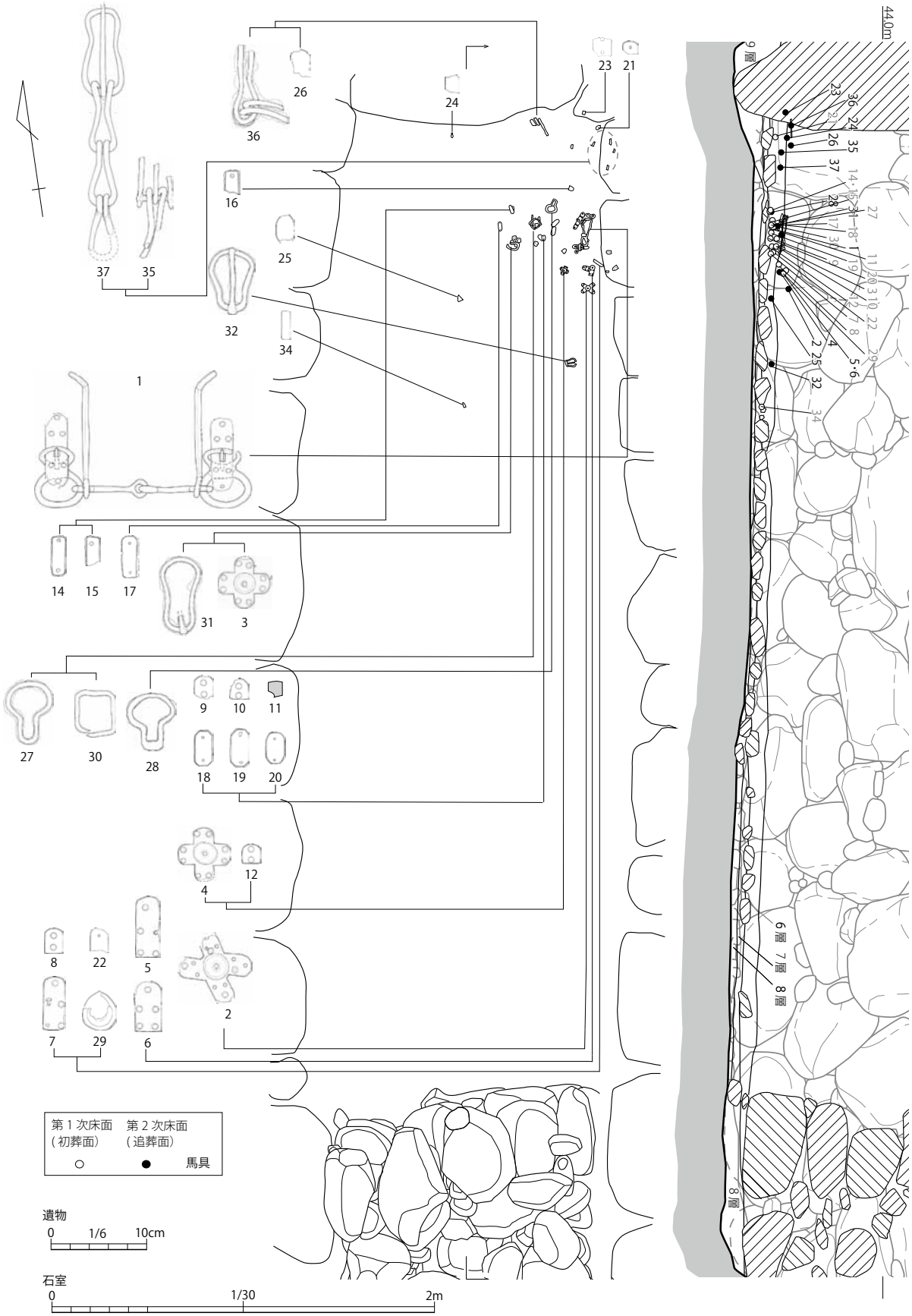
以下、これらの区分をもとに、各遺物の概要や観察結果、編年的位置付けについて報告を行う。遺物の編年的位置付けについては以後、遠江須恵器編年（鈴木2004）を時間軸に据えて記述するが、TK209型式併行期前半までは陶邑編年（田辺1966・1981）、TK209型式併行期後半以降については、飛鳥編年（西1986）を併記した。各編年の併行関係については基本的に鈴木敏則氏の見解に則るが、Ⅲ期後葉から末葉の取り扱いについては長泉町・原分古墳報告書の見解を参考として（井鍋編2008）、TK209型式併行期前半を遠江Ⅲ期後葉に、飛鳥Ⅰ後半（TK209型式併行期後半）を遠江Ⅲ期末葉にそれぞれ当てはめることとした。



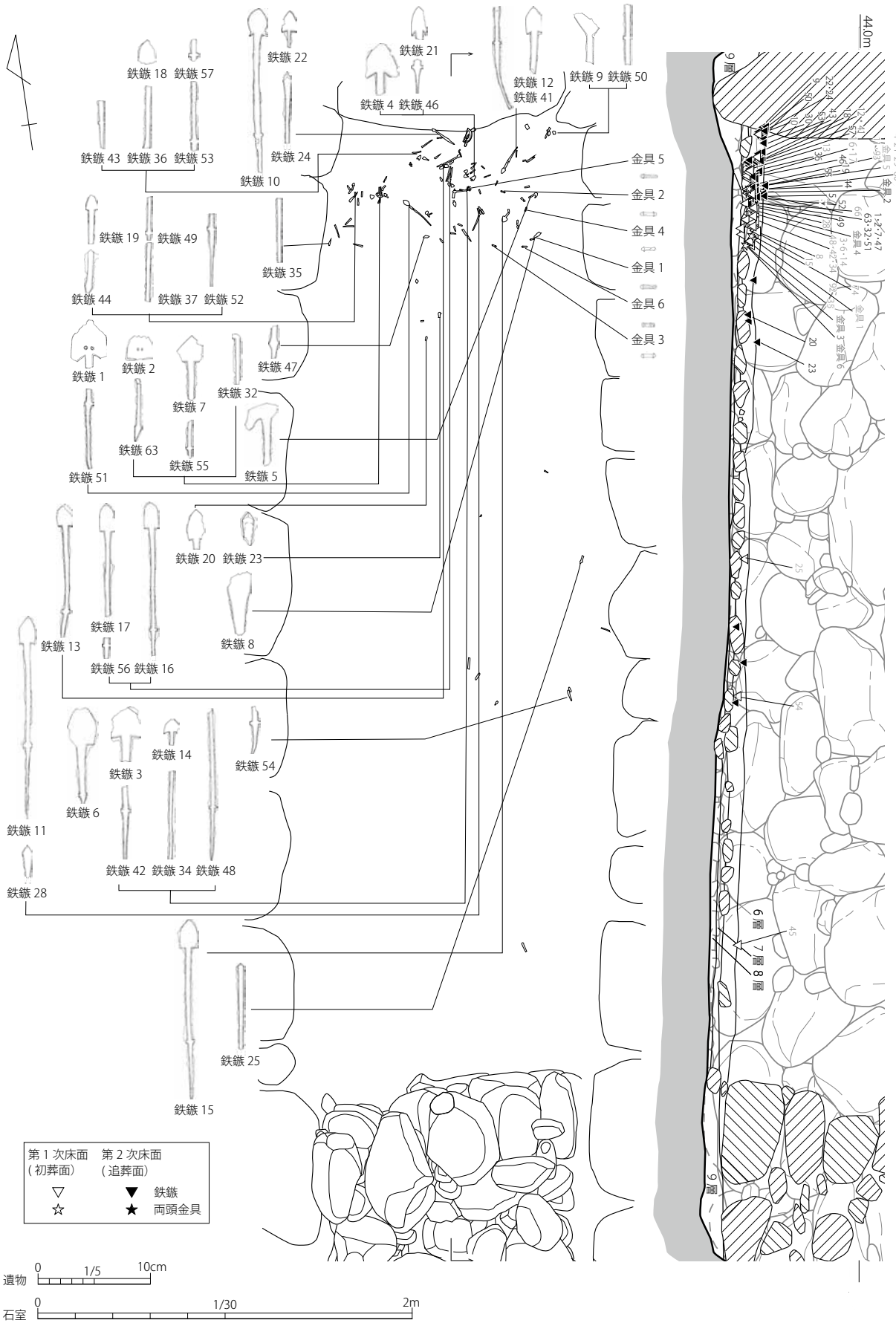
第 14 図　L- 第 62 号墳　第 1 次床面・第 2 次床面遺物出土分布



第15図　L-第62号墳 石室内小刀・装身具出土状況図



第16図　L-第62号墳　石室内馬具出土状況図



第 17 図　L- 第 62 号墳　石室内鉄鏃・他金属出土状況図

（1）武器

小刀（第18図1） 1は左側壁際に置かれていた小刀（短刀）である。茎部と鎺の外側に木質が残存しており、本来は鞘に収められた状態で副葬されていたことが窺われる。鍔と鎺は刀身に着装された状態で出土しており、鎺着装状態での刀身長は33.2cmを測る。刃部は反りがない直刀で、ふくらが張る。現状の鎺元の関の有無については、X線でも確認することができなかったが、茎部の鍔付近ではやや刀身幅が狭まっており、浅い関が設けられている可能性はある。この小刀の最も奇妙な点は、現状の柄間に設けられた明瞭な直角片関と、鉄製目釘の残存する目釘穴であろう。通常、刀身を柄に固定するための目釘は茎部のやや先端側に設けられる場合が多いが、これは鍔近くに位置する。この不自然な目釘穴と、現状では使用されていない直角片関から察するに、この小刀が装具を仕立て直されている可能性が浮上する（注1）。現状の目釘穴は本来の鎺元孔であり、直角片関より茎側に柄が装着されていたのであろう。茎部の先端は現状で幅1.0cmまで先細っており、先端が尖っていた可能性も大いに考慮される。茎が細く先端が尖る特徴は、富士市須津J-第6号墳出土大刀と共通しており、そうした類例は大谷宏治氏によって在地生産の可能性が指摘されている（大谷2010b）。

鍔は鉄製で倒卵形を呈すると推定される無窓鍔である。復元長軸6.9cm、短軸5.6cmを測り、断面は細長方形である。内孔形は推定線であり、形態は不明である。X線撮影を実施したが、象嵌等の造作はみられないものと判断された（注2）。鎺は断面楕円形を呈し、外径長軸3.6cm、幅は2.3～2.2cmを測る。刀身茎部や鎺の片面に木質が残存しており、木製の鞘や柄木を伴って副葬されたものと判断される。

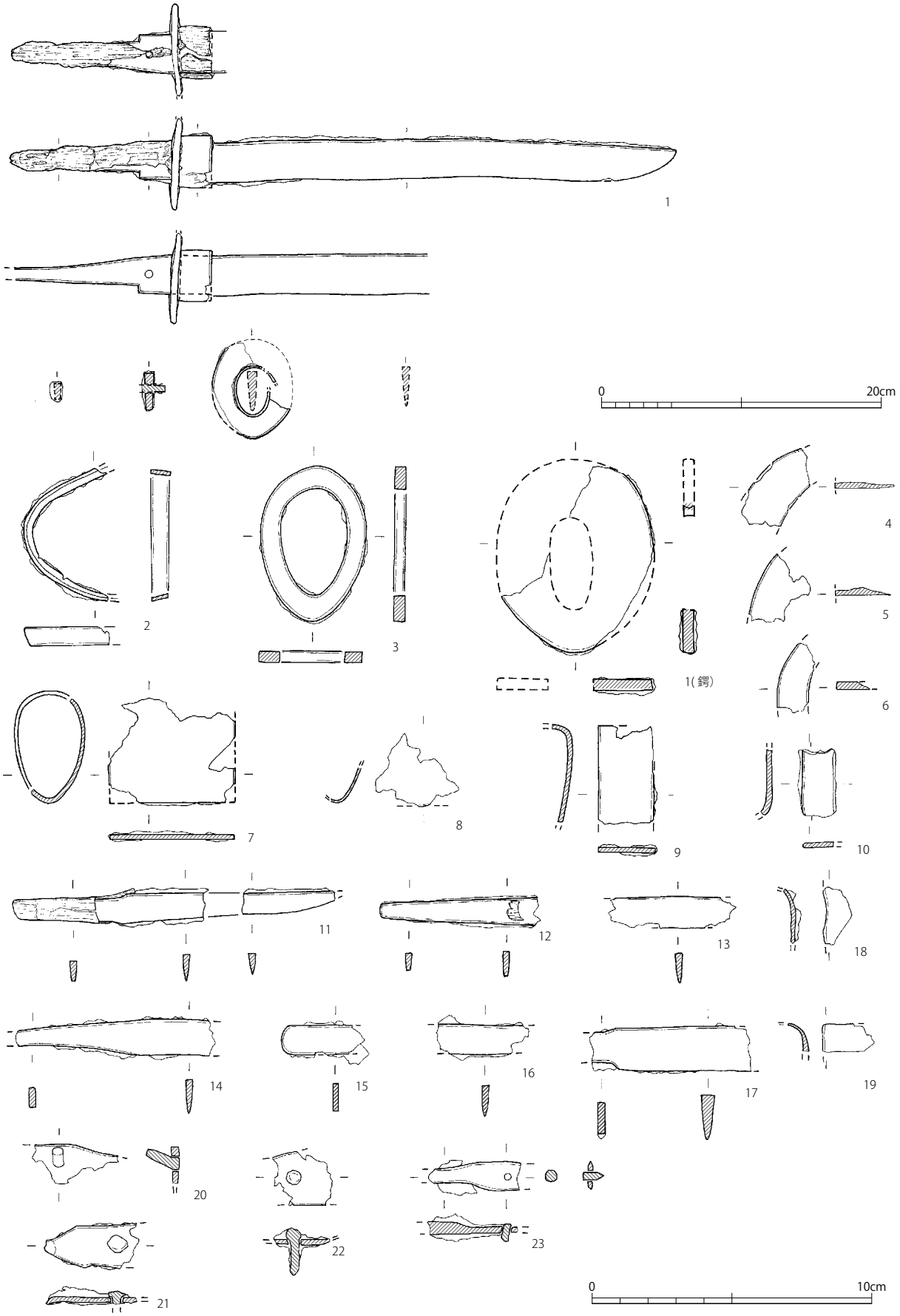
刀装具（第18図2～10） 2・3は頭椎大刀に伴う可能性が高い鉄製刀装具である。2は厚さ0.1cm、幅0.7cmの鉄板を緩い「くの字」形に折り曲げた形状の破片であるが、図示した横断面はともに外傾しており、頭椎大刀の柄頭責金具となる可能性が高い。3は頭椎大刀の柄頭に取り付く切羽または鍔の柄側に付く鉄製責金具である。形状は倒卵形であり、長軸5.5cm、短軸3.8cm、内孔の長軸3.8cm、短軸2.4cm、厚さ0.4cmを測る。頭椎大刀との想定が正しければ、柄頭は木製であったとみられる。4～6は無窓鍔とみられる破片である。4・5は表裏とも剥離しており現状の厚さは極めて薄いが、幅はともに2.0cm前後を測る。6は幅1.2cm、厚さ0.3cmであり、4・5より幅狭である。7は鉄製の鞘口金具または鞘間金具の破片であり、断面形は倒卵形に復元される。長さ4.6cm、復元幅は4.0cmを測る。8も断面が倒卵形を呈しており、7と類似した鉄製鞘金具とみられる。9・10は大刀に伴う鉄製鎺とみられる破片である。9は長さ2.0cm、残存幅3.5cm、10は残存長1.2cm、残存幅2.4cmを測る。

その他の大刀片（第18図20～23） 20～23は目釘を有する形状から大刀または刀子の茎部片と判断したが、21は図上左側の端部が急速に窄まり、断面では屈曲しかかっているようにもみえることから、鐙吊金具の破片の可能性もある。

小結　大刀類については、無窓鍔や鎺の破片が存在することから、1の小刀のほかに、もう一振の大刀または小刀が存在したものと推定される。刀身部の破片が全く出土していないことは、追葬時に副葬品類の片付け・一部室外への移動が行われた可能性を想起させる。2・3の頭椎大刀装具についても1の小刀とは離れた位置から出土しており、失われたもう一振りの大刀に伴う可能性も考えられるが、法量的には1の小刀に伴うとみても問題ないようにみえる（第15図）。その場合、責金具・切羽以外の部分の柄頭と柄間は木製であったと考えられる。

大刀類から考えられる副葬時期については、まず頭椎大刀の存在から遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期前葉（TK209型式併行期～飛鳥Ⅱ）の範囲が捉えられる。併せて、1の無窓鍔は西澤正晴氏の分類（西澤2002）におけるC類やF類に近く、遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期後葉（飛鳥Ⅰ～Ⅲ）の存続時期が考えられることから、頭椎大刀と重複する遠江Ⅳ期前葉～後葉（飛鳥Ⅰ～Ⅱ）の時期を想定しておきたい。

鉄鏃　石室内で出土した鉄鏃のうち、鏃身部の形状が確認できるものは29点ある。このうち、短茎（無頸）が2点、平根系が7点、尖根系（長頸鏃）が20点である（注3）。鏃身部の形状は、短茎では腸抉五角形式・五角形式が2点、平根系では五角形式が2点、腸抉三角形式・三角形式が2点、腸抉柳葉形式が1点、方頭式が1点、雁股式が1点であり、尖根系（長頸鏃）では腸抉柳葉形式・柳葉形式が4点、腸抉五角形式が4



第18図　L-第62号墳　小刀・刀子

点、腸抉長三角形式･長三角形式が５点、鑿箭式が６点、片刃箭式が１点であり、少量ずつながらも多様な鉄鏃構成となっている。このほか、頸部や茎部のみの遺存に留まった資料もあり、茎関が遺存する資料を数えれば総数で 25 点となり、鏃身部が確認できる資料数（29 点）にやや及ばない。ただ、茎関のない短茎式が２点あること（第 19 図１・2）や小さな茎関が遺存しなかった可能性も考慮すれば、当古墳に副葬された鉄鏃総数は鏃身部に依拠した 29 点という数量で考えておおよそ問題ないだろう。

ａ）短茎腸抉五角形式・五角形式（第 19 図１、2）

１は短茎腸抉五角形式であり、両側の腸抉が欠損する。鏃身部の中央に横位に２点の穿孔がみられる。茎部長は 1.0cm としたが、端部が若干欠損している可能性もある。２も中央に２点の穿孔がみとめられることから、短茎式と判断される。切先や茎部が欠損するが、短茎五角形式とした。あるいはふくらの張る短茎三角形式の可能性もある。古墳時代後期後半以降の穿孔のある無茎・短茎式鏃は船津 L- 第 209 号墳（渡井 1999）、中里 K- 第 95・第 98 号墳（植松ほか 1975）、芋ヶ窪１号墳（鈴木ほか 2001）などに類例があり（大谷 2011）、特に駿河東部地域から伊豆地域で目立った出土をみせる。これらの古墳は遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期前葉（TK209 型式併行期～飛鳥Ⅱ）に位置付けられることから、本例も同様の時間幅で考えておく。

ｂ）平根五角形式（第 19 図３、6）

３は各端部の欠損が目立つが、いわゆる逆ホームベース形の平根五角形式とみられる。６は鏃身部長が幅に対して長いタイプであり、長三角形式に近い形態をとる。茎関は棘関であり、短小な茎部を有する。逆ホームベース形の五角形式については遠江Ⅲ期末葉（飛鳥Ⅰ）以降に主流となることから（大谷 2003b）、本例の上限時期も同様に捉えておきたい。

ｃ）平根腸抉三角形式・三角形式（第 19 図４、7）

４は平根腸抉三角形式としたが、各端部は欠損する。７は鏃身部両翼が欠損するが、片方の端部の破片が折れ曲がった状態で錆着しており、それをもとに横幅の長い平根三角形式に復元した。７と同種の横長の三角形式については東平第１号墳（久松 1991）や横沢古墳（平林・志村 1981）、平石４号墳（小野ほか 1973）に類例が認められることから、遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期前葉（TK209 型式併行期～飛鳥Ⅱ）の時間幅で捉えておきたい。

ｄ）平根腸抉柳葉形式（第 19 図５）

５は鏃身部の欠損が著しいが、鏃身部が内側に括れた形態であることから平根腸抉柳葉式と判断した。飛燕式やその影響を受けた腸抉三角形式（大谷 2004）になる可能性もある。

ｅ）平根方頭式（第 19 図８）

８は切先や頸部を欠損するが、平根方頭式とみられる。方頭式自体の存続時期は長いが、遠江Ⅳ期前葉以降に駿河・伊豆地域で増加する傾向が指摘されている（大谷 2003b）。遠江Ⅲ期末葉の松江南１号墳例（滝沢ほか編 1999）のような鏃身部幅 2.0 ～ 3.0cm 程度の比較的細いものと、遠江Ⅳ期前葉から後葉の谷津原第 12 号墳例（石川ほか 2001）や大北 34 号墳例（植松・佐藤 1981）のような幅 3.0cm 以上の広いものでは、後者のほうがやや後出的な特徴として捉えられる可能性がある。本例は前者に近い形態に復元されることから、遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉（飛鳥Ⅰ～飛鳥Ⅱ）の時間幅で考えたい。

ｆ）平根雁股式（第 19 図９）

９は欠損が著しいが、平根雁股式に復元した。横沢古墳（平林・志村 1981）や石川６号墳（荒井・鶴田 2006）に類例があるが、横沢古墳例は追葬もしくは前庭部祭祀時の遺物と考えられることから、遠江Ⅳ期前葉以降に位置付けられる（藤村 2011）。

ｇ）尖根腸抉柳葉形式･柳葉形式（第 19 図 10､15 ～ 17）

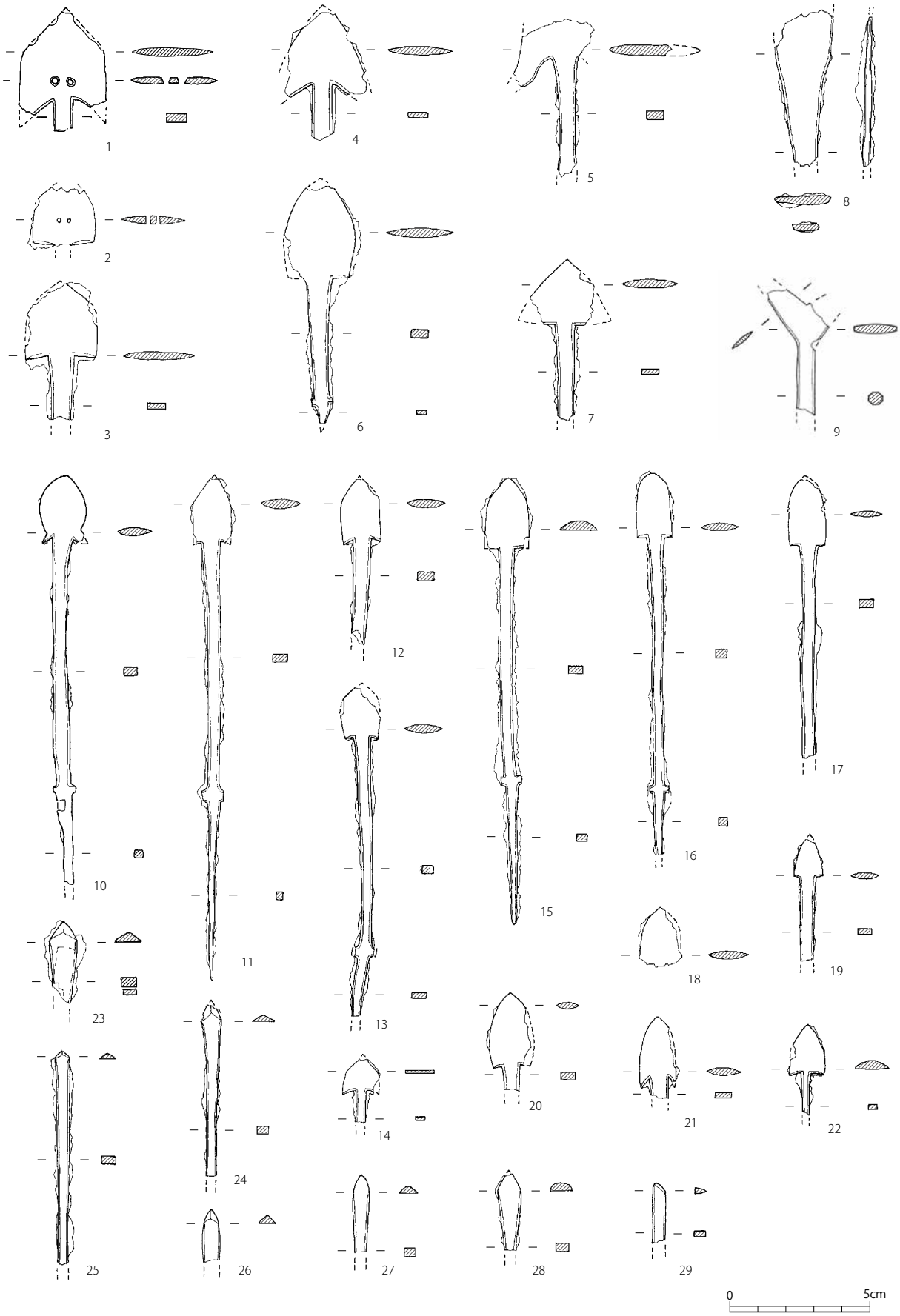
10 は尖根腸抉柳葉式であり、ふくらの張る鏃身部と短小な逆刺を有する。茎関は棘関である。短小な逆刺を有する鏃身部形態は、井出１号墳例に類似する（滝沢編 2002）。15 ～ 17 は尖根柳葉式であり、鏃身部や頸部の形態、棘関などの特徴がいずれも類似するが、15 のみ片丸造のようである。

ｈ）尖根腸抉五角形式（第 19 図 11 ～ 14）

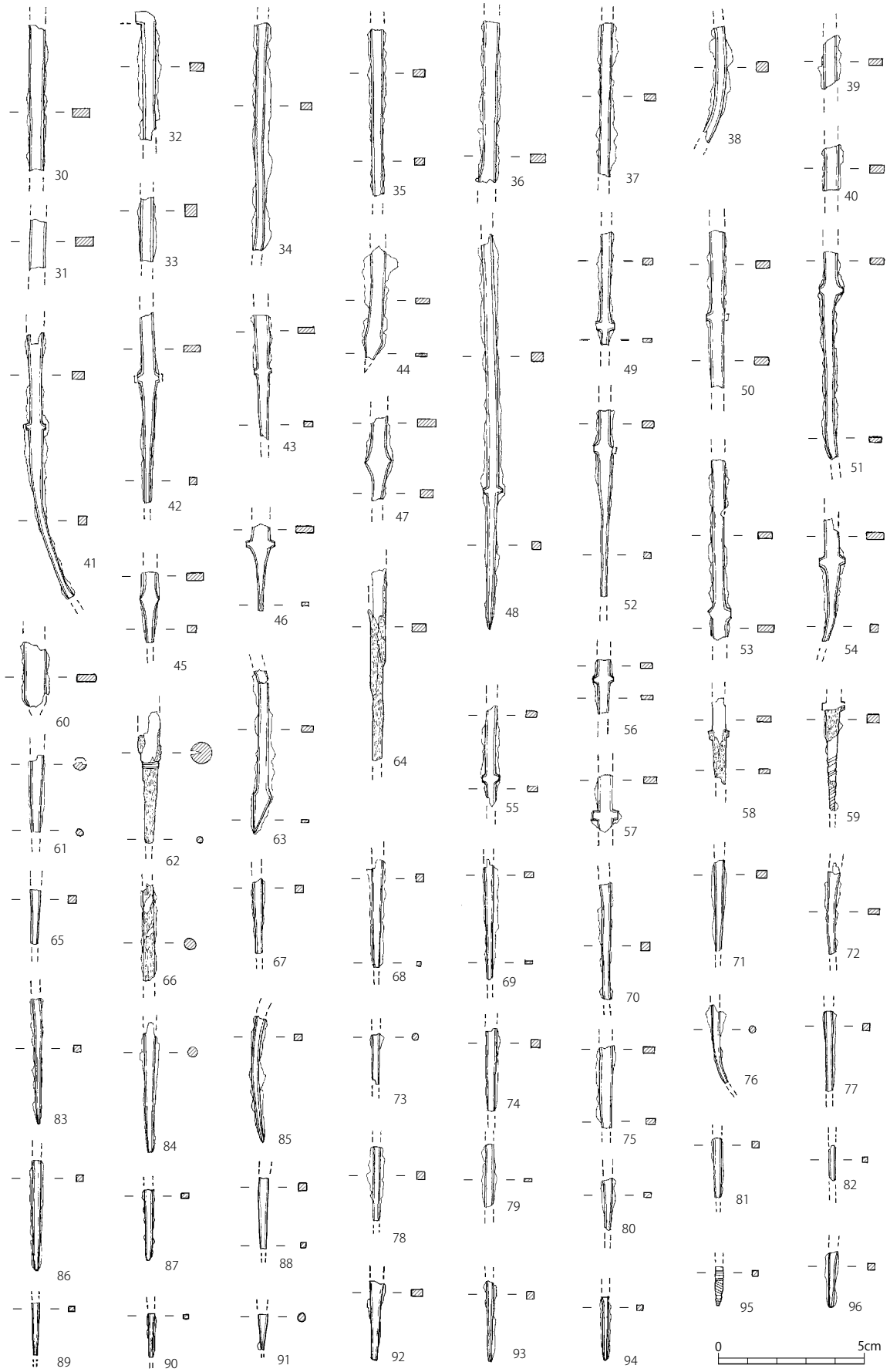
11 ～ 14 は尖根腸抉五角形式としたが、11・12 が鏃身部長が幅に対して長く、直線的なふくらを有するタイプなのに対し、13 はふくらの張るタイプ、14 は鏃身部長と幅がほぼ等しく小型のタイプとなる。

ｉ）尖根腸抉長三角形式･長三角形式(第 19 図 18 ～ 22)

19 は切先と頸部を欠損するが、小型の尖根長三角形式となる。20 はふくらの張る尖根長三角形式であり、18 も類似した形態であろうか。21 は腸抉長三角形式であり、深い腸抉を有する。22 はやや小型の尖根長三角



第19図　L-第62号墳　鉄鏃①



第 20 図　L- 第 62 号墳　鉄鏃②

形式とみられる。

以上の尖根系鉄鏃については、一部の小型の鏃身部のものを除いて、多くは鏃身部長や幅、頸部長といった法量が近似しており、それらはまとまった鏃群として捉えられる資料である。このように鏃身部長が幅に対して長い尖根長三角形式や尖根柳葉式、尖根五角形式を長頸鏃の主体として揃え、法量も本例と近似する例は中里K-第95号墳（植松ほか1975）や東原第5号墳（北川1994）、谷津原第6・第8号墳（石川ほか2001）などで確認することができる。これらの古墳には遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期前葉（TK209型式併行期～飛鳥Ⅱ）の時期が与えられることから、本例も同様の時間幅で捉えておきたい。

ｊ）尖根鑿箭式（第19図23～28）

23～28は尖根鑿箭式である。鏃身部の断面形には片鎬造（23～26）と片丸造（27・28）の2種類があり、鏃身部自体の大きさにも幅1.0cmほどの大型品(23)と幅0.5cmほどの小型品（24～28）という違いがある。頸部長や茎関の形状を知り得る資料はなく、編年的位置付けも困難ではあるが、駿河東部地域での鑿箭式の存続時期から（井鍋2003a）、遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期末葉(TK209型式併行期～飛鳥Ⅳ)の時間幅を想定しておく。

ｋ）尖根片刃箭式（第19図29）

29は尖根片刃箭式である。鏃身部幅が0.4cmと周辺地域の類例と比しても小さいが、片刃箭式鉄鏃であれば端刃造とみえ、片刃箭式では後出的な遠江Ⅳ期前葉以降（飛鳥Ⅱ以降）に帰属するものと考えられる（大谷2010a）。

ｌ）その他の鉄鏃（第20図30～96）

鏃身部形態が判明する資料のほかにも、頸部や茎部のみの出土にとどまった資料も数多いが、本報告では茎関が遺存する破片と、茎関がなくても残存長が1.0cm以上のものについてすべて図化・掲載した。

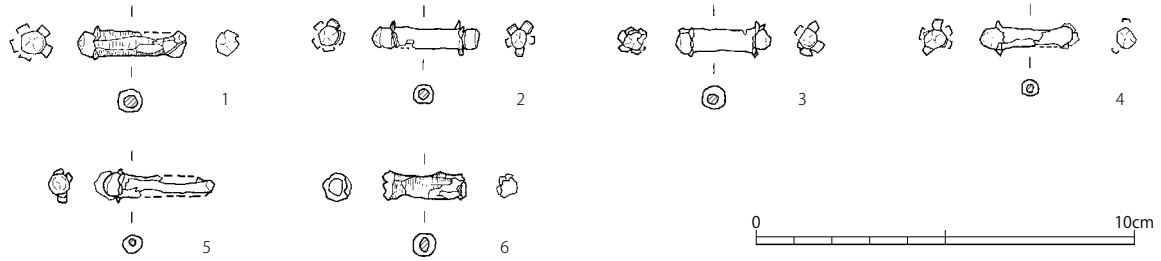
頸部片については、断面長方形のものから、方形のものまで存在する。

茎関が遺存するのは、41～59、63である。いずれも棘関であり、頸部と茎部の境で直角的に突出する棘関や台形状の棘関が目立つが、44、45、47、63は境が鈍角的（撫角状）に張り出す、簡略的な形態のものもある。特に44、45、63は茎部がそのまま逆三角形状に短く偏平に収束するものであり、周辺では国久保古墳において数例確認できることから、こちらも茎部の地域的な特徴の可能性がある（藤村ほか2011）。それ以外で通有の茎部を有するものの茎部長は、5.0～6.0cm程度のもの（11、15、41、51、52）、4.0cm前後のもの（48、59）、2.0cm前後のもの（46）が見受けられる。

木質等の有機質が遺存していたのは58、59、62、64、66、95である。このうち、59、62、95で細い樹皮か繊維を巻いた痕跡が確認される。59、95では茎に直接巻きつける状況が確認でき、また62では木質(矢柄)の上に巻きつけがみとめられることから、実際は茎に樹皮や繊維を巻いた上で矢柄に差込み、その上からさらに樹皮や繊維を巻きつけて鉄鏃を固定していたものと判断される。

なお、平根系につく頸部～茎部の破片の可能性が高いものとして、47、60、77が挙げられる。

茎関形態の観察からは、直角的な棘関を有するものと、鈍角的（撫角状）な関を有するものが確認でき、後者は簡略化した茎関と判断することが可能であり、前者を古相、後者を新相と考えることもできるかもしれない。そうであれば、尖根系鉄鏃の項でやや新しい時期の可能性を示した片刃箭式のほか、鑿箭式や小型の長三角形式・五角形式の一部については、追葬時の副葬鏃群として捉えられる可能性があろう。



第21図　L-第62号墳　弓金具

弓金具（第 21 図） 弓金具（両頭金具）はすべて鉄製で、6 点出土している。法量は、全長 2.50 ～ 3.00cm 前後、筒状金具の長さ 1.60 ～ 2.40cm、同直径が 0.45 ～ 0.60cm である。おそらくは弓本体に筒状金具を挿入後、その両端に切り込みを入れて花弁状に開き、その筒内部に棒状金具を差し込んで両端を打ち敲き、端部が円筒形または半円形になるようにかしめたものである。花弁は欠損したものも多いが、1 ～ 4 を見るに、いずれも方形で 5 弁であった可能性が高い。1、6 には木質も遺存するので、木製の弓に取り付けられていたことは疑いない。8 個以上の出土は複数の飾り弓が存在した可能性が高いとする考え（井鍋 2003b）を参考とすれば、本例は 1 本の飾り弓に伴うものとみられる。

（2）工具

刀子（第 18 図 11 ～ 19） 11 ～ 18 は鉄製刀子とその装具である。11 は切先と刃部の中間が欠損しているが、復元全長は 6.0cm 前後と推定できる。関はやや棟側が深い両撫関で、茎部には木質が残存しており、木柄が着装されていたとみられる。

12・13 は出土地点からも同一個体とみられる刀子片であり、12 が茎部片、13 は刃部片である。茎部には一部に木質が残存し、先端にいくにつれて先細るが、茎尻はやや四角い。こちらも木柄着装とみられる。14 は茎部～刃部片であり、関は片撫関である。茎部は刃部側が斜めに先細っていく形状をとる。15 は小破片であるが、刀子茎部片と判断した。茎尻が丸い形態である。16 は刃部片、17 は茎部～刃部片である。17 の関は両撫関であるが、刃部側がやや深く、棟側は浅い。刃部幅が 1.6cm、厚さ 0.5cm を測り、他の刀子よりも大型品とみられる。18・19 は刀子に伴う鉄製の鏃の破片と判断した。

（3）馬具

本古墳から出土した馬具は、量・内容ともに豊富であるが、おもに面繋と鞍、鐙に伴うものが大半であり、すべてが 1 組分の馬装に伴う馬具と考えられる（第Ⅳ章、大谷論考参照）。

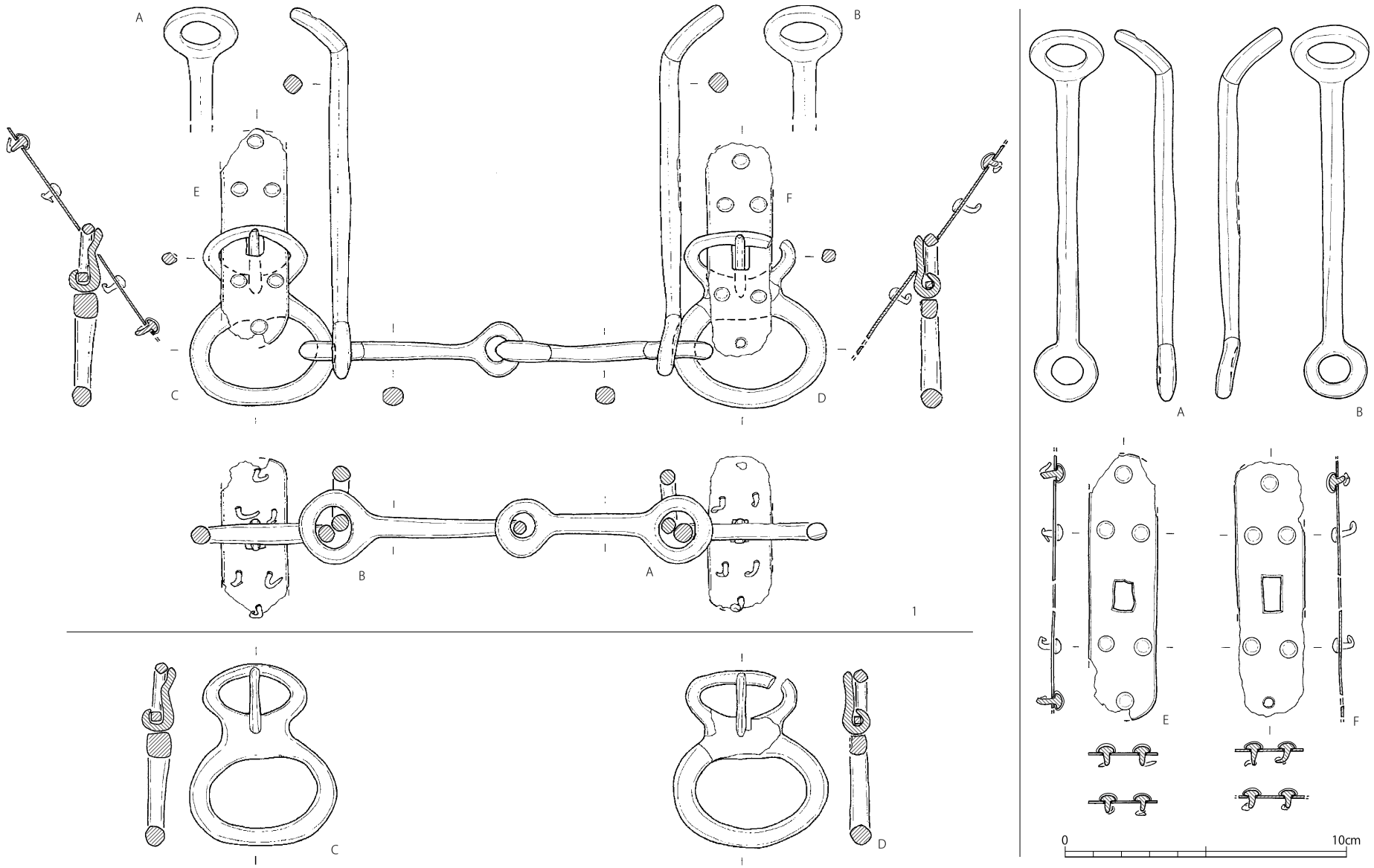
そのなかで、面繋に関連するとみられる馬具を中心に銅製の帯飾金具を伴う点は、群集墳出土の馬具としては特筆される。以下、面繋・鞍・鉸具類・鐙という順で可能な限り部位ごとに記述していきたい。

轡（第 22 図 1） 轡（1）は、通有の鉄製鉸具造環状鏡板付轡に銅製帯飾金具が取り付くものである。図面上での高さは 14.4cm、幅は 22.6cm を測る。依存状態は良好であり、保存修復によって、帯飾金具は可動する。宮代栄一氏の研究（宮代 1997）を参考に使用時の状況を想定すれば、引手壺が上方を向き、刺金を外側にして鉸具と帯飾金具が頬革に接続することから、鏡板や引手を個別に回転させることで左右の別なく使用できるものとみられる。したがって、以下の記述における左右とは、便宜的に図示した平面に向かっての左右とした。鏡板の前後表記は、着装状態を想定し、平面図下方（手前側）を前、上方（奥側）を後ろとして記述する。

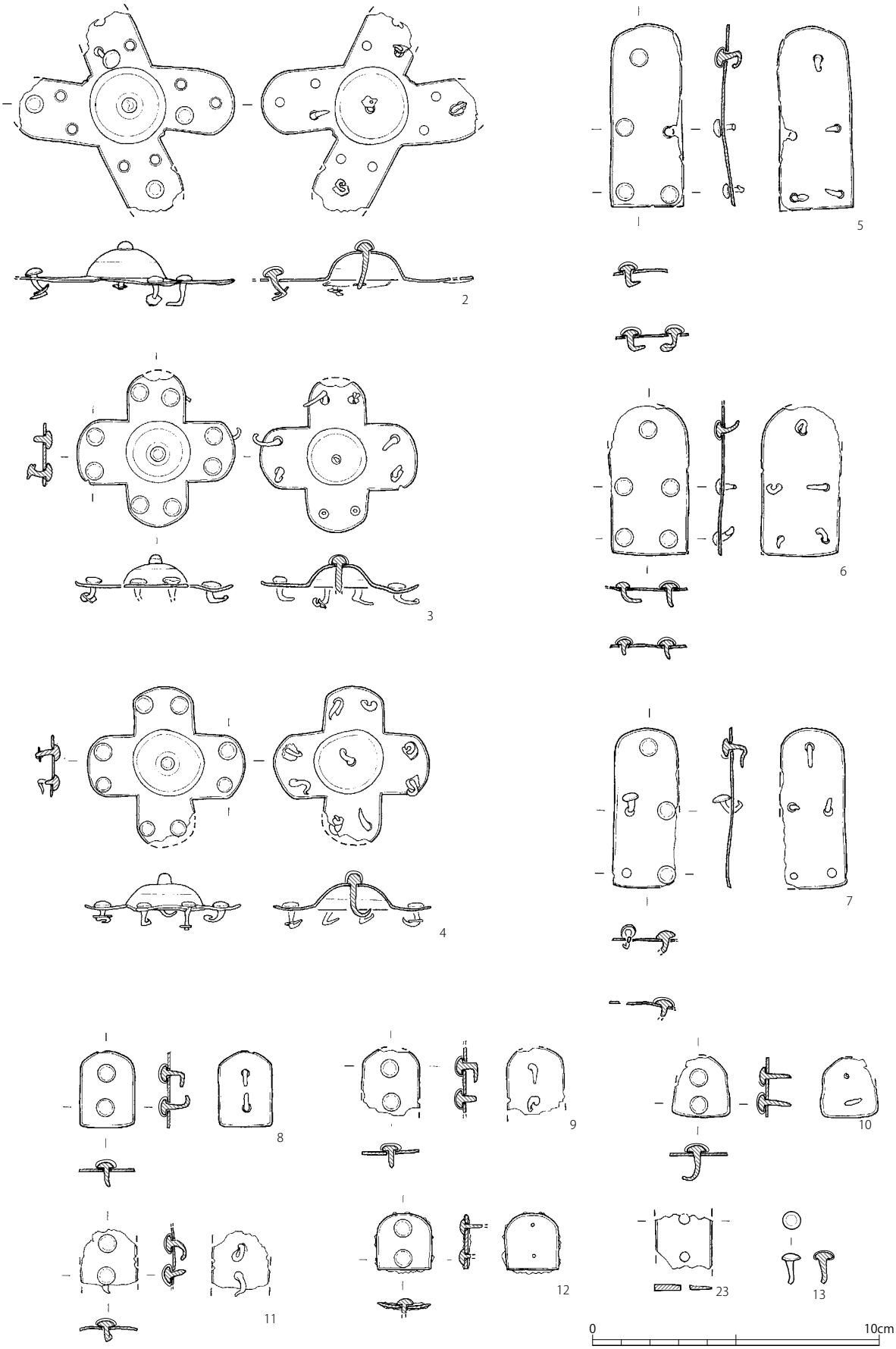
鏡板は鉸具が楕円形の環に鍛接されたものであり、右鉸具の鍛接部に現代の修復時の補修がみられる。円環や鉸具、刺金の断面形は基本的に円形である。左鏡板（C）は幅 5.2cm、高さが 6.5cm を測り、幅 2.4cm のわずかな頸部を介して、幅 3.7cm の鉸具が鍛接される。右鏡板（D）は幅 5.5cm、高さ 6.3cm を測り、幅 2.7cm のわずかな頸部を介して、幅 4.0cm の鉸具が鍛接される。こちらの鉸具は現代の補修により右上部分に間隙が生じており、本来の形状とは異なる可能性がある。刺金は左鉸具で長さ 2.4cm、幅 0.4cm、厚さ 0.3cm の断面円形の鉄棒を用い、頸部に穿たれた小孔に根元を蕨手状に巻きつけることによって稼動するようにしている。頸部の孔の形態は、錆化によって判然としなかった。

鉸具に取り付けられた帯飾金具は、細長い形状の銅板の前後 3 箇所ずつ、計 6 箇所に銅製鋲が打ち込まれており、中央に穿たれた方形の孔に刺金を通すことで、轡と連結させている。銅板の端部は欠損が目立つが、左帯飾金具（E）でみとめられるように、本来は前後ともに端部は半円形を呈するものと推定される。銅製鋲は銀または錫とみられる金属板が被せられた半円形の鋲頭を有し、脚部を折り曲げて頬革を固定したと考えられる。銅板から鋲屈折部までの長さは、0.2 ～ 0.3cm である。後述する辻金具の鋲（第 23 図 2 ～ 4）には革帯を保護するための座金が遺存するが、本例も含めた他の帯飾金具にはみられず、当初より伴わない可能性も高い。

銜は、断面円形の鉄棒を用いている。左銜の長さ 8.0cm、右銜の長さ 7.7cm、左右の銜を連結して伸ばした状態の長さは 14.7cm を測る。銜先環は直径 0.6 ～



第 22 図　L- 第 62 号墳　馬具①



第 23 図　L- 第 62 号墳　馬具②

0.7cm の断面円形の鉄棒を楕円形に成形して銜端に鍛接されており、ここに鏡板と引手が連結される。引手・銜共連法（岡安 1984）に相当しよう。喞金は左右ともに銜先環よりも小さく成形されている。

引手は、幅 0.6cm 程度の断面方形の鉄棒を用いている。両引手の長さはともに 13.2cm を測り、銜との連結部分近くがやや細く、引手中央部に移行するに従い太さを増す。銜先環に連結する円環よりも引手壺の円環の方がやや大きく、引手壺は引手本体と鈍角に鍛接されている。

なお、鏡板や銜、引手の各円環内に接合痕等の成形技法を知る手がかりは得られなかった。

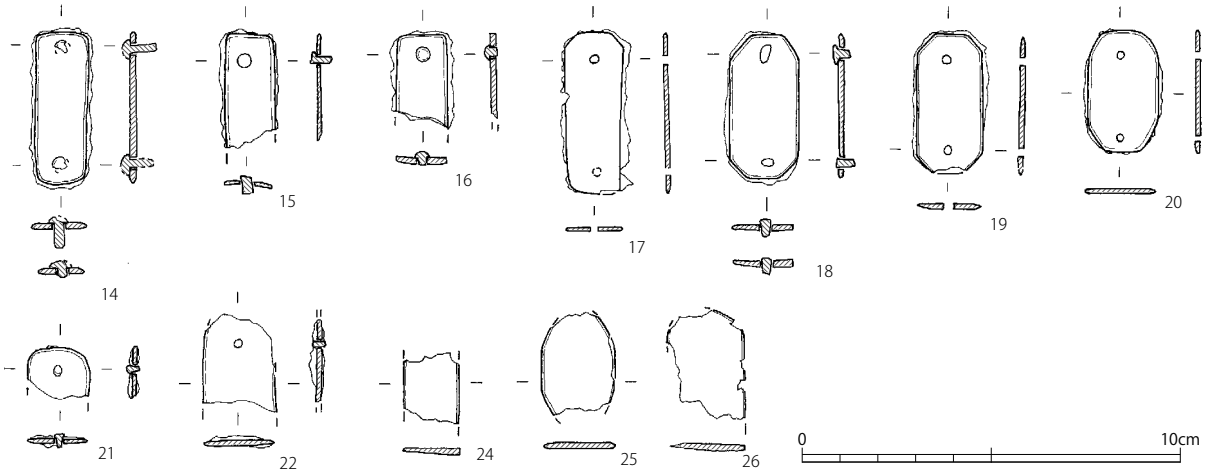
鉸具造鏡板付轡の法量による編年観（岡安 1985、鈴木 2008）や第Ⅳ章の大谷宏治氏の検討から、遠江Ⅳ期前葉（飛鳥Ⅱ）に位置付けられるとみられる。

辻金具（第 23 図 2 ～ 4）　銅製辻金具が 3 点出土しており、一部の鋲頭には銀または錫とみられる金属板が被せられている。2 は銅製 X 字脚板状辻金具であり、図示した位置で残存幅 7.5cm、長さ 6.9cm、高さ 2.3cm、鉢高 1.3cm を測る。鉢部は半球形を呈し、直径は 2.8cm 程である。鉢頂部には半球形の鋲頭を有する鋲が打たれ、鋲脚先端には銅板をやや乱雑に切った座金が残る。また、鉢頂部の鋲頭には金または銀とみられる付着物がみとめられる。四方に伸びる脚部は一部欠損するものが目立つが、先端の形状はすべて半円形を呈するとみられる。各脚部の谷間は、鈍角側が直線的に整形されているのに対し、鋭角側は細かな凹凸がみとめられており、銅板の裁断等製作方法に起因する特徴とみられる。脚部の鋲は各脚に 3 箇所ずつ打たれ、鉢頂部の鋲と比して鋲頭が偏平で銀または錫とみられる金属板を被せた形態であり、鋲脚屈折部には乱雑に切られた銅板が座金として残っている。脚部銅板から鋲脚屈折部までの長さは 0.7 ～ 0.8cm を測り、他の辻金具のそれよりも長い。鉢頂部の鋲脚長とも異なっており、それぞれ革帯の通し方に差があることが想定される。

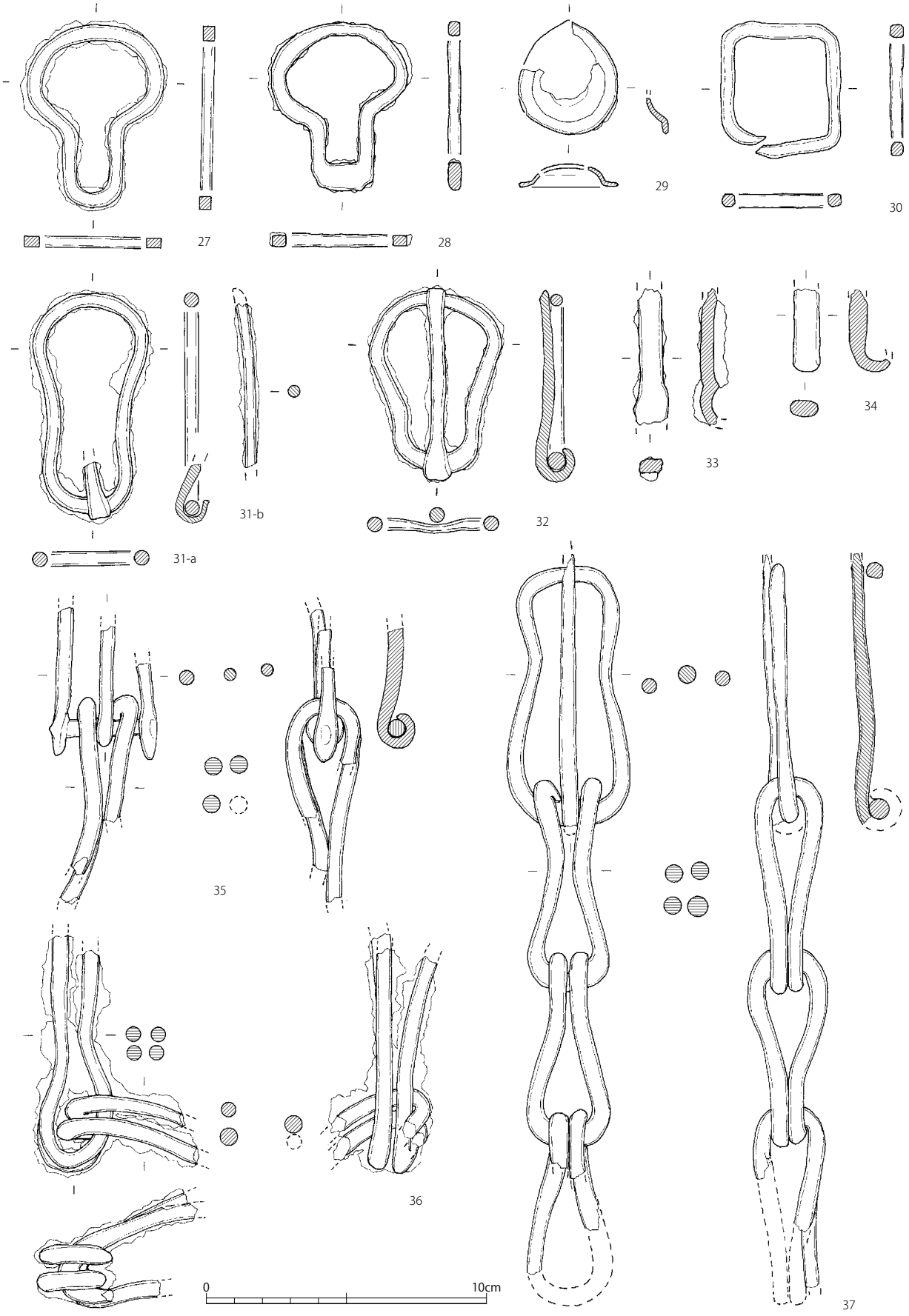
3、4 は銅製十字脚板状辻金具であり、ほぼ同形、同大で、諸特徴が一致する。図示した位置で 3 が幅 5.5cm、残存長 5.25cm、高さ 1.7cm、鉢高 1.1cm、4 が幅 5.5cm、残存長 5.4cm、高さ 1.9cm、鉢高 1.3cm を測る。鉢部は半球形を呈し、直径は 3 が 2.2cm でほぼ正円形であるのに対し、4 は 2.2 ～ 2.5cm と楕円形である。ともに鉢頂部には半球形の鋲頭を有する鋲が打たれ、4 は屈折した鋲脚先端まで残るが、座金はない。鉢頂部の鋲頭には 2 と同様に、金または銀とみられる金属板が被せられる。脚部先端部の形状は半円形を呈する。脚部の鋲は各脚に 2 箇所ずつ打たれ、鉢頂部の鋲と比して鋲頭が偏平で銀または錫とみられる金属板を被せた形態であり、一部の鋲脚屈折部には乱雑に切られた銅板が座金として残っている。脚部銅板から鋲脚屈折部までの長さは 0.3 ～ 0.5cm を測り、2 とは異なる。

編年的位置付けについては、第Ⅳ章の大谷氏の検討から、遠江Ⅳ期前葉（飛鳥Ⅱ）に位置付けられるとみられる。

帯飾金具（第 23 図 5 ～ 12、第 24 図 14 ～ 26）　面繋や鞍に伴う革帯等に取り付けられたとみられる帯飾金具が、破片も含めて 21 点出土している。これらは形状や素材、鋲の打ち方によって、いくつかの種類に分類



第 24 図　L- 第 62 号墳　馬具③



第 25 図　L- 第 62 号墳　馬具④

することが可能である（注 4）。

ａ）帯飾金具１類　5 ～ 7 は銅製の板状金具の 5 箇所に銅製鋲を有するものであり、鋲頭には銀または錫とみられる金属板が被せられている。図示した位置での長さは 5.6 ～ 6.4cm、幅は 2.3 ～ 2.7cm まであり、銅板から鋲脚屈折部までの長さは 0.2 ～ 0.3cm を測る。

ｂ）帯飾金具２類　8 ～ 11 は銅製の板状金具の 2 箇所に銅製鋲を有するものであり、鋲頭には銀または錫とみられる金属板が被せられている。図示した位置での長さは復元値も含めて 2.2 ～ 2.6cm 程度、幅は 2.0cm 程度であり、銅板から鋲脚屈折部までの長さはやはり 0.3 ～ 0.5cm のものが目立つが、10 は 0.7cm と長く、2 の辻金具と近似した数値を測る。

ｃ）帯飾金具３類　12 は鉄製の板状金具の 2 箇所に銅製鋲を有するものであり、鋲頭には銀または錫とみられる金属板が被せられている。図示した位置での長さは 2.0cm、幅は 1.9cm であり、板状金具の素材こそ異なるものの、形状は 2 類との共通性が高い。破片である 23 も、帯飾金具 3 類となる可能性があろう。

帯飾金具 1 ～ 3 類は、金具の素材や形態の類似性から、轡や辻金具との共通性が指摘できる帯飾金具である。12 や 23 は何らかの事情によって鉄板を用いたようであるが、これらは第Ⅳ章の大谷氏の論考でも検討されている通り、面繋構造に用いられた一連の馬具とみられる。13 の銅製鋲も、辻金具または帯飾金具 1 ～ 3 類から遊離したものと考えられる。

ｄ）帯飾金具４類　14 ～ 22、24 ～ 26 は鉄製の板状金具の 2 箇所に鉄製鋲を有するものである。板状金具の形状が幅 1.5cm 程度で長方形を呈するもの（14 ～ 17）と、幅 1.7 ～ 2.0cm ほどで縦長の隅切方形（八角形）または楕円形を呈するもの（18 ～ 20）がみられる。端部のつくりは帯飾金具 1 ～ 3 と比べると粗雑な感は否めず、鋲の形状も異なるため、面繋以外の部位に伴う馬具と考えられよう。

鞍金具（第 25 図 27 ～ 29、33、34）　鞍はすべて鉄製で、鍵穴形の鉸具（27、28）と栗形の座金具（29）、脚部（基部）片（33、34）を確認することができた。鉸具は 27 が長さ 6.6cm、幅 4.8cm、28 が長さ 6.0cm、幅 4.9cm を測る。根元の形状は、27 が細い棒状であるのに対し、28 は幅広で偏平な形態を呈する。29 は全体の 1/4 以上が欠損するが、鞍座金具と判断した。残存長 4.0cm、最大幅 3.5cm、残存高 0.8cm で平面は栗形を呈し、断面半円形の鉢部の周囲に平坦な縁部が廻っていたものと判断される。33、34 はともに鉸具の刺金にもみえる破片であるが、端部の蕨手部分が 27、28 の鞍鉸具の根元ともよく合うことから、鞍の脚部（基部）と判断した。両破片ともに、断面はやや偏平な棒状を呈する。

鞍金具以外の鞍金具はまったく出土しておらず、本古墳に副葬された鞍は鞍以外に金属を用いない木装鞍であったと考えられる。鞍金具の鉸具が 2 点であることを評価すれば、鞍を後輪のみにとりつける木装鞍（宮代 1996b）が 1 点存在したものと考えられる。その場合、鞍の鉸具の根元部分に差異がみとめられることから、後輪の左右で細部に違いがあったことを考慮する必要があるだろう。また、本例のように栗形の座金具を用いる鉄製鞍金具はやや類例に乏しく、周辺では神明山 4 号墳例（清水市教委 2002）が可能性があるほか、花岡山 1 号墳例（中井ほか 1992）で確認できる。鉄地金銅張であれば原分古墳（井鍋編 2003）の 2 号鞍金具とも共通し、先の 2 例も一部に金銅装馬具を伴う馬装の古墳であることから、本例も通有のものと比較すればやや装飾性が高い鞍に伴う鞍金具であった可能性がある。

腹帯金具（第 25 図 30）　30 は断面方形の細い鉄棒を、一辺が 4.2cm ほどの正方形となるように折り曲げて作られた製品であるが、端部同士は剥離して 0.2cm ほど離れている。用途は検討の余地が残るが、ここでは腹帯金具として報告する。駿河地域周辺では、駿河丸山古墳（静岡市教委 1962）で長方形を呈するものが確認されているほか、原分古墳（井鍋編 2003）でも方形を呈する鉸具の破片が、法量、形態ともに類似する。

鉸具金具（第 25 図 31、32）　面繋やその他の部位の革帯等をつなぎ留めていたと考えられる鉄製鉸具が、2 点出土している。31 は刺金が途中から遊離しており、接合はしないものの、同一個体と判断される。ともに輪金は図示した上下端が円形で間に括れを有し、棒状・蕨手形の刺金を伴う鉸具であるが、法量や形状は細差がみられる。31 が長さ 8.1cm、最大幅 4.1cm、32 が長さ 6.9cm、最大幅 4.7cm であり、括れの位置も 32 のほうが下方にある。

鐙吊金具（第 25 図 35 ～ 37）　鐙吊金具は、鉸具に横軸を介した刺金を有し、兵庫鎖の各単位が長く、2 連

に復元されるもの（35、36）と、輪金に直接刺金を絡めた鉸具で、兵庫鎖が３連となるもの（37）の二者が存在する。斎藤弘氏分類によれば、前者が木芯三角錐形壺鐙Ｅ式（三Ｅ式）、後者が木芯三角錐形壺鐙Ｄ式（三Ｄ式）に該当する（斎藤 1986）。法量は、35 の鉸具の残存幅 3.9cm、兵庫鎖の長さ 7.3cm 以上、36 は兵庫鎖の残りの良い方の長さ 8.5cm 以上、38 の鉸具の残存長 9.7cm、最大幅 4.3cm、兵庫鎖の各単位の長さは 7.0 ～ 7.5cm である。35 と 36 は接合しないが、同一個体である可能性がある。

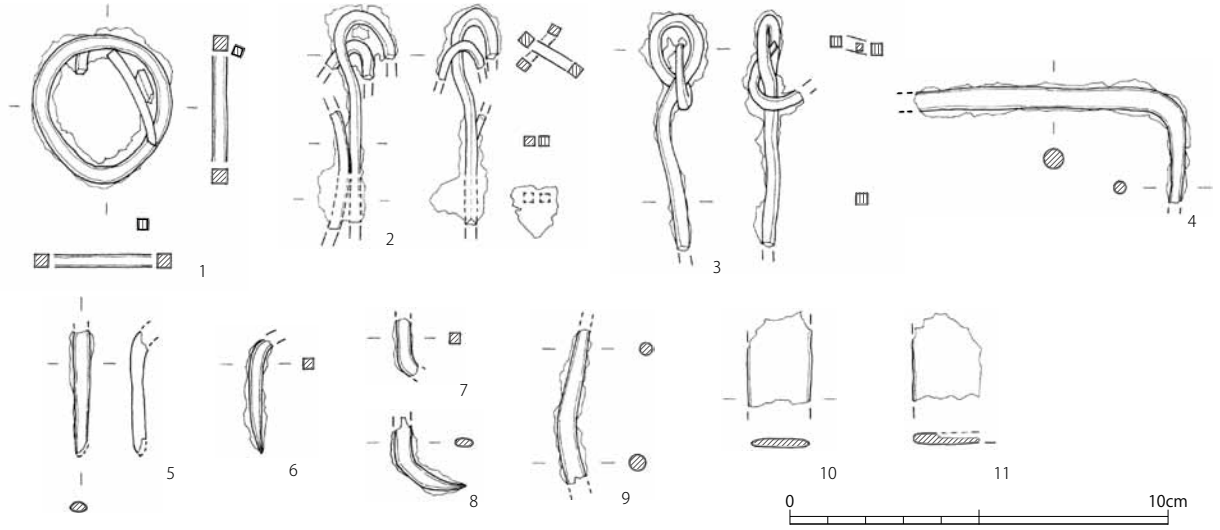
斎藤氏の研究によると、編年的位置付けについては 38 の三Ｄ式が遠江Ⅲ期中葉～後葉（TK43 ～ TK209 型式併行期）とやや古く、36・37 の三Ｅ式が遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期前葉（TK209 型式併行期～飛鳥Ⅱ）と新しく位置付けられるようである。詳細は第Ⅳ章の大谷氏論考を参照されたいが、石室内に副葬された鐙は１対ずつの２組が存在したのではなく、古相である三Ｄ式と新相である三Ｅ式の片方ずつを組み合わせることで、後者の時期に１組の鐙として本古墳に副葬されたものと考えられる。

（４）その他の鉄製品

上述した金属製品以外で、機能が不明瞭なものを第 26 図に掲載した。すべて鉄製品である。

１～３は一括して取り上げられたものであり、すべて断面方形で幅 0.3 ～ 0.4cm 程度の棒状鉄製品を、さまざまな形態に成形したり、組み合わせたりすることによって使用された一連の製品と考えられる。１は円環状の鉄製品であり、図示した位置での長さ 3.9cm、幅 3.6cm を測る。同種の鉄棒の破片が付着した状態で錆化しており、複数の棒状鉄製品を組み合わせて使用したことは疑いない。2、3 は鉄棒の端部を径 1.5 ～ 2.0cm 程度の環状に曲げ、その環部に同種の鉄製品を連結させていたとみられるものである。出土状況からこれらの鉄製品の機能を想定することも困難であるが、小型の円環状鉄製品や環付の棒状鉄製品を複数連結させていたとみられることから、なんらかの佩用金具であった可能性が考えられる。類例の可能性があるものとしては、福岡県・平等寺向原Ⅰ -1 号墳で類似した環付棒状鉄製品が出土しているほか（宗像市教委 1992）、愛知県・稲荷山４号墳では８字形に捩じった鉄棒にまた別の鉄棒を巻きつけた不明鉄製品が出土している（岩原編 2002）。

４は断面円形の鉄棒を直角に屈曲させた製品であり、端部は欠損する。５は図示した位置の上端部で緩やかに曲がり始める棒状の鉄製品であり、断面は偏平な楕円形を呈する。６は断面方形で一端が屈曲部を有し、もう一端は鋭利に尖る。７も断面方形で屈曲部を有する鉄棒状の破片である。８も先端が尖るが、６に比して屈曲部までが短い。９は断面円形の棒状鉄製品である。4、9 は一括して取り上げられたものであり、同一個体の可能性もある。以上の破片資料は、屈曲部を有し、先端が尖った形状をとる４や６などは、木棺に伴う鋲の可能性が真先に想定される。周辺地域において釘や鋲を出土した



第 26 図　L- 第 62 号墳　その他の鉄製品

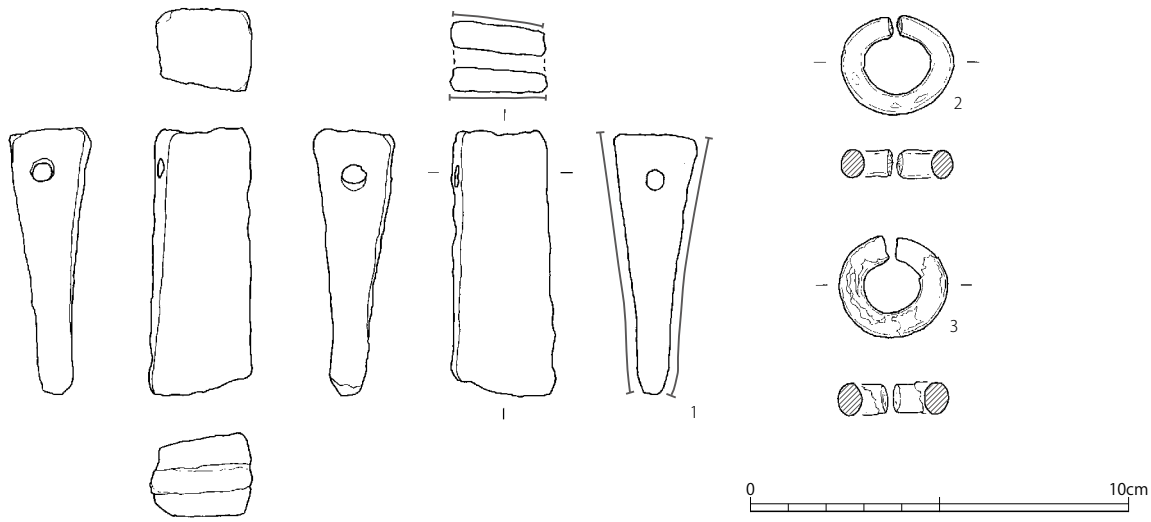
古墳は非常に少なく、ヤマト王権との関係が深いとみられる有力古墳に限定されることから（大谷 2010a）、その評価には慎重を期したい。5 は鋏の可能性のほか、鉸具の刺金の可能性も想定される。8 についても、秋葉林 1 号墳（大谷編 2010）例の如き小型の鋏の可能性を考えてもよいかもしれないが、漁具の釣針である可能性も併せて考慮される。

10、11 は板状の鉄製品であり、馬具の帯飾金具（4 類）または刀子の刃部片とみられるが、錆化や欠損が著しく、判断することが出来なかった。

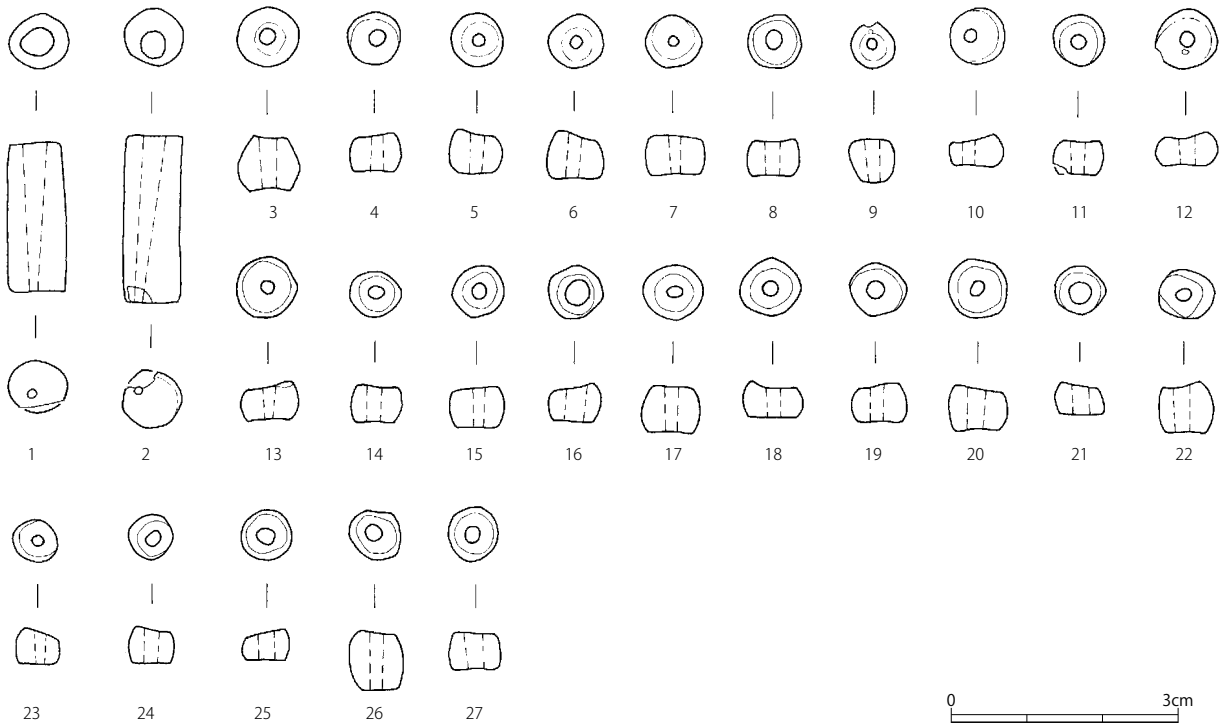
（5）装身具

提砥（第 27 図 1） 長方形の板状を呈し、一端に垂下用の孔を有する。両面ともに磨跡が認められる。

耳環（第 27 図 2、3） 耳環は 2 点出土しており、現状の箔表面は銀色の発色が強い。2 は長軸 2.90cm、短



第 27 図　L- 第 62 号墳　装身具



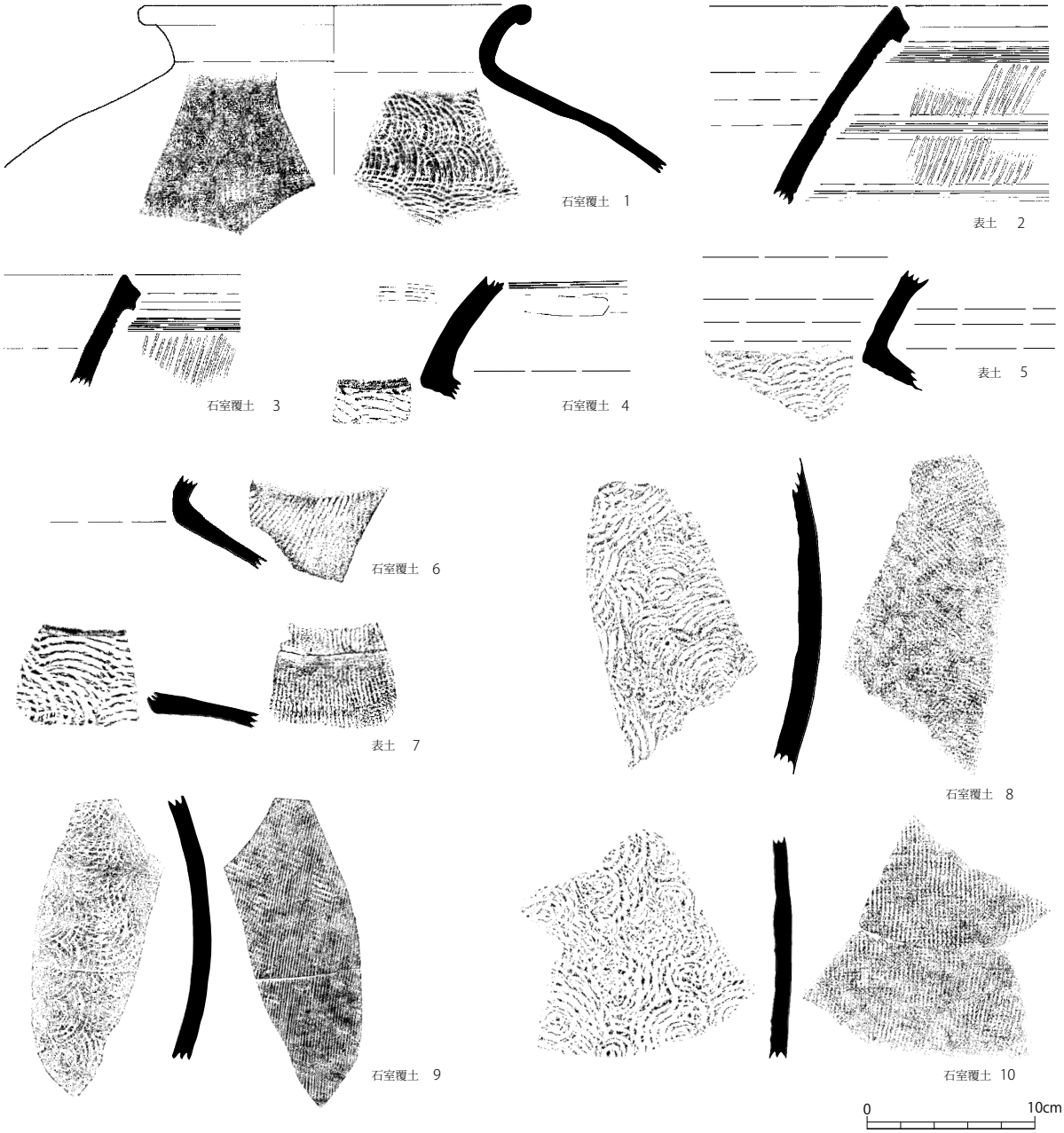
第 28 図　L- 第 62 号墳　玉類

軸 2.55cm を計り、ところどころ箔が剥がれている。3 は長軸 2.90cm、短軸 2.70cm を測り、小口部分に箔の皺や折込みが確認できるほか、箔がはがれた部分も複数確認される。ともに中実の銅芯に金箔または銀箔を巻き付けて製作された耳環と判断される。両者は法量も近似しており、一対で用意されたものとみられる。

玉類（第 28 図） 玉類は計 27 点がまとまった位置から出土しており、管玉と小玉によって構成される一連の装身具であった可能性がある。

碧玉製管玉　1、2 はいわゆる碧玉製の管玉であり、ともに片面穿孔であるが、2 は穿孔の際に端に寄り過ぎたためか、端部が欠損している。高さは 2.20 ～ 2.00cm、径はともに 0.75cm を測る。

ガラス小玉　ガラス小玉は 25 点出土している（3 ～ 27）。3 は丸みを帯びた形態であるが、ほかは上下面に平滑な面を有するものが目立つ。5、9、10、12、13、14、15、18 では孔と平行に気泡が動いた痕跡がみとめられることから、引き伸ばし法によって製作されたもの



第 29 図　L- 第 62 号墳　須恵器

が多いとみられる。法量は高さが0.40～0.80cm、径が0.60～0.80cmまであり、色調は濃青色から紺色である。

（6）土器

須恵器（第29図） 調査区内の表土や石室覆土内からは、甕類の破片がコンテナ1箱分程度出土している。これらの資料については個々の詳細な出土地点は不明瞭なものの、非抽出資料も含めて石室床面から出土した甕の破片は皆無であることから、墳丘上部や開口部周辺で使用された資料と考えられる。

今回はそのなかでも部位や形状がわかる10点を図示したが、同一個体となる可能性のあるものを含んでおり、形態や内外面の調整からは、2～5、7が同一個体の可能性が高い。これらは断面台形の口唇部を有し、頸部は上部3条、中・下部2条の沈線によって区画された範囲に直線的なヘラ描き文が施され、肩部外面は格子ふうタタキ、内面は同心円文当て具痕がみとめられるものであり、大型甕の一部である。1は復元口径が22.6cmの小型甕で、断面円形の口唇部を有す。断面色調は赤灰色である。6も甕類の肩部であるが、1や4～7とは異なり、肩部内面に当て具痕が確認できない。8～10も甕類の体部であるが、いずれの口縁部～肩部片に伴うものとも判断できなかった。9は断面赤灰色であり、1に近い。

以上の須恵器は2または3個体の甕類からなる資料であると考えられるものの、石室周辺から検出された遺物の絶対量は後世の耕作の影響を考慮してもやはり少なく、当初から破片であった可能性も想定しておく必要があろう。なお、本資料に共通してみとめられる黒味がかった光沢ある外面色調や、一部でみとめられる断面赤灰色となる特徴は、次節で報告するL-206号墳出土須恵器とも類似している。こうした特徴は同時期に盛行している湖西産製品とは一線を画するものであり、現在の静岡市にあたる静清平野の窯跡の製品である可能性がある（注5）。

編年的位置付けは困難であるが、端部の形状や沈線は比較的丁寧なつくりであり、遠江Ⅲ～Ⅳ期（TK10型式併行期～飛鳥Ⅳ）には確実におさまる資料であろう。

注

(1) 以下、小刀や刀装具、茎片の評価については、大谷宏治氏より御教示をいただいた。

(2) X線撮影に基づく評価については、静岡県埋蔵文化財センターの大森信宏氏・伊藤純子氏よりご教示を得た。

(3) 鉄鏃分類については、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所による鉄鏃集成の基準に則り（大谷2003a）、編年的位置付けについては大谷宏治氏の研究を参考とした（大谷2003b）。

(4) 7の銅板表面、8の銅板裏面の一部に金～銅色に発色する部分が観察されたが、これは保存処理の際に金具表面を削りすぎたために、銅の地金が出てしまっているものと考えられる。したがって、これらはあくまで銅装であり、鋲頭のみ、銀または錫とみられる金属板を被せたものとして判断した。

(5) 資料を実見した和田達也氏の御教示による。

第２節　船津 L- 第 206 号墳

１．古墳の現況

船津 L- 第 206 号墳は春山川を見下ろす東岸の低位段丘上の緩やかな緩斜面上に位置する。現況では高まりがなく古墳の存在は明らかではなかった。西側を通る農道の拡幅工事に伴い、石室の一部が露出し、新たに発見された。18 m南東に L- 第 207 号墳が所在する。

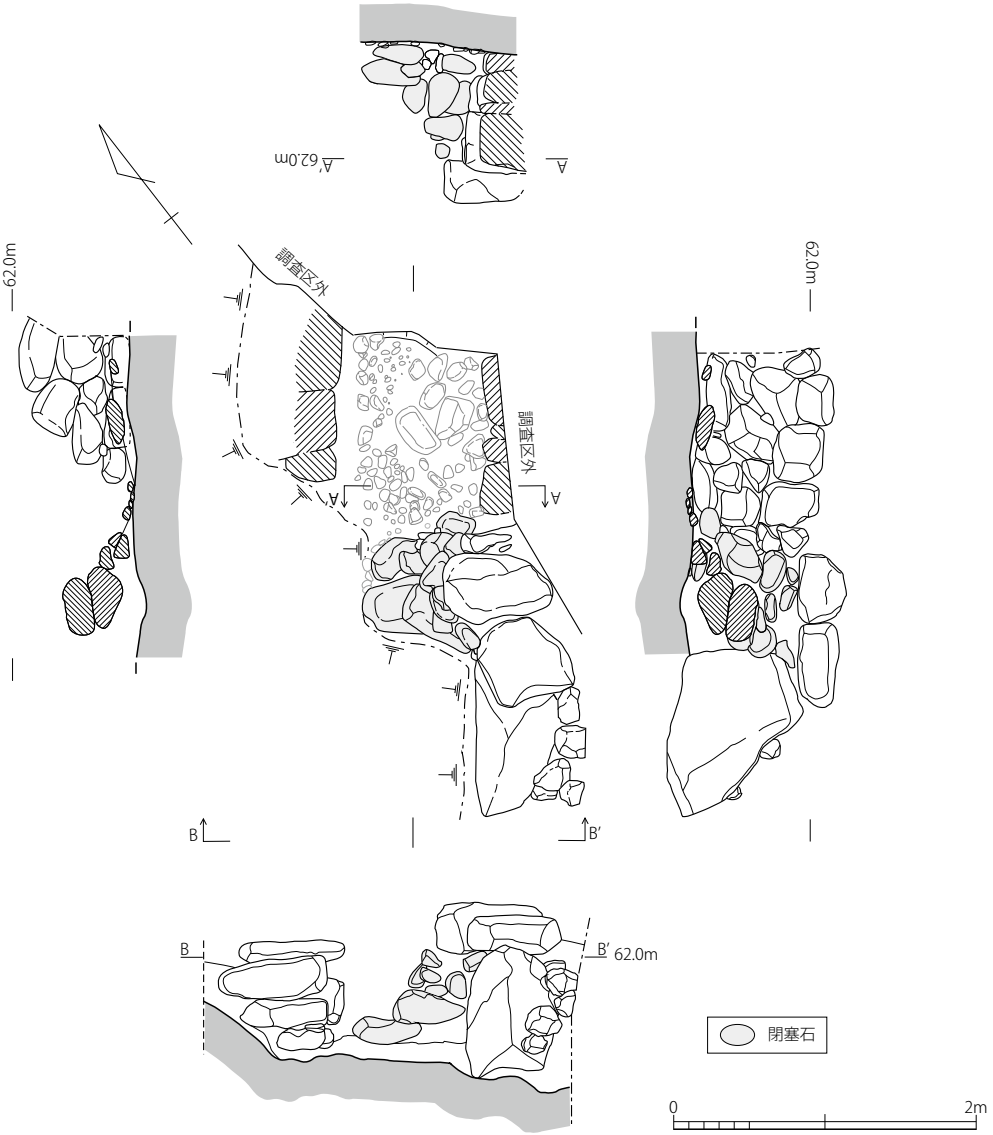
２．墳丘の構造（第 30 図）

墳丘の大部分が調査区外で、また、石室の石材が露出した状況で発見されたため、墳丘及び周溝等の外部施設については明らかとなっていない。

３．石室と墓坑の構造（第 30 図）

形状・規模　石室は開口部側の側壁及び床面の一部を検出した。発見した際には、既に工事の重機によって石室の閉塞部と右側壁の一部が破壊され、また、石室の大半が調査区外であった。このため、石室の全容については不明であるが、残存状況から磁北に対して主軸が 37 度東に触れ、南西方向に開口する横穴式石室と推測される。

石室石材はすべて春山川で採取される川原石を用いている。規模は開口部から前方にかけて長さ 3.85 m までを確認した。石室幅は左右側壁が遺存する部分で幅内法



第 30 図　L- 第 206 号墳　石室展開図

1.15 mを測る。未完堀のため、墓坑の規模、形状については明らかにできていない。

壁面構成　側壁は３～４段目分残存する。石積は石材の小口面を石室に内側に向けることを基本とし、平積みしている。一部、基底石と４段目の一部に長手面を石室内側に向けている石が認められる。

左側壁端の石材は幅 1.20 mの大型礫を、広口の平坦面を石室内側に向け、据えていた。一石で側壁２段目の高さを持つ。この部位にのみ巨石を用いていることから、石室開口部を意識した意図が感じられる。開口部の右側壁と閉塞石が破壊され、定かではないが、閉塞石より前方に設置されていることから前庭側壁の可能性も考慮したい。

閉塞石　閉塞石は前方部の石北端より 70cm 程の範囲で残存していた。残存状況から長さ 40cm ほどの川原石の小口面を石室内に向け、積み上げていた。

床面　石室主軸から左側壁にかけて長さ 20 ～ 30cm 程度の川原石が認められるが、他は５～ 10cm 程度の角礫を用いていた。石室の全容が把握できず、かつ道路工事による影響から本来の床面状況であるかは判断できない。

４．遺物出土状況（第 31 図）

石室内からの遺物出土量は少なく、図示した大刀１点、鉄鏃１点、耳環２点がみられたのみである。前述の大きめの川原石上から大刀、耳環が出土している。他よりも大きめの敷石を使い、装身具が出土しているが、開口部から近すぎることから、この場所を埋葬位置と捉えていいかは断定できない。土器については工事中の採集であり、その出土位置は明らかでない。

５．出土遺物

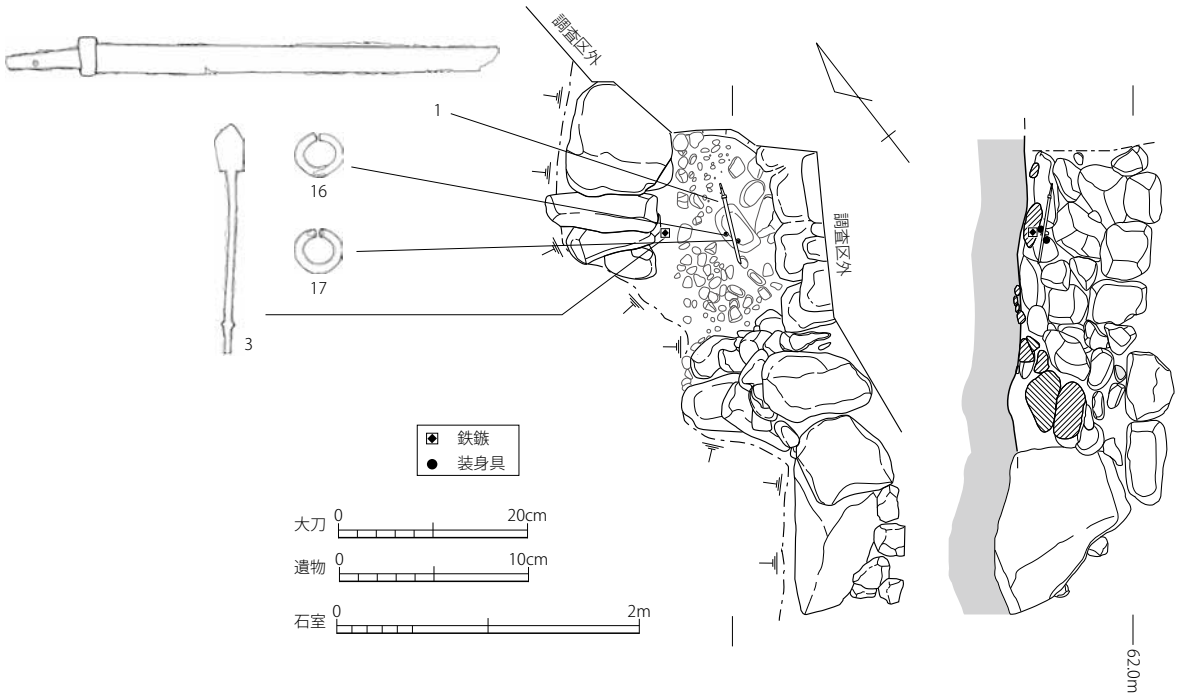
船津 L- 第 206 号墳では、横穴式石室床面の残存範囲から大刀、鉄鏃、装身具からなる副葬遺物が出土した。また、古墳発見の契機となった道路工事に伴う削平の際、一定量の須恵器が工事者によって採り上げられている。出土した遺物の種類と総数は下記の通りである。

【床面】

武　器	大　刀	１点
	鉄　鏃	７点以上（鏃身６点、茎関７点）
装身具	耳　環	２点

【開口部付近】

土　器	須恵器	15 点

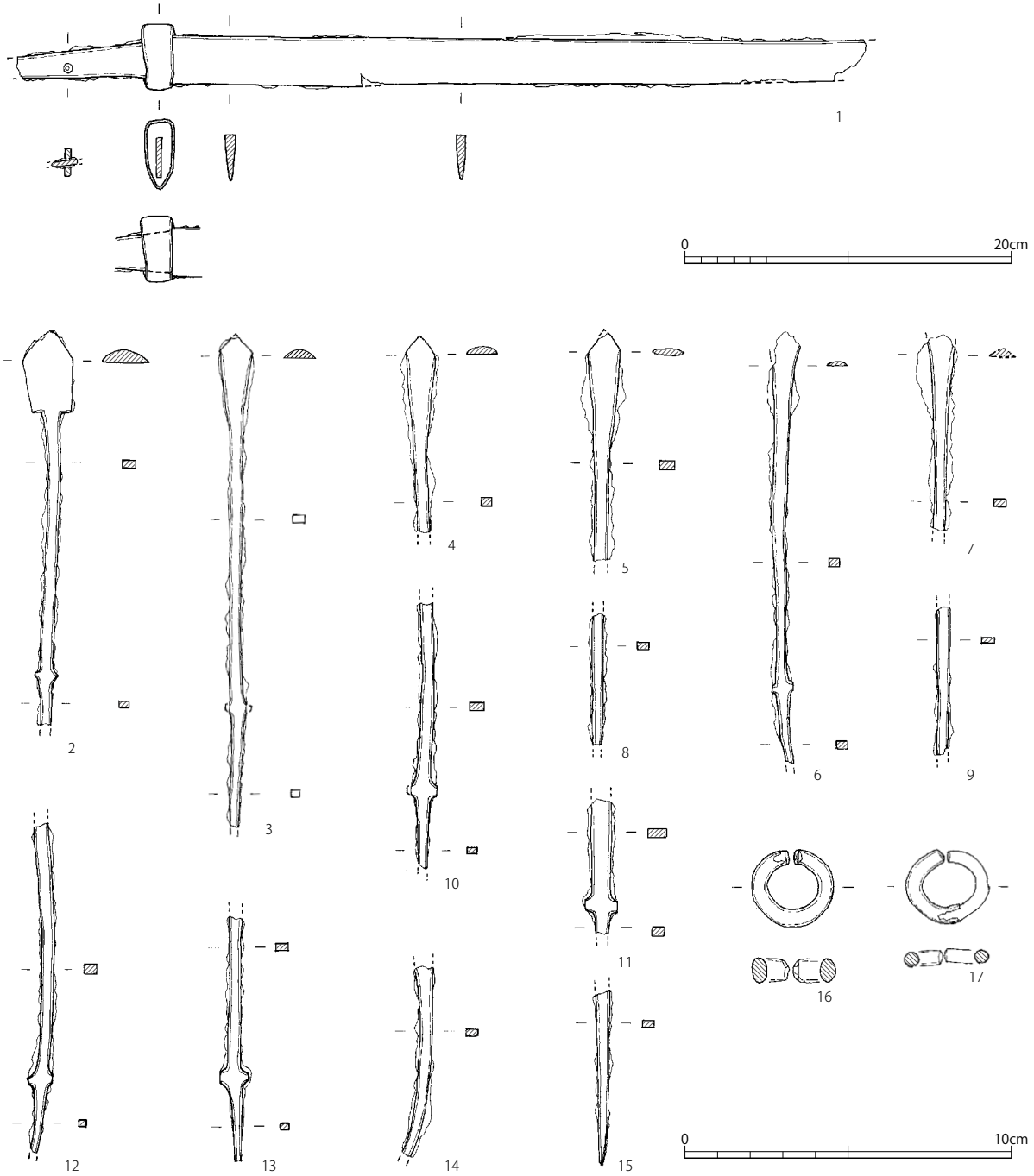


第 31 図　L- 第 206 号墳　遺物出土分布

以下、これらの区分をもとに、各遺物の概要や観察結果、編年的位置付けについて報告を行う。

（1）武器

大刀（第 32 図 1） 1 は床面より出土した大刀である。切先と茎部先端が欠損しており、木質も全く残存していなかった。鍔が刀身に着装された状態で出土しており、残存全長 52.0cm、鍔着装状態での残存刀身長は 42.4cm、刀身幅 2.8cm、茎部残存長は 9.6cm を測る。刃部は反りがない直刀である。現状の鍔元の関の有無については、X線でも確認することができなかったが、図上で復元すれば、浅い直角両関になるものとみられる。茎部は先端にいくにつれて先細り、残存範囲での最小幅は 1.3cm を測る。L- 第 62 号墳出土の小刀（第 18 図 1）同様、先端が尖っていた可能性も大いに考慮される。茎部には径 0.4cm ほどの目釘穴に残存長 1.6cm の目釘が遺存する。鍔は断面爪形を呈し、上端に面を有する。外



第 32 図 L- 第 206 号墳 遺物（大刀・鉄鏃・耳環）

径長軸 4.3cm、幅は 1.9 ～ 1.6cm を測る。

あえて編年的位置付けに言及すれば、本例は臼杵 勲氏による均等両関中細茎に分類され（臼杵 1984）、遠江Ⅲ期後葉（TK209 型式併行期）以降の 7 世紀代の時期が与えられる。

鉄鏃　石室内で出土した鉄鏃のうち、鏃身部の形状が確認できるものはすべて尖根系(長頸鏃)で、計 6 点ある。鏃身部の形状別では、五角形式が 1 点、鑿箭式が推定のものも含めて 5 点存在する。このほか、頸部や茎部のみの遺存に留まった資料もあり、茎関が遺存する資料を数えれば総数で 7 点となり、鏃身部が確認できる資料数と近似する。

したがって、当古墳に副葬された鉄鏃については未調査の奥壁側や既に削平された石室部分にも鉄鏃が存在した可能性も考慮して、茎部に依拠した 7 点以上という数量で捉えておきたい。

ａ）尖根五角形式（第 32 図 2）　2 は尖根五角形式である。鏃身部長が幅に対して長く、片丸造であり、茎関は棘関である。形態や法量が本例と近似する例は中里 K- 第 95 号墳（植松ほか 1975）や東原 5 号墳（北川 1994）で確認できることから、これらの古墳の時期である遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期前葉（TK209 型式併行期～飛鳥Ⅱ）の時期幅が本例にも与えられる。

ｂ）尖根鑿箭式（第 32 図 3 ～ 7）　3 ～ 7 は尖根鑿箭式であり、本古墳の副葬鏃群の主体となる形式とみられる。6、9 は鏃身部先端が欠損するが、鑿箭式と考えてよいだろう。鏃身部の断面形は片丸造（3、4、6、9）と平造（5）の 2 種類があるものの、鏃身部自体の大きさは長さ 0.6cm、幅 1.0cm ほどの形態に揃えられている。頸部長も判明するものについては 11.0cm 前後で、確認できる茎関はすべて棘関である。これらは形態や法量の類似性から、同時期に副葬された鉄鏃と考えられる。編年的位置付けについては、駿河東部地域での鑿箭式の存続時期から（井鍋 2003a）、ひとまずは遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期末葉（TK209 型式併行期～飛鳥Ⅳ）の時間幅を想定しておく。

（2）装身具

耳環（第 32 図 16、17）　耳環は 2 点出土しており、ともに緑青が著しいが、現状の箔表面は銀色の発色が強い。16 は長軸 2.60cm、短軸 2.30cm を計り、ところどころ箔が剥がれている。17 は長軸 2.60cm、短軸 2.30cm を測り、図示した右半部は箔が破れて銅の地が露出する。断面の長軸径は 16 が 0.70cm、17 が 0.4cm であり、16 の方が太い。腐食のため小口部分に箔の皺や折込みは確認できないが、ともに中実の銅芯に金箔または銀箔を巻き付けて製作された耳環とみられる。

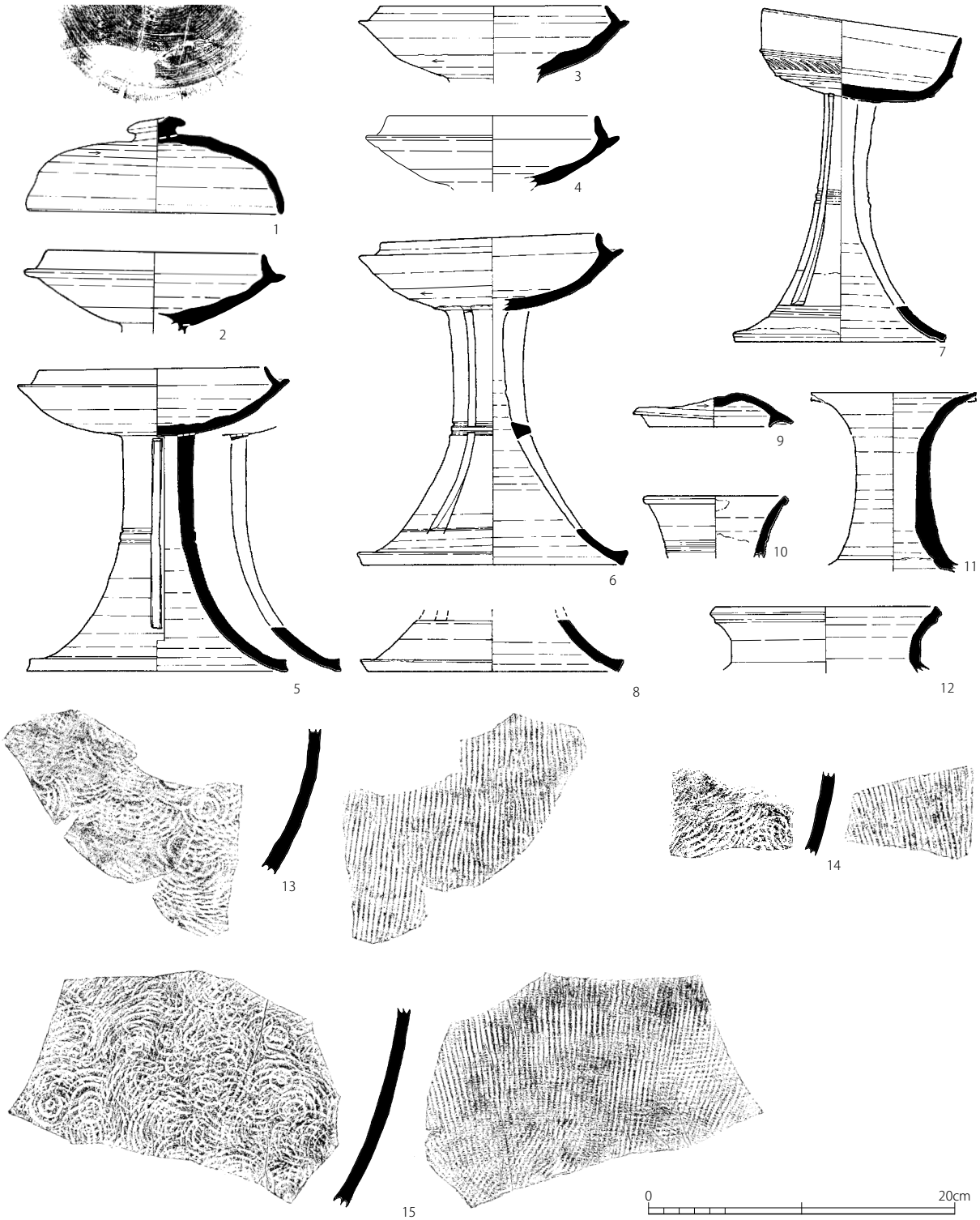
（3）土器

須恵器（第 33 図）

杯蓋　1 がこれに相当し、ほぼ完形である。やや扁平で上部を窪ませる摘みを有し、杯蓋頂部には丁寧な回転ヘラ削りがみとめられる。頂部と口縁部の境は明瞭ではなく、口唇部は丸くおさめられる。なお、頂部には × 字状のヘラ記号が残る。

有蓋高杯　2 ～ 6 がこれに相当し、5、6 はほぼ完形である。いずれも杯部の立ち上がりはやや外反気味に内傾し、端部は丸くおさめており、立ち上がりと受け部の谷間に沈線がめぐる。細部の特徴は、2、4、6 が垂直気味に立ち上がり、2、4 は受部と体部の境にも緩い段を有する。脚部は 5 では中央部に 2 条、6 では中央部に 2 条と裾部に形骸化した 1 条の沈線がめぐっており、ともに基本は 2 段透しであるが、5 では 2 方透しの内 1 方で、6 では 3 方透しの内 1 方で透しが中央部を突き抜けて、1 段透し様に仕上げられている。透しの切り込みは粗雑で、杯部底や裾部にも切り込みが突き出す。色調はともに杯部は灰色であるが、脚部は裾部にいくにつれて光沢をもった黒灰色となる。なお、透しを有する高杯脚部片である 8 は、2 ～ 4 のいずれかの有蓋高杯に伴う破片と考えられる。外面色調は光沢をもった暗灰色であり、内面には自然釉が顕著にみとめられる。

無蓋高杯　7 がこれに相当する。ほぼ完形であり、杯部下半には明瞭な 2 本の突線で区画された部分にヘラ状工具による刺突文が施される。脚部は中央部と裾部に 2 条の沈線がめぐり、基本は 2 段 3 方透しであるが、有蓋高杯同様、各透しが中央部を突き抜け、1 段透し様に仕上げられている。外面色調は裾にいくにしたがって光沢を増す灰色であるが、断面は特徴的な赤灰色を呈す。1 段透し様に仕上げられる点は有蓋高杯と類似するが、杯部の明瞭な突線や透しの切り込みがはみ出さない点からは、有蓋高杯よりも丁寧な仕上がりの個体とみなされる。



第 33 図　L- 第 206 号墳　遺物（須恵器）

壷・瓶類　9は壷類に伴うとみられる蓋である。頂部に摘みはなく、内側にはかえりがつく。表面に粘土粒の付着や1.0cm大の黒色粒子もみとめられ、高杯類の胎土と比べると違いが大きい。10は壷または瓶類の口縁部～頸部片であり、頸部には2条の沈線がめぐる。11は長頸壷または瓶類であり、口縁端部が欠損する。12は広口壷または大型瓶類の口縁部片である。

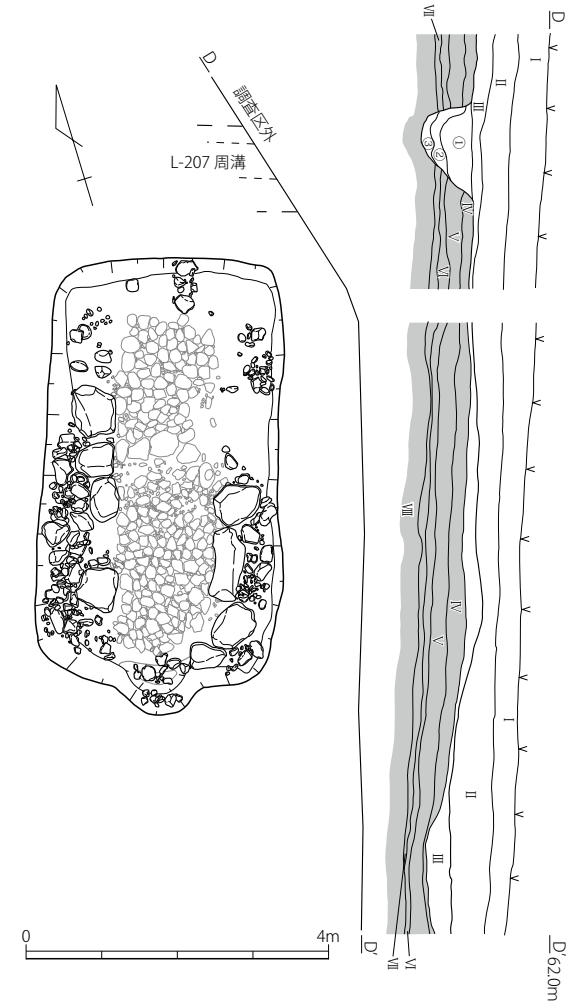
甕　13～15は甕の体部片である。すべて外面には木目に直交して溝を刻んだ板による格子ふうタタキ、内面は同心円文の当て具痕が残る点が共通する。

高杯類は遠江Ⅲ期中葉～後葉（TK43～TK209型式併行期）に位置付けられるが、11の長頸壺または瓶類は、遠江Ⅳ期（飛鳥Ⅱ）以降のものと判断される。いずれも削平された石室入口周辺から出土したものと考えられるが、前者が初葬に、後者は追葬やその後の墳墓祭祀に伴う土器と推定される。またL-第62号墳出土須恵器の項目でも述べたが、高杯類は湖西窯産製品の特徴とは明らかに異なっており、静清平野の窯跡に生産地が求められる可能性がある。

第３節　船津 L- 第 207 号墳

１．古墳の現況

船津 L- 第 207 号墳は春山川を見下ろす東岸の低位段丘上の緩やかな緩斜面上に位置する。古墳は埋没し、現況では茶畑となっていた。農道の拡幅工事に伴い、石室が検出され、未確認の古墳として発見された。18 m北西に L- 第 206 号墳が所在する。



Ⅰ 暗茶褐色土　大淵スコリア微量　中１～２cm 微量　粘性やや強くしまり弱い。
Ⅱ 暗茶褐色土　大淵スコリア少量　大沢スコリア微量　粘性やや強くしまり弱い。
Ⅲ 黒　色　土　大淵スコリア多量　大沢スコリア微量　粘性やや強くしまり強い。
Ⅳ 黒　色　土　大淵スコリアやや多量　白色粒子微量　粘性・しまり共にやや強い。
Ⅴ 黒　色　土　白色粒子やや多量　粘性・しまり共にやや弱い。
Ⅵ 暗茶褐色土　粘性・しまり共にやや強い。
Ⅶ 茶褐色土　粘性・しまり共にやや強い。
Ⅷ 黄褐色土　粘性・しまり共にやや強い。

① 黒　色　土　大淵スコリア多量　大沢スコリア微量　粘性やや強くしまり弱い。
② 黒　色　土　大沢スコリア少量　粘性やや強くしまりやや弱い。
③ 黒　色　土　大沢スコリア少量　粘性やや強くしまりやや弱い。
周溝覆土

第 34 図　L- 第 207 号墳　検出状況図

２．墳丘の構造（第 34・35 図）

墳丘は既に削平されていたため、詳細は不明である。道路切土壁において一部周溝らしき落ち込みを確認した。しかし墳丘盛土と考えられる土層が存在せず、茶畑開墾時か、それ以前に墳丘盛土は流失、削平されたものと判断される。

周溝らしき落ち込みは、Ⅳ層大淵スコリア堆積層から切り込み、Ⅷ層の黄褐色土層まで達していた。東西幅 1.25 m、深さ 0.6 mを測る。この落ち込みの南から石室中央部まで約 3.5 mを測ることから、この落ち込みが周溝であるならば、径 7.0 mほどの円墳が想定される。

３．石室と墓坑の構造（第 35・36 図）

形状・規模　船津 L- 第 207 号墳の石室の遺存状況は悪く、床面、石室基底石の一部を残すのみであった。残存部からは主軸が磁北に対して東に 16.9 度振れ、南西に開口する無袖形横穴式石室と想定される。石室石材は春山川周辺で採取される川原石を用いている。

左側壁は開口部から奥にむかって 2.41 m、右側壁は石室前方に一石、石室中央部から奥壁に向かって 1.80 mほどの石室基底石が残されていた。両壁の基底石が残る石室中央部で石室内法幅 1.29 mを測る。石室長は明らかにならないが、床面の残存長と墓坑から復元すると 5.5 m前後と推測される。平面プランは長方形を呈すものと考えられる。

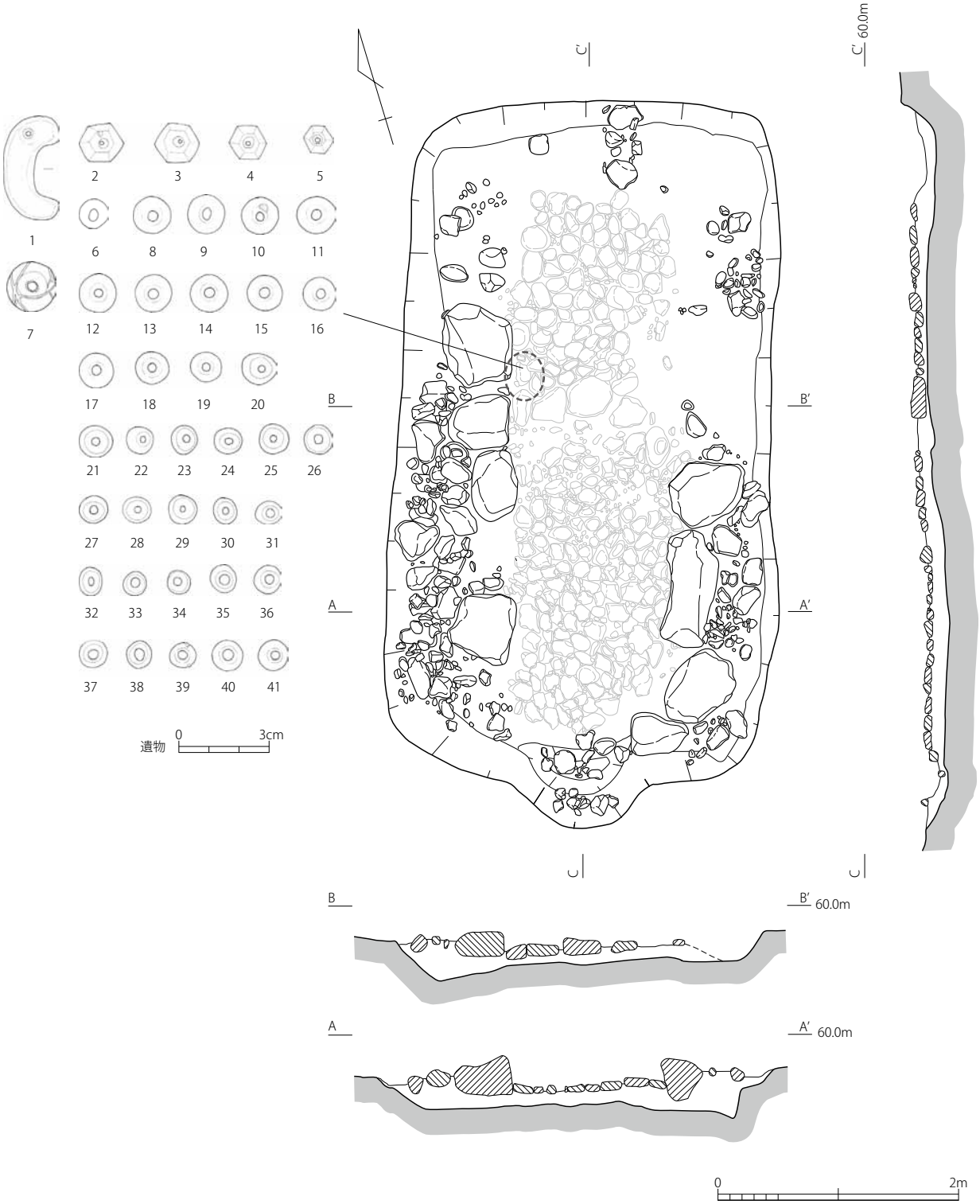
墓坑は竪穴状で、長軸 6.07 m、中央部幅 3.10 mを測る。長方形を呈し、開口部が凸形となる。石室中央部の墓坑底面に抜き取り穴がみられ、屍床仕切石の存在が推測される。

壁面構成　残存する基底石をみると、比較的大型の石材を用い、石室中央付近は石材小口面を、その他は長手面を石室内に向けて設置する。ただし、左側壁開口部付近の基底石は小口面を石室に向け、閉塞部の抜き取り穴に近接させていた。この部位は基底石状を呈しているものと考えられ、框石の存在が推測され、この周囲に散らばる石材は框石を固定させる詰石とも捉えられる。従って本石室は東駿河地域で多くみられる段構造をもつ石室である可能性が考えられる。また、側壁裏には長さ 20

～30cm ほどの角礫を用い、その隙間に 10cm 程度の礫がみられた。側壁を構築する上で側壁を固定するため裏込め石を用いたものと考えられる。

床面　床面は石室中央部を除き、川原石によって石敷きが施されていた。前述のごとく、中央部は墓坑底面の抜き取り穴から屍床仕切石の存在が推測でき、床面も中央部で石敷きの石の大きさに変化がみられる。抜き取り穴の北には 30cm 大の大きさの石を用い、開口部側は 10～15cm 大の川原石を、奥壁側は 20cm 大の川原石を、平坦面を上にして石敷している。

床面断面をみると、抜き取り穴よりも北側で若干、石敷の上面が高くなることから、棺座状に埋葬空間の使い



第 35 図　L- 第 207 号墳　石室平面図図・遺物出土状況図

分けを行っていた可能性が考えられる。

4．遺物出土状況

遺物は装身具である玉類が出土したのみであるが、玉類のバリエーション、量共に比較的豊富であった。

玉類は全て、大型の床石周辺に出土が集中する。

抜き取り穴を境とする埋葬空間の区分けの可能性も併せ、奥壁側が主体的な埋葬場所であった可能性が高い。

5．出土遺物

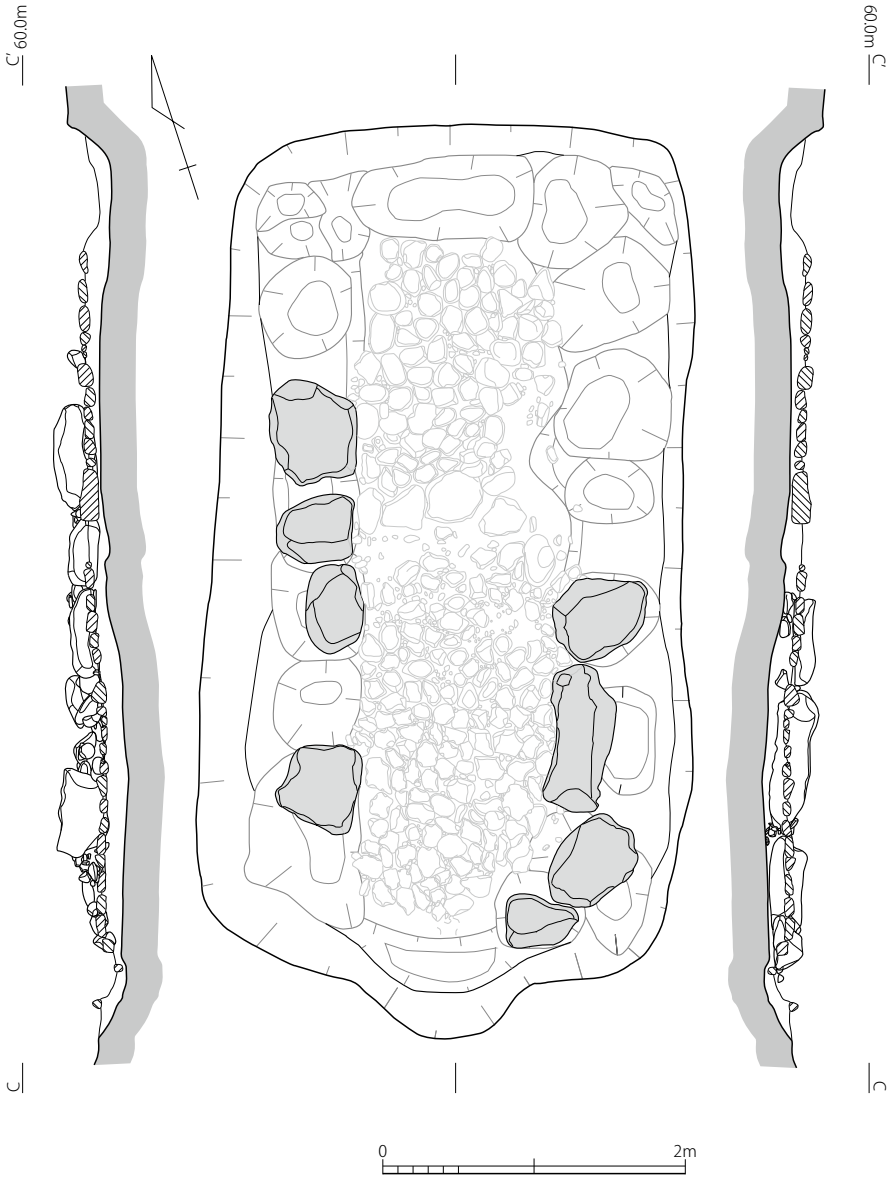
横穴式石室床面から豊富な玉類が出土した。出土した玉類の種類と総数は下記の通りである。

【床面】

装身具（玉類）

瑪瑙製勾玉	1点
水晶製切子玉	4点
碧玉製管玉	1点
蛇紋岩製小玉	8点
線状貼付ガラス玉	1点
ガラス丸玉	12点
ガラス小玉	12点
銅製丸玉	2点

以下、これらの区分をもとに、各遺物の概要や観察結果について報告を行う（注1）。



第36図　L-第207号墳　石室展開図

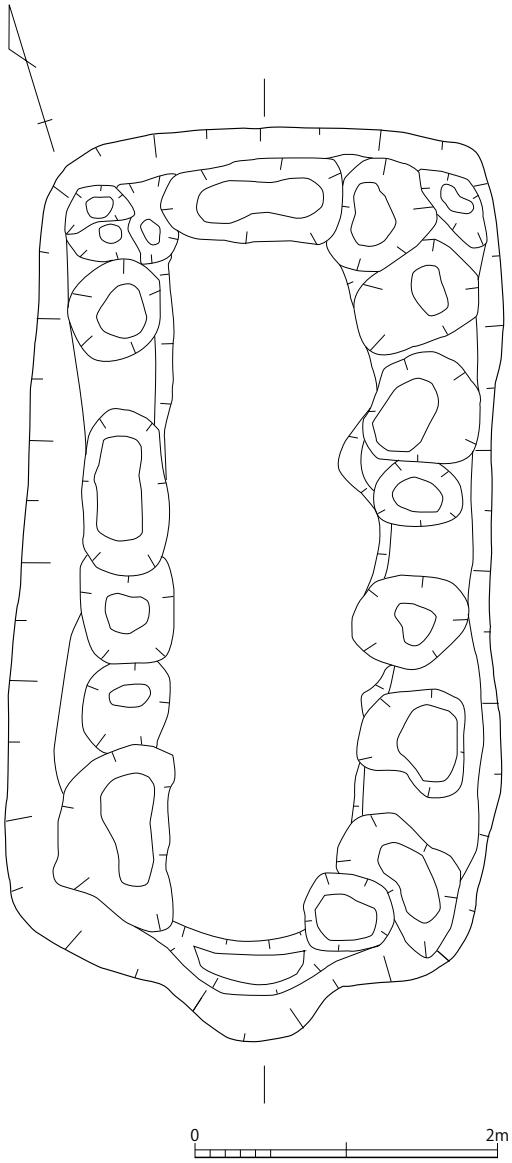
（1）装身具

玉類（第38図）　玉類は石室内から計41点が出土しており、個別の出土状況は不明ながら、いずれもまとまった位置から出土しているようである。

瑪瑙製勾玉　1がこれに相当する。平面形はコの字形に近く、頭部・尾部の端部はやや平たい。片面穿孔であり、反対側は擂鉢状に抉りこまれている。

水晶製切子玉　2～5がこれに相当する。いずれも半透明で六角形を呈し、各辺と側面の中央に稜を有するが、磨耗も目立つ。幅1.10～1.40cm、高さは1.70～1.90cmを測る。すべて片面穿孔である。

碧玉製管玉　6はいわゆる碧玉製の管玉であり、図示した上方からの片面穿孔である。下方が欠損しているが、欠損部には部分的に研磨された円滑な面もみとめられることから、破損後も磨き直して使用されていたものとみられる。



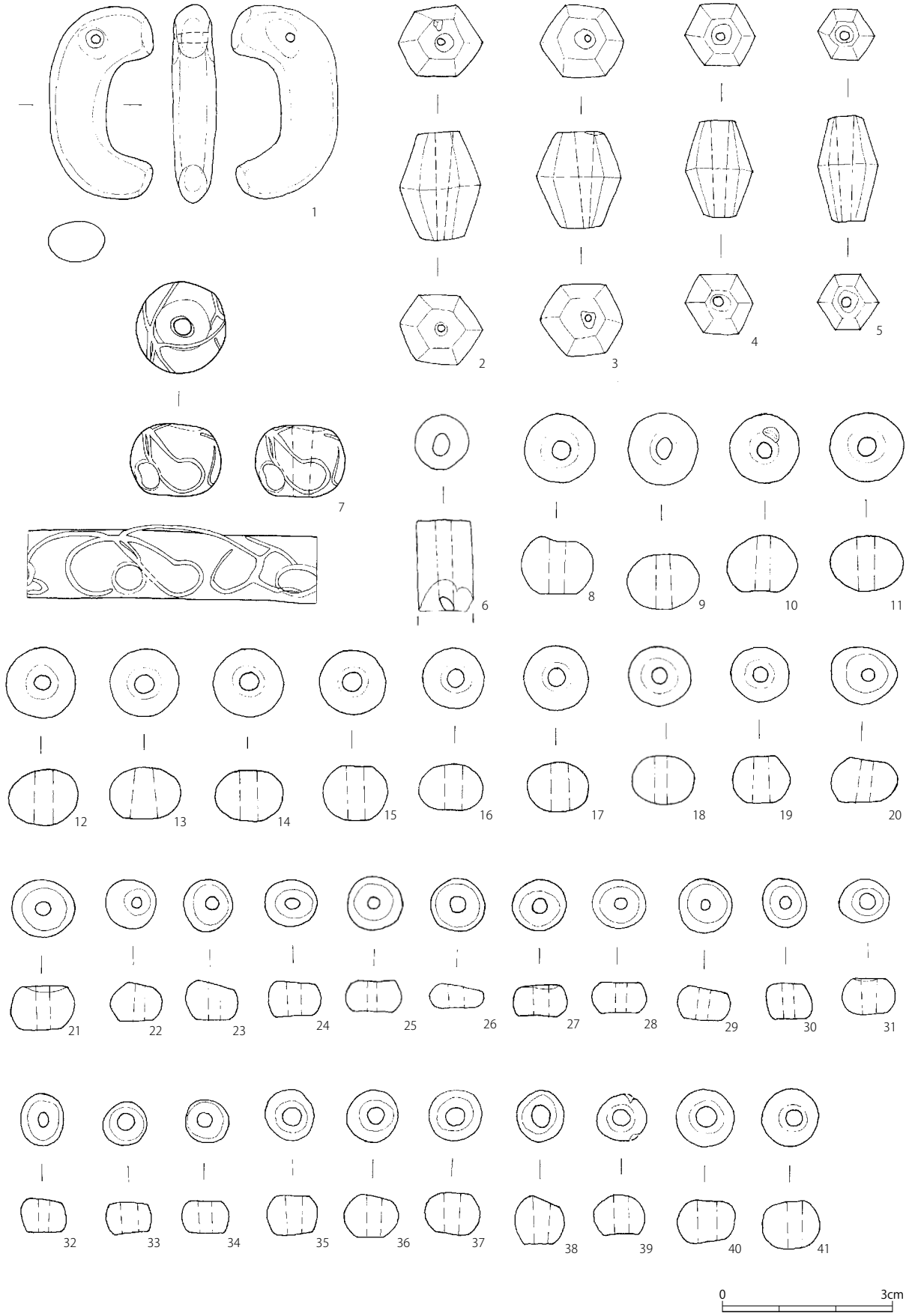
第37図　L-第207号墳　墓坑検出状況図

蛇紋岩製小玉　31、33～39がこれに相当する。法量は直径が0.70～0.90cm、高さが0.60～0.70cmの狭い範囲に集まり、上下の孔径も一定であるが、色調や風化度合いによって細分することが可能である。a類は表面の風化具合が弱く、青黒色不透明を呈するものを指し、孔周囲の調整は、緩やかな陥没がみられるもの（31、33、34）と、平坦に磨かれるもの（35）がある。b類は風化が著しく進行した青黒色不透明と黄橙色不透明のものを指し、孔周囲の調整については、両方に平坦面を有するもの（36～38）、片方のみに陥没を有するもの（39）が存在する。

線状貼付ガラス玉　7がこれに相当する。径1.60cm、高さ1.30cmを測り、濃青色のガラス丸玉の表面に淡黄色ガラスを複数の円弧を描くように線状に貼り付けている。表面には直径0.40～0.60cm程度の円形の窪みが側面に2ヶ所、図示した下面に1ヵ所みとめられており、これらが象嵌された別ガラスの剥離痕であれば、本例は線状貼付斑点文ガラス玉であった可能性がある。その場合、窪みの底部分にも線状の淡黄色ガラスが観察されることから、線状ガラスを貼り付けた跡に斑点文が象嵌されたものと推定される。

ガラス丸玉　通有の単色ガラス玉のなかでも、法量が直径1.00～1.30cm、高さ0.80～1.00cmで、孔に対して円周する微細な筋状の痕跡を外面や孔内面に有し、孔周辺への圧力加工痕も顕著に認められない一群をガラス丸玉とした。8～19がこれに相当し、いずれも巻き付け法による単体製作品と考えられる。色調は濃青色半透明、濃青色不透明、紺色不透明のものに分類できるが、視覚的には法量も含めてよく似通った印象を受ける一群である。

ガラス小玉　それに対し、法量が直径0.80～1.15cm、高さ0.40～0.80cmで、孔の長軸に沿って伸びる気泡の筋を有し、孔の内面や上下端面が平滑な一群をガラス小玉とした。20～30、32がこれに相当し、いずれも引き伸ばし法によって製作されたものと考えられる。色調は淡青色半透明、濃青色半透明、濃青色不透明、紺色半透明、紺色不透明のものに細分される。法量は20、21が丸玉並みに大きいが、それ以外は直径0.80～



第 38 図　L- 第 207 号墳　遺物（玉類）

1.00cm、高さ 0.40 ～ 0.60cm の範囲に凝集する。なお、鋳型法の製品については今回確認することができなかった。

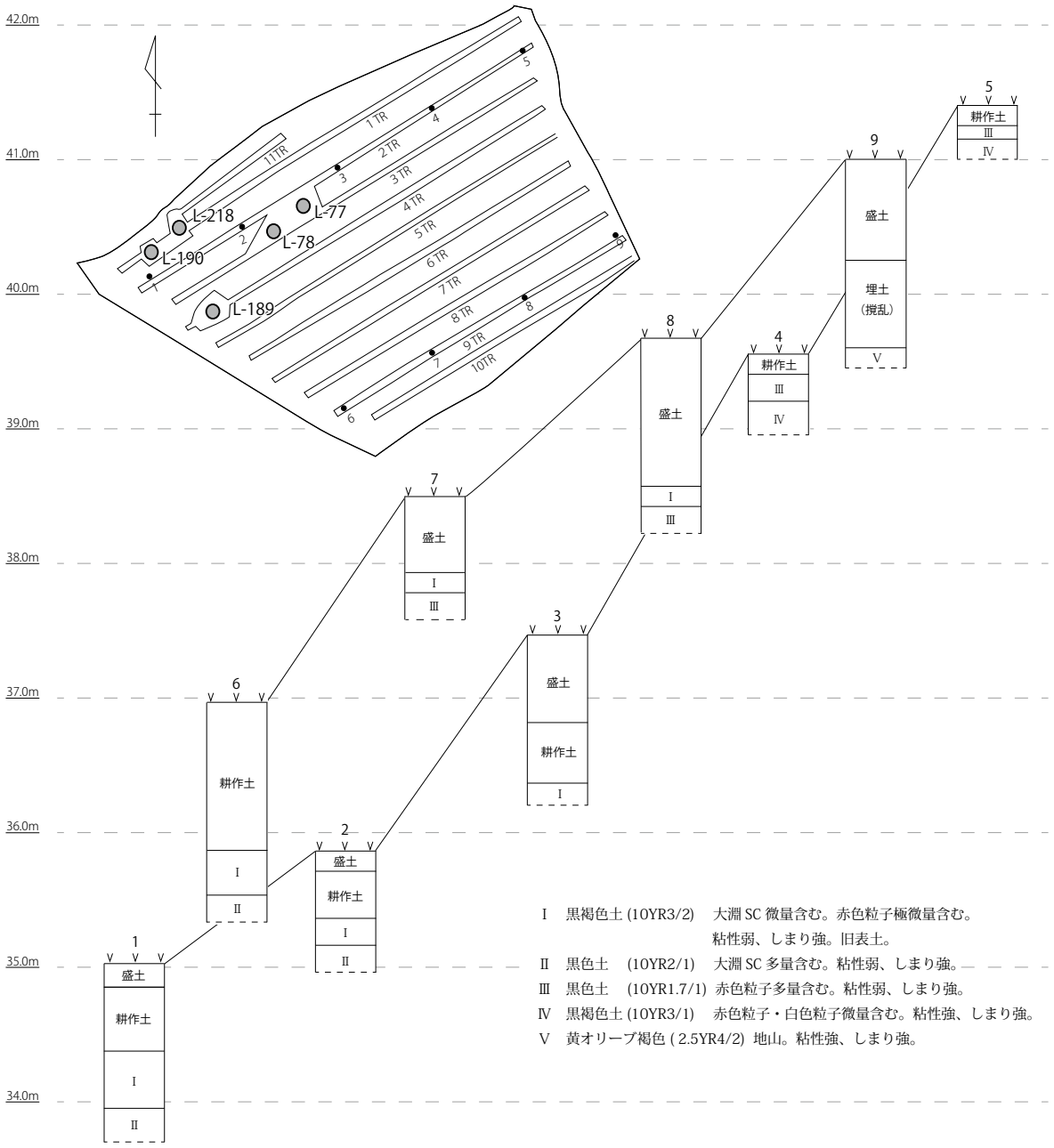
銅製丸玉　40、41 がこれに相当する。法量は直径 0.90 ～ 0.95cm、高さ 0.80 ～ 1.00cm を測り、表面全体に緑青がみとめられる。重量は 40 が 2.35g、41 が 2.61g と大きさの割には重みがあり、X 線撮影はおこなっていないものの、中実であると考えられる。

第４節　船津 L- 第 77・78・189・190・218 号墳

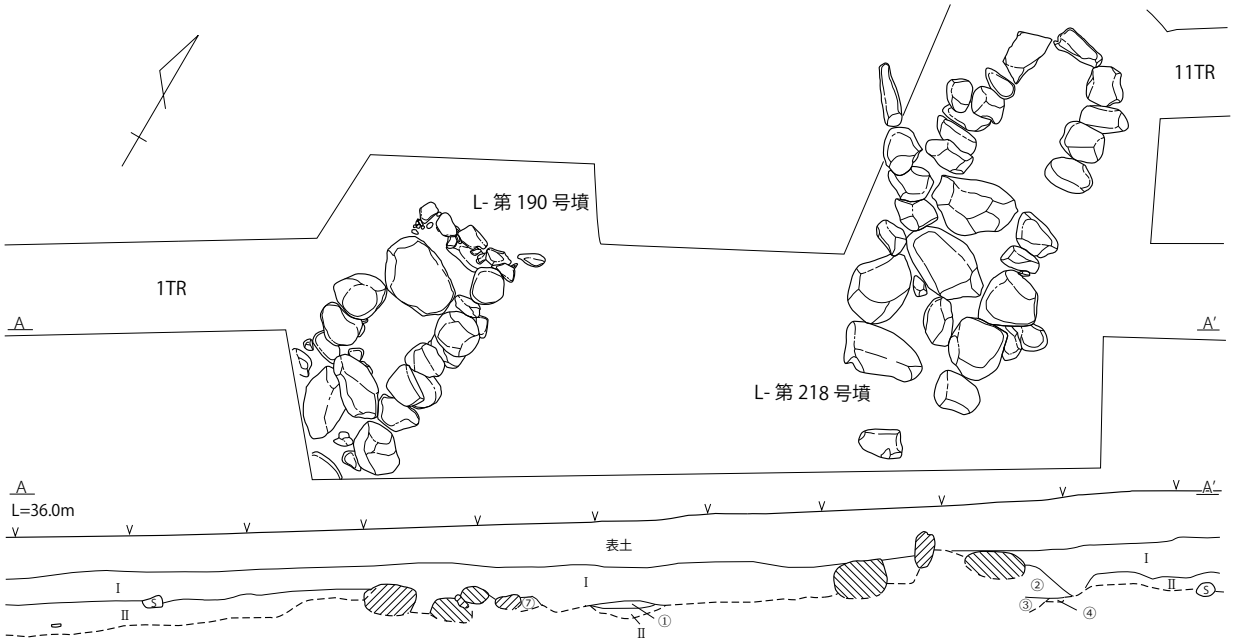
１．古墳の現況（第２図）

平成 11 年に確認調査を実施した結果、５基の石室を確認した。うち、１基は新規発見の古墳であった。古墳は春山川を見下ろす東岸の低位段丘上の緩やかな緩斜面上に位置し、茶畑の造作により石室の一部が露出した状況にあった。北側には径８ｍ、主体部現存長６ｍを測る稲荷塚古墳（L- 第 73 号墳）を始めとして、L- 第 208 ～第 213 号墳と古墳が所在する密集地域といえる。主体部の石材が露出し、墳丘盛土が既に、流出、削平されているものと考えられる。

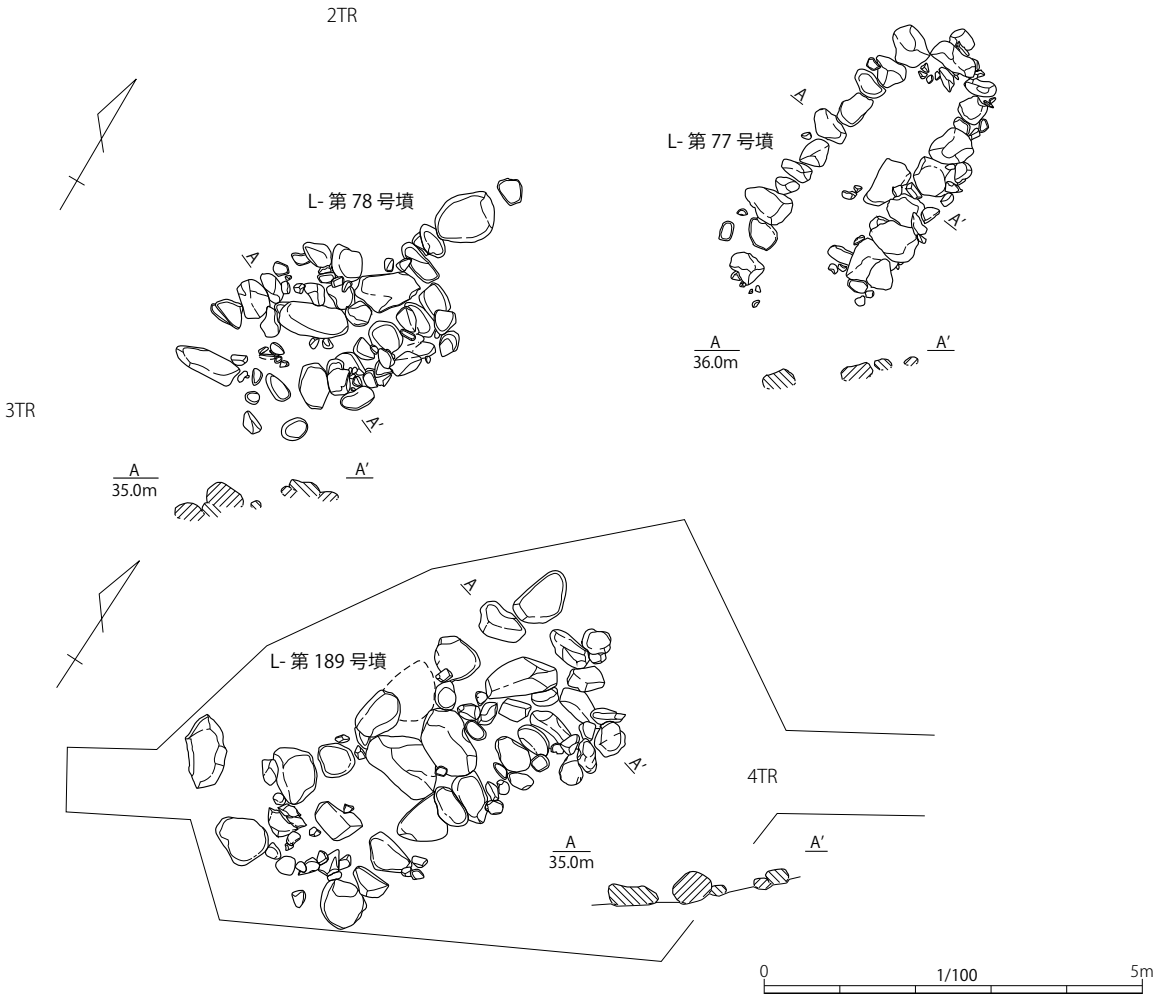
確認調査を行った段階で、事業者との協議によって保存措置が決定していたことから、調査では石室検出のみに留まった。



第 39 図　平成 11 年度　確認調査トレンチ配置図・土層断面図



I　黒褐色土 (10YR3/2)　赤色粒子極微量含む。粘性弱、しまり弱。
II　黒色土　(10YR2/1)　赤色粒子少量含む。発砲 SC を多量含む。粘性あり、しまり弱。
①にぶい黄褐色 (10YR4/3)　赤色粒子微量含む。大淵 SC を少量含む。粘性弱、しまりあり。
②黒褐色土 (10YR2/1)　赤色粒子微量含む。大淵 SC を極微量含む。粘性弱、しまり弱。
③黒色土　(10YR3/1)　赤色粒子微量含む。粘性弱、しまり弱。②より黒い。
④黒色土　(10YR3/1)　暗黄灰土少量混入。粘性弱、しまりあり。



第 40 図　L- 第 190・第 218・第 77・第 78・第 189 号墳　平断面エレベーション図

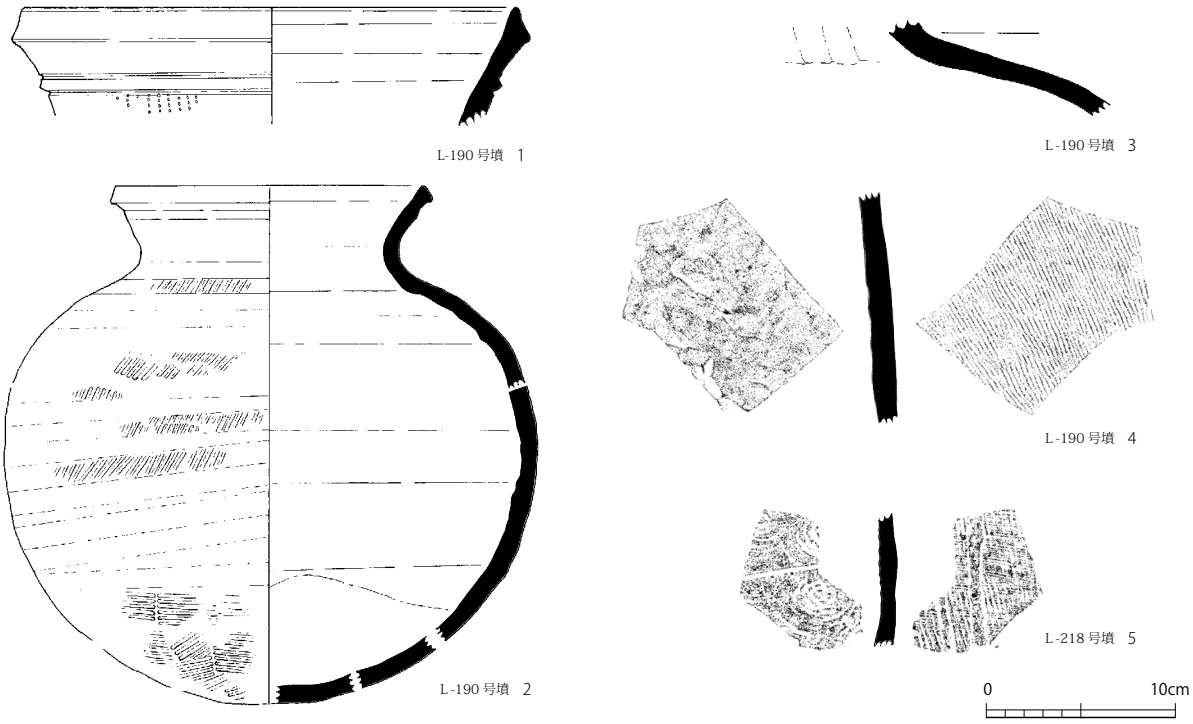
2．古墳の検出状況（第２図・第40図）

調査された５基は一番距離のあるL-第77号墳と第189号墳でも20 m程しか離れず、密集している。特にL-第77号墳と第78 号墳、第190号墳と第218 号墳は互いの距離が６ mと近接していた。

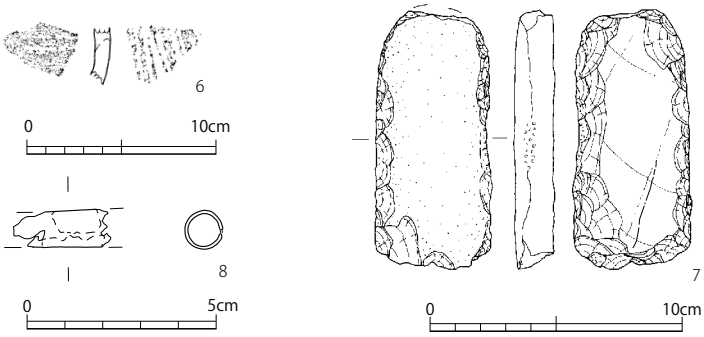
L-第77号墳　調査区の東側に位置する。主体部と考えられる石列で現存長3.7 m、幅1.75 mを測る。石材は春山川で採取される川原石である。平成８年度に行われた調査事例から無袖形横穴式石室と想定される。推測される主軸方位は磁北に対して東に17度振れ、石室は南西に開口するものと考えられる。

L-第78号墳　調査区東側に位置する。６ m北東にはL-第77号墳が近接する。主体部と考えられる石列が確認され、現存長4.22 m、幅最大で1.30 mを測る。石材は春山川で採取される川原石である。石室の崩れが大きいため、主軸方位の推測は困難である。

L-第189号墳　調査区南端に位置する。近接する古墳は確認されない。主体部と考えられる石列は現存長5.80 m、幅最大で2.7 mを測る。今回の調査中、最大の規模を持つ。石材は春山川で採取される川原石である。周辺の古墳と同様、無袖形横穴式石室と推測され、磁北に対して東に26度触れ、南西に開口する主軸方位が想



第41図　L-第190・L-第218号墳　遺物（須恵器）



第42図　古墳に伴わない遺物

定される。

L-第190号墳　調査区の南西端に位置する。5 m北東にL-第218 号墳が近接する。主体部と考えられる石列は現存長約3.50 m、最大幅1.96 mを測る。石材は春山川で採取される川原石である。周辺の古墳と同様、無袖形横穴式石室と推測され、磁北に対して6度東に振れ、南西に開口する主軸方位が想定される。

L-第218号墳　調査区の南西に位置する。5 m南東にL-第190号墳が近接する。主体部と考えられる石列は現存長5.20 m、幅2.45 mを測る。石材は春山川で採取される川原石である。周辺の古墳と同様、無袖形横穴式石室と推測され、磁北に対して東に2度振れ、南西に開口する主軸方位が想定される。

3．出土遺物

試掘確認調査においてコンテナ2箱分程度の遺物が出土し、そのうちの古墳に伴う遺物を5点、それ以外の時期の遺物を3点図示した。

（1）古墳に伴う遺物

須恵器（第42図）　1～4はL-第190号墳から出土した。1は大型甕の口縁部であり、断面三角形を呈する突線下の区画帯には、櫛歯状工具による列点刺突文が施される。2は広口壷であり、逆ハの字状に広がる頸部と、球胴の体部を有する。体部外面の平行タタキの痕は、ヨコナデによって処理される。内面も当て具痕があったとみられるが、丁寧なヨコナデによってその痕跡をみることができない。3は甕類の肩部片。4は甕の胴部片であり、外面のみ平行タタキが残る。以上の資料は胎土や内面調整の特徴から、湖西窯製品とみられる。

一方、L-第218号墳から出土した5の甕片は、内外面ともに光沢のある黒味がかった色調を呈し、L-第62号墳、第206号墳出土の須恵器同様、静清平野の窯跡の製品と考えられる。

（2）その他の遺物

6、7はL-第218号墳付近から出土した縄文時代の遺物である。6は縄文土器であり、外面に沈線文がみとめられる。7は打製石斧であり、短冊形を呈する。石材は中粒砂岩とみられる。8はL-第190号墳付近から出土した銅製品であり、厚さ0.5mmほどの銅板を筒状に巻いて成形される。近世の煙管の一部とみられる。

注

（1）玉類の評価に際しては、戸根比呂子氏、鈴木一有氏より多くの御教示を頂いた。

第Ⅳ章　後論

第１節　船津 L- 第 62 号墳の馬具について　　大谷宏治

１　船津 L- 第 62 号墳出土馬具の概要

船津 L- 第 62 号墳(以下､本墳あるいは 62 号墳とする)からは､銅製帯金具付鉸具造立聞環状鏡板付轡１組（１。註１。以下、環状鏡板付轡は「円環轡」とする)、辻金具２種３点（２～４、13。13 の銅鋲は２に伴う可能性大)、鉸具２点（31･32)、しおで座金具･鉸具２点分（27～29、註２)、腹帯金具と想定する金具１点（30)、鐙吊金具２点分（35・36 と 37、註３)、銅製帯金具８点(５～12、５鋲のもの３点、２鋲のもの５点)、鉄製帯金具 13 点（14～26、長方形２鋲４点、隅丸方形２鋲３点、その他破片６点）が出土している。鐙吊金具は通常左右対称であることから、同様の構造を有する鐙を利用することが多いが、62 号墳から出土した鐙吊金具は兵庫鎖が３連（37、鐙吊金具Ａとする）と２連のもの(35・36、鐙吊金具Ｂとする）が確認でき、本来は別々の馬具に伴う鐙吊金具であったものが、片方ずつ壊れたため残ったものを組合せたか、あるいは鐙が２組分副葬されていた可能性がある。ただし、鐙のみが２組副葬されたと考え難く、馬具が２組、特に轡と鞍と鐙が副葬されたとした場合、轡の帯金具と辻金具、帯金具は材質や鋲が同様であることから１組の馬具に伴うと判断できること、鐙の片方のみを残して轡・辻金具などの部品すべてを持ち出すことは難しいと想定できるため、鐙は別種のものを１組に組合せたと想定し、当初から副葬された馬具は１組のみとする解釈のほうの妥当性が高い。

なお、62 号墳は面繋と鞍・鐙を構成する馬具（金具）のみの出土であり、雲珠・杏葉などの尻繋を構成する馬具は出土していない。

２　船津 L- 第 62 号墳出土馬具の編年的位置

轡　鉸具造立聞円環轡は鏡板の大きさと刺金の形状によって相対的な位置づけを行うことができる（岡安 1984、鈴木 2008)。62 号墳例は、蕨手状刺金で、鏡板の全長 6.3 ～ 6.5㎝、幅 5.2 ～ 5.5㎝であり、岡安光彦氏が TK217 型式期の標準とした全長 7.2㎝、幅 6.4㎝を下回ることから、TK217 型式期でも新しい時期かあ

第２表　古墳時代後期～終末期の板状Ｘ字脚辻金具の類例（板状十字脚辻金具を含む）

古墳名	所在地	材質	X字脚			十字脚			轡	文献
			個数	鋲数	中央部	個数	鋲数	中央部		
羽山１号横穴墓	福島県南相馬市	金銅装	3	3	◆	-	-	-	鉸具造立聞円環轡	横須賀 2008
勿来金冠塚古墳	福島県いわき市	鉄製	-	-	-	2	3	●	大型矩形立聞円環轡	横須賀 2006
観音塚古墳	群馬県高崎市	銅地鉄透板被	２種３	3	菱形	-	-	-	(鹿角鑣轡)	高崎市 1992
上毛製材内古墳	群馬県東吾妻町	(未確認)	1	3	◆	-	-	-	不明	群馬県 1996
蟹沼東 31 号墳	群馬県伊勢崎市	鉄製	1?	3	◆・●	1	3	◆	鉸具造立聞円環轡	群馬県 1996
奥原 13 号墳	群馬県高崎市	金銅装	-	-	-	1	2+	●	不明	群馬県 1996
上横俵Ｍ４号墳	群馬県前橋市	(未確認)	1?	2+	●	1	3	●	大型矩形立聞円環轡	群馬県 1996
金鈴塚古墳	千葉県木更津市	金銅装	2	3	◆	1	3	□	花形鏡板付轡	宮代 1997
芝宮遺跡	長野県佐久市	鉄製	-	-	-	1	3	●	不明	長野県 1999
船津Ｌ 62 号墳	静岡県富士市	銅製	1	3	●	2	2	●	鉸具造立聞円環轡	本書
賤機山古墳	静岡県静岡市	金銅装	1	3	◆	2	3	●	花形・円環轡ほか	川江 1992
才良吉田谷１号墳	三重県伊賀市	金銅装	-	-	-	2	3	□	不明	三重県 2003
桃谷古墳	京都府京丹後市	金銅装	1	3	◆	1	3	□	不明	京都府 1961
鳥木横穴墓	島根県安来市	鉄地銀装	2	3	◆	4	3	□	花形鏡板付轡	宮代 1997
向山１号墳	島根県松江市	金銅装	1	1?	◆	-	-	-	不明	八雲立つ 1996
山下古墳	山口県	(未確認)								宮代 1997
柏原Ａ２号墳	福岡県福岡市	金銅装？	-	-	-	2	3	○	円環轡	福岡市 1986
三沢 17 号墳	福岡県小郡市	鉄製	２種４	3	◆・●	2	3	□	鉄製渦巻文鏡板付轡	小郡市 1990
高下古墳	長崎県国見町	鉄製銀張	-	-	-	1	2	●	円環轡	国見町 1959

※円環轡＝環状鏡板付轡　　□＝方形　◆＝菱形　●＝円形

るいはそれ以降に位置づけることができる可能性が高い（岡安 1984・85）。大きさは長泉町原分古墳出土２号轡に近いことから、鈴木一有氏の編年（鈴木 2008）を参考にすると、当古墳例は蕨手刺金系列で、飛鳥Ⅱ～Ⅲ期に位置づけられる可能性が高い。

辻金具　辻金具は宮代栄一氏（宮代 1997）による「脚をＸ字状に配置し、中央に隆起を持つ板状辻金具」（以下、Ｘ字脚板状辻金具とする）１点と、脚を十字状に配置し、「中央部に隆起を持つ板状辻金具」（以下、十字脚板状辻金具。なお、Ｘ字脚、十字脚を総称する場合は板状辻金具とする）２点の合計３点である。３点ともに銅製・銅鋲で、金銅装や銀装は施されていない。また、板状でその中央を半球形に造る意匠は、辻金具３点が同じ馬装に伴うと想定するのに十分な共通点である。

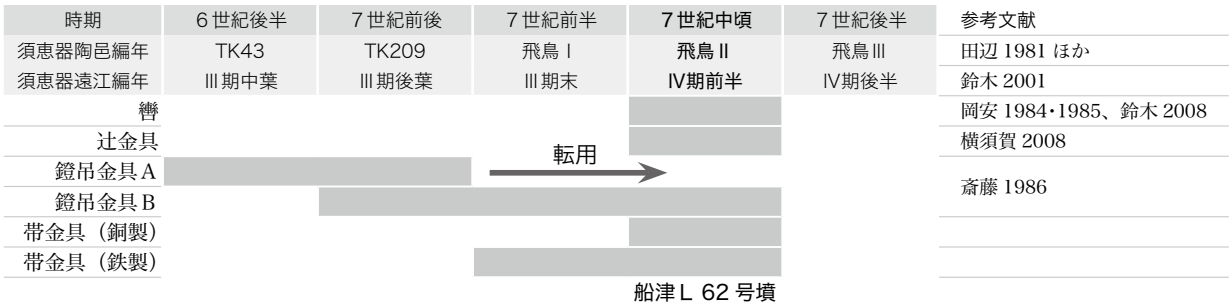
Ｘ字脚板状辻金具は、千葉県金鈴塚古墳をはじめとする古墳から出土しており（第１表）、TK209 型式以降に用いられた辻金具である（横須賀 2008）。福島県羽山１号横穴墓出土馬具の検討を行った横須賀倫達氏は中央の突起の形状から方形突起＝Ａ類、円形突起＝Ｂ類に区分し、Ａ類からＢ類へ変遷したとした。Ａ類はおおむね TK209 型式期、Ｂ類は TK217 型式期以降に位置づけている（横須賀 2008、註４）。62 号墳例は円形突起であることから TK217 型式期に位置づけることができる。また、横須賀氏の編年図をみると、十字脚板状辻金具では中央部が円形で、長崎県高下古墳出土の脚の鋲数が２鋲のものを新しく位置づけている。62 号墳の板状十字脚辻金具は２鋲であることから、高下古墳（飛鳥Ⅱ～Ⅲ期）と同時期に位置づけられる可能性が高い。

また、銅製辻金具の類例は少ないと想定されるが、装飾付大刀でも銅製刀装具が目立つようになるのは、TK217 型式期以降の可能性が高く（註５）、銅を主体的に利用した製品という観点からみれば、やはり TK217 型式期以降で、轡と同時期としても差し支えない。

鐙吊金具　62 号墳出土の鐙は出土した金具から木製壺鐙に鐙吊金具が装着されるものである。鐙吊金具は鉸具の特徴、兵庫鎖の連数、兵庫鎖１連の全長が相違することから、２種類確認できる。兵庫鎖が３連のもの（鐙吊金具Ａ）と２連のもの（鐙吊金具Ｂ）である。斎藤弘氏の研究によれば、兵庫鎖３連のものが氏の「木心三角錐形壺鐙Ｄ式（三Ｄ式）」、２連のものが「木心三角錐形壺鐙Ｅ式（三Ｅ式）」に該当する。前者には、奈良県烏土塚古墳例等の類例があり、Ⅲ期（TK43 ～ TK209 型式併行期）に位置づけている。一方、後者は、栃木県狼塚古墳等の類例を挙げ、Ⅳ～Ⅴ期（TK209 ～ TK217 型式併行期）に位置づけている（斎藤 1986）。62 号墳例も３連が TK43 ～ TK209 型式期、２連が TK209 ～ TK217 型式期（飛鳥ⅠかⅡ期）に位置づけられる可能性が高い。

帯金具　銅製帯金具については、材質や銅鋲が辻金具のものと類似することから、辻金具と同時期として認定できる可能性が高い。板状で５鋲打ち込まれた帯金具は少なく、上述した十字脚板状辻金具が出土した高下古墳で出土しており、辻金具と同様高下古墳と同時期である飛鳥Ⅱ～Ⅲ期に位置づけられる可能性が高い。また、板状辻金具が出土した群馬県上横俵Ｍ４号墳でも出土しており、この板状辻金具の中央が円形であることから TK217 型式期以降に位置づけることができ、飛鳥Ⅱ期に位置づけられるであろう。したがって、５鋲の辻金具は飛鳥Ⅱ期に位置づけることができる。これ以外の銅製帯金具は材質・鋲ともに同巧であり、５鋲のものと同時期に位置づけることができる。鉄製帯金具についても一部銅鋲が使われたものがあることから、銅製帯金具と同時期と考えてよい。

馬具の編年的位置　馬装を構成するそれぞれの部品の



第 43 図　馬具の編年的位置づけ（鈴木 2008 を参照して作成）

編年的位置づけを第１図にまとめた。轡・辻金具・帯金具・鐙吊金具ＢなどTK217型式期後半、飛鳥Ⅱ期に編年的位置づけが重なることから、本古墳の馬装の主体的な時期は飛鳥Ⅱ期（遠江編年Ⅳ期前半）、７世紀中ごろに位置づけられる可能性が高い。一方で、鐙吊金具Ａは、転用・再利用され、上記馬装に伴った可能性が高いが、もし別の馬具が副葬されていたと想定するならば、TK209型式期（遠江Ⅲ期後葉）、７世紀初頭に位置づけるのが妥当であろう。

３　帯金具付鉸具造立聞環状鏡板付轡について

（１）類例

帯金具を伴う鉸具造立聞円環轡は、第２表に示したように、本墳のほかに福島県南相馬市羽山１号横穴墓、埼玉県深谷市四十坂遺跡151号土坑（馬埋葬土坑）、静岡県菊川市西宮浦１号横穴墓、島根県岩美郡岩美町小畑３号墳から出土しており、管見で日本国内のみで総数５例出土している。

（２）特徴と編年

ここでは、轡の特徴、馬具の組合せ関係、編年的位置をみておく。

轡の位置づけ　鉸具造立聞円環轡は、大きさが大きいものから小さいものへ変化することが想定され、上述したように全長7.2㎝、環幅6.4㎝がTK217併行期の規格的な大きさとされている（岡安1984・85）。第２表に示したように、この規格的な大きさとの比較により羽山１号横穴墓例、四十坂遺跡151号土坑例、小畑３号墳例はそれより大きく、西宮浦１号横穴墓例及び62号墳例はそれより小さい。大きさから判断して、羽山１号横穴墓例・四十坂例（註６）→小畑３号墳例（TK209型式期）→西宮浦１号横穴墓例・62号墳例（飛鳥Ⅱ期）に位置づけることができる。鉸具造立聞円環轡のもう一つの編年指標となる頸部の形状からみても、前３者の鉸具の頸部がやや長く、また鉸具の頭部と頸部を明確に認識できる一方で、後２者は頸部が短い上、頭部と頸部の境が不明瞭であることからも、前者を古く、後者を新しく位置づけるのは妥当である（第２図）。

なお、四十坂151号土坑例は二条線捩じり引手で、鉸具の刺金も唯一蕨手形ではなくＴ字形（鈴木2008）である。鈴木一有氏が区分した鉸具造立聞円環轡のＴ字形刺金系列と蕨手刺金系列の二系列ともに帯金具が装着されており、刺金の造りは異なるが、帯金具が採用される点からすると、鉸具造立聞円環轡の刺金の形状区分による二系列は、生産工房が違ったとしても近しい関係にあった可能性が高い。

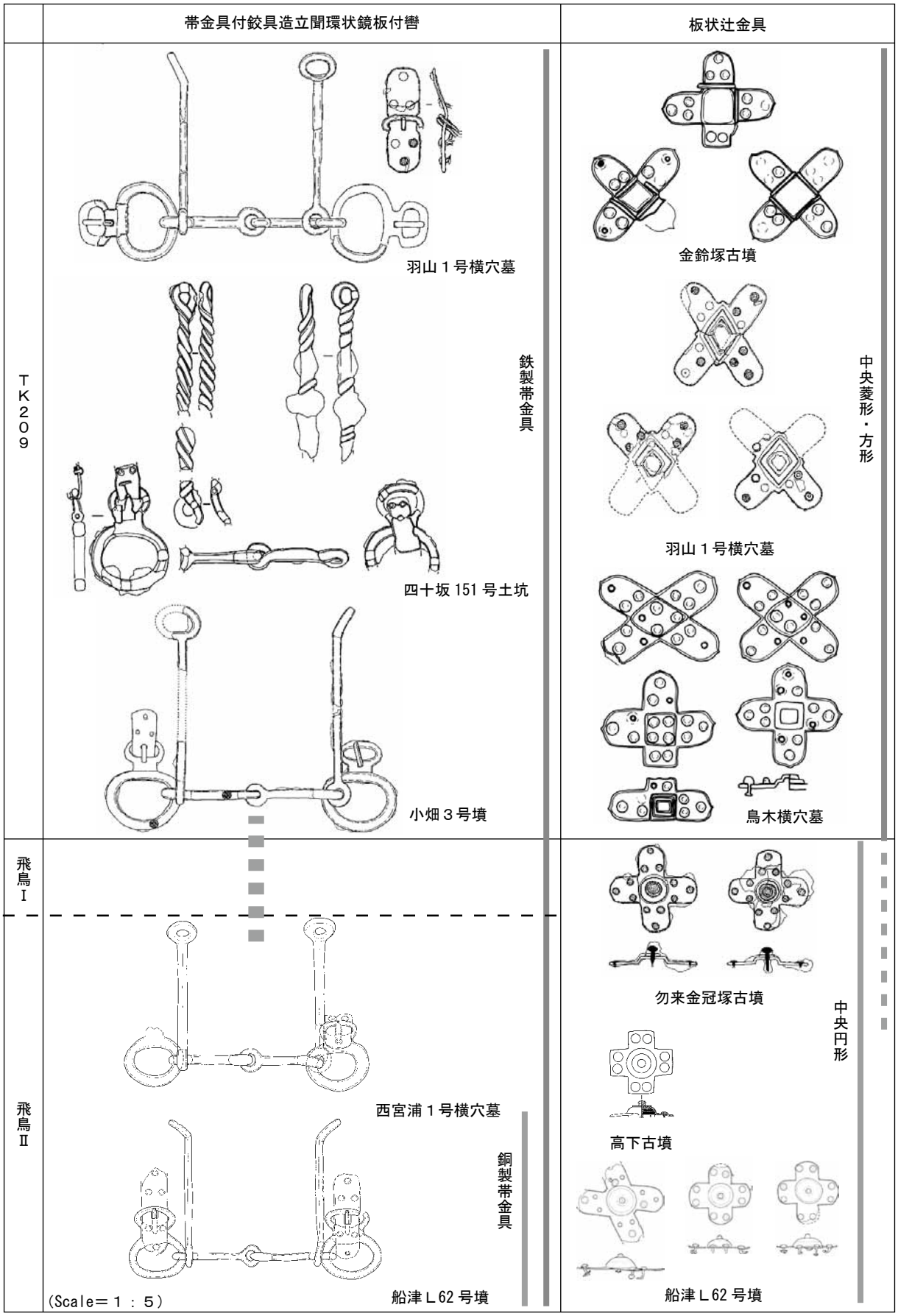
帯金具の特徴　５例ともに、刺金に取り付ける長方形の透かしの上下に３鋲ずつ－刺金近くに２鋲、外側に１鋲を三角形になるように－設置している。西宮浦例も刺金側に２鋲を確認できることから本来は３鋲であった可能性が高い。この点は共通性が高い。鏡板の形状と大きさから判断すると、第２図に示すように羽山１号横穴墓例・四十坂151号土坑例→小畑３号墳例→西宮浦１号横穴墓例・62号墳例と時期差を想定できる。西宮浦１号横穴墓例と62号墓例はほぼ同時期に位置づけられるが、前者が古い段階の様相をもつ帯金具を使用するのに対し、後者は帯金具が銅製に材質転換されていることを評価すれば、後者の方が新しく位置づけられる可能性がある。

また、この編年的位置づけが正しければ、少なくともTK209～飛鳥Ⅱの３時期に亙って、この帯金具を伴う馬具が生産されていたと判断できる。特殊な馬具が長期にわたって少数ずつ生産されていた可能性が高い。

帯金具付鉸具造立聞環状鏡板付轡を伴う馬装　馬具の

第３表　帯金具付鉸具造立聞環状鏡板付轡の類例

古墳名	所在地	墳形	帯金具			轡		その他の馬具	文献
			本体	鋲	鋲数	全長	幅		
羽山１号横穴墓	福島県南相馬市	横穴墓	鉄製	錫装	3+3	8.8±	7	鉄製Ｘ字脚辻金具３・鉄製帯金具３・鉸具１	横須賀2008
四十坂151号土坑	埼玉県深谷市	土坑	鉄製	鉄製？	３＋？	9.3	7	鉸具３	岡部町2003
船津Ｌ62号墳	静岡県富士市	円墳	銅製	銅製	３＋３	6.6	5.6	銅製辻金具３・銅製帯金具・鉄製帯金具・鉸具・鐙吊金具	本書
西宮浦１号横穴墓	静岡県菊川市	横穴墓	鉄製	錫製？	３＋？	6.6	5.6	鐙吊金具	明星大1984
小畑３号墳	鳥取県岩美町	方墳	鉄製	鉄製？	３＋？	8.1	6.6	十字文透心葉形鏡板付轡１・しおで４・障泥金具１・鉸具４、鐙吊金具１・帯金具11	鳥取県2002



第 44 図　帯金具付鈹具造立聞環状鏡板付轡の変遷

組合せ（第３図）は、羽山１号横穴墓でＸ字脚板状辻金具が出土しており、帯金具の形状は異なるものの、62号墳と関連性が高い。したがって、時期は須恵器にして１型式以上隔たるものの、同じような馬装で構成されていた可能性が高いといえよう。

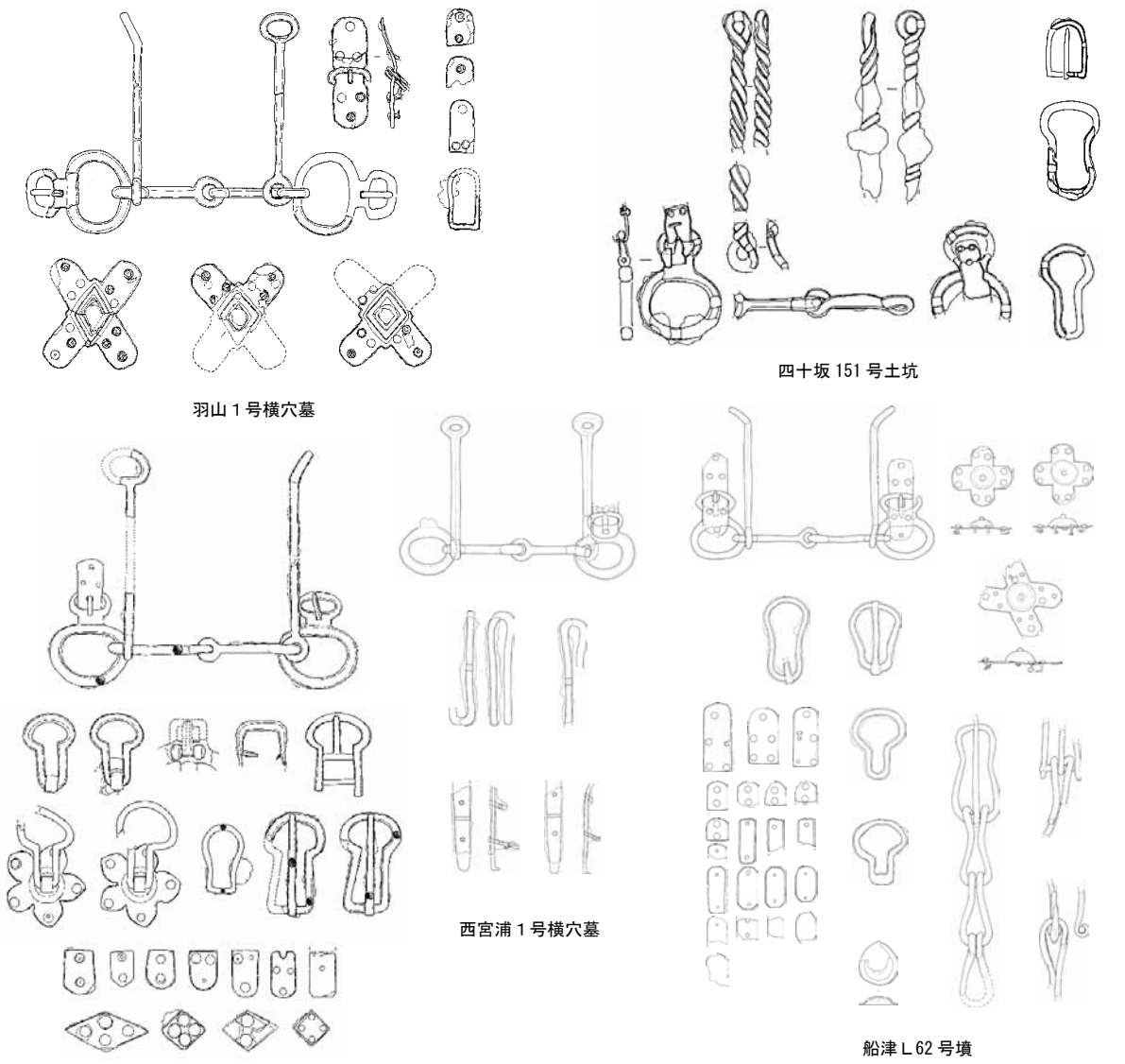
一方、羽山１号横穴墓以外の３者とは、馬装の組合せ自体の共通性は少ない（註７）。

また、小畑３号墳例の馬装の組合せが不明確であるが、障泥金具は十字文透心葉形鏡板付轡に伴う可能性が高い。つまり、帯金具付鉸具造立聞円環轡が出土した５古墳ともに尻繋にともなう雲珠・杏葉は出土していないという共通点が確認できる（註８）。帯金具付鉸具造立聞円環轡に伴う尻繋は革帯のみで構成されていた可能性が高く、面繋・鞍・鐙のみに金具が装着された馬装、尻繋に金属製の金具を用いないという意味で、いわゆる「面繋馬装」（宮代 1997）であった可能性が高い。

４　船津 L- 第 62 号墳の馬装の復元

（１）船津 L- 第 62 号墳の馬装

面繋･鞍で構成される馬装　上述したように本墳では、轡と鐙吊金具、しおで、帯金具が出土しているが、杏葉･雲珠は出土していない。したがって、本墳の馬装を復元すると面繋と、金銅装のしおでが装着された木製鞍（本体は消失）、そして鉄製吊金具で吊られる木製壺鐙（本



第 45 図　帯金具付鉸具造立聞環状鏡板付轡に伴う馬具

体は消失）で構成され、尻繋は金属製の金具は取り付けられず、革帯だけが尻尾まで伸びていただけであった可能性が高い。同じような材質の雲珠と杏葉が存在したが盗掘などで失われたと考えがちであるが、宮代栄一氏は、面繋馬装は鉄製円環轡に基本的に多く、逆にいえば鉄製円環轡は杏葉・雲珠を持たない馬装が多い傾向にあることを指摘しており（宮代 1997）、本墳例も尻繋は当初から金属製金具を伴わないものであった可能性が高い。

他の帯金具を伴う鈒具造立聞円環轡も 62 号墳と同様に尻繋には金属製金具を伴わない馬装であった可能性が高い。

帯金具・鈒具の装着部位　轡・辻金具・しおで金具以外の馬具について、どこに装着されていたかを想定しておきたい。ただし、場所を特定できないため、復元図を作成することは控えた。

銅製帯金具は轡と辻金具の東側でしおで金具とともに出土していることから面繋あるいは胸繋のどちらかに銅製帯金具を多用した可能性が高いが、出土状況からどのように装着されていたかを復元することは難しい。面繋であるとすれば、項革・額革・頬革に用いられた可能性が高い。胸繋であるとすれば、しおでを通した革帯を固定する、その両方から来る革帯を中央で固定するものと、革帯に飾りとして装飾されるものが想定される。

一方で、鉄製帯金具は、轡・辻金具の西側で出土しており、腹帯金具と想定する金具や鈒具などが近くで出土していることから腹帯金具あるいは胸繋金具に使用された可能性がある。

（2）面繋構造の復元

X字脚板状辻金具は、基本的に２点１組で、面繋（頬革）の左右に付けられることが多いとされる（宮代 1997）が、筆者が集成した板状X字脚板状辻金具の組合せをみると、羽山１号横穴墓例をはじめ必ずしも２点１組で用いられているわけではないことがわかる（第１表）ため後述する復元案Bだけでは妥当性が低いことから、宮代栄一氏の面繋構造復元を参考にしながら、62 号墳の面繋構造について復元案を２案（A・B案）示した（第４図）。

また、62 号墳は宮代栄一氏による「辻金具を用いる馬装」である（宮代 1997）。復元案Aが「単条系」に、復元案Bが「複条系」に位置づけることができる。以下に、それぞれの復元案について述べるとともに、両者の課題についても記載しておきたい。

なお、筆者は 62 号墳の副葬品が盗掘された可能性が低いこと、羽山１号横穴墓の板状辻金具が３点であることを参考にして、復元案Aの可能性が高いと想定する。

復元案A　出土した３点の辻金具と轡のみで構成されていた場合。

頬革・咽喉革と額革・項革（註９）の交点に十字脚板状辻金具を配し、額革の額中央部分にX字脚板状辻金具を配する（註 10）。項革の耳の後ろあるいは中央から額革の中央に向かって革帯を伸ばしてX字脚板状辻金具と繋ぐ方法。この場合、項革から伸びる革帯は少なくともX字脚板状辻金具の脚部先端まで伸びていた可能性が高く、額から鼻先に向かって伸びていた可能性がある。この面繋構造は宮代栄一氏の「単条系」で「辻金具を３点伴う馬装」にあたる（宮代 1997）。

帯金具付鈒具造立聞円環轡とX字脚板状辻金具が出土している羽山１号横穴墓で辻金具が３点であり、この面繋構造が採用された可能性がある。

この復元案の課題は、X字脚板状辻金具の額革が装着されない２脚の利用方法である。左右どちらかの革帯を無理な状態で辻金具に留める必要があることと、項革から革帯を額革へ斜めに伸ばす必要があること、項革と額帯を繋ぐ革帯に帯金具が使用されていたと想定する必要があることである（註 11）。

復元案B　X字脚板状辻金具１点が失われたと想定する場合で、轡＋十字脚板状辻金具２点＋X字脚板状辻金具２点で構成されていたと想定する場合。

鼻革・顎革と頬帯の交点に十字脚板状辻金具を配し、頬革・項革と額革・咽喉革の交点にX字脚板状辻金具を配する方法。復元案Aよりも、革帯の配置が無理なく行えた可能性が高い。宮代栄一氏の「複条系（鼻革１本）」で「辻金具４点装着」にあたる（宮代 1997）。

この復元案の課題は、本墳同様帯金具付鈒具造立聞円環轡とX字脚板状辻金具が出土している羽山１号横穴墓で辻金具が３点であり、復元案A方法が想定されること、X字脚板状辻金具がもう１点確実に副葬されていた保証がないこと、である。

5　船津 L- 第 62 号墳の馬具の意義

（1）62 号墳の轡と辻金具の生産について

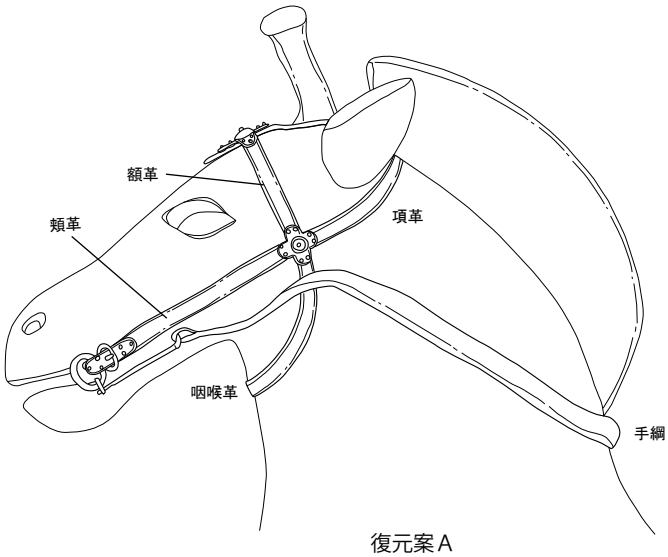
帯金具を装着する意味　鈒具造立聞円環轡は、通常面

繋の革帯（頬革）を直接鏡板の鉸具の刺金に取り付けることから、革帯を繋ぐのに帯金具は必要としていない。また、62 号墳例は帯金具が銅製である。したがって、帯金具は装飾を高める効果を狙った可能性が高い。

轡・辻金具の生産　62 号墳以外の帯金具付鉸具造立聞円環轡の４例はいずれも鉄製帯金具であり、羽山１号横穴墓が錫装鋲である。このほか分析がなされていないため判別しにくいが、報告書や実物を観察すると、四十坂 151 号土坑や西宮浦１号横穴墓の轡の帯金具の鋲は、鉄錆とは異なる色調を呈するなど、羽山１号横穴墓例を参考にすれば錫装の可能性がある。したがって、帯金具付鉸具造立聞円環轡は出現当初から錫製品を生産する集団（工房）と近しい関係があった可能性が高い。

一方、板状辻金具は、62 号墳をはじめ 17 遺跡で確認されているが、材質は金銅装、鉄製、銅製など多岐にわたる。TK209 型式期に金銅装のものが多く、飛鳥Ⅰ期以降に鉄製が多くなり、銅製が出現した可能性が高いが、脚に打たれる鋲数が３鋲（最終段階は２鋲）で、中央部が菱形・方形から円形という変遷過程、脚部先端の特徴が心葉形・方形などみられるが材質の違いに形状や鋲数は影響を受けていない。材質が違い、出土数が少ないながらも特徴が一致することから、同一工房あるいは近しい工房において同一系譜で生産されたと想定できる。

62 号墳と馬具の共通性が高い羽山１号横穴墓は、鉄製帯金具付鉸具造立聞円環轡＋金銅装辻金具の組合せである。同時期（TK209 型式併行期）の板状辻金具と組合される轡は鉄製馬具だけではなく、金鈴塚古墳、鳥

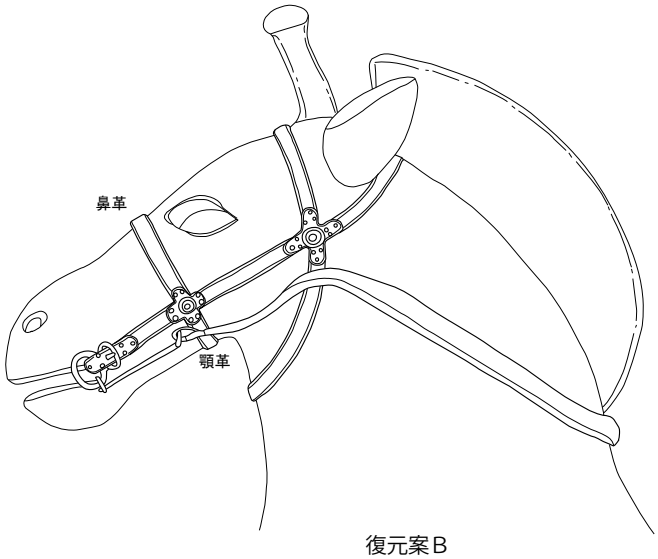


復元案Ａ

復元案Ａ

出土した３点の辻金具と轡のみで構成されていた場合。頬革・咽喉革と額革・項革 の交点に十字脚板状辻金具を配し、額革の額中央部分にＸ字脚板状辻金具を配する。項革の耳の後ろあるいは中央から額革の中央に向かって革帯を伸ばしてＸ字脚板状辻金具と繋ぐ方法。

この復元案の課題は、Ｘ字脚板状辻金具の額革が装着されない２脚の利用方法である。左右どちらかの革帯を無理な状態で辻金具に留める必要があることと、項革から革帯を額革へ斜めに伸ばす必要があること、項革と額帯を繋ぐ革帯に帯金具が使用されていたと想定する必要があることである。



復元案Ｂ

復元案Ｂ

Ｘ字脚板状辻金具１点が失われたと想定する場合で、轡＋十字脚板状辻金具２点＋Ｘ字脚板状辻金具２点で構成されていたと想定する場合。鼻革・顎革と頬帯の交点に十字脚板状辻金具を配し、頬革・項革と額革・咽喉革の交点にＸ字脚板状辻金具を配する方法。

この復元案の課題は、本墳同様帯金具付鉸具造立聞環状鏡板付轡とＸ字脚板状辻金具が出土している羽山１号横穴墓で辻金具が３点であり、復元案Ａ方法が想定される事例があること。Ｘ字脚板状辻金具がもう１点確実に副葬されていた保証がないこと、である。

(Scale=1:10)

第 46 図　船津 L- 第 62 号墳出土馬具の面繋構造の復元（宮代 1997 を参照して作成）

木横穴墓のように金銅装轡が想定される（宮代 1997）。この段階では、板状辻金具に伴う轡は固定されておらず、羽山１号横穴墓例は、轡と辻金具は別々に生産されたものが組合された可能性が高い。また、小畑３号墳や四十坂 151 号土坑をみれば板状辻金具と帯金具付鉸具造立聞円環轡の組合せは確定ではなかったことがわかる。

一方で 62 号墳の辻金具、轡の帯金具、帯金具が銅製で、同一工房で生産された可能性が高い。つまり、錫製品生産工房に近い場所で生産されていた帯金具付鉸具造立聞円環轡と、金銅装馬具生産を行う工房で生産されていた可能性が高い板状辻金具を組合せることで、飛鳥Ⅱ期に鉄製帯金具が材質転換され、62 号墳例の銅製帯金具付円環轡＋銅製板状辻金具の馬装が創出された可能性が高い。

62 号墳の馬具の生産地　帯金具付鉸具造立聞円環轡の分布は静岡（遠江・駿河）２例と福島２例、鳥取１例であり、やや東日本に偏りがあるものの、西日本にも存在している。一方板状辻金具は現状では畿内で確認できないものの、九州から東北まで出土している。材質も金銅装、銀装、鉄製、銅製などが確認できる。

二者ともに全国的に分布すること、轡・板状辻金具とも TK209 型式期～飛鳥Ⅱ期まで、ある程度長期にわたり、規範をもって生産された可能性が高いことも考慮すれば、畿内で生産された可能性が高いと想定する。

（２）船津 L- 第 62 号墳の馬具・馬装が提起する問題

馬具の修復　通常同一馬具に伴う鐙の兵庫鎖は連数が同一で、同じ長さ、そして革帯に留めるための鉸具も同じ形状のものが用いられることが多い。上述したように鐙だけ２組副葬され、片方ずつ石室外に持ち出された可能性は低いことから、62 号墳の鐙は、鐙吊金具Ｂの片方の鐙が壊れたため、近くに存在（流通）していた、やはり片方が壊れた鐙吊金具Ａを組合せることで１組の馬具にしている蓋然性が高い。これも馬具の修理あるいは修復の一環といえよう。また、鐙が壊れた可能性が高いことから、62 号墳の馬具は、銅製辻金具・帯金具を用いるやや奢侈なものであるが、頻繁に使用されていたことを想定できる。

馬具の組合せ（馬装）　62 号墳出土馬具が１組と仮定した場合、また、帯金具付鉸具造立聞円環轡のそれぞれの馬具の組合せをみた場合、類例が少ないにもかかわらず、共通する点が少ないことから、それぞれ馬装は轡とそれ以外の馬具が別々に生産されていたものを組合せた可能性が高い。

また、板状辻金具が使用された馬装についても、第１表に示したように組合される轡や馬具の共通性が低いと想定できる。したがって、62 号墳出土の馬具の組合せについては、轡・辻金具・帯金具は当初から組合せる目的で同時に生産された可能性が高いが、鐙や鞍に関しては、当初は面繋と組合せることを目的として生産された可能性は低かったのではないかと想定する。

鈴木一有氏は、静岡県長泉町原分古墳の馬装の復元および、各馬装を構成する馬具の分布の検討を通じて、原分古墳の２組馬具に関して、いずれも東日本に分布が多い轡・鐙と、畿内を中心に分布する鞍金具・杏葉の組合せであることを示し、別々に生産された轡や鐙と、金銅装鞍・杏葉などが組合された可能性を指摘している（鈴木 2008）。また、宮代栄一氏は、埼玉県将軍山古墳や千葉県金鈴塚古墳の馬装の復元を通じて「出来合いの馬具を組合せて構成した」馬装が存在することを指摘する（宮代 2013）。鈴木、宮代両氏の意見を参考にすれば、62 号墳例についても、轡・辻金具は同一工房で生産された可能性は高いものの鐙や鞍とは別に生産されたものが組合された可能性を想定してよいと考える。

つまり、62 号墳の馬装は生産前に馬具の組合せが決まっていたわけではなく、別々に生産された後に馬装全体が組合された可能性が高い。この馬装の構成は、配布を受ける側の立場や性格等に応じて、配布側が組合せる馬具を替えていた可能性と、62 号墳の被葬者集団が多方面から馬具を入手して組合せた可能性の２者を想定しておく必要がある。62 号墳の場合は、鐙吊金具Ａは前者の場合であっても後から組合された可能性が高いが、どちらかは断定できない。今後の馬具研究の進展とともに解決しなければならない課題である。

【謝辞】

小論の執筆にあたり、内山敏行氏、岡安光彦氏、栗林誠治氏、齋藤大輔氏、鈴木一有氏、瀧瀬芳之氏、田中祐樹氏、宮代栄一氏、大手前大学史学研究所（森下章司氏・魚津知克氏）にご教示いただいた。また、関連資料の調査で、菊川市教育委員会、蔵本俊明氏に御配慮いただき

ました。さらに、富士市教育委員会　石川武男氏、佐藤祐樹氏、藤村　翔氏に船津L-第62号墳の馬具に対する検討の機会を与えていただきました。明記して御礼申し上げます。

【補記】

脱稿後、X字脚・十字脚板状辻金具の類例が、以下の古墳・横穴墓から出土していることが明らかとなったため、類例として追加する。

新たに確認できた板状辻金具が出土した兵庫県文堂古墳や福岡県三沢17号墳で渦巻文杏葉が出土している。また、兵庫県東山古墳群でも板状辻金具とは共伴しないものの東山12号墳で渦巻文杏葉が出土している。それ以外の板状辻金具に伴う轡や杏葉などが明確ではないため断言はできないが、板状辻金具と渦巻文杏葉の共伴率が高く、生産にあたって近しい工房で生産された可能性が高いといえよう。

さらに、文堂古墳例に用いられた鋲は錫被せであるようであり、板状辻金具はやはり錫製品との関係も深い可能性が高い。

註

（1）　遺物番号７・８には一部「金箔」に見える部分（銅の残存部分の可能性もある）があり、ここで銅製とした轡帯金具、辻金具、帯金具が金銅装だった可能性を排除できない。

また、鋲の本体は銅製であるが、その鋲に別の金属が被せられており、銀色あるいは黒光りするような状況である。したがって、鋲は「銅地銀装」あるいは「銅地錫装」の可能性を想定しているが、後述するように帯金具付鉸具造立聞円環轡は、錫生産との関係が強いと想定できることから、筆者は「錫被せ」の可能性を想定している。

（2）　鉄製金具２点（33・34）がしおでの脚部の可能性がある。

（3）　35と36は出土地点も離れ、接合もしないが、35の兵庫鎖の部分と、36の図下側の兵庫鎖の欠損部分が接合する可能性を想定している。

（4）　なお、板状辻金具の中央部が菱形・方形のものと円形のものが、群馬県伊勢崎市蟹沼東31号墳と、福岡県小郡市三沢17号墳で出土しており、いずれもTK217型式期前半（飛鳥Ⅰ期）ごろに位置づけられる可能性が高い。菱形・方形のものと円形のものの両者が併存していた可能性がある。

（5）　瀧瀬芳之氏による円頭・頭椎・方頭大刀の編年（瀧瀬1984）を参照すると、銅製刀装具が増加するのはTK217型式期以降であることが想定できる。

（6）　なお、帯金具の形状を比較すると、羽山１号横穴墓例は、鉸具が嵌められる部分の側面がコ字形に切り欠かれている一方で、四十坂151号土坑例は切り欠きがないことから、前者がより古い可能性がある。

（7）　西宮浦１号横穴墓から出土した鐙の兵庫鎖は、62号墳の鐙吊金具Ｂと同様２連に復元できる可能性が高い。西宮浦１号横穴墓は出土遺物が副葬品のすべてではないと想定できるのでどこまで類似性が高かったか不明確であるが、鐙吊金具は62号墳の鐙吊金具Ｂと同様、斎藤弘氏の「三Ｅ式」にしていた可能性がある。

（8）　土坑から出土した埋葬時の原状を維持している可能性の高い四十坂151号土坑例では、鞍金具・鐙も出土していない。

（9）　面繋の部分名称については、増田精一氏による名称を用いた（増田1960）。

（10）　X字脚に打ち込まれた鋲を観察すると、図中の横方向の鋲の折曲がる部分までの脚の長さと、上下の部分の鋲を比較すると、若干ではあるが、横方向のほうが長いことが判明する。２点の十字脚辻金具の鋲の脚部の折れ曲がる部分までの長さは、X字脚の上下の鋲の脚部の中さと同じであることから１本の帯の厚さはこの程度であったと想定する。一方で脚が長い部分には２本の革帯が装着されていたことになるとすれば、復元案Ａでは２本の革帯が辻金具部分で交差するように復元することから２本分を貫いて留めたことの証左になる可能性がある。

補記　古墳時代後期～終末期の板状X字脚辻金具の類例（板状十字脚辻金具を含む）　追加資料

古墳名	所在地	材質	X字脚			十字脚			轡	文献
			個数	鋲数	中央部	個数	鋲数	中央部		
城山Ｂ７号横穴墓	神奈川県平塚市	（未確認）	２？	3	●	-	-	-	不明	柏木2011
前谷原横穴墓群	神奈川県大磯町	（未確認）	1	２？	●	-	-	-	不明	柏木2011
東山９号墳	兵庫県中町	鉄製	-	-	-	1	3	●	不明	中町2001
東山10号墳	兵庫県中町	鉄製	-	-	-	1	3	●	不明	中町2001
文堂古墳	兵庫県	鉄製	5	2	●	-	-	-	不明	※

※大手前大学史学研究所の御教示による。

(11)　項革と額革を繋ぐ革帯をやや斜めに取り付けた事例として、鈒具を利用した装着方法であるが、宮代栄一氏が復元した福岡県山の神古墳が挙げられる（宮代 1997）。62 号墳からは刺金のある鈒具が出土しているが、このような想定が可能かは不明確である。

引用・参考文献

内山敏行・大谷晃二 1995「安来市鳥木横穴墓について」『八雲立つ風土記の丘』No.131

大谷宏治 2006「馬具の分布からみた東海古墳時代社会」『東海の馬具と飾大刀』 東海古墳文化研究会

岡安光彦 1984「いわゆる『素環の轡』について－環状鏡板付轡の型式学的分析と編年」『日本古代文化研究』創刊号　古墳時代研究会

岡安光彦 1985「環状鏡板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』vol. 2　古墳時代研究会

群馬県古墳時代研究会 1996『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』群馬県古墳時代研究会

斎藤　弘 1986「古墳時代の壺鐙の分類と編年」『日本古代文化研究』vol. 3　古墳時代研究会

鈴木敏則 2001「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器の出現から消滅』第５分冊　東海土器研究会

鈴木一有 2008「原分古墳出土馬具の時期と系譜」『原分古墳』 静岡県埋蔵文化財調査研究所

瀧瀬芳之 1984「円頭・頭椎・方頭大刀の編年について」『日本古代文化研究』創刊号　古墳時代研究会

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

増田精一 1960「埴輪馬にみる頭絡の結絡」『考古学雑誌』45 巻 1 号　日本考古学会

宮代栄一 1997「古墳時代の面繋構造の復元－Ｘ字脚辻金具はどこにつけられたか－」『HOMINIDS』vol. 1

宮代栄一 2013「将軍山古墳出土の馬具とその馬装」『古代の豪族』埼玉県立さきたま史跡の博物館

桃崎裕輔 2001「棘葉形杏葉・鏡板の変遷とその意義」『筑波大学先史学・考古学研究』12　筑波大学歴史・人類系

横須賀倫達 2008「羽山 1 号横穴出土馬具の調査」『福島県立博物館紀要』22 号　福島県立博物館

補記文献

柏木善治 2011「６・７世紀における相模地域の動態」『総合研究大学院大学文化科学研究』７号　総合研究大学院大学

中町教育委員会 2001『東山古墳群Ⅱ』

平塚市教育委員会 1994『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書　平成５年度発掘調査』

図・表　出典

第１・２表

岡部町教育委員会 2003『四十坂遺跡』

小郡市教育委員会 1990『三沢古墳群Ⅰ』

川江秀孝 1992「馬具」『静岡県史』資料編３　静岡県

京都府教育委員会 1961『京都府文化財調査報告』22

国見町教育委員会 1959『高下古墳調査報告』（長崎県）

群馬県古墳時代研究会 1996『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』群馬県古墳時代研究会

高崎市教育委員会 1992『観音塚古墳調査報告書』

鳥取県教育文化財団 2002『小畑古墳群』

長野県埋蔵文化財センター 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 18 －佐久市内その４・小諸市内その２　芝宮遺跡群・中原遺跡群』

福岡市教育委員会 1986『柏原古墳群Ⅱ』

三重県埋蔵文化財センター 2003『才良吉田谷古墳群・才良山ノ谷古墳群ほか発掘調査報告』

宮代栄一 1997「古墳時代の面繋構造の復元－Ｘ字脚辻金具はどこにつけられたか－」『HOMINIDS』vol. 1

明星大学考古学研究室 1984『大淵ヶ谷・篠ヶ谷・西宮浦』

八雲立つ風土記の丘資料館 1996『黄金に魅せられた倭人たち』

横須賀倫達 2006「勿来金冠塚古墳出土遺物の調査Ⅱ」『福島県立博物館』20 号　福島県立博物館

横須賀倫達 2008「羽山 1 号横穴出土馬具の調査」『福島県立博物館紀要』22 号　福島県立博物館

第２・３図　第１表の参考文献による

羽山 1 号横穴墓（横須賀 2008 による）、四十塚 151 号土坑（岡部町教委 2003 による）、小畑３号墳（鳥取県 2002 による）、西宮浦 1 号横穴墓（筆者及び藤村翔氏実測）、船津Ｌ 62 号墳（本書）、金鈴塚古墳・鳥木横穴墓（宮代 1997 による）、勿来金冠塚古墳（横須賀 2006）、高下古墳（国見町 1959）

第Ⅴ章　まとめ

第１節　古墳の年代について

各古墳の造営時期について横穴式石室構造と出土遺物の検討を踏まえ、推測していきたい。

① L- 第 62 号墳

本報告の古墳の中で横穴式石室の遺存が良く、石室内の遺物が豊富であった。

遺物は石室内からの土器の出土がないものの、小刀・鉄鏃、馬具等が出土した。その時期は、Ⅲ章で報告したように遠江Ⅲ期前葉～Ⅳ期前葉を主体としている。ただし、第１床面（初葬時）、第２床面（追葬時）、それぞれに伴う遺物の区分けが困難で、初葬、追葬に伴う遺物を明確に分類することは出来なかった。

遺物は出土状況から片付けが行われたものと考えられる。この中で威信具である馬具は初葬時に埋葬された可能性が高い。Ⅳ章での大谷氏の考察では、馬具を遠江Ⅳ期前半（飛鳥Ⅱ期）としており、初葬時期を飛鳥Ⅱ期（7 世紀中ごろ）と考えたい。追葬はそれ以降、あまり時間をあけずに行われたものと推測される。

② L- 第 206 号墳

横穴式石室の開口部付近の検出で留まったことから、古墳の全容を明らかにできなかったが出土遺物をもとに埋葬時期を推測したい。

大刀は遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期前葉（TK209 型式並行期～飛鳥Ⅱ期）、鉄鏃が遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期末葉（TK209 型式並行期～飛鳥Ⅳ期）に位置づけらた。須恵器は高坏が遠江Ⅲ期中葉～遠江Ⅲ期後葉（TK43 ～ TK209 型式並行期）、長頸壺、瓶類が遠江Ⅳ期（飛鳥Ⅱ期）と時期差が認められ、前者を初葬期、後者を追葬・墓前祭祀期と推定した。

須恵器の出土位置が明確でないため、初葬、追葬の時期として確定できないものの、石室内の遺物時期と大きな矛盾がないことから、本墳の造営時期を 6 世紀末～7 世紀初頭と想定したい。

③ L- 第 207 号墳

主体部である横穴式石室が検出されたが、石室の遺存状況が悪く、遺物は玉類のみの出土であった。

明確な時期を示す遺物がないことからその造営時期を明らかにできないが、墓坑の形状から段構造をもつ横穴式石室の可能性が推測される。このため本墳の造営時期を段構造をもつ横穴式石室が多く見られるようになる 7 世紀代と捉えたい。

④ L- 第 77･78･189･190･218 号墳

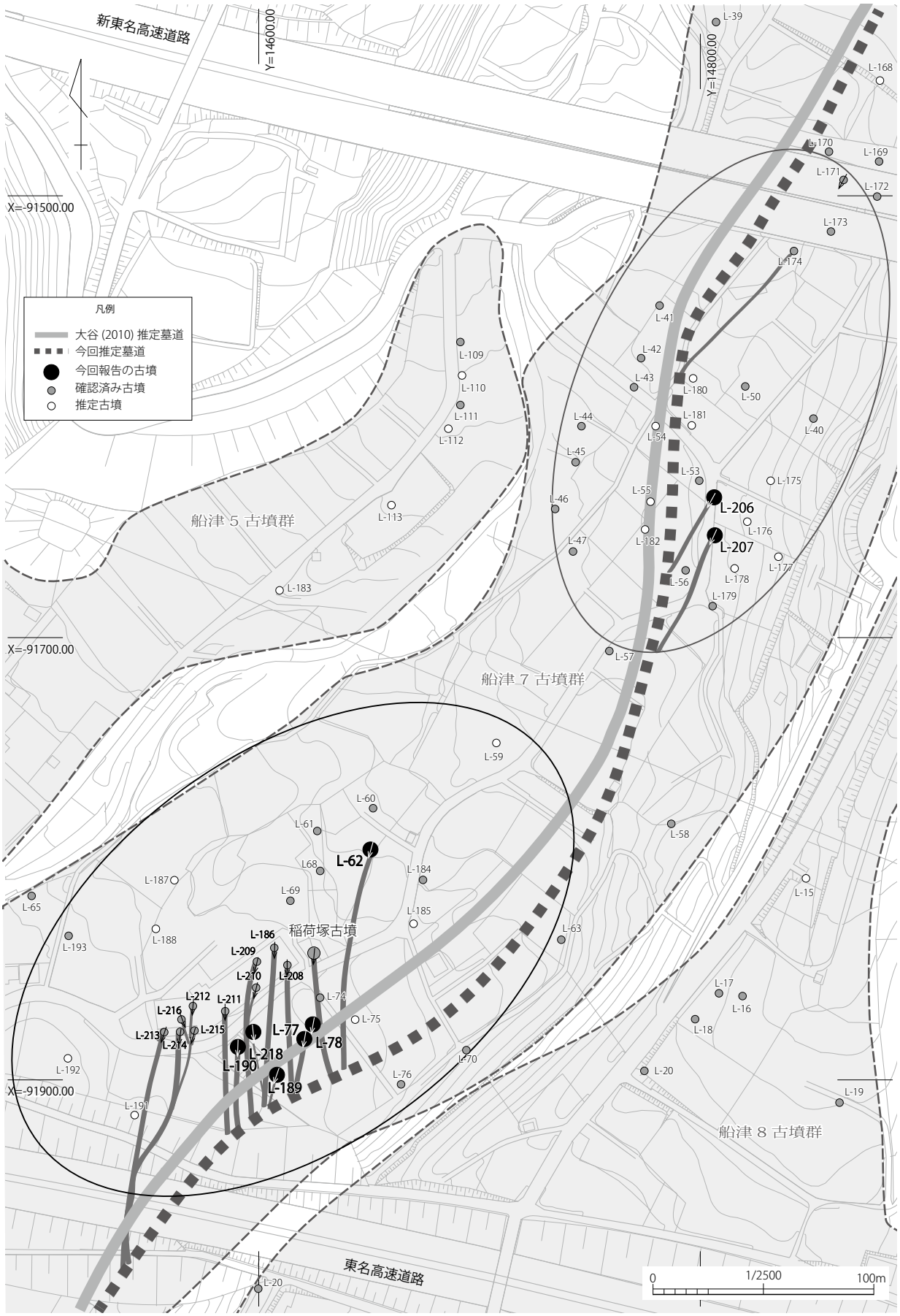
5 基共に主体部である横穴式石室を検出したのみで、石室内の調査は実施していない。また、周辺からの遺物も少なく、時期を明確にする遺物も出土していない。このため、造営時期を明らかにすることはできないが、近接する L- 第 208 ～ L- 第 216 号墳の造営時期と同様に 6 世紀末から 8 世紀としたい。

第２節　墓道について

本書にて船津古墳群での調査事例は 29 基を数えた。船津古墳群は市内の古墳群の中で調査事例が多く、今回報告した 8 基のほか、L- 第 202 号墳（寺の上第 1 号墳）、L- 第 171 号墳、L- 第 208 ～第 217 号墳が調査されている。

船津古墳群の調査では古墳の横穴式石室開口部から接続する墓道が確認されている。大谷氏は墓道の方向、石室開口部方位から船津古墳群の墓道を復元し、支群のあり方について考察している（静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010）。

ここでは大谷氏の考察を踏まえ、再度、船津古墳群の墓道ルートの検討を行いたい。なお、墓道（幹道･茎道･



第 47 図　船津古墳群の墓道の復元

枝道）の用語やその概念については水野正好氏の研究によった（水野 1970･1974・1975）。

大谷氏の検討では L- 第 62 号、L- 第 208 〜第 216 号墳の横穴式石室の墓道が西側を南流する春山川方向でなく、南〜東側の浅い谷地形に向けて墓道を伸ばすこと、L- 第 171 号横穴式石室が南西方向に向かい開口し、西側にある谷地形に墓道を伸ばしていたことを根拠とし、一段高い尾根下にある谷地形を通る道を想定されている。

そこで、L- 第 62、第 206、第 207、第 77、第 78、第 189、第 190、第 218 号墳の位置を大谷氏が示された墓道推測ラインに当てはめてみた（第 47 図）。古墳の分布と開口方位をみると概ね氏が推定された墓道に沿っているが、L- 第 78、第 79、第 189 号墳を横切る形で墓道ラインが通ってしまう。このため、第 77、第 78 、第 189、第 190、第 218 号墳 5 基の位置とそれぞれの横穴式石室の開口方位を考慮し、再度、大谷氏の推定された墓道ラインよりも東側を通る墓道を推定したものが、第 47 図の推定ルートである。

墓道に伴う古墳の位置をみてみると、稲荷塚古墳、L- 第 62 号墳を含む斜面南低位部と、第 171 、第 206、第 207 号墳を含む斜面北の 2 箇所に集中する。調査された古墳が限定されていることから、推測の域を出ないが、小支群内の単位群が形成するグループ（鈴木 1986）であった可能性が考えられる。これについては今後、船津古墳群内における古墳の調査例の増加や、詳細な地形観察や開口方向の検討をもって再点検していくべき課題と考える。

第 3 節　総括

最後に、船津 L - 第 62 号墳の調査で明らかになった成果をまとめ、総括としたい。

墳丘・石室　調査時、墳丘の大部分が流出しており、加えて確認調査において周溝も発見されなかったため、古墳の規模は明らかではない。石室は、東駿河に多く見られる開口部に「段構造」を有する無袖形横穴式石室で、石室全長は 6.23m を測る。同等の石室規模を有する船津 L- 第 212 号墳の墳丘規模が 12.1m であるから、第 62 号墳も直径 12m 前後の円墳と想定される。石室の床面は最低でも 2 面あると考えられた。築造は 7 世紀中ごろと考えられる。

小刀･刀装具　刃身長 33.2cm の小刀一振が出土した。この小刀は装具が仕立て直された可能性が指摘でき、東駿河での生産が推定される。頭椎大刀に伴うと考えられる装具が出土していることから、最低でももう一振の大刀（小刀）が副葬されていたと考えられる。

鉄鏃　29 点の鉄鏃が副葬されていた。短茎（無頸）が 2 点、平根系が 7 点、尖根系（長頸鏃）が 20 点である。尖根系（長頸鏃）は形式の異なる多様な鉄鏃構成をしていることが特徴である。

馬具　銅製帯金具付鉸具造立聞環状鏡板付轡 1 組をはじめ、面繋と鞍・鐙を構成する馬具が出土した。鐙吊金具などが出土している。鐙吊金具は兵庫鎖が 3 連と 2 連のものがあることから、別種のものを 1 組に組合せていたと想定される。なお、7 世紀中ごろの築造年代は、主に馬具から導き出された年代である。

被葬者集団　これまでの先行研究により､東駿河には、鍛冶技術や馬匹生産などの特殊技術を有する集団が移植してきたと想定されている（鈴木 2010）。出土した小刀もその生産体制のなかで産出されたものであろう。

船津古墳群をはじめ、東側に展開する沼津市石川古墳群もあわせた数百単位での古墳の築造が考えられる。それらに埋葬された集団の居住域については、古墳群の南方の田子浦砂丘上に展開する沼津市中原遺跡などを想定している。この遺跡からはガラス小玉の鋳型なども出土しており、鍛冶生産に留まらない生産者集団が居住していた可能性があり、加えてそれらの集団の計画的・戦略的配置は畿内王権の直接的かかわりであったことも考えられる。

参考文献

阿部　敬　2009『秋葉林遺跡Ⅰ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第207集　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

荒井玲子・鶴田晴徳　2006『石川古墳群』沼津市文化財調査報告書　沼津市教育委員会

池谷信之編　2012『高尾山古墳発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書　第104集　沼津市教育委員会

石川武男ほか　2001『富士川SA関連遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第123集　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

稲垣甲子男編　1975『駿河山王』富士川町教育委員会

稲垣甲子男　1980『駿河妙見古墳群　静岡県富士川町室野坂妙見古墳群調査報告書』富士川町教育委員会

稲垣甲子男　1984『中野遺跡　静岡県富士川町中野遺跡第２・３次調査報告書』富士川町教育委員会

井鍋誉之　2003a「富士川西岸～箱根山西麓地域」『静岡県埋蔵文化財調査研究所　研究紀要』第10号　（特集：古墳時代後期の鉄鏃）（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

井鍋誉之　2003b「静岡県内の飾り弓について」『静岡県埋蔵文化財調査研究所　研究紀要』第10号　（特集:古墳時代後期の鉄鏃）（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

井鍋誉之編　2008『原分古墳』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第184集　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

入江文敏　1998「佩砥考―日韓出土資料の検討―」『網干先生古希記念　考古学論集』上　網干先生古希記念会

岩崎しのぶ・西田真由子ほか　2013『富士岡１古墳群他』静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第37集　静岡県埋蔵文化財センター

岩原　剛編　2002『稲荷山古墳群』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第65集　豊橋市教育委員会

岩本　貴ほか　2010『天ヶ沢東遺跡　古木戸Ａ遺跡　古木戸Ｂ遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第228集　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

岩本　貴ほか　2013『渕ヶ沢遺跡』静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第30集　静岡県埋蔵文化財センター

植松章八ほか　1975『中里大久保（Ｋ第95号）古墳　付載　Ｋ第97・98・99号墳の副葬品』富士市教育委員会

植松章八　1976『天間代山遺跡発掘調査概報』富士市教育委員会

植松章八　1984「富士山南麓文化のあけぼのと天間沢遺跡」『鷹岡町史』鷹岡町

植松章八・佐藤達雄 1981『大北横穴群』伊豆長岡町教育委員会

臼杵　勲　1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号　PHALANX―古墳文化研究会―

小川賢之輔　1986「富士市域の地質及び地形」『富士市の自然　富士市域自然調査報告書』富士市

大塚初重　1965「薬師塚古墳」『東海道新幹線静岡県内工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県文化財調査報告書　第６集　静岡県教育委員会

大塚初重編　1990「古墳時代」『静岡県史　資料編２考古二』

大谷宏治　2003a「地域区分、時期区分と鉄鏃分類」『静岡県埋蔵文化財調査研究所　研究紀要』第10号　（特集：古墳時代後期の鉄鏃）（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷宏治　2003b「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鏃の変遷とその意義」『静岡県埋蔵文化財調査研究所　研究紀要』第10号　（特集：古墳時代後期の鉄鏃）（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷宏治　2004「東と西の狭間―古墳時代後期の鉄鏃にみる東海・甲信地方の特質―」『（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　設立20周年記念論文集』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷宏治編　2010『富士山・愛鷹山麓の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第231集　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷宏治ほか　2010『秋葉林遺跡Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第216集　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷宏治　2010a「出土遺物から見た秋葉林１号墳の被葬者像」『秋葉林遺跡Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第216集　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷宏治　2010b「古墳時代後期～終末期の古墳について」『富士山・愛鷹山麓の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第231集　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷宏治　2011「遠江・駿河の頸部を呑み込む矢柄をもつ鉄鏃の意義―無茎式・短茎式鉄鏃との比較を通じて―」『静岡県埋蔵文化財調査研究所　研究紀要』第17号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

岡安光彦　1984「いわゆる『素環の轡』について　―環状鏡板付轡の型式学的分析と編年―」『日本古代文化研究』創刊号　PHALANX―古墳文化研究会―

小野眞一　1957『静岡県東部古代文化総覧』蘭契社書店

小野眞一編　1964「吉原上ノ段遺跡調査略報」『沼津女子高校考古館報』４　沼津女子高校考古館

小野眞一ほか　1965「的場遺跡」『東海道新幹線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』日本国有鉄道

小野眞一・笹津備洋　1971「駿東郡原町葱川遺跡調査報告」『駿豆の遺跡研究』１

小野眞一ほか　1973『大仁町の古墳文化（付）大仁町の弥生文化』大仁町史編纂資料第四輯　大仁町教育委員会
小野眞一　1975『ゆずり葉』加藤学園考古学研究所
小野眞一・秋元眞澄ほか　1995『沢東Ａ遺跡―富士不燃建材工業株式会社工場増設に伴う埋蔵文化財第３次発掘調査報告書―』富士市教育委員会
北川恵一　1994「東原５号墳」『埋蔵文化財発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書　第58集
木ノ内義昭編　1996『舟久保遺跡　第20・21・33・34地区発掘調査報告書』富士市教育委員会
木ノ内義昭　2001『東平遺跡　第28地区発掘調査報告書』富士市教育委員会
木ノ内義昭編　2002『東平遺跡　第16地区（三日市廃寺跡）、第27地区発掘調査報告書』富士市教育委員会
後藤守一・中野国雄ほか　1958『吉原市の古墳』吉原市教育委員会
斎藤　弘　1986「古墳時代の壺鐙の分類と編年」『日本古代文化研究』第３号　PHALANX―古墳文化研究会―
佐藤祐樹編　2009『宇東川遺跡　平成19年度左富士臨港線街路築造工事に伴う宇東川遺跡Ｐ地区埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会
佐藤祐樹　2011「富士市岩倉Ａ遺跡出土の弥生土器」『平成21年度　富士市内遺跡発掘調査報告書』富士市教育委員会
佐藤祐樹編　2011『宮添遺跡Ⅳ』富士市教育委員会
佐藤祐樹編　2012『宮添遺跡Ⅴ』富士市埋蔵文化財発掘調査報告書　第52集　富士市教育委員会
佐藤祐樹・服部孝信　2012『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市埋蔵文化財調査報告　第51集　富士市教育委員会
佐藤祐樹・藤村　翔　2013「考古学からみた富士山の噴火と地域社会の変動―古墳時代・平安時代を中心に―」『2012年度静岡県考古学会シンポジウム　考古学からみた静岡の災害と復興』静岡県考古学会
佐藤祐樹・若林美希編　2013『富士市内遺跡発掘調査報告書　―平成22・23年度―』富士市埋蔵文化財調査報告　第54集　富士市教育委員会
静岡県　1930『静岡縣史』第壱巻　池鶴堂印刷所
静岡市教育委員会　1962『駿河丸山古墳』静岡考古館
静岡大学人文学部考古学研究室　1998「静岡県富士市国指定史跡・浅間古墳測量調査の成果」『静岡県の重要遺跡（静岡県内重要遺跡詳細分布調査報告書）』静岡県文化財調査報告書　第52集　静岡県教育委員会
柴田常恵　1929「富士の遺跡」官幣大社浅間神社編『富士の研究』Ⅳ　古今書院
柴田亮平・杉山和徳ほか　2009『矢川上Ｃ遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第200集　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
清水市教育委員会　2002『神明山４号墳　発掘調査報告書』
志村　博　1986『富士市の埋蔵文化財（遺跡編）』富士市教育委員会
志村　博編　2000『三新田遺跡（Ｄ地区）発掘調査報告書　～富士市立マリンプール建設計画に伴う発掘調査報告書～』富士市教育委員会
志村　博ほか　2003『東平遺跡発掘調査報告書　第４地区（西平１号墳）ほか』富士市教育委員会
志村　博・吉田博子　2004『中桁遺跡　王子板紙株式会社富士工場製品倉庫新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会
鈴木敏則ほか　2001「韮山町多田大塚古墳群　芋ヶ窪古墳群発掘調査報告」『静岡県の前方後円墳－個別報告編－』静岡県文化財調査報告書第55集　静岡県教育委員会
鈴木一有　2010「駿河東部における無袖石室の史的意義」『東日本の無袖石室』雄山閣
鈴木敏則1986「第２節　半田山古墳群Ｃ・Ｄ小支群の群構造」『浜松市半田山遺跡（Ⅳ）発掘調査報告書』浜松市教育委員会
鈴木敏則　2004「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』浜松市教育委員会
滝沢　誠ほか編　1999『井田遺跡Ⅱ・井田松江南古墳群』戸田村文化財調査報告書第４集　戸田村教育委員会
滝沢　誠編　2002「古墳時代」『沼津市史　資料編　考古』沼津市
田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ
田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店
田村隆太郎・大谷宏治ほか　2010『富士山・愛鷹山麓の遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第230集　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
富樫孝志　2010『的場古墳群・的場遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第227集　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
中井正幸ほか　1992『花岡山古墳群』大垣市埋蔵文化財調査報告書第１集
中野国雄　1958「吉原市域の古墳―スルガのクニ西部地域古墳群―」後藤守一・中野国雄ほか『吉原市の古墳』吉原市教育委員会
中野国雄　1969「富士市のあけぼの（岩本台地の遺跡と人々の生活）」『富士市史』上巻　富士市
中野国雄　1972「浅間古墳とスルガの国」『吉原市史』上巻　吉原市
西澤正晴　2002「遠江・駿河における鉄製板鍔の変遷と展開」『静

岡県埋蔵文化財調査研究所　研究紀要』第９号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
西　弘海　1986『土器様式の成立とその背景』真陽社
沼津市教育委員会　1976『山崎・大平丸山・高田第六天』沼津市文化財調査報告第五集
久松義昭編　1991『宇東川遺跡Ａ・Ｂ・Ｃ地区発掘調査概報』富士市教育委員会
久松義昭　1991『東平第１号墳発掘調査概報』富士市教育委員会
平林将信編　1981『西富士道路（富士地区）・岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書　東平』富士市教育委員会
平林将信・志村　博　1981「横沢古墳」『西富士道路（富士地区）　岳南広域都市計画道路田子浦臨港線　埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会
平林将信　1983「山の神古墳周溝発掘調査報告」『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会
平林将信編　1983『三新田遺跡発掘調査報告書』富士市教育委員会
平林将信編　1984『天間沢遺跡Ⅰ　遺構編』富士市教育委員会
平林将信編　1985『天間沢遺跡Ⅱ　遺物・考察編』富士市教育委員会
平林将信・川上敏朗　1986『富士市指定史跡　実円寺西古墳保存修理工事報告書』富士市教育委員会
平林将信･渡井義彦　1987『船津寺ノ上第１号墳　発掘調査報告書』富士市教育委員会
富士市教育委員会　1994『中原第３号墳・第４号墳　発掘調査概要報告書』
富士市教育委員会編　2013『富士市埋蔵文化財分布地図』
藤村　翔　2010『コーカン畑遺跡　第１地区埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会
藤村　翔　2011「報告書既刊遺跡追加資料報告」『平成 21 年度富士市内遺跡発掘調査報告書』富士市教育委員会
藤村　翔ほか　2011「伝法　国久保古墳の調査」『平成 13 年度富士市内遺跡・伝法国久保古墳　埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会
藤村　翔　2012「古墳時代後期初頭における２つの首長墳とその評価」『富士市内遺跡発掘調査報告書　―平成 11・12 年度―』富士市埋蔵文化財調査報告　第 53 集　富士市教育委員会
藤村　翔・若林美希　2012『富士市内遺跡発掘調査報告書　―平成 11・12 年度―』富士市埋蔵文化財調査報告　第 53 集　富士市教育委員会
藤村　翔ほか　2013「柏原遺跡の調査」『富士市内遺跡発掘調査報告書　―平成 22・23 年度―』富士市埋蔵文化財調査報告　第 54 集　富士市教育委員会
馬飼野行雄・山上英誉ほか　1991『丸ヶ谷戸遺跡』富士宮市文化財調査報告書　第 14 集　富士宮市教育委員会
松原彰子　1989「完新世における砂州地形の発達過程―駿河湾沿岸低地を例として」『地理学評論』62A（2）
前田勝己編　1999『向山遺跡　―東京電力（株）鉄塔新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』富士市教育委員会
前田勝己　2000『沖田遺跡　～大昭和紙工産業株式会社の貸店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～』富士市教育委員会
前田勝己　2007『ジンゲン沢遺跡　宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会
前田勝己・佐藤祐樹編　2008『祢宜ノ前遺跡　市立吉原商業高等学校屋内運動場改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会
町田　洋ほか編　2006『日本の地形５　中部』財団法人　東京大学出版会
水野正好　1970「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本』５－近畿　角川書店
水野正好　1975「群集墳の構造と性格」『古代史発掘』６
宮代栄一　1996a「倭人たちの馬装―面繋を中心に―」大谷晃二編『特別展　黄金に魅せられた倭人たち』島根県八雲立つ風土記の丘
宮代栄一　1996b「鞍金具と雲珠・辻金具の変遷」大谷晃二編『特別展　黄金に魅せられた倭人たち』島根県八雲立つ風土記の丘
宮代栄一　1997「古墳時代面繋構造の復元　―Ｘ字脚辻金具はどこにつけられたか―」『HOMINIDS』VOL.001　CRA
宗像市教育委員会　1992『平等寺向原』
山本恵一編　1999『長塚古墳・清水遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書　第６８集　沼津市教育委員会
若林美希編　2012『宇東川遺跡Ａ地区　原田公園造成整備事業に伴う３～６次埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市埋蔵文化財調査報告　第 50 集　富士市教育委員会
渡井一信・山上英誉　1989『渋沢遺跡　富士宮市立富丘小学校運動場拡張事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』富士宮市教育委員会
渡井義彦　1988『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』富士市教育委員会
渡井義彦　1991『船津Ｌ- 第 62 号墳　発掘調査概報』富士市教育委員会
渡井義彦　1999『船津古墳群　船津Ｌ- 第 186・208 ～ 216 号墳　製茶工場建設に伴う発掘調査』富士市教育委員会

船津Ｌ－第 62 号墳

小刀・刀子

挿図	図版	報告書番号	遺物内容	全長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	刃部（刀身）			茎・装具部			鏃部			鍔部			備考	1991 年概報番号	保存 X 線 No.	保存処理 No.
							長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	長さ（cm）	幅(cm)	厚（cm）	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)				
第 18 図	PL.8・9	1	小刀	47.40			38.60	2.80	0.50	(9.10)	(0.50)	(1.20)	3.70	2.30		(6.70)	(5.40)			164	920205G	6675
第 18 図	PL.17	2	不明金具	(3.00)	(4.70)					(0.10)		(0.70)							責金具	94		
第 18 図	PL.17	3	喰出鍔	5.50	3.80											0.90	0.70	0.40	切羽 or 責金具	114	920205C	6655
第 18 図	PL.17	4	刀装具	(2.70)													(2.10)	0.20	無窓鍔	2		
第 18 図	PL.17	5	刀装具	(2.40)													(2.00)	0.25	無窓鍔	1		
第 18 図	PL.17	6	鉄片（刀装具）	(2.40)	(1.20)	0.30													無窓鍔	18		
第 18 図	PL.17	7	刀装具	(4.60)	(3.70)	0.15				(3.70)	(1.90)								鞘金具	63		
第 18 図	PL.17	8	刀装具？	(2.90)	(2.60)	0.10				(1.20)	(1.10)								鞘金具	60		
第 18 図	PL.17	9	刀装具	2.00	(3.50)	0.20							(3.50)	(0.80)					鏃	69		
第 18 図	PL.17	10	刀子	(1.20)	(2.40)	0.20							(2.40)	(0.45)					鏃	98		
第 18 図	PL.17	11	刀子（茎部～刃部）	(6.80)			(2.95)	0.90	0.30	3.85	0.60	0.20								66（66-1）		
第 18 図	PL.17	11	刀子（刃部）	(3.40)			(3.40)	0.70	0.25											66（66-2）		
第 18 図	PL.17	12	刀子	(5.70)						(5.70)	0.75	0.25								99-1		
第 18 図	PL.17	13	刀子	(4.60)			(4.60)	1.10	0.30											99-2		
第 18 図	PL.17	14	刀子	(3.00)						(3.00)	1.00	0.20								158		
第 18 図	PL.17	15	刀子	(7.10)			(2.50)	1.20	0.25	(4.60)	0.70	0.30								3-2		
第 18 図	PL.17	16	刀子？	(3.30)			(3.30)	1.10	0.25											4		
第 18 図	PL.17	17	刀子	(5.70)			(4.90)	1.60	0.50	(0.80)	1.10	0.30								160		
第 18 図	PL.17	18	刀子	(1.00)									(1.00)	(2.00)	0.10				鏃	144-1		
第 18 図	PL.17	19	刀子	(1.80)									(1.80)	(1.00)	0.15				鏃	10-2		
第 18 図	PL.17	20	刀装具	(3.10)	(1.40)	0.30				(1.20)	0.40	(←鋲部)							鋲付き	10-1		
第 18 図	PL.17	21	刀装具	(3.30)	1.50	0.15				(鋲頭部→)	(0.60)	0.20							茎、鏃、鋲（頭）付き	144-2		
第 18 図	PL.17	22	刀装具	(2.10)	1.90	0.20				(鋲頭部→)	(0.55)	0.40							鋲（頭）付き	161-1		
第 18 図	PL.17	23	刀装具	(3.30)	1.00	0.20				0.70	0.30	(←鋲部)							茎？、鋲付き	11-4		

鉄鏃

挿図	図版	報告書番号	鉄鏃部位	鏃身部形状・断面形状	現存長(cm)	鏃身部			頸部			茎部			1991 年概報番号
						長さ（cm）	幅（cm）	厚（cm）	長さ（cm）	幅（cm）	厚（cm）	長さ（cm）	幅（cm）	厚（cm）	
第 19 図	PL.12・13	1	鏃身部～頸部片	短茎腸抉五角形式・平造	(4.20)	(3.70)	3.00	0.30				1.00	0.70	0.30	34-1
第 19 図	PL.12・13	2	鏃身部	短茎五角形式・平造	(2.00)	(2.00)	2.20	0.20							37
第 19 図	PL.12・13	3	鏃身部～頸部片	平根五角形式・平造	(4.90)	(2.60)	2.40	0.25	(2.30)	0.70	0.20				104
第 19 図	PL.12・13	4	鏃身部～頸部片	平根腸抉三角形式・平造	(4.60)	(3.10)	2.30	0.25	(2.00)	0.70	0.15				102
第 19 図	PL.12・13	5	鏃身部～頸部片	平根腸抉柳葉形式？・平造	(5.60)	(2.40)	(2.20)	0.40	(4.20)	0.60	0.40				167
第 19 図	PL.12・13	6	鏃身部～茎部片	平根五角形式・平造	(8.50)	(3.30)	2.40	0.30	4.50	0.60	0.30	(0.70)	0.40	0.20	101
第 19 図	PL.12・13	7	鏃身部～頸部片	平根三角形式・平造	(5.70)	2.30	2.30	0.25	(3.40)	0.60	0.20				35-1
第 19 図	PL.12・13	8	鏃身部～頸部片	平根方頭式・平造	(5.60)	(2.20)	2.00	0.25	(3.40)	0.90	0.20				129
第 19 図	PL.12・13	9	鏃身部～頸部片	平根雁股式・平造	(4.50)	(2.00)	1.55	0.30	(2.50)	0.40	0.50				11-7
第 19 図	PL.12・13	10	鏃身部～茎部片	尖根腸抉柳葉形式・平造	(14.60)	2.20	1.20	0.35	9.20	0.50	0.30	(3.20)	0.30	0.30	21
第 19 図	PL.12・13	11	完形	尖根腸抉五角形式・平造	(18.00)	(2.40)	1.40	0.30	9.30	0.50	0.25	6.30	0.25	0.30	86
第 19 図	PL.12・13	12	鏃身部～頸部片	尖根腸抉五角形式・平造	(5.90)	(2.20)	1.20	0.30	(3.70)	0.55	0.35				13-1

挿図	図版	報告書番号	鉄鏃部位	鏃身部形状・断面形状	現存長（cm）	鏃身部			頸部			茎部			1991年概報番号
						長さ（cm）	幅（cm）	厚（cm）	長さ（cm）	幅（cm）	厚（cm）	長さ（cm）	幅（cm）	厚（cm）	
第19図	PL.12・13	13	鏃身部～茎部片	尖根腸抉五角形式・平造	(11.80)	(1.90)	1.30	0.30	7.90	0.40	0.30	(2.00)	0.50	0.20	73
第19図	PL.12・13	14	鏃身部～頸部片	尖根腸抉五角形式・平造	(2.30)	(1.30)	(1.10)	0.10	(1.00)	0.35	0.10				103
第19図	PL.12・13	15	完形	尖根柳葉形式・片丸造	16.00	2.50	1.40	0.30	8.50	0.45	0.25	5.00	0.35	0.25	119
第19図	PL.12・13	16	鏃身部～茎部片	尖根柳葉形式・平造	(13.70)	2.30	1.20	0.25	9.20	0.40	0.35	(2.20)	0.40	0.30	67
第19図	PL.12・13	17	鏃身部～頸部片	尖根柳葉形式・平造	(10.00)	(2.40)	1.10	0.15	(7.60)	0.50	0.30				74
第19図	PL.12・13	18	鏃身部片	尖根長三角形式・平造	(2.10)	(2.10)	1.50	0.30							28
第19図	PL.12・13	19	鏃身部～頸部片	尖根長三角形式・平造	(4.40)	(1.30)	1.00	0.20	(3.10)	0.50	0.20				41
第19図	PL.12・13	20	鏃身部～頸部片	尖根長三角形式・平造	(3.50)	(2.60)	0.80	0.25	(0.90)	0.50	0.25				62
第19図	PL.12・13	21	鏃身部～頸部片	尖根腸抉長三角形式・平造	(2.90)	2.50	1.20	0.30	(0.70)	0.60	0.20				81
第19図	PL.12・13	22	鏃身部～頸部片	尖根三角形式・平造	(3.20)	1.80	1.20	0.30	(1.40)	0.30	0.20				78-1
第19図	PL.12・13	23	鏃身部～頸部片	尖根鑿箭式・片丸造	(2.90)	0.70	1.00	0.30	(2.20)	0.50	0.35				65
第19図	PL.12・13	〃	頸部片		(2.00)				(2.00)	0.40	0.15				〃
第19図	PL.12・13	24	鏃身部～頸部片	尖根鑿箭式・片丸造	(6.10)	(0.60)	0.80	0.20	(5.50)	0.40	0.30				166
第19図	PL.12・13	25	鏃身部～頸部片	尖根鑿箭式・片丸造	(7.60)	0.20	0.50	0.20	(7.40)	0.50	0.30				148
第19図	PL.12・13	26	鏃身部～頸部片	尖根鑿箭式・片丸造	(1.80)	0.50	0.60	0.30	(1.30)	0.60	0.40				不明3
第19図	PL.12・13	27	鏃身部～頸部片	尖根鑿箭式・片丸造	(2.70)	0.60	0.70	0.20	(2.10)	0.40	0.30				84
第19図	PL.12・13	28	鏃身部～頸部片	尖根鑿箭式・片丸造	(2.70)	0.60	0.80	0.30	(2.10)	0.40	0.30				87
第19図	PL.12・13	29	鏃身部～頸部片	尖根片刃箭式・片丸造	(2.10)	0.30	0.40	0.20	(1.80)	0.40	0.20				79-1
第20図	PL.14・15	30	頸部片		(5.00)				(5.00)	0.55	0.30				22
第20図	PL.14・15	31	頸部片		(1.80)				(1.80)	0.60	0.30				58-2
第20図	PL.14・15	32	頸部片		(4.40)				(4.40)	0.50	0.30				58-1
第20図	PL.14・15	33	頸部片		(2.20)				(2.20)	0.40	0.40				19-1
第20図	PL.14・15	34	頸部片		(7.80)				(7.80)	0.40	0.20				106
第20図	PL.14・15	35	頸部片		(5.70)				(5.70)	0.40	0.30				49
第20図	PL.14・15	36	頸部片		(5.50)				(5.50)	0.50	0.30				26
第20図	PL.14・15	37	頸部片		(5.20)				(5.20)	0.40	0.25				44
第20図	PL.14・15	38	頸部片		(4.00)				(4.00)	0.40	0.35				152
第20図	PL.14・15	39	頸部片		(1.90)				(1.90)	0.50	0.20				64
第20図	PL.14・15	40	頸部片		(1.60)				(1.60)	0.50	0.25				82
第20図	PL.14・15	41	頸部～茎部片		(9.20)				(3.40)	0.40	0.30	(5.80)	0.30	0.30	13-2
第20図	PL.14・15	42	頸部～茎部片		(6.50)				(2.40)	0.60	0.20	(4.10)	0.20	0.20	105
第20図	PL.14・15	43	頸部～茎部片		(4.30)				(2.00)	0.55	0.20	(2.30)	0.30	0.20	25
第20図	PL.14・15	44	頸部～茎部片		(3.90)				(3.50)	0.50	0.15	(0.40)	0.40	0.05	40
第20図	PL.14・15	45	頸部～茎部片		(2.40)				(1.20)	0.60	0.30	(1.20)	0.30	0.25	157
第20図	PL.14・15	46	頸部～茎部片		(2.90)				(0.80)	0.60	0.20	2.10	0.25	0.10	77
第20図	PL.14・15	47	頸部～茎部片		(2.90)				(2.00)	0.60	0.30	(0.90)	0.40	0.30	53
第20図	PL.14・15	48	頸部～茎部片		(13.60)				(8.90)	0.40	0.35	4.70	0.30	0.30	115
第20図	PL.14・15	49	頸部～茎部片		(3.90)				(3.40)	0.30	0.20	(0.50)	0.30	0.15	39-1
第20図	PL.14・15	50	頸部～茎部片		(5.40)				(3.10)	0.50	0.30	(2.30)	0.45	0.30	9
第20図	PL.14・15	51	頸部～茎部片		(7.10)				(1.40)	0.50	0.25	(5.70)	0.40	0.20	34-2
第20図	PL.14・15	52	頸部～茎部片		(6.40)				(1.50)	0.40	0.25	(4.90)	0.25	0.25	38
第20図	PL.14・15	53	頸部～茎部片		(6.20)				(5.60)	0.45	0.20	(0.60)	0.50	0.25	24
第20図	PL.14・15	54	頸部～茎部片		(4.20)				(1.70)	0.30	0.25	(2.50)	0.30	0.30	154
第20図	PL.14・15	55	頸部～茎部片		(3.40)				(2.60)	0.40	0.25	(0.80)	0.30	0.20	33

挿図	図版	報告書番号	鉄鏃部位	鏃身部形状・断面形状	現存長（cm）	鏃身部			頸部			茎部			1991 年概報番号
						長さ（cm）	幅（cm）	厚（cm）	長さ（cm）	幅（cm）	厚（cm）	長さ（cm）	幅（cm）	厚（cm）	
第 20 図	PL.14・15	56	頸部～茎部片		(1.80)				(0.80)	0.40	0.20	(1.00)	0.40	0.15	70
第 20 図	PL.14・15	57	頸部～茎部片		(1.90)				(1.60)	0.50	0.20	(0.30)	-	-	27
第 20 図	PL.14・15	58	頸部～茎部片		(2.90)				(1.30)	0.50	0.20	(1.60)	0.35	0.15	48
第 20 図	PL.14・15	59	(関～) 茎部片		(3.60)				(0.30)			(3.30)	0.40	0.30	96
第 20 図	PL.14・15	60	茎部片		(2.25)							(2.25)	0.70	0.30	29
第 20 図	PL.14・15	61	茎部片		(2.60)							(2.60)	0.50	(0.30)	46
第 20 図	PL.14・15	62	茎部片		(4.50)							(4.50)	(0.60)	0.60	42
第 20 図	PL.14・15	63	頸部～茎部片		(5.10)				(4.50)	0.40	0.20	0.60	0.40	0.15	36
第 20 図	PL.14・15	64	茎部片		(6.50)							(6.50)	0.35	0.30	151
第 20 図	PL.14・15	65	茎部片		(1.90)							(1.90)	0.30	0.25	30
第 20 図	PL.14・15	66	茎部片		(3.30)							(3.30)	0.40	0.20	88
第 20 図	PL.14・15	67	茎部片		(2.50)							(2.50)	0.30	0.25	16
第 20 図	PL.14・15	68	茎部片		(3.60)							(3.60)	0.30	0.25	117
第 20 図	PL.14・15	69	茎部片		(4.10)							(4.10)	0.30	0.20	43
第 20 図	PL.14・15	70	茎部片		(4.00)							(4.00)	0.30	0.30	17
第 20 図	PL.14・15	71	茎部片		(3.10)							(3.10)	0.35	0.25	107
第 20 図	PL.14・15	72	茎部片		(3.10)							(3.10)	0.40	0.20	34-3
第 20 図	PL.14・15	73	茎部片		(1.70)							(1.70)	0.20	0.20	59
第 20 図	PL.14・15	74	茎部片		(2.80)							(2.80)	0.30	0.30	108
第 20 図	PL.14・15	75	茎部片		(2.80)							(2.80)	0.40	0.20	11-5
第 20 図	PL.14・15	76	茎部片		(2.60)							(2.60)	0.25	0.20	47
第 20 図	PL.14・15	77	茎部片		(2.70)							(2.70)	0.20	0.20	19-2
第 20 図	PL.14・15	78	茎部片		(2.50)							(2.50)	0.30	0.30	72
第 20 図	PL.14・15	79	茎部片		(2.10)							(2.10)	0.30	0.10	39-2
第 20 図	PL.14・15	80	茎部片		(1.80)							(1.80)	0.25	0.15	79-2
第 20 図	PL.14・15	81	茎部片		(2.00)							(2.00)	0.20	0.20	91
第 20 図	PL.14・15	82	茎部片		(1.20)							(1.20)	0.20	0.20	78-2
第 20 図	PL.14・15	83	茎部片		(4.30)							(4.30)	0.30	0.30	14
第 20 図	PL.14・15	84	茎部片		(4.40)							(4.40)	0.40	0.35	50
第 20 図	PL.14・15	85	茎部片		(4.30)							(4.30)	0.30	0.20	15
第 20 図	PL.14・15	86	茎部片		(3.25)							(3.25)	0.25	0.20	75
第 20 図	PL.14・15	87	茎部片		(2.40)							(2.40)	0.25	0.20	35-2
第 20 図	PL.14・15	88	茎部片		(2.50)							(2.50)	0.30	0.30	54
第 20 図	PL.14・15	89	茎部片		(1.80)							(1.80)	0.20	0.20	不明 6
第 20 図	PL.14・15	90	茎部片		(1.50)							(1.50)	0.15	0.15	89
第 20 図	PL.14・15	91	茎部片		(1.20)							(1.20)	0.30	0.30	不明 5
第 20 図	PL.14・15	92	茎部片		(2.70)							(2.70)	0.40	0.20	109
第 20 図	PL.14・15	93	茎部片		(2.80)							(2.80)	0.25	0.25	85
第 20 図	PL.14・15	94	茎部片		(2.20)							(2.20)	0.20	0.20	168
第 20 図	PL.14・15	95	茎部片		(1.30)							(1.30)	0.20	0.20	不明 4
第 20 図	PL.14・15	96	茎部片		(1.90)							(1.90)	0.25	0.20	71

弓金具

挿図	図版	報告書番号	遺物内容	全長(cm)	軸部長(cm)	筒部長(cm)	筒部径(cm)	頭部幅(cm)	花弁形状	備考	1991年概報番号
第21図	PL.16	1	両頭金具	2.85	2.85	2.10	0.60	0.60-0.70	5	木部残存	130
第21図	PL.16	2	両頭金具	2.80	2.80	1.70	0.50	0.50-0.55	5		93
第21図	PL.16	3	両頭金具	2.50	2.50	1.70	0.60	0.55	5		133
第21図	PL.16	4	両頭金具	2.60	2.60	1.60	0.45	0.60	5		113
第21図	PL.16	5	両頭金具	(2.90)	(2.90)	(2.40)	0.50	0.60	(3)		83
第21図	PL.16	6	両頭金具	(2.20)	(2.20)	1.90	0.60	0.70	?	両頭欠損　木部残存	122

馬具

挿図	図版	報告書番号	遺物内容	原図番号	全長(cm)	幅(cm)	先端幅(cm)	最小幅(cm)	厚・高(cm)	鉢高(cm)	鋲（孔）数	鋲頭径(cm)	鋲頭高(cm)	備考	1991年概報番号	X線No.	保存処理No.
第22図	PL.8	1	銅製帯金具付鉸具造環状鏡板轡	F053	-	-	-	-	-	-	-	-	-	個別図有り	125		
第23図	PL.10・11	2	銅製辻金具（X字形）	F042	(7.00)	(7.50)			1.30	1.00					145	920205E	6671
第23図	PL.10・11	3	銅製辻金具	F093	(5.25)	5.50			1.20	0.80					123	920205D	6658
第23図	PL.10・11	4	銅製辻金具	F041	(5.50)	5.50			1.30	0.90					143	920205E	6670
第23図	PL.10・11	5	銅製帯金具	F044	6.40	2.50			0.05		5	0.60-0.65	0.20		140	920205E	6669
第23図	PL.10・11	6	銅製帯金具	F043	(5.20)	2.70			0.05		5	0.60	0.20		139	920205E	6668
第23図	PL.10・11	7	銅製帯金具	F088	5.60	2.30			0.50		5	0.60	0.25	鍍金？残存	138	920205E	6667
第23図	PL.10・11	8	銅製帯金具	F087	2.60	1.90					2	0.60-0.65	0.20	鍍金？残存	137	920205E	6666
第23図	PL.10・11	9	銅製帯金具	F096'	(2.30)	2.00			0.10		2（残）	0.60	0.20-0.25		131	920205D	6661
第23図	PL.10・11	10	銅製帯金具	F097	(2.10)	2.00			0.10		2	0.65-0.70	0.20		134	920205D	6663
第23図	PL.10・11	11	銅製帯金具	F102	(2.00)	2.00			0.10		2（残）	0.60	0.20		121	920205C	6657
第23図	PL.10・11	12	鉄製帯金具	F089	2.00	1.90					2	0.60	0.15	鋲は銅製	136	920205D	6665
第23図	PL.10・11	13	銅製鋲	KARI3								0.70	0.20	鋲のみ	161-2		
第24図	PL.10・11	14	鉄製帯金具	A10	4.00	1.40			0.15		2	0.35-0.50	0.15-0.20		111	920205C	6653
第24図	PL.10・11	15	鉄製帯金具	A11	(3.00)	1.30			0.10		1（残）	0.30	0.15		112	920205C	6654
第24図	PL.10・11	16	鉄製帯金具	F104	(2.50)	1.30			0.20		1（残）	0.40	0.20		92	920205C	6651
第24図	PL.10・11	17	鉄製帯金具	A06	4.30	1.60			0.10		2				110		
第24図	PL.10・11	18	鉄製帯金具	F099	4.00	1.90			0.15		2	0.35-0.60	0.50-0.25		127	920205D	6659
第24図	PL.10・11	19	鉄製帯金具	F101	(3.60)	1.80			0.15		2				128	920205D	6660
第24図	PL.10・11	20	鉄製帯金具	A02	3.20	1.90			0.15		2				132	920205D	6662
第24図	PL.10・11	21	鉄製帯金具	F121	(1.40)	1.70			0.10		1（残）	0.25	0.15		7		
第24図	PL.10・11	22	鉄製帯金具	A01	(2.60)	1.90					1（残）				135	920205D	6664
第23図	PL.10・11	23	鉄製帯金具	F047	(1.90)	2.00			0.20		2（残）				3-1		
第24図	PL.10・11	24	鉄製帯金具	F027	(1.90)	1.50			0.20						23		
第24図	PL.10・11	25	鉄製帯金具	F005'	(2.70)	1.90			0.15						61		
第24図	PL.10・11	26	鉄製帯金具	F051	(2.90)	2.00			0.20						11-6		
第25図	PL.10・11	27	鞍金具	F103'	6.60	2.20	4.80	2.20	0.40						118		
第25図	PL.10・11	28	鞍金具	F100	6.00	2.25	5.10	2.25	0.40						97	920205C	6652
第25図	PL.10・11	29	円形座金具	F090	(4.00)	3.50				(0.80)					142		
第25図	PL.10・11	30	鉸具金具	F098'	4.90	4.25			0.50						120	920205C	6656
第25図	PL.10・11	31	鉸具金具	F094	8.10	3.10	4.10	3.00	0.40						124		

挿図	図版	報告書番号	遺物内容	原図番号	全長(cm)	幅(cm)	先端幅(cm)	最小幅(cm)	厚・高(cm)	鉢高(cm)	鋲(孔)数	鋲頭径(cm)	鋲頭高(cm)	備考	1991年概報番号	X線No.	保存処理No.
第25図	PL.10・11	32	鉸具金具	F054	6.90	3.00	4.70	3.00							146	920205E	6672
第25図	PL.10・11	33	刺金	F074	(4.80)	0.90			0.40						159		
第25図	PL.10・11	34	刺金	F125'	(2.90)	0.90	0.70								147		
第25図	PL.10・11	35	鐙吊金具	F072	-	-	-	-	-	-	-	-	-		5-2		
第25図	PL.10・11	36	鐙吊金具	F051	-	-	-	-	-	-	-	-	-		11-1		
第25図	PL.10・11	37	鐙吊金具	F072	-	-	-	-	-	-	-	-	-		5-1		

その他の鉄製品

挿図	図版	報告書番号	遺物内容	全長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	備考	1991年概報番号
第26図	PL.16	1	円環付金具	-	-	-		12-1
第26図	PL.16	2	ねじり状金具	-	-	-	大刀の吊金具？	12-2
第26図	PL.16	3	ねじり状金具	-	-	-	大刀の吊金具？	12-3
第26図	PL.16	4	不明	7.20	0.40-0.50	0.40-0.55		11-2
第26図	PL.16	5	鉄鏃	(3.30)	0.50	0.30		116
第26図	PL.16	6	不明	(3.00)	0.30	0.30		156-1
第26図	PL.16	7	不明	(1.50)	0.30	0.30		156-2
第26図	PL.16	8	円形金具？	(2.00)	0.40	0.20		8
第26図	PL.16	9	不明	(4.10)	0.40-0.50	0.40		11-3
第26図	PL.16	10	刀子？留金具？	(2.50)	1.50	0.20		不明2
第26図	PL.16	11	刀子？留金具？	(2.30)	(1.70)	0.30		不明1

装身具ほか

挿図	図版	報告書番号	遺物内容	全長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	平面長軸(cm)	平面短軸(cm)	断面形	備考	1991年概報番号	X線No.	保存処理No.
第27図	PL.9	1	砥石	7.00	2.70	0.85-2.1					95		
第27図	PL.9	2	耳環				2.90	2.55	楕円形		162	920205E	6673
第27図	PL.9	3	耳環				2.90	2.70	楕円形		163	920205E	6674

玉類

挿図	図版	報告書番号	名称	材質	残存状況	直径(cm)	高さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	色調	備考	1991年概報番号
第28図	PL.9	1	管玉	碧玉	完形	0.75	2.00	0.15-0.40	2.04	濃緑色	片面穿孔	169
第28図	PL.9	2	管玉	碧玉	一部欠け有	0.75	2.20	0.10-0.35	2.13	濃緑色	片面穿孔	169
第28図	PL.9	3	小玉	ガラス	完形	0.80	0.70	0.20	0.60	濃青色　半透明		169
第28図	PL.9	4	小玉	ガラス	完形	0.70	0.50	0.20	0.39	濃青色　不透明		169
第28図	PL.9	5	小玉	ガラス	完形	0.70	0.55	0.20	0.41	濃青色　不透明	引き伸ばし法	169
第28図	PL.9	6	小玉	ガラス	完形	0.75	0.60	0.20	0.45	濃青色　不透明		169
第28図	PL.9	7	小玉	ガラス	完形	0.75	0.50	0.15	0.40	濃青色　不透明		169
第28図	PL.9	8	小玉	ガラス	完形	0.70	0.50	0.20	0.41	濃青色　不透明		169
第28図	PL.9	9	小玉	ガラス	完形	0.60	0.55	0.20	0.26	濃青色　不透明	引き伸ばし法	169

挿図	図版	報告書番号	名称	材質	残存状況	直径（cm）	高さ（cm）	孔径（cm）	重量（g）	色調	備考	1991年概報番号
第28図	PL.9	10	小玉	ガラス	完形	0.75	0.40	0.15	0.35	濃青色　不透明	引き伸ばし法	169
第28図	PL.9	11	小玉	ガラス	一部欠け有	0.70	0.45	0.20	0.32	濃青色　不透明		169
第28図	PL.9	12	小玉	ガラス	完形	0.80	0.40	0.20	0.42	濃青色　不透明	引き伸ばし法	169
第28図	PL.9	13	小玉	ガラス	完形	0.80	0.50	0.20	0.52	濃青色　不透明	引き伸ばし法	169
第28図	PL.9	14	小玉	ガラス	完形	0.70	0.45	0.20	0.33	濃青色（ほぼ黒色）　不透明	引き伸ばし法	169
第28図	PL.9	15	小玉	ガラス	完形	0.70	0.50	0.15-0.20	0.35	濃青色　半透明	引き伸ばし法	169
第28図	PL.9	16	小玉	ガラス	完形	0.75	0.50	0.35	0.31	濃青色　半透明		169
第28図	PL.9	17	小玉	ガラス	完形	0.80	0.60	0.20	0.46	濃青色　半透明		169
第28図	PL.9	18	小玉	ガラス	完形	0.80	0.45	0.20	0.40	濃青色　半透明	引き伸ばし法	169
第28図	PL.9	19	小玉	ガラス	完形	0.75	0.50	0.25	0.36	紺色　不透明		169
第28図	PL.9	20	小玉	ガラス	完形	0.80	0.60	0.20-0.25	0.52	紺色　不透明		169
第28図	PL.9	21	小玉	ガラス	完形	0.65	0.40	0.25	0.20	紺色　不透明		169
第28図	PL.9	22	小玉	ガラス	完形	0.75	0.70	0.20	0.47	紺色　半透明		169
第28図	PL.9	23	小玉	ガラス	完形	0.60	0.50	0.20	0.19	紺色　半透明		169
第28図	PL.9	24	小玉	ガラス	完形	0.60	0.50	0.20	0.23	紺色　半透明		169
第28図	PL.9	25	小玉	ガラス	完形	0.80	0.40	0.20	0.30	紺色　半透明		169
第28図	PL.9	26	小玉	ガラス	完形	0.70	0.80	0.20	0.50	紺色　半透明		169
第28図	PL.9	27	小玉	ガラス	完形	0.65	0.50	0.20	0.35	紺色　半透明		169

須恵器

挿図	図版	報告書番号	細別	出土層位	残存率（%）	口径（cm）	最大径（cm）	器高（cm）	焼成	特徴	色調	備考
第29図	PL.18	1	小型甕	石室覆土	(20)	(22.6)	(39.2)	(9.9)	良	精緻 白色粒子（0.5～1.0mm）少量 赤色粒子（0.5～1.0mm）少量	内：2.5 Y 5/1 黄灰 外：N3/0 暗灰 断面：7.5R5/1 赤灰	外面：格子ふうタタキ？ 内面：同心円文当て具痕 肩部外面自然釉
第29図	PL.18	2	大型甕	表土	-	-	-	(11.8)	良	精緻 白色粒子（0.5～2.0mm）多量 黒色粒子（0.5～1.0mm）微量	内：2.5 Y 6/2 灰黄 外：7.5 Y 3/1 オリーブ黒 断面：2.5 Y 6/2 灰黄	内面自然釉
第29図	PL.18	3	大型甕	石室覆土	-	-	-	(6.6)	良	精緻 白色粒子（0.5～3.0mm）多量 黒色粒子（0.5～1.0mm）微量	内：2.5Y8/2 灰白 外：2.5Y5/1 黄灰 断面：2.5Y8/2 灰白	内面自然釉 口縁部外面暗灰色
第29図	PL.18	4	大型甕	石室覆土	-	-	-	(5.2)	良	精緻 白色粒子（0.5～3.0mm）多量 黒色粒子（0.5～1.0mm）微量	内：2.5Y5/2 暗灰黄 外：7.5 Y 3/1 オリーブ黒 断面：2.5Y5/2 暗灰黄	肩部内面：同心円文当て具痕
第29図	PL.18	5	大型甕	表土	-	-	-	(7.2)	良	精緻 白色粒子（0.5～3.0mm）多量 黒色粒子（0.5～1.0mm）微量	内：2.5Y5/2 暗灰黄 外：2.5Y5/2 暗黄灰 断面：2.5Y5/2 暗灰黄	肩部内面：同心円文当て具痕
第29図	PL.18	6	甕	石室覆土	-	-	-	(5.4)	良	精緻 白色粒子（0.5～1.0mm）微量 黒色粒子（0.5～1.0mm）中量	内：2.5Y6/1 黄灰 外：2.5Y6/2 灰黄 断面：2.5Y6/1 黄灰	外面：格子ふうタタキ 内外面自然釉
第29図	PL.18	7	大型甕	表土	-	-	-	(1.8)	良	精緻 白色粒子（0.5～3.0mm）多量 黒色粒子（0.5～1.0mm）微量	内：2.5Y5/2 暗灰黄 外：2.5Y5/2 暗黄灰 断面：2.5Y5/2 暗灰黄	外面：格子ふうタタキ 内面：同心円文当て具痕 内外面自然釉
第29図	PL.18	8	甕	石室覆土	-	-	-	(18.8)	良	精緻 白色粒子（0.5～2.0mm）少量 黒色粒子（0.5～2.0mm）微量	内：2.5Y6/2 灰黄 外：2.5Y5/1 黄灰 断面：2.5Y5/1 黄灰	外面：格子ふうタタキ？後ハケ 内面：同心円文当て具痕 内面自然釉

挿図	図版	報告書番号	細別	出土層位	残存率（%）	口径（cm）	最大径（cm）	器高（cm）	焼成	特徴	色調	備考
第 29 図	PL.18	9	甕	石室覆土	-	-	-	（15.7	良	精緻 白色粒子（0.5 ～ 2.0㎜）少量 黒色粒子（0.5 ～ 2.0㎜）微量	内：5Y6/1 灰 外：5Y5/1 灰 断面：7.5R5/1 赤灰	外面：格子ふうタタキ？後ハケ 内面：同心円文当て具痕後ナデ
第 29 図	PL.18	10	甕	石室覆土	-	-	-	（13.1	良	精緻 白色粒子（0.5 ～ 2.0㎜）少量 黒色粒子（0.5 ～ 2.0㎜）微量	内：10YR6/1 褐灰 外：2.5Y5/1 黄灰 断面：10YR6/1 褐灰	外面：格子ふうタタキ 内面：同心円文当て具痕

船津Ｌ－第 206 号墳

鉄器

挿図	図版	報告書番号	遺物内容	鉄鏃部位	鏃身部形状・断面形状	現存長（cm）	鏃身部			頸部			茎部			X 線	保存処理
							長さ（cm）	幅（cm）	厚（cm）	長さ（cm）	幅（cm）	厚（cm）	長さ（cm）	幅（cm）	厚（cm）	No.	No.
第 32 図	PL.21	1	大刀													920205K	6682
第 32 図	PL.22	2	鉄鏃	鏃身部～茎部片	尖根五角形式・片丸造	（12.1）	2.5	1.5	0.4	8.2	0.4	0.25	（1.4）	0.3	0.2	920205L	6684
第 32 図	PL.22	3	鉄鏃	鏃身部～頸部片	尖根鑿箭式・片丸造	（14.9）	（0.4）	1.0	0.25	11.1	0.4	0.25	（3.4）	0.3	0.2	920205L	6685
第 32 図	PL.22	4	鉄鏃	鏃身部～頸部片	尖根鑿箭式・片丸造	（6.0）	0.7	1.0	0.2	（5.3）	0.4	0.3				920205M	6690
第 32 図	PL.22	5	鉄鏃	鏃身部～頸部片	尖根鑿箭式・平造	（6.9）	（0.6）	1.0	0.2	（6.3）	0.5	0.3				920205M	6688
第 32 図	PL.22	6	鉄鏃	鏃身部～茎部片	尖根鑿箭式・不明	（13.2）	（0.4）	（0.9）	0.1	10.7	0.3	0.25	（2.1）	0.3	0.3	920205L	6683
第 32 図	PL.22	7	鉄鏃	鏃身部～頸部片	尖根鑿箭式・不明	（6.0）	（0.2）	（0.8	（0.3）	（5.2）	0.35	0.25				920205M	6689
第 32 図	PL.22	8	鉄鏃	頸部片		（4.0）				（4.0）	0.35	0.2				920205M	6695
第 32 図	PL.22	9	鉄鏃	頸部片		（4.5）				（4.5）	0.4	0.2				920205M	6696
第 32 図	PL.22	10	鉄鏃	頸部～茎部片		（8.2）				（6.0）	0.45	0.25	（2.2）	0.3	0.2	920205M	6687
第 32 図	PL.22	11	鉄鏃	頸部～茎部片		（4.1）				（3.5）	0.6	0.3	（0.6）	0.4	0.3	920205M	6691
第 32 図	PL.22	12	鉄鏃	頸部～茎部片		（10.1）				（8.1）	0.4	0.3	（2.0）	0.2	0.2	920205L	6686
第 32 図	PL.22	13	鉄鏃	頸部～茎部片		（7.5）				（5.2）	0.4	0.25	（2.3）	0.3	0.2	920205M	6694
第 32 図	PL.22	14	鉄鏃	茎部片		（5.8）							（5.8）	0.4	0.25	920205M	6692
第 32 図	PL.22	15	鉄鏃	茎部片		（5.4）							（5.4）	0.4	0.2	920205M	6693

装身具

挿図	図版	報告書番号	遺物内容	平面長軸（cm）	平面短軸（cm）	断面長径（cm）	断面形	備考
第 32 図	PL.21	16	耳環	2.60	2.30	0.70	楕円形	
第 32 図	PL.21	17	耳環	2.60	2.30	0.40	円形	

須恵器

挿図	図版	報告書番号	細別	残存率(%)	口径(cm)	最大径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	その他
第 33 図	PL.21	1	杯蓋	95	16.5	16.7	6.3	精緻　細礫（2 ～ 5㎜）少量 白色粒子（0.5 ～ 3.0㎜）中量 黒色粒子（0.5 ～ 1.0㎜）極少量	良	内：2.5 Y 5/1 黄灰 外：2.5 Y 7/3 浅黄 断面：2.5Y 6/2 灰黄	頂部ヘラ記号（×）
第 33 図	PL.20	2	有蓋高杯	(30)	(14.0)	(17.0)	(5.3)	精緻 白色粒子（0.5 ～ 2.0㎜）少量 黒色粒子（0.5 ～ 1.0㎜）少量	良	内：2.5 Y 6/1 黄灰 外：2.5 Y 8/2 浅黄 断面：2.5Y 6/1 灰黄	外面自然釉
第 33 図	PL.21	3	有蓋高杯	(95)	14.8	17.6	(5.0)	精緻 白色粒子（0.5 ～ 2.0㎜）少量 黒色粒子（0.5 ～ 1.0㎜）少量	良	内：2.5 Y 6/1 黄灰 外：2.5 Y 6/1 黄灰 断面：2.5 Y 6/1 黄灰	
第 33 図	PL.21	4	有蓋高杯	(35)	(14.0)	(17.0)	(4.5)	精緻 白色粒子（0.5 ～ 2.0㎜）少量 黒色粒子（0.5 ～ 1.1㎜）少量	良	内：2.5 Y 7/1 灰白 外：2.5 Y 8/1 灰白 断面：2.5Y 6/1 黄灰	外面自然釉
第 33 図	PL.21	5	有蓋高杯	95	14.7	17.8	19.8	精緻 白色粒子（0.5 ～ 2.0㎜）少量 黒色粒子（0.5 ～ 1.0㎜）少量	良	内：2.5 Y 6/1 黄灰 外：2.5 Y 4/1 黄灰 断面：2.5 Y 5/1 黄灰	2 段 2 方透し（1 方は透しが中央を突き抜けて 1 段透し様に） 脚部最大径 17.0cm
第 33 図	PL.21	6	有蓋高杯	95	14.0	17.2	21.6	精緻 白色粒子（0.5 ～ 2.0㎜）少量 黒色粒子（0.5 ～ 1.0㎜）少量	良	内：2.5 Y 6/1 黄灰 外：2.5 Y 5/1 黄灰 断面：2.5 Y 6/1 黄灰	2 段 3 方透し（1 方は透しが中央を突き抜けて 1 段透し様に） 脚部最大径 17.6cm
第 33 図	PL.20	7	無蓋高杯	95	13.0	13.1	21.6	精緻 白色粒子（0.5 ～ 2.0㎜）少量 黒色粒子（0.5 ～ 1.0㎜）微量	良	内：2.5 Y 5/1 黄灰 外：2.5 Y 4/1 黄灰 断面：2.5 Y 5/1 黄灰	2 段 3 方透し（3 方とも透しが中央を突き抜けて 1 段透し様に） 脚部最大径 13.9cm 杯部上段突線と裾部外面に自然釉
第 33 図	PL.20	8	有蓋高杯？	(25)	-	-	3.3	精緻 白色粒子（0.5 ～ 2.0㎜）少量 黒色粒子（0.5 ～ 1.0㎜）微量	良	内：2.5 Y 8/5 浅黄 外：2.5 Y 5/1 黄灰 断面：2.5 Y 7/1 灰白	透しあり 脚部最大径 17.1cm（反転） 内面自然釉
第 33 図	PL.21	9	壷蓋	97	7.7	10.4	2.1	精緻 白色粒子（0.5 ～ 1.0㎜）微量 黒色粒子（0.5 ～ 1 0㎜）多量	良	内：5 Y 5/1 灰 外：5 Y 5/1 灰 断面：5 Y 5/1 灰	粘土粒付着
第 33 図	PL.20	10	壷 or 瓶類	(25)	(8.8)	(9.4)	(4.0)	精緻 白色粒子（0.5 ～ 2.0㎜）少量 黒色粒子（0.5 ～ 1.0㎜）微量	良	内：2.5 Y 6/1 黄灰 外：2.5 Y 6/1 黄灰 断面：2.5 Y 7/2 黄灰	内外面自然釉
第 33 図	PL.20	11	長頸壷 or 瓶	(70)	(10.5)	(10.7)	(11.7)	精緻 白色粒子（0.5 ～ 2.0㎜）少量 黒色粒子（0.5 ～ 2.0㎜）少量	良	内：2.5 Y 5/1 黄灰 外：2.5 Y 5/2 暗黄灰 断面：2.5 Y 6/1 黄灰	内外面自然釉
第 33 図	PL.20	12	広口壷 or 瓶	(20)	(14.2)	(15.1)	(4.3)	精緻 白色粒子（0.5 ～ 1.0㎜）微量 黒色粒子（0.5 ～ 1.0㎜）微量	良	内：2.5 Y 6/1 黄灰 外：5 Y 5/1 灰 断面：2.5 Y 6/1 黄灰	
第 33 図	PL.20	13	甕	20 以下	-	-	(9.5)	精緻 白色粒子（0.5 ～ 2.0㎜）微量 黒色粒子（0.5 ～ 1.0㎜）微量	良	内：5 Y 5/1 灰 外：5 Y 5/1 灰 断面：5 Y 5/1 灰	外面：格子ふうタタキ 内面：同心円文当て具痕
第 33 図	PL.20	14	甕	20 以下	-	-	(13.0)	精緻 白色粒子（0.5 ～ 2.0㎜）少量 黒色粒子（0.5 ～ 1.0㎜）微量	良	内：5 Y 5/1 灰 外：5 Y 6/1 灰 断面：5 Y 5/1 灰	外面：格子ふうタタキ 内面：同心円文当て具痕
第 33 図	PL.20	15	甕	20 以下	-	-	(5,5)	精緻 白色粒子（0.5 ～ 1.0㎜）微量 黒色粒子（0.5 ～ 1.0㎜）微量	良	内：5 Y 5/1 灰 外：5 Y 5/1 灰 断面：5 Y 5/1 灰	外面：格子ふうタタキ 内面：同心円文当て具痕

船津Ｌ－第 207 号墳

玉類

挿図	図版	報告書番号	名称	原図番号	材質	残存状況	直径・幅(cm)	高さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	色調	備考
第 38 図	PL.24	1	勾玉	なし	瑪瑙	完形	1.80	3.40	0.20-0.40	6.11	橙色　半透明	片面穿孔
第 38 図	PL.24	2	切子玉	なし	水晶	完形	1.40	1.90	0.10-0.30	4.44	白色　半透明	片面穿孔
第 38 図	PL.24	3	切子玉	なし	水晶	完形	1.40	1.70	0.10-0.30	3.89	白色　半透明	片面穿孔
第 38 図	PL.24	4	切子玉	なし	水晶	完形	1.20	1.70	0.15-0.40	3.02	白色　半透明	片面穿孔
第 38 図	PL.24	5	切子玉	なし	水晶	完形	1.10	1.90	0.17-0.30	2.70	白色　半透明	片面穿孔
第 38 図	PL.24	6	管玉	なし	碧玉	一部欠け	0.90	(1.60)	0.20-0.30	2.65	濃緑色	片面穿孔、欠損後に再利用
第 38 図	PL.24	7	線状貼付ガラス玉	なし	ガラス	一部欠け？	1.60	1.30	0.30-0.40	4.05	濃青色・淡黄色　不透明	剥落痕の可能性がある円形の窪みが３ヶ所あり（線状貼付斑点文ガラス玉の可能性）
第 38 図	PL.24	8	丸玉	なし	ガラス	完形	1.30	0.90	0.30	1.78	紺色　不透明	巻き付け法
第 38 図	PL.24	9	丸玉	なし	ガラス	完形	1.20	0.95	0.25	1.60	紺色　不透明	巻き付け法
第 38 図	PL.24	10	丸玉	なし	ガラス	完形	1.20	0.95	0.25	1.66	紺色　不透明	巻き付け法
第 38 図	PL.24	11	丸玉	なし	ガラス	完形	1.25	1.00	0.30	1.58	紺色　不透明	巻き付け法
第 38 図	PL.24	12	丸玉	なし	ガラス	完形	1.20	0.95	0.30	1.49	紺色　不透明	巻き付け法
第 38 図	PL.24	13	丸玉	なし	ガラス	完形	1.20	0.90	0.30	1.55	紺色　不透明	巻き付け法
第 38 図	PL.24	14	丸玉	なし	ガラス	完形	1.20	0.90	0.30	1.55	濃青色　不透明	巻き付け法
第 38 図	PL.24	15	丸玉	なし	ガラス	完形	1.10	1.00	0.30	1.53	紺色　不透明	巻き付け法
第 38 図	PL.24	16	丸玉	なし	ガラス	完形	1.10	0.80	0.30	1.17	濃青色　半透明	巻き付け法
第 38 図	PL.24	17	丸玉	なし	ガラス	完形	1.10	0.90	0.30	1.28	紺色　不透明	巻き付け法
第 38 図	PL.24	18	丸玉	なし	ガラス	完形	1.10	0.80	0.25	1.24	紺色　不透明	巻き付け法
第 38 図	PL.24	19	丸玉	なし	ガラス	完形	1.00	0.80	0.25	1.00	濃青色　半透明	巻き付け法？
第 38 図	PL.24	20	小玉	なし	ガラス	完形	1.15	0.80	0.20	1.21	淡青色　半透明	引き伸ばし法
第 38 図	PL.24	21	小玉	なし	ガラス	完形	1.10	0.80	0.25	1.26	紺色　半透明	引き伸ばし法？
第 38 図	PL.24	22	小玉	なし	ガラス	完形	0.90	0.60	0.15	0.62	淡青色　半透明	引き伸ばし法
第 38 図	PL.24	23	小玉	なし	ガラス	完形	0.90	0.60	0.20	0.68	紺色　半透明	引き伸ばし法
第 38 図	PL.24	24	小玉	なし	ガラス	完形	0.90	0.60	0.15	0.62	淡青色　半透明	引き伸ばし法
第 38 図	PL.24	25	小玉	なし	ガラス	完形	1.00	0.50	0.15	0.71	濃青色　半透明	引き伸ばし法
第 38 図	PL.24	26	小玉	なし	ガラス	完形	0.90	0.40	0.25-0.30	0.53	淡青色　半透明	引き伸ばし法
第 38 図	PL.24	27	小玉	なし	ガラス	完形	0.90	0.50	0.25	0.60	濃青色　半透明	引き伸ばし法
第 38 図	PL.24	28	小玉	なし	ガラス	完形	0.90	0.50	0.20	0.61	紺色　不透明	引き伸ばし法
第 38 図	PL.24	29	小玉	なし	ガラス	完形	0.90	0.55	0.15	0.67	濃青色　半透明	引き伸ばし法
第 38 図	PL.24	30	小玉	なし	ガラス	完形	0.80	0.60	0.20	0.60	濃青色　不透明	引き伸ばし法
第 38 図	PL.24	31	小玉	なし	蛇紋岩	完形	0.90	0.60	0.30	0.67	青黒色　不透明	a 類
第 38 図	PL.24	32	小玉	なし	ガラス	完形	0.90	0.55	0.20	0.57	濃青色　半透明	引き伸ばし法
第 38 図	PL.24	33	小玉	なし	蛇紋岩	完形	0.70	0.60	0.25	0.55	青黒色　不透明	a 類
第 38 図	PL.24	34	小玉	なし	蛇紋岩	完形	0.80	0.60	0.25	0.55	青黒色　不透明	a 類
第 38 図	PL.24	35	小玉	なし	蛇紋岩	完形	0.80	0.70	0.30	0.72	青黒色　不透明	a 類
第 38 図	PL.24	36	小玉	なし	蛇紋岩	完形	0.90	0.70	0.30	0.69	青黒色（風化顕著）　不透明	b 類
第 38 図	PL.24	37	小玉	なし	蛇紋岩	一部欠け	0.90	0.70	0.30	0.57	青黒色（風化顕著）　不透明	b 類
第 38 図	PL.24	38	小玉	なし	蛇紋岩	完形	0.90	0.60	0.30	0.67	黄橙色（風化顕著）　不透明	b 類
第 38 図	PL.24	39	小玉	なし	蛇紋岩	完形	0.80	0.70	0.30	0.54	青黒色（風化顕著）　不透明	b 類
第 38 図	PL.24	40	丸玉	なし	銅	完形	0.90	1.00	0.30	2.35		中実
第 38 図	PL.24	41	丸玉	なし	銅	完形	0.95	0.80	0.25	2.61		中実

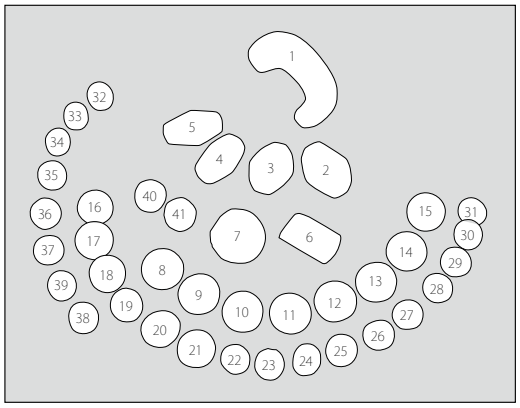
船津Ｌ－第 190・218 号墳

須恵器

挿図	図版	出土古墳	報告書番号	細別	残存率(%)	口径(cm)	最大径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	その他
第 41 図	PL.26	L-190 号墳	1	大型甕	(20)	(26.0)	(27.3)	(6.3)	精緻 白色粒子（0.5 ～ 2.0㎜）微量 黒色粒子（0.5 ～ 2.0㎜）少量	良	内：2.5 Y 6/2 灰黄 外：2.5 Y 6/3 にぶい黄 断面：2.5 Y 6/2 灰黄	外面自然釉
第 41 図	PL.26	L-190 号墳	2	広口壷	50	(16.2)	28.0	27.3	精緻 白色粒子（0.5 ～ 1.0㎜）少量 黒色粒子（0.5 ～ 2.0㎜）微量	良	内：2.5 Y 5/1 黄灰 外：2.5 Y 5/2 暗灰黄 断面：2.5 Y 5/1 黄灰	外面：平行タタキ後ヨコナデ 内面：ヨコナデ 内外面自然釉
第 41 図	PL.26	L-190 号墳	3	甕	-	-	-	(4.7)	精緻 白色粒子（0.5 ～ 1.0㎜）微量 黒色粒子（0.5 ～ 1.0㎜）中量	良	内：2.5 Y 5/2 暗灰黄 外：2.5 Y 7/3 浅黄 断面：2.5 Y 5/2 暗灰黄	外面自然釉
第 41 図	PL.26	L-190 号墳	4	甕	-	-	-	(12.0)	精緻 白色粒子（0.5 ～ 2.0㎜）微量 黒色粒子（0.5 ～ 1.0㎜）少量	良	内：2.5 Y 7/2 灰黄 外：2.5 Y 6/2 灰黄 断面：2.5 Y 7/2 灰黄	外面：平行タタキ 内面：ナデ
第 41 図	PL.26	L-218 号墳	5	甕	-	-	-	(6.9)	精緻 白色粒子（0.5 ～ 2.0㎜）中量 黒色粒子（0.5 ～ 1.0㎜）微量	良	内：7.5 Y 4/1 灰 外：10 Y 3/1 オリーブ黒 断面：7.5 Y 5/1 灰	外面：平行タタキ？後ハケ 内面：同心円文当て具痕後ヨコナデ 外面火襷

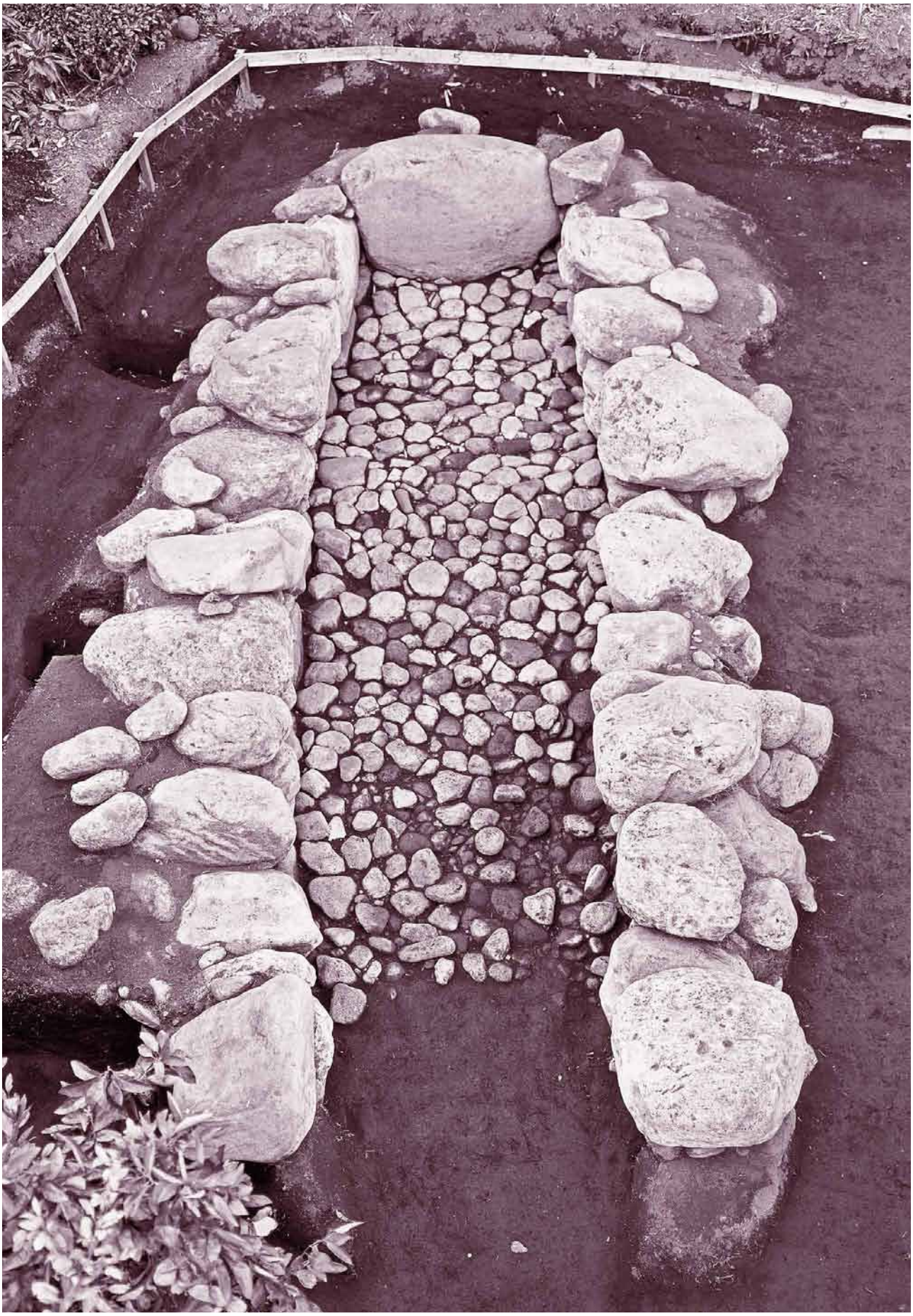
写真図版

PLATE



船津 L- 第 207 号墳　玉類集合（PL.24 上段）　報告番号対応図

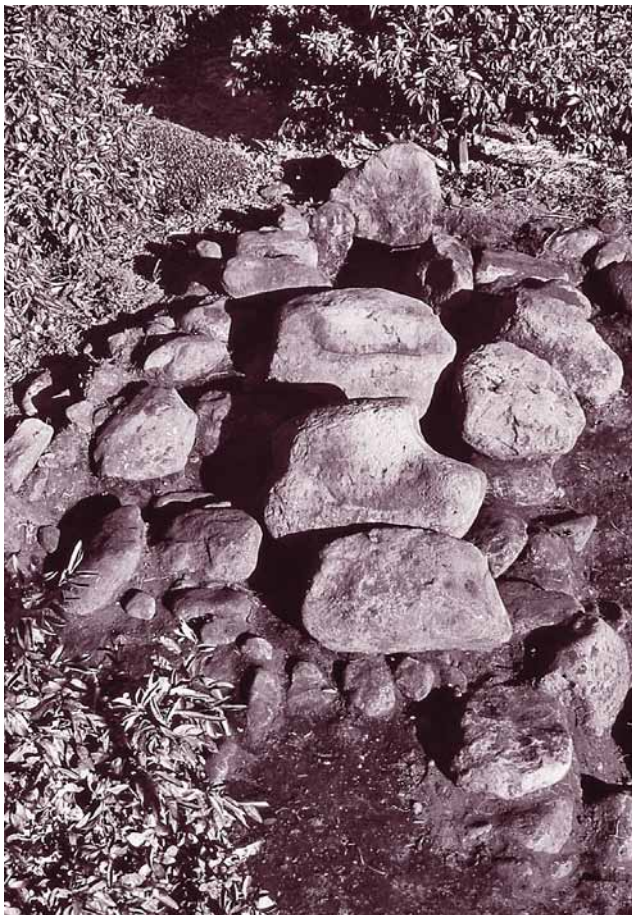
【写真図版表紙】　船津 L- 第 62 号墳出土遺物集合（撮影：杉本和樹）



1．船津 L- 第 62 号墳　第 1 次床面検出状況（南から）

PL.2　船津 L- 第 62 号墳

1. 船津 L- 第 62 号墳　調査前現況（南から）

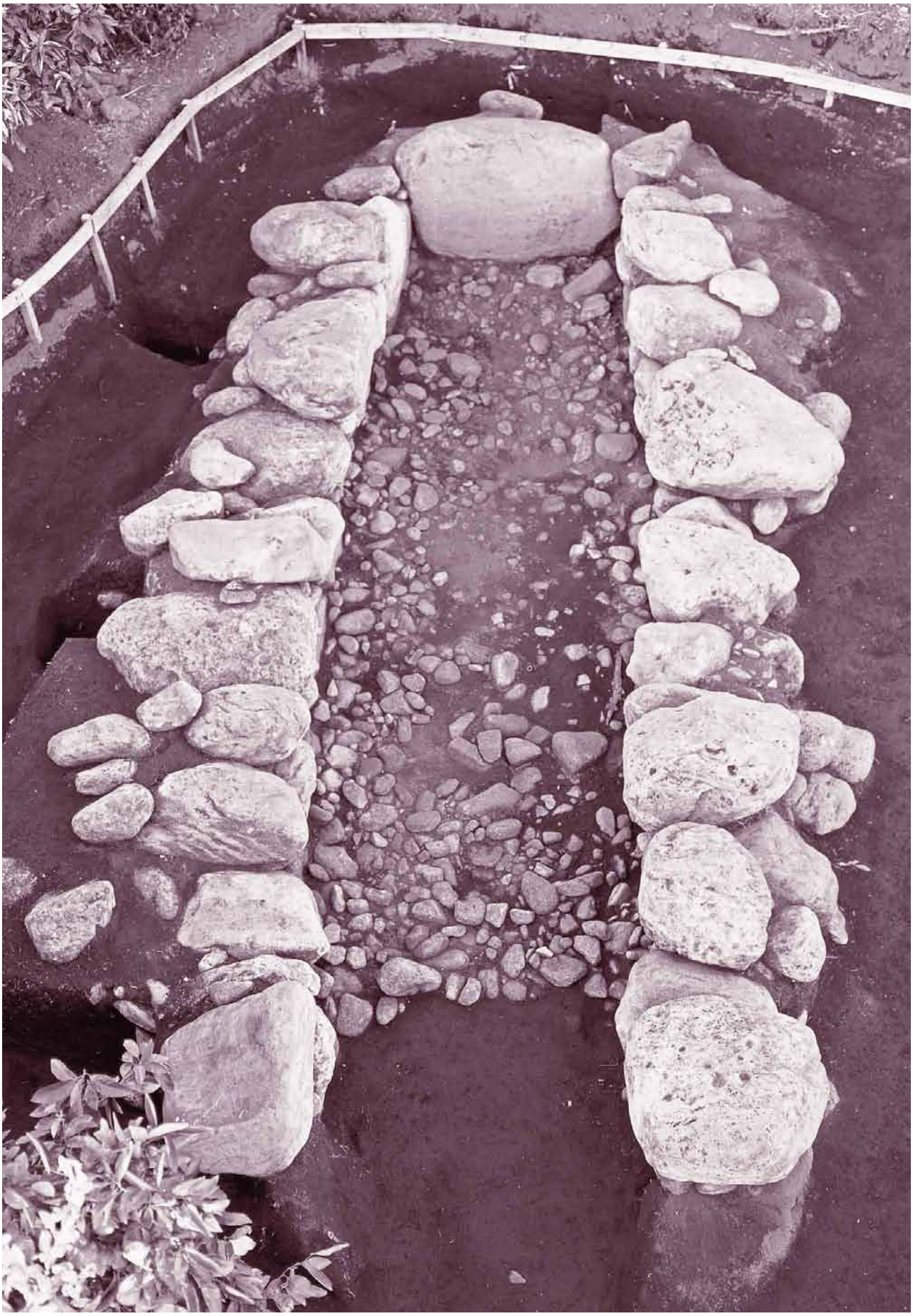


2. 船津 L- 第 62 号墳　表土除去状況（南から）

3. 船津 L- 第 62 号墳　石室全景（南から）

4. 船津 L- 第 62 号墳　石室閉塞部（石室外から）

5. 船津 L- 第 62 号墳　石室閉塞部（石室内から）

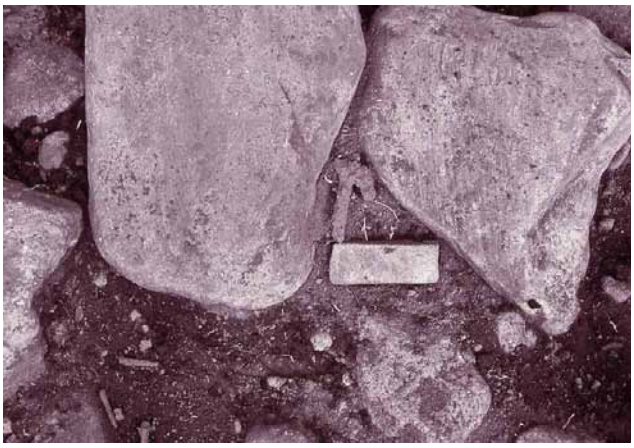


1．船津 L- 第 62 号墳　第 2 次床面検出状況（南から）

PL.4　船津 L- 第 62 号墳

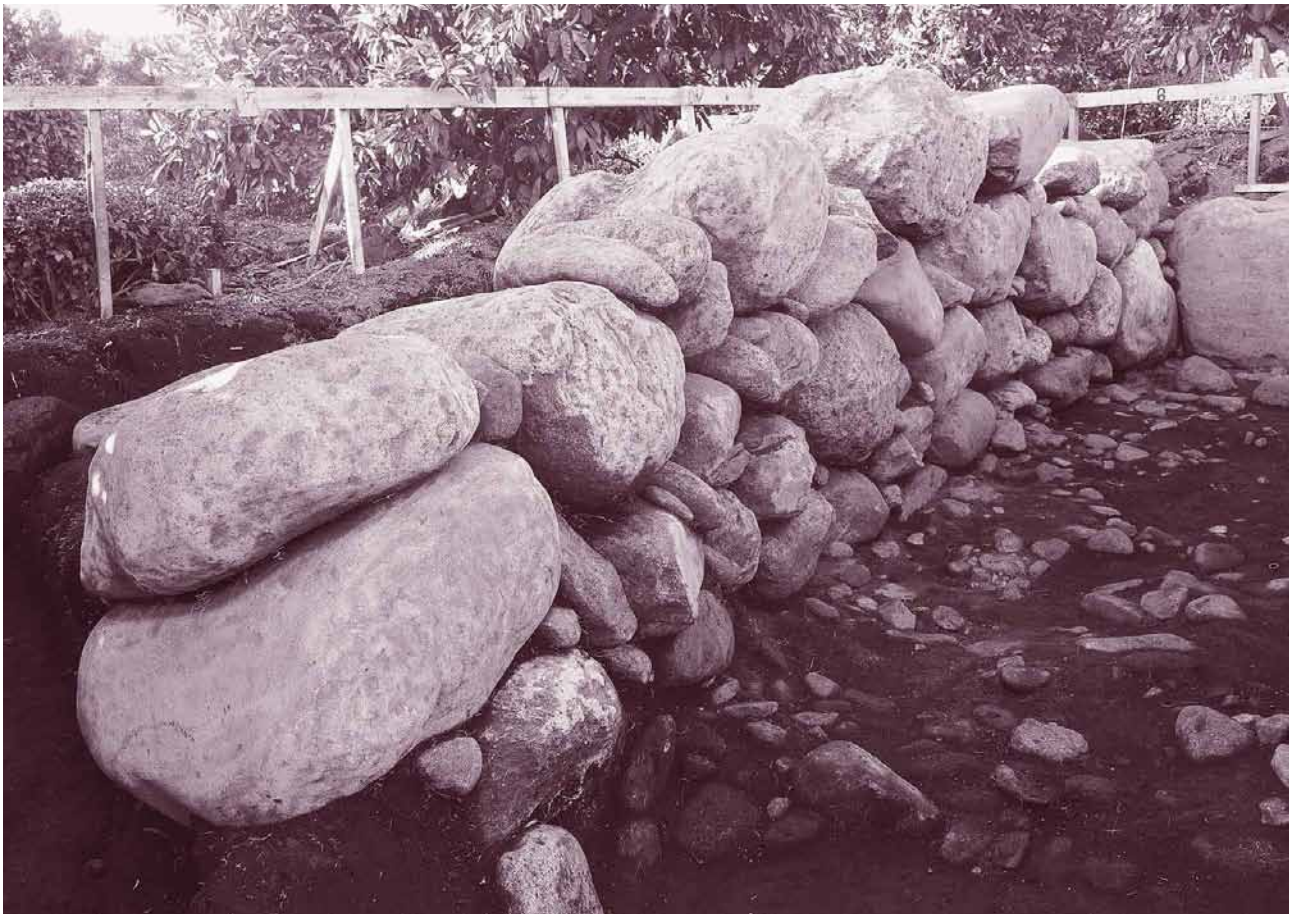
1. 船津 L- 第 62 号墳　石室閉塞部の最下部

2. 船津 L- 第 62 号墳　石室奥壁（南から）

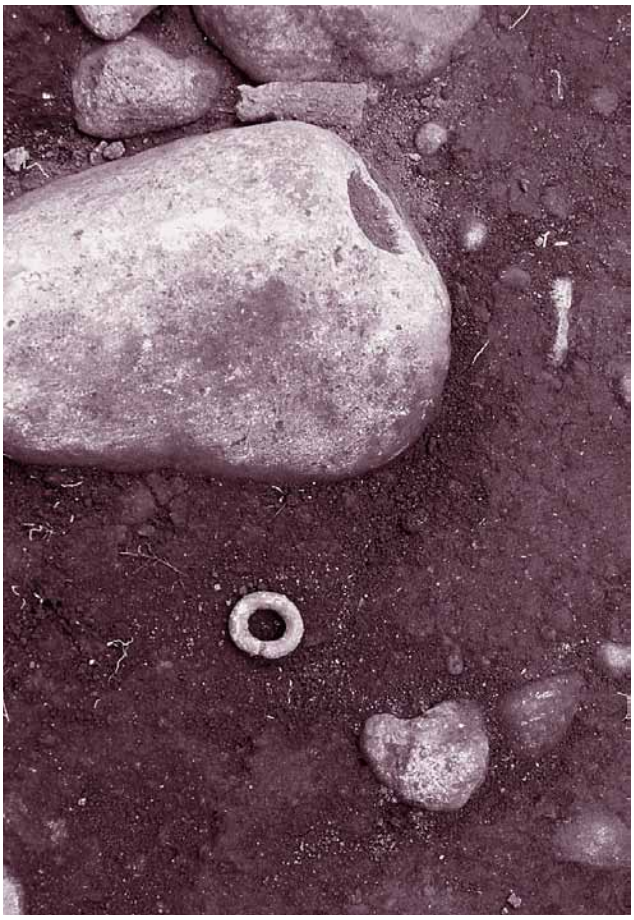


3. 船津 L- 第 62 号墳　遺物出土状況（鉄鏃・砥石）

4. 船津 L- 第 62 号墳　遺物出土状況（馬具・鉄鏃）



5. 船津 L- 第 62 号墳　石室右側壁（南から）



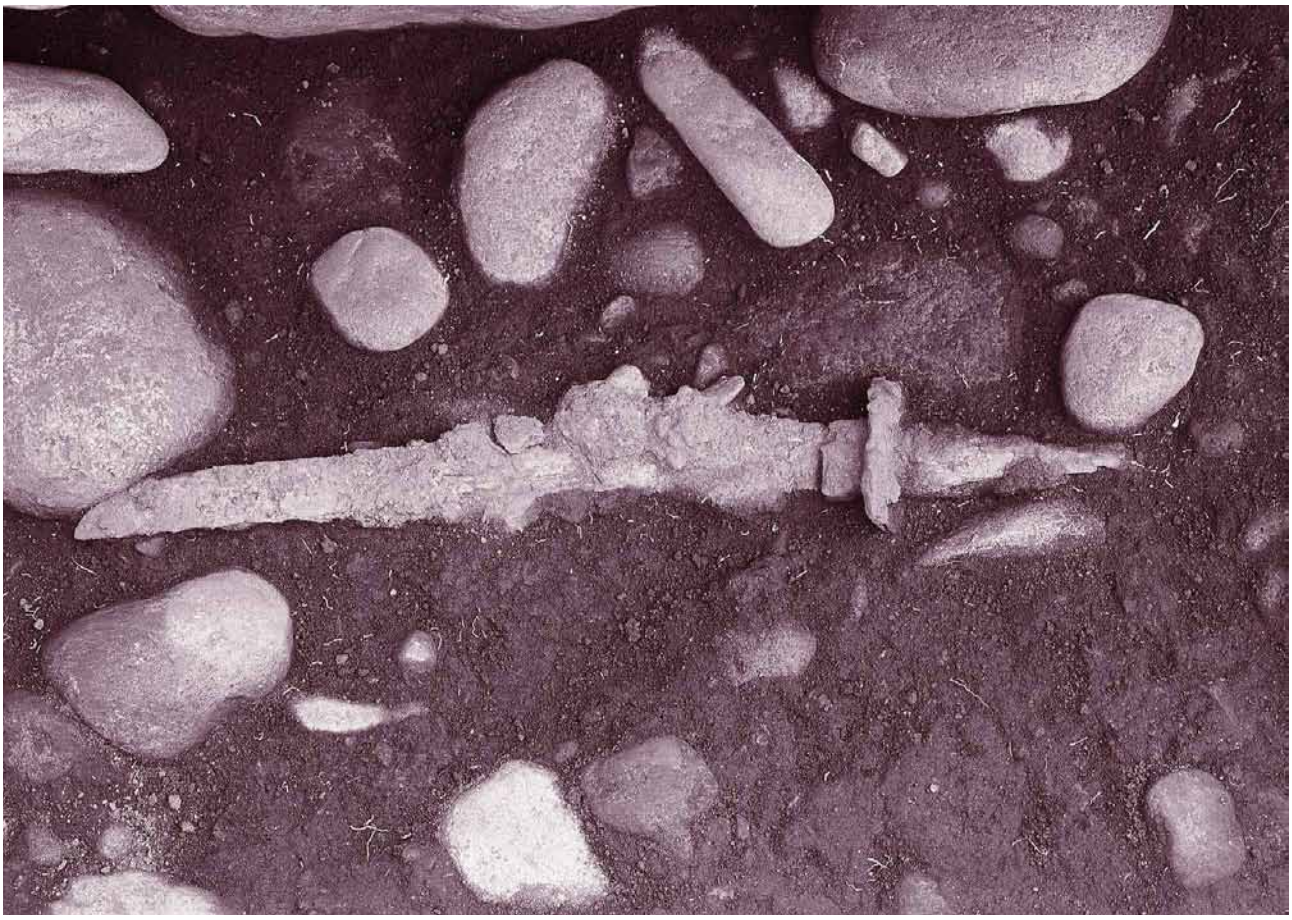
1. 船津 L- 第 62 号墳　遺物出土状況（耳環・刀子）

2. 船津 L- 第 62 号墳　遺物出土状況（玉類）

3. 船津 L- 第 62 号墳　調査の様子

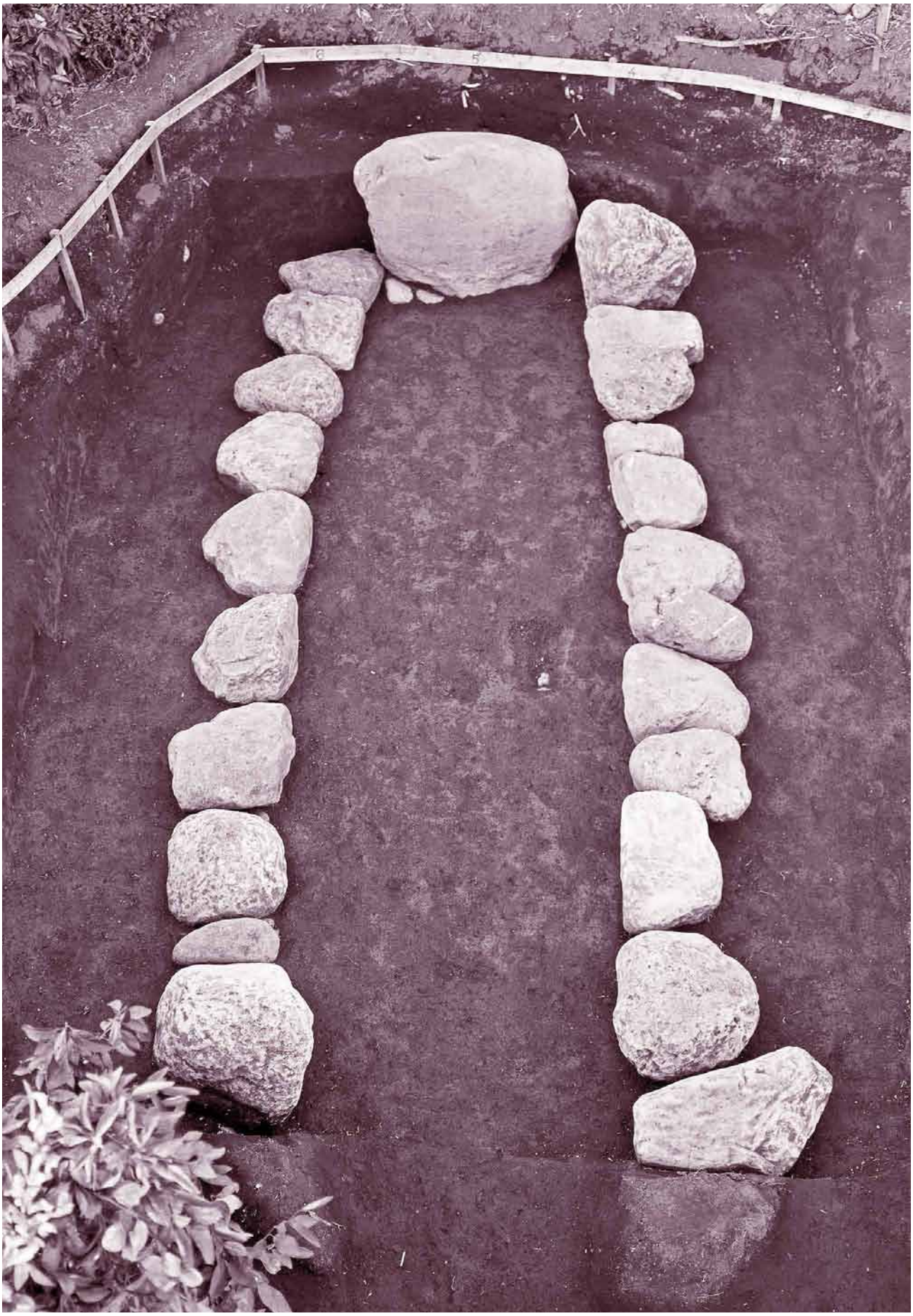
4. 船津 L- 第 62 号墳　石室左側壁（南から）

PL.6　船津 L- 第 62 号墳



1．船津 L- 第 62 号墳　遺物出土状況（小刀）

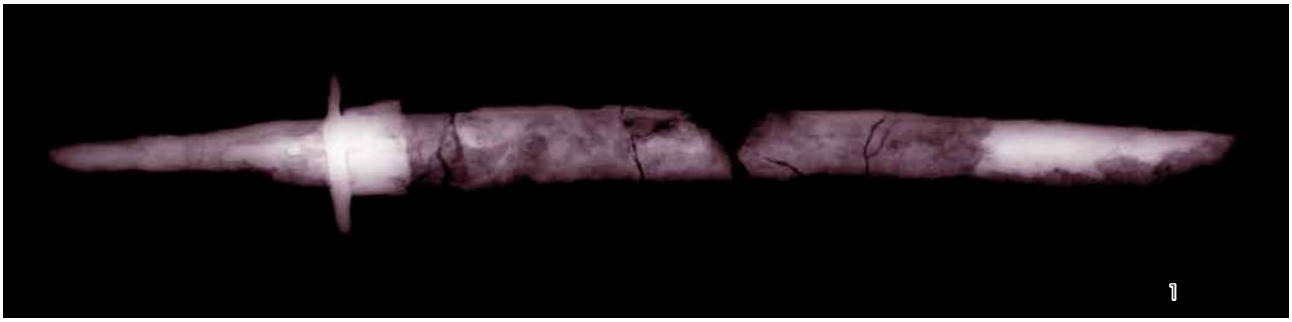
2．船津 L- 第 62 号墳　遺物出土状況（馬具）

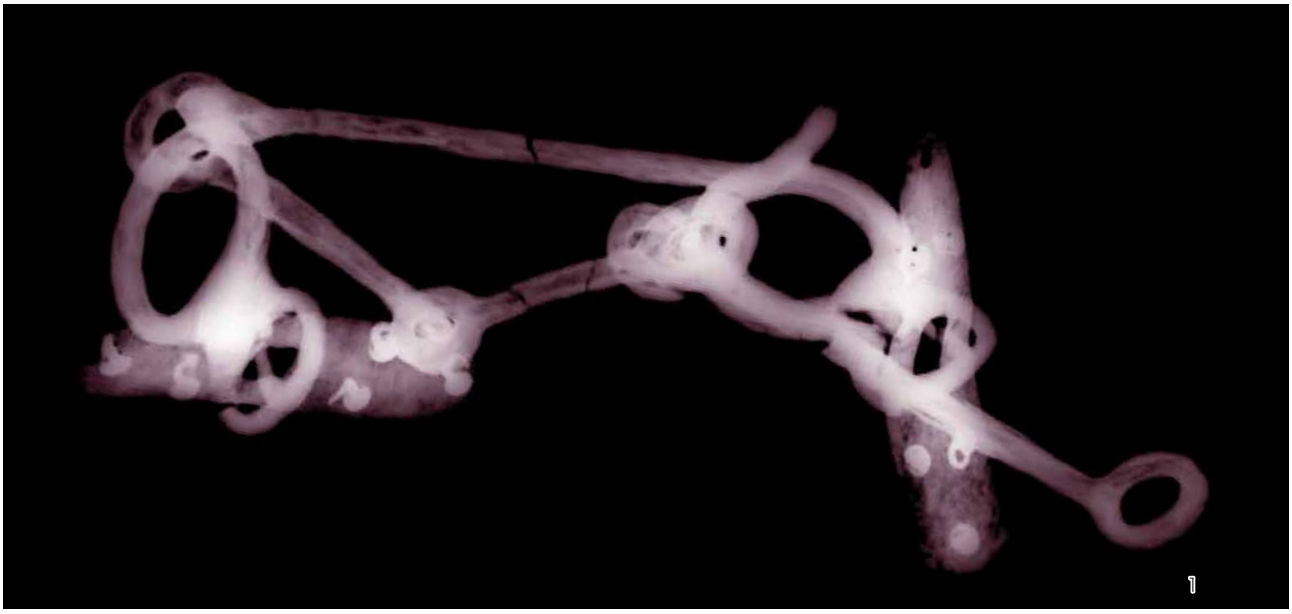


1．船津 L- 第 62 号墳　石室基底石検出状況（南から）

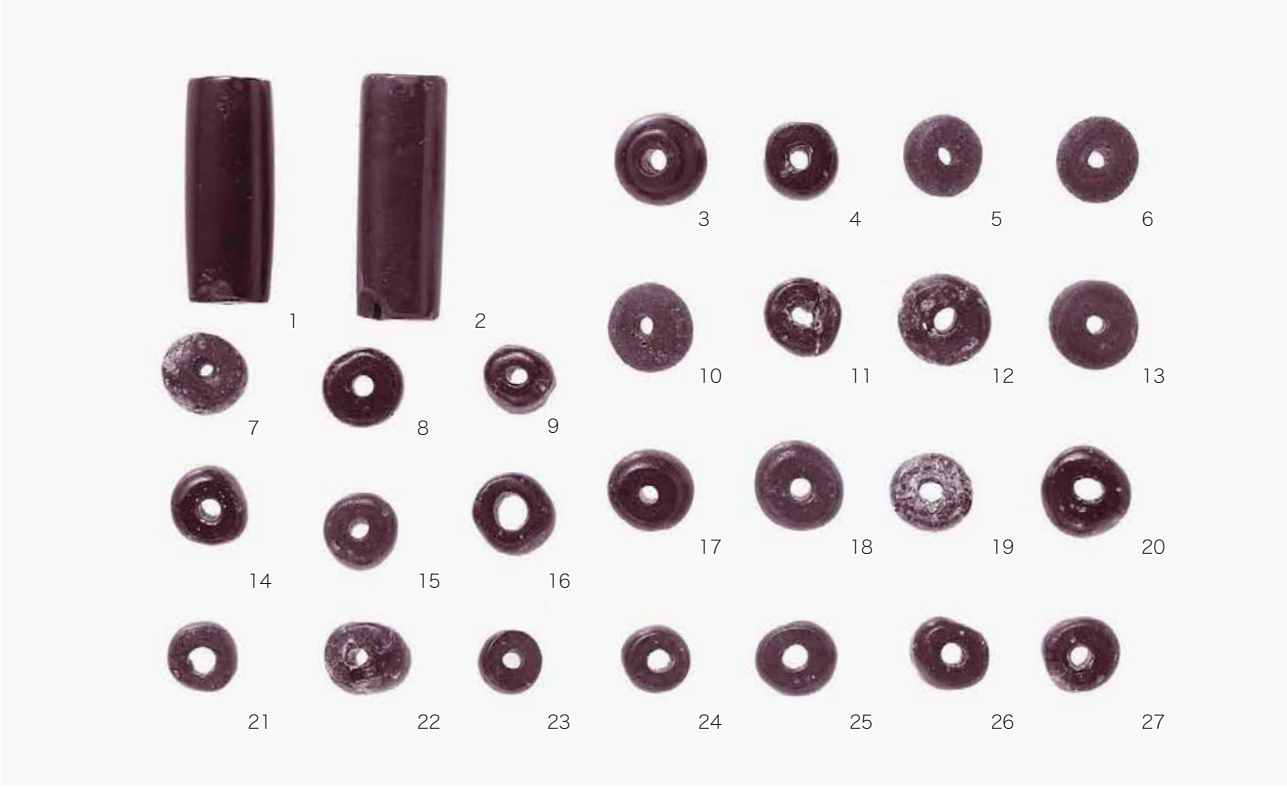
PL.8　船津 L- 第 62 号墳

船津 L- 第 62 号墳　出土遺物



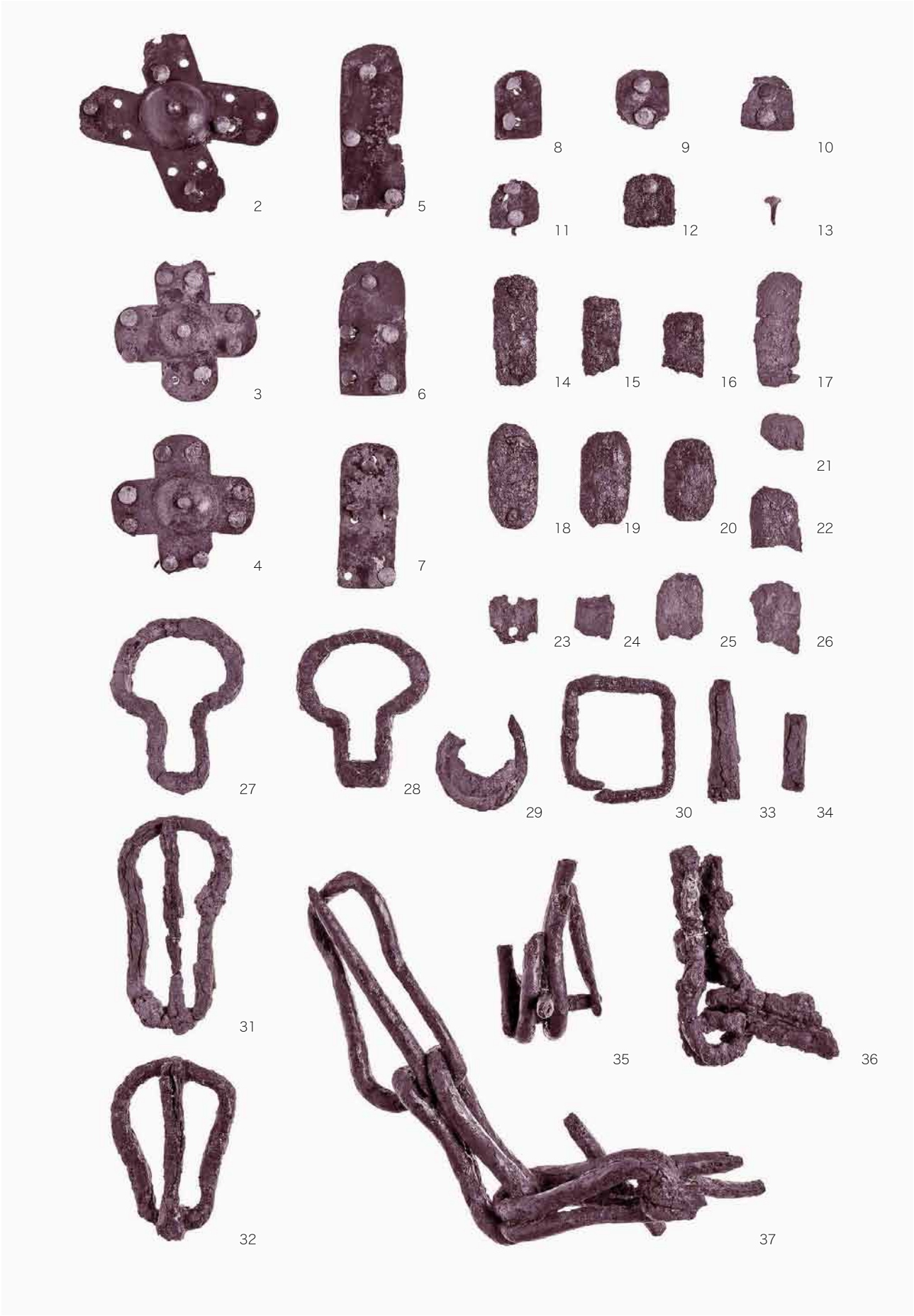


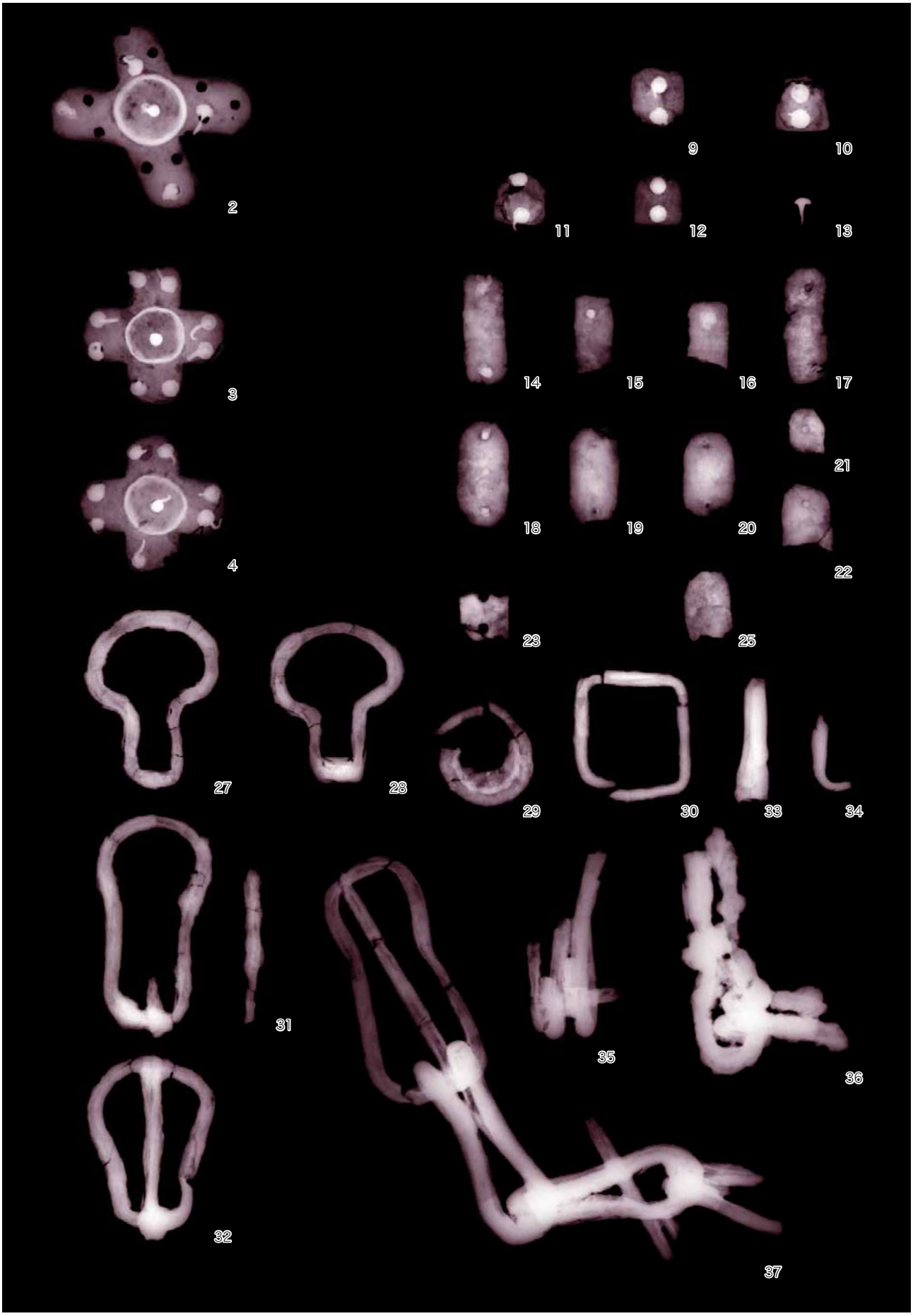
船津 L- 第 62 号墳　出土遺物



PL.10 船津 L- 第 62 号墳

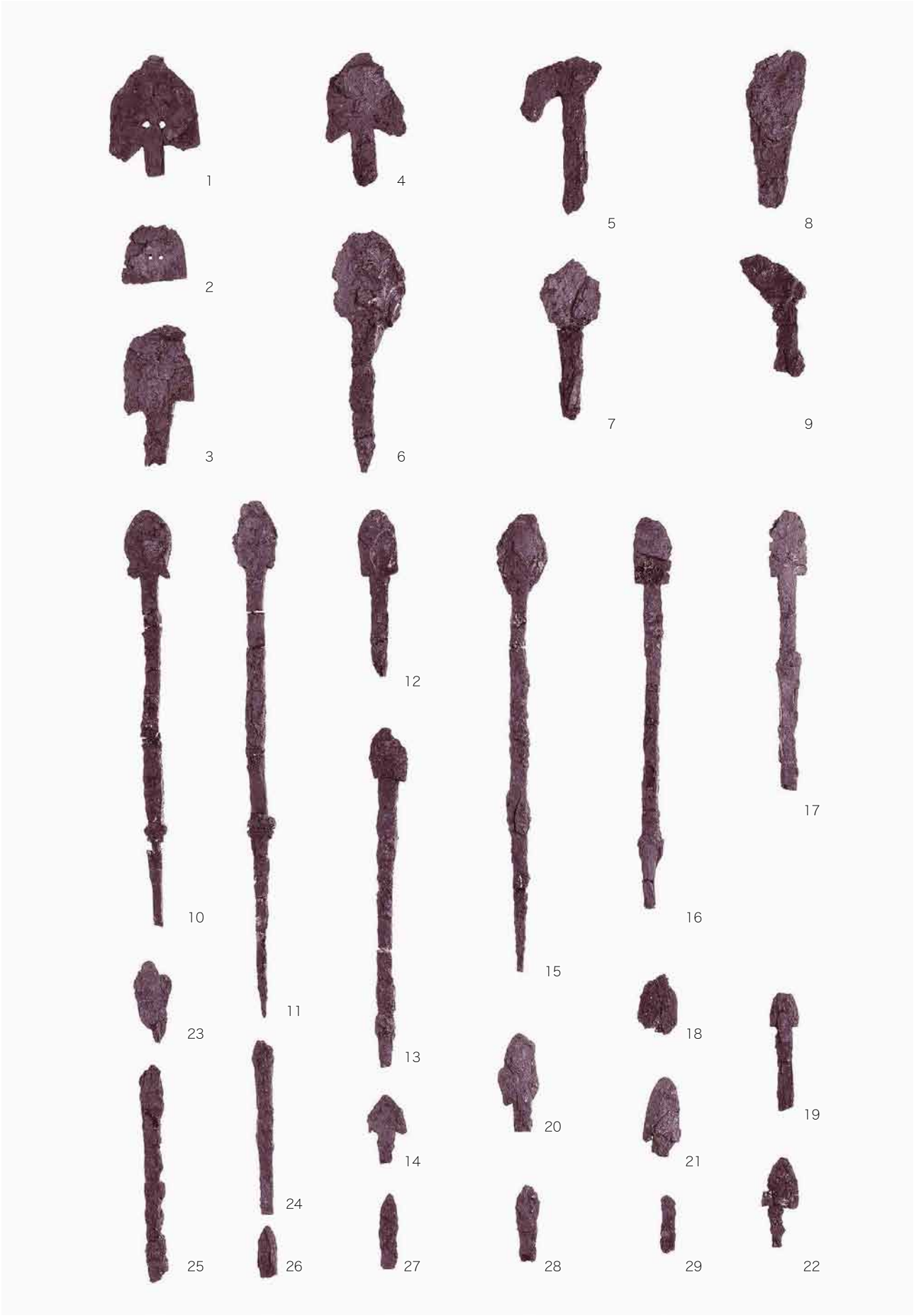
船津 L- 第 62 号墳　出土遺物

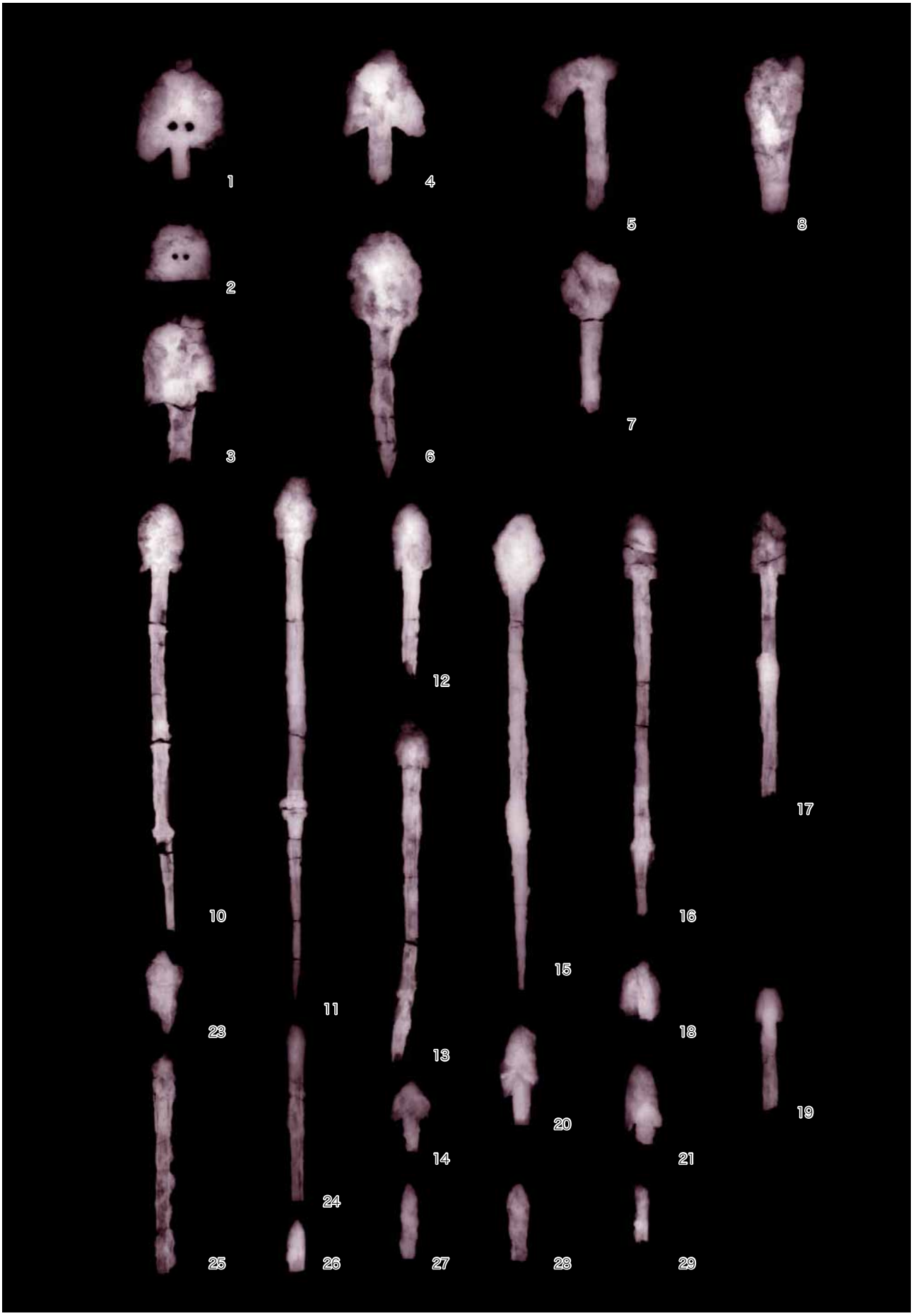



2
9
10
11
12
13
3
14
15
16
17
4
18
19
20
21
22
23
25
27
28
29
30
33
34
31
35
36
32
37

PL.12 船津 L- 第 62 号墳

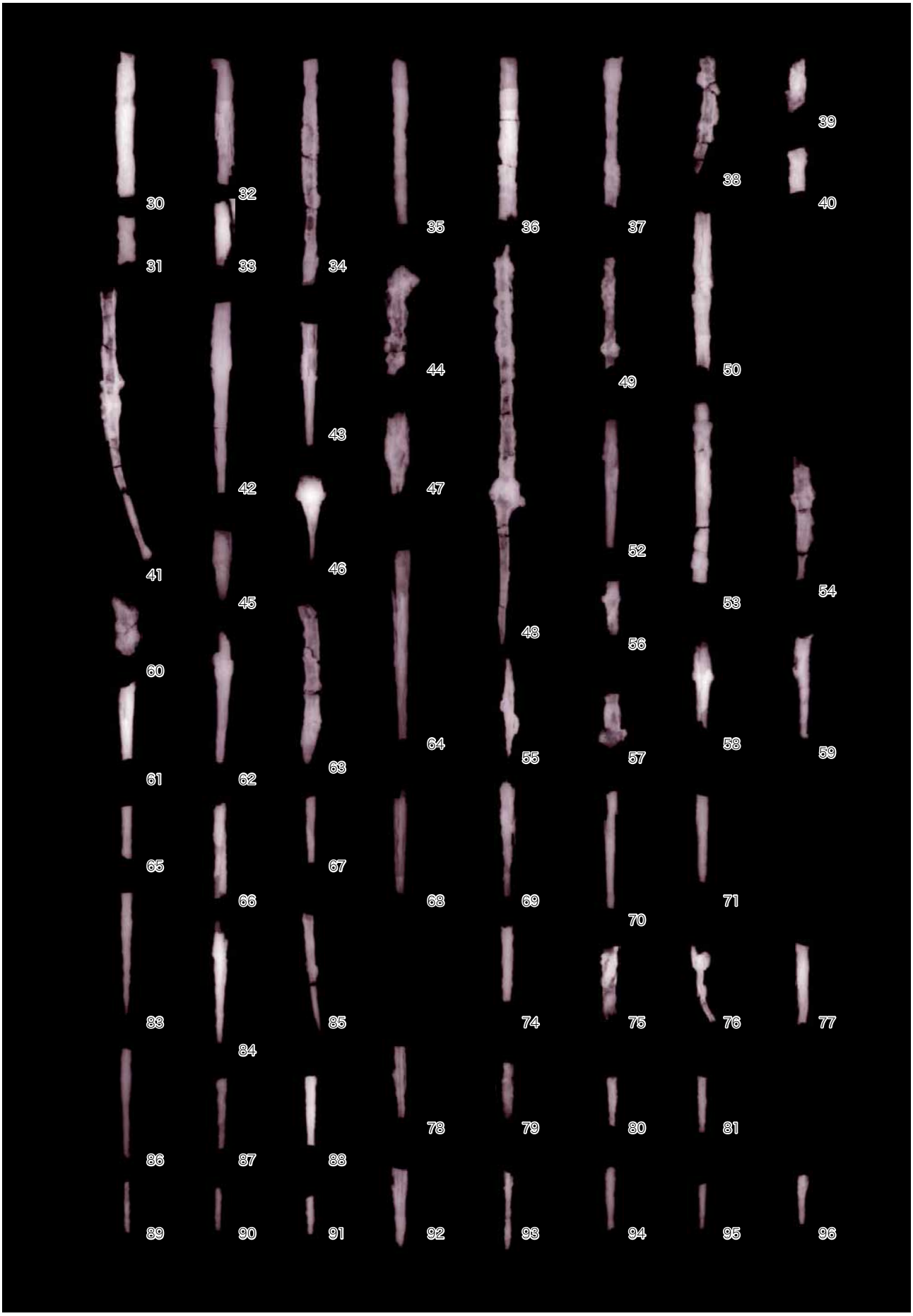
船津 L- 第 62 号墳　出土遺物




1
4
5
8
2
7
3
6
12
17
10
16
15
11
23
18
13
19
20
14
21
24
25
26
27
28
29

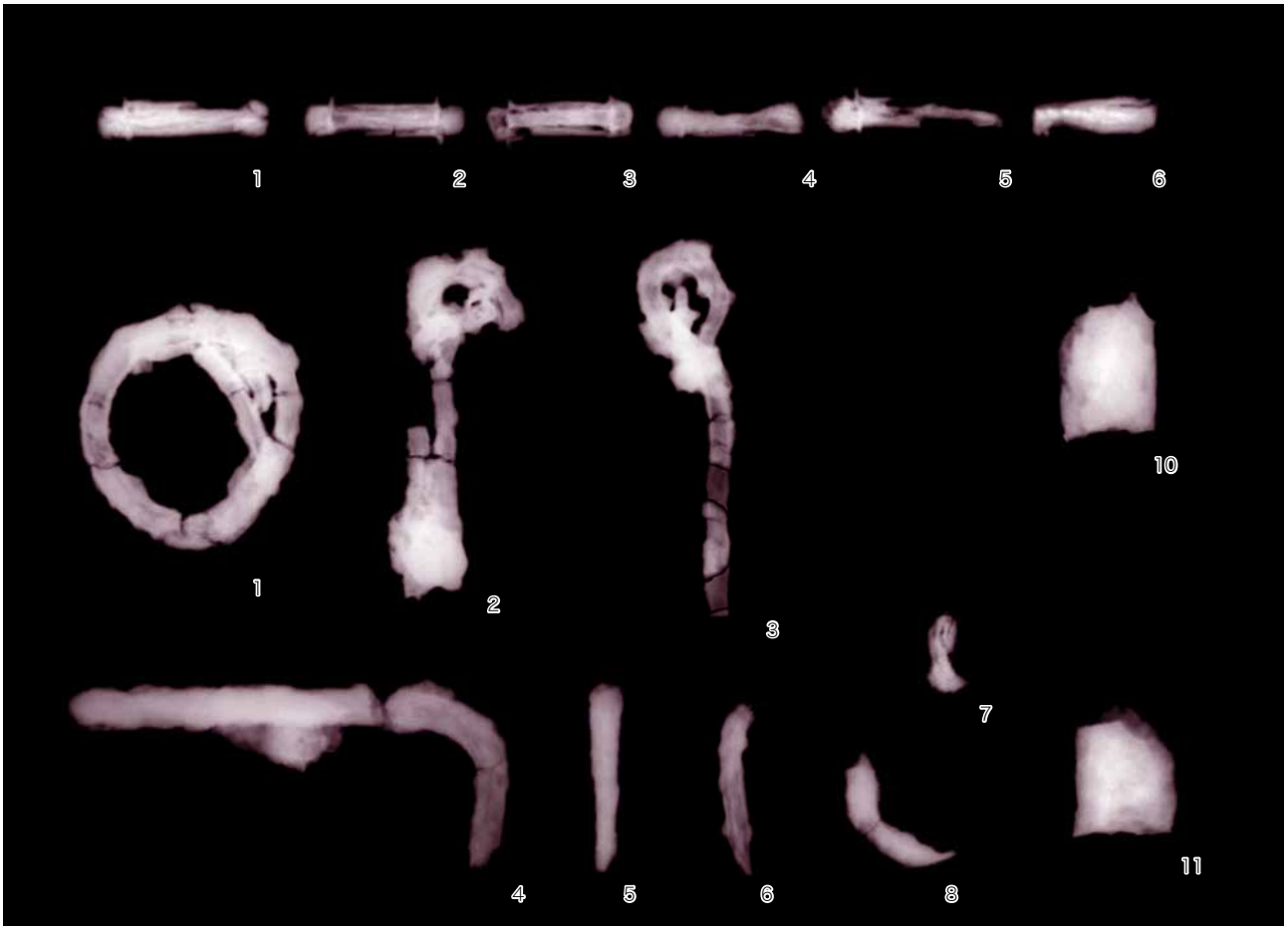
PL.14 船津 L- 第 62 号墳

船津 L- 第 62 号墳　出土遺物

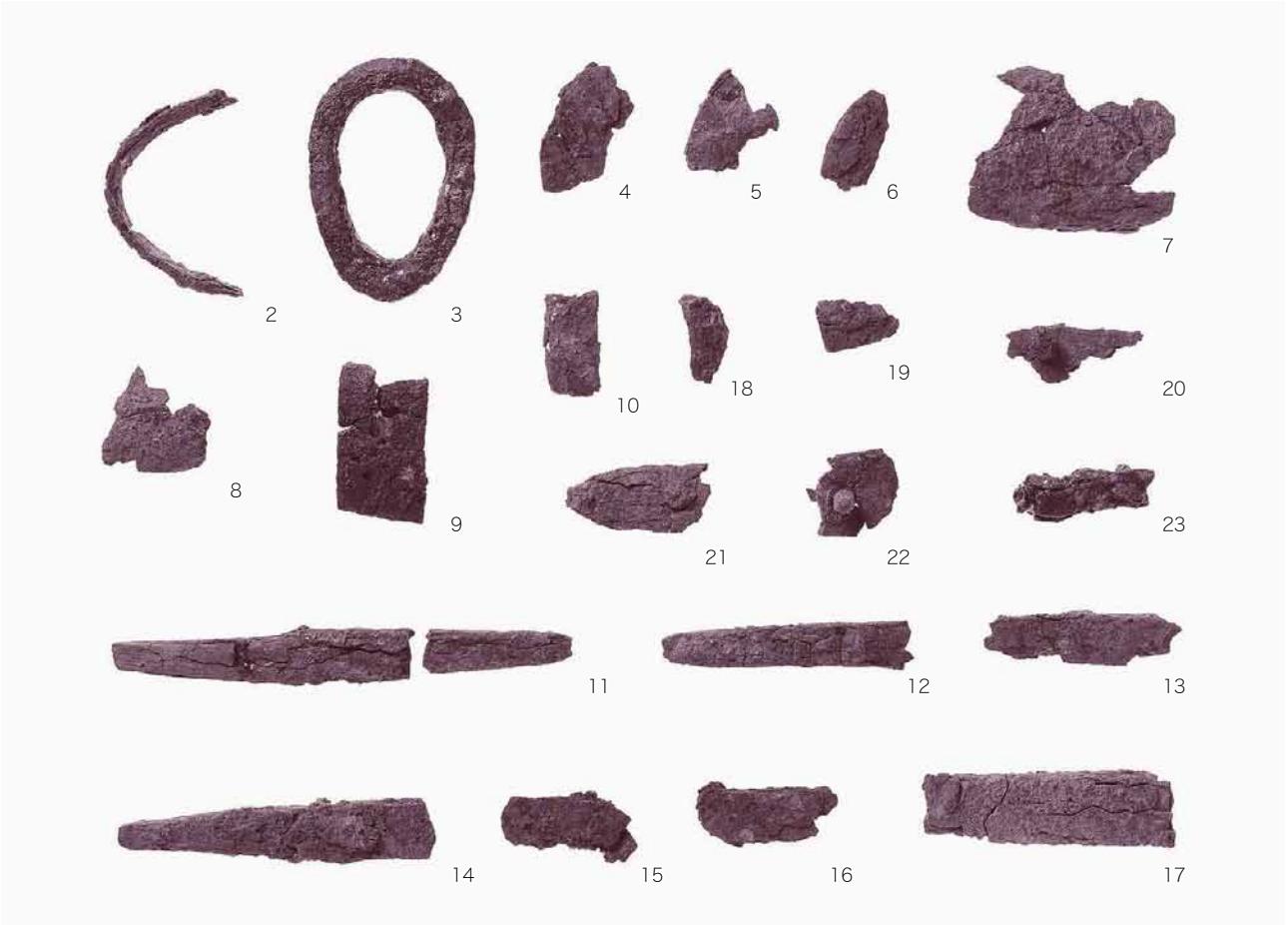

30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
74
75
76
77
78
79
80
81
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96

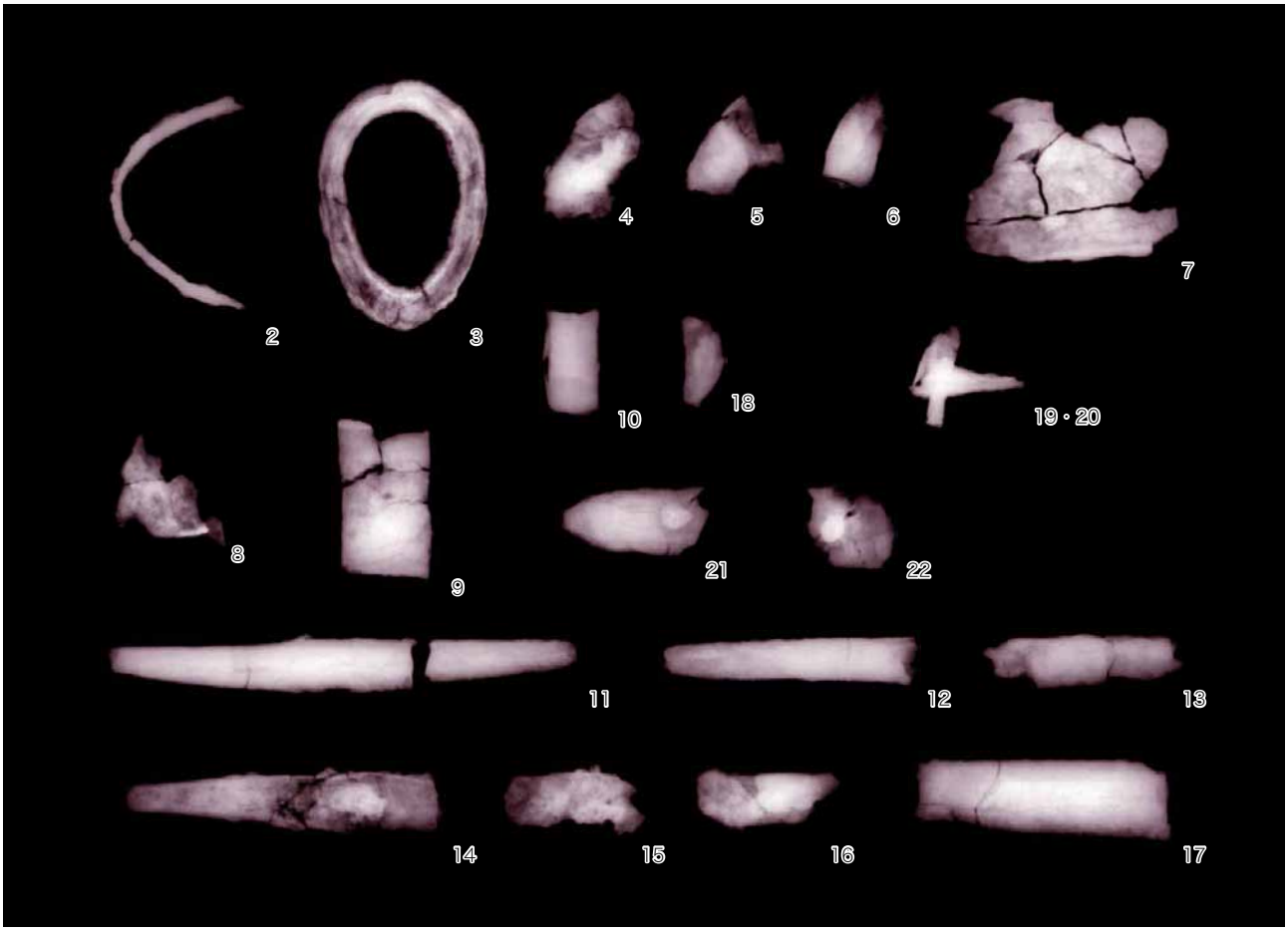
PL.16 船津 L- 第 62 号墳

船津 L- 第 62 号墳　出土遺物



船津 L- 第 62 号墳　出土遺物





PL.18 船津 L- 第 62 号墳

船津 L- 第 62 号墳　出土遺物

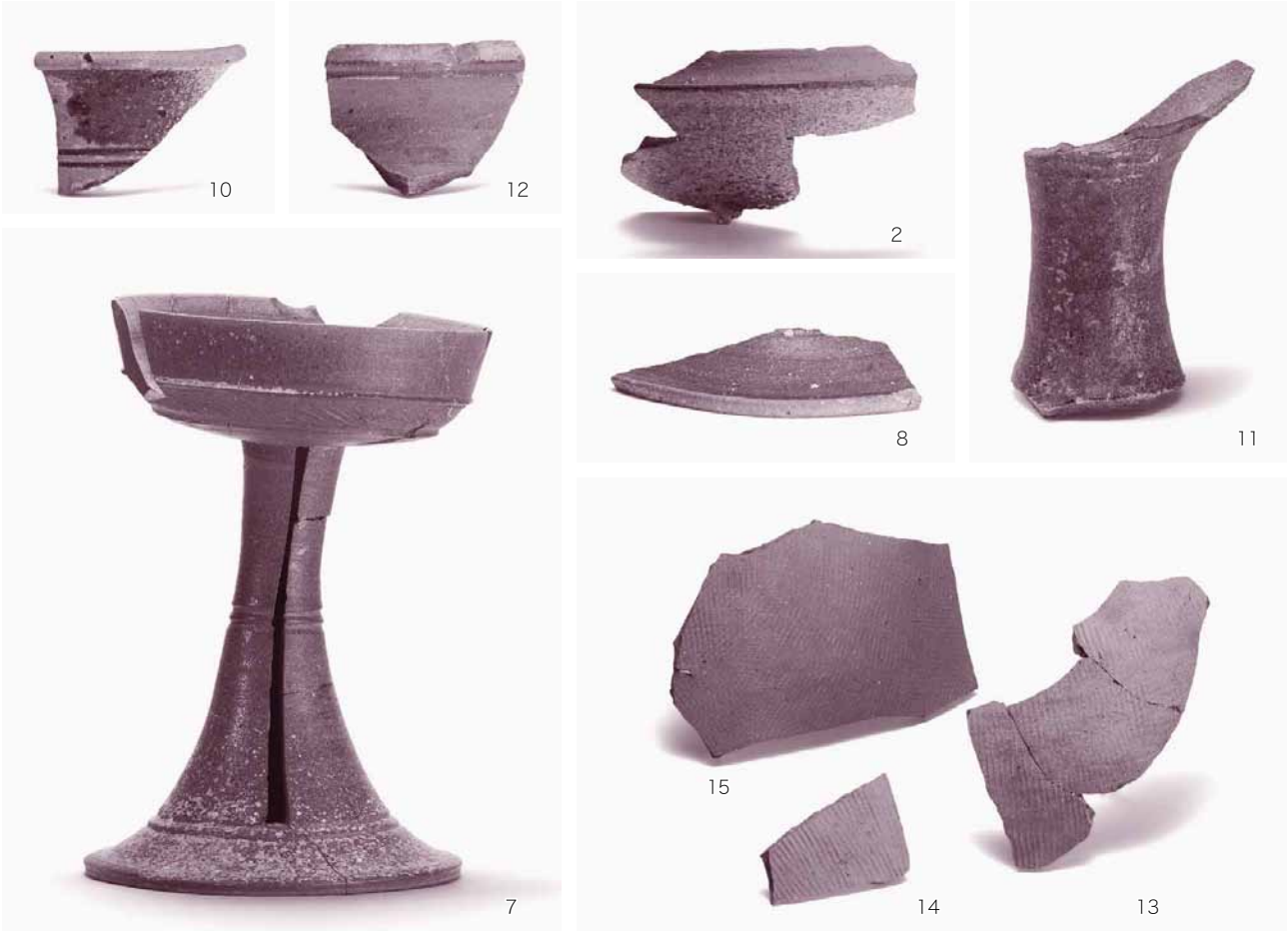
1. 船津 L- 第 206 号墳　石室全景（南西から）

2. 船津 L- 第 206 号墳　石室全景（南から）

PL.20 船津 L- 第 206 号墳

1．船津 L- 第 206 号墳　遺物出土状況

船津 L- 第 206 号墳　出土遺物



船津 L- 第 206 号墳　出土遺物

1

5

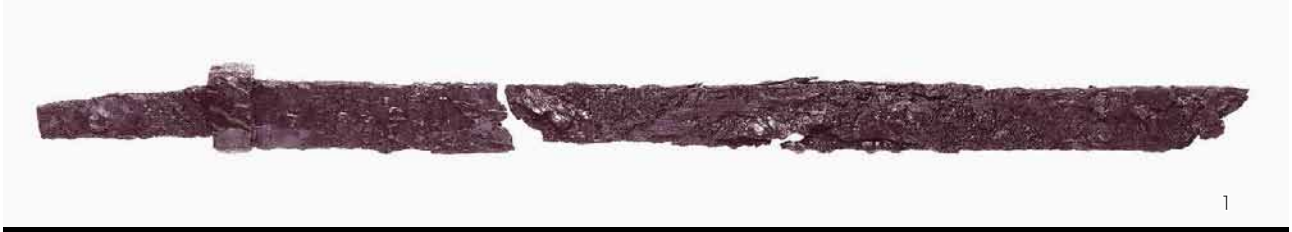
3

4

6

9

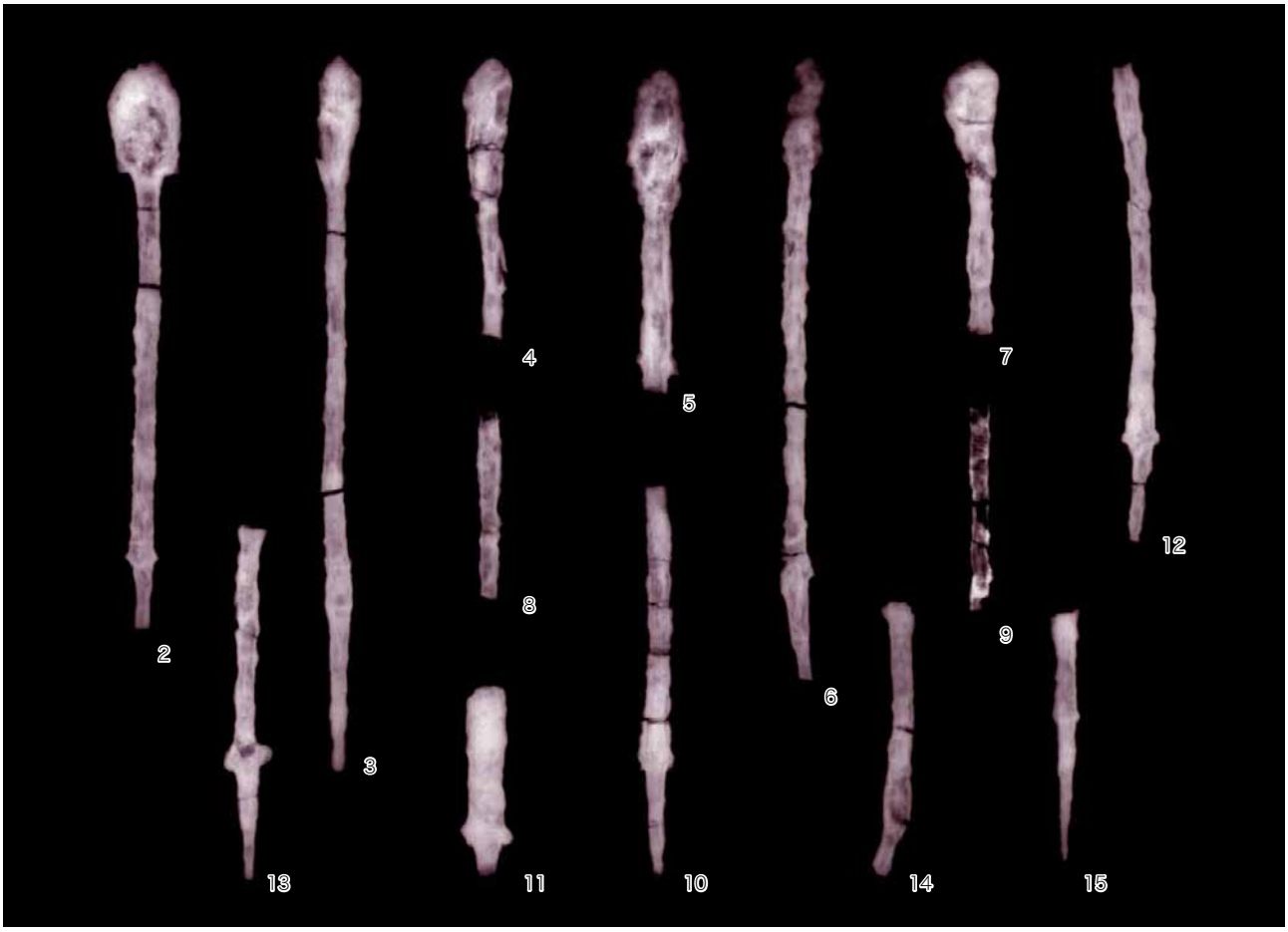
16 17

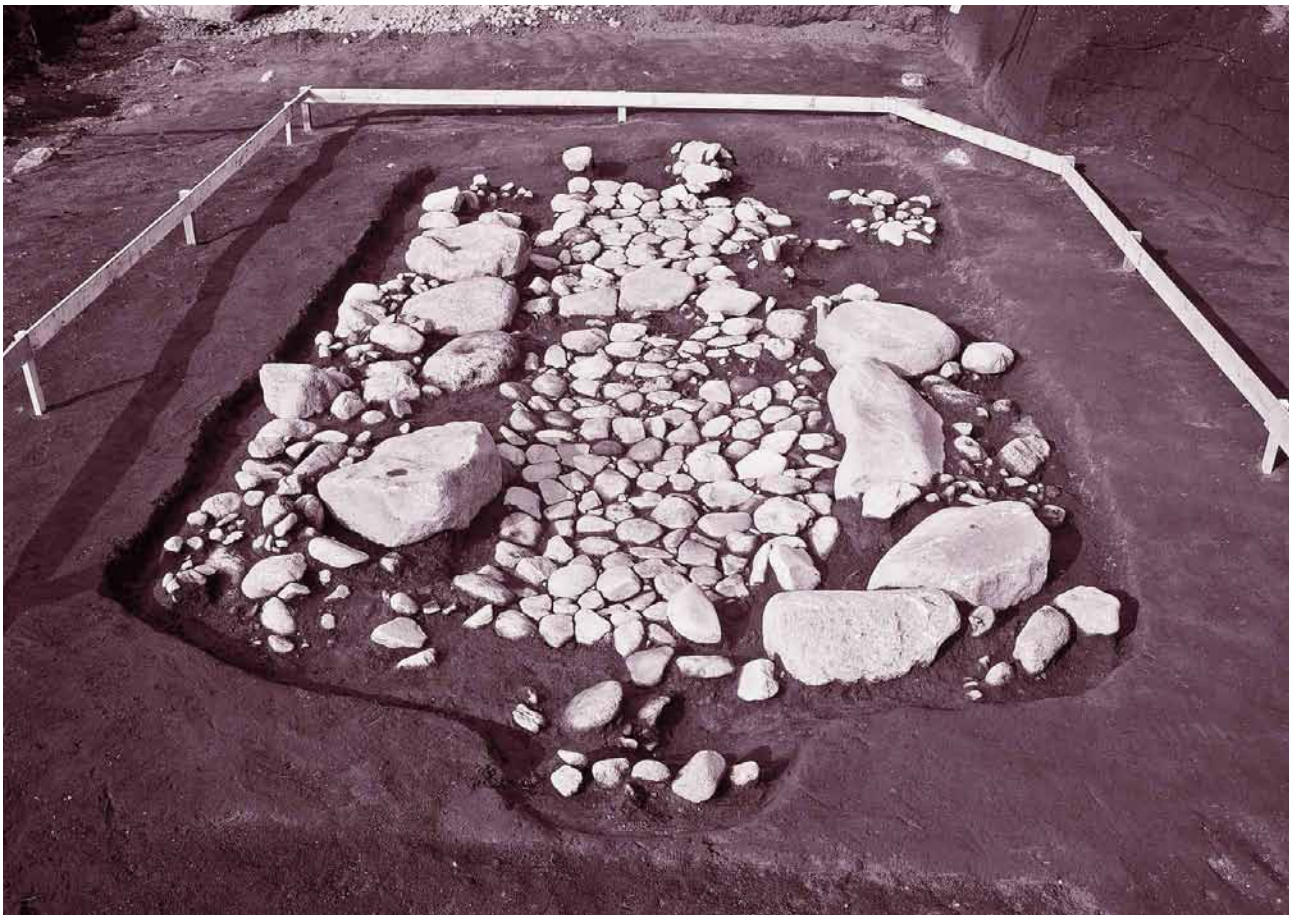

1

1

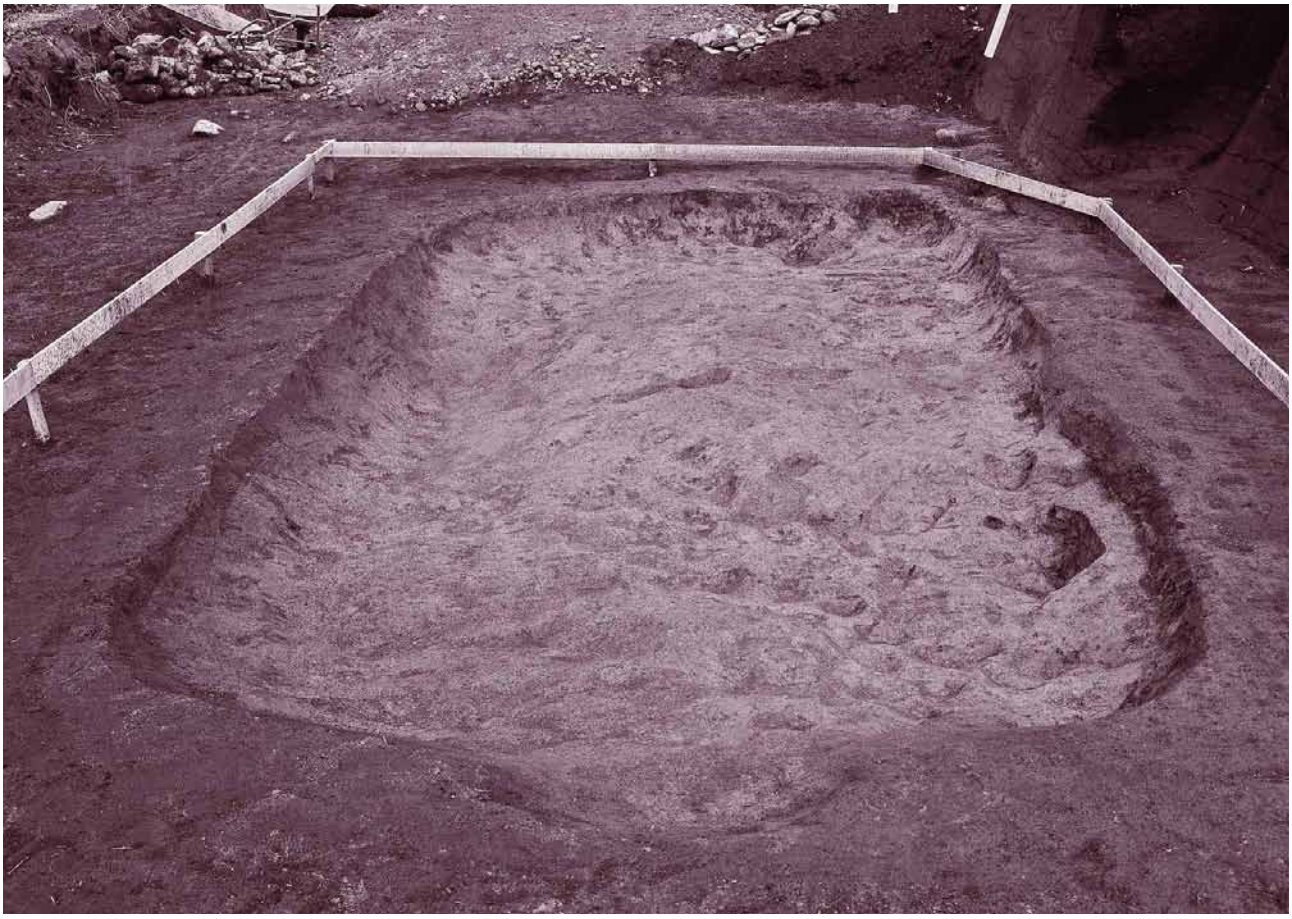
PL.22 船津 L- 第 206 号墳

船津 L- 第 206 号墳　出土遺物





1. 船津 L- 第 207 号墳　石室全景（南から）



2. 船津 L- 第 207 号墳　墓坑全景（南から）

PL.24 船津 L- 第 207 号墳

船津 L- 第 207 号墳　出土遺物

船津 L- 第 212 号墳　出土遺物

船津 L- 第 208 号墳 出土遺物

1. 平成 11 年度　確認調査地全景（南から）

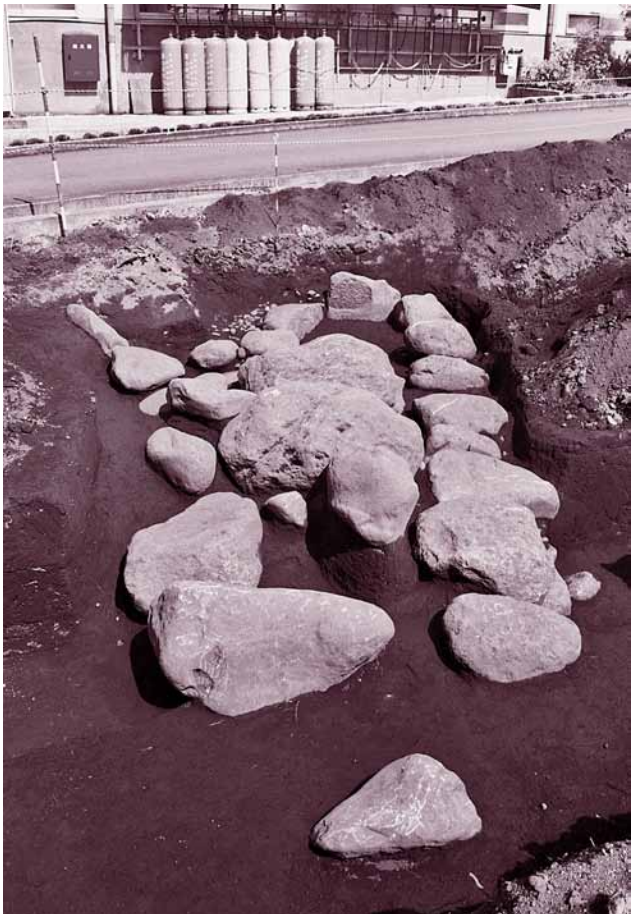
2. 船津 L- 第 77・78 号墳　石室全景（南西から）

3. 船津 L- 第 77 号墳　石室全景（南から）

4. 船津 L- 第 78 号墳　石室全景（東から）

5. 船津 L- 第 189 号墳　石室全景（南西から）

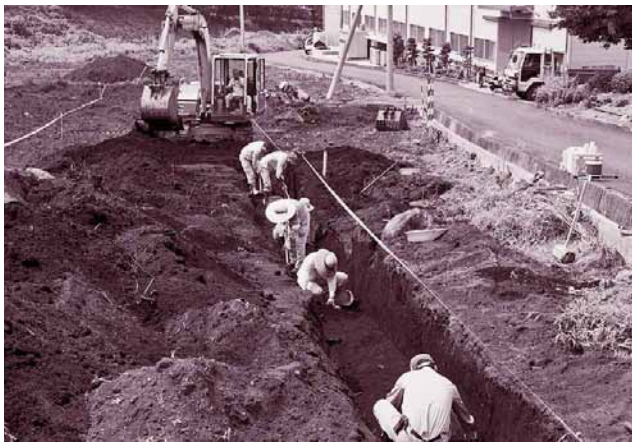
6. 船津 L- 第 190 号墳　石室全景（南から）



7. 船津 L- 第 218 号墳　石室全景（南から）

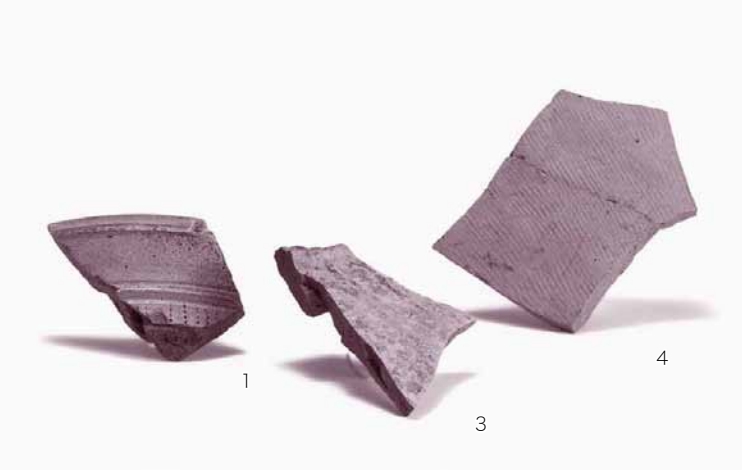
PL.26 船津L-第77・78・189・190・218号墳

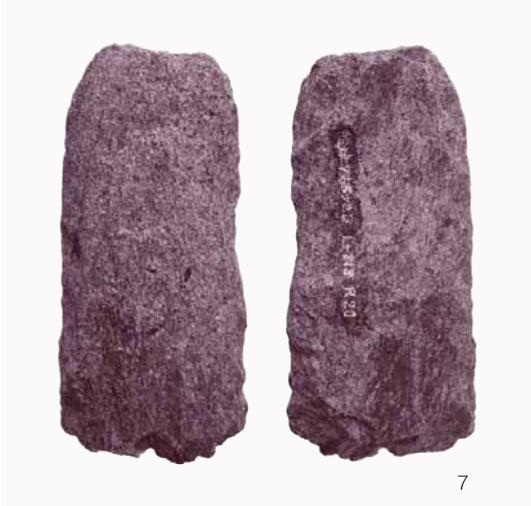
1. 須恵器出土状況



2. 調査の様子

出土遺物





報告書抄録

ふりがな	ふなつこふんぐん に
書名	船津古墳群 Ⅱ
副書名	船津Ｌ - 第 62 号墳ほか埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	富士市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 55 集
編著者名	藤村　翔・石川武男（編）・大谷宏治
編集機関	富士市教育委員会　（担当課：文化振興課）
所在地	〒 417-8601　静岡県富士市永田町 1 丁目 100 番地　　TEL　0545-55-2875
発行年月日	平成 25 年 3 月 29 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	地区名	調査期間	発掘面積 （㎡）	発掘原因
		市町村	古墳番号	（世界測地系）					
ふなつえるだいろくじゅうにごうふん 船津 L- 第 62 号墳	しずおかけん 静岡県 ふじし 富士市 ふなつ 船津	22210	510	35°09′26″	138°46′14″	第２地区	第１次調査 19900705	8	確認調査
							第２次調査 19910110 ～ 19910228	51	本発掘調査
ふなつえるだいにひゃくろくごうふん 船津 L- 第 206 号墳			598	35°09′31″	138°46′20″	第３地区	第１次調査 19911019	5.8	確認調査
ふなつえるだいにひゃくななごうふん 船津 L- 第 207 号墳			599	35°09′30″	138°46′20″		第２次調査 19911020 ～ 19911030	18.6	本発掘調査
ふなつえるだいななじゅうななごうふん 船津 L- 第 77 号墳			524	35°09′22″	138°46′13″	第５地区	19990902 ～ 19990930	720	確認調査
ふなつえるだいななじゅうはちごうふん 船津 L- 第 78 号墳			525	35°09′22″	138°46′12″				
ふなつえるだいひゃくはちじゅうきゅうごうふん 船津 L- 第 189 号墳			526	35°09′21″	138°46′12″				
ふなつえるだいひゃくきゅうじゅうごうふん 船津 L- 第 190 号墳			527	35°09′22″	138°46′11″				
ふなつえるだいにひゃくじゅうはちごうふん 船津 L- 第 218 号墳			628	35°09′22″	138°46′12″				

所収遺跡名	遺跡番号	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ふなつななこふんぐん 船津 7 古墳群	209	古墳	古墳時代	横穴式石室　８基	武器（大刀・鉄鏃・弓金具） 馬具（轡・辻金具・帯飾金具・鞍金具・腹帯金具・鉸具金具・鐙吊金具） 装身具（提砥・耳環・瑪瑙製勾玉・水晶製切子玉・碧玉製管玉・線状貼付ガラス玉・ガラス小玉・銅製丸玉） 須恵器（有蓋高坏・無蓋高坏・甕）	

要　約	船津古墳群とは、富士市域の東側に位置し、愛鷹山南麓を流れる春山川によって形成される河岸段丘上やそれを見下ろす丘陵尾根上にかけて築かれた古墳によって構成される古墳群を指す。 農地改良や農道建設工事に伴い３基の横穴式石室墳の本調査（船津Ｌ - 第 62 号墳・第 206 号墳・第 207 号墳）、５基の横穴式石室墳の確認調査（船津Ｌ - 第 77 号墳・第 78 号墳・第 189 号墳・第 190 号墳・第 218 号墳）を行った。７世紀中ごろの船津Ｌ - 第 62 号墳（石室全長 6.23m）からは、小刀や鉄鏃、馬具をはじめとした豊富な副葬品が出土した。船津Ｌ - 第 206 号墳・第 207 号墳は部分的な検出のため出土遺物も少ないが、第 207 号墳からは線状貼付ガラス玉が出土した。 船津古墳群では、これまでに 29 基の発掘調査が行われており、本報告も含めると墓道の復元や群構成の把握、副葬品から見た被葬者集団の性格を考える上で貴重な成果と言える。

富士市埋蔵文化財調査報告　第 55 集

船津古墳群 II

船津Ｌ - 第 62 号墳ほか埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日　平成 25 年 3 月 29 日

編集・発行　富士市教育委員会
〒 417-8601　静岡県富士市永田町一丁目 100 番地
TEL 0545-55-2875　FAX 0545-53-0789
E-mail:ky-bunkashinkou@div.city.fuji.shizuoka.jp

印刷・製本　文光堂印刷株式会社
〒 410-0871　静岡県沼津市西間門 68 番地の 1

（富士市行政資料登録番号　24-56）